

奇譚クラブ

1959年 7月号

創作
「謎の緊縛フォト」 久留木 栄
「満月の島」 三条卓史



7月号

昭和三十四年六月二十日印刷 (第十三巻 七月号 通巻第百二十四号) (毎月一回一日発行) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十四年七月号

7

200
奇譚クラブ

昭和三十四年六月二十日印刷 (第十三巻 七月号 通巻第百二十四号) (毎月一回一日発行) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

応えて、目を奪う秘美の殿堂茲に完成！

悦 限定版

No. 2

臨時増刊 特集

巻頭の口絵（四馬孝画）の緊縛絵画から始まって百十六葉の特写グラビヤ写真、本文の昭和二十八年年度本誌掲載の傑作サド小説サド読物と、全巻息もつかせぬ充実したS一偏倒の編集によって再びここに皆様の御機嫌を伺うことになりました。全巻二百頁を擁う妖気は必ずや皆様に百二十パーセントの御満足を与えるだろうという自信を持っております。最近半年間、撮りためた緊縛フォトの中から

麗筆巻頭口絵

四馬孝緊縛画集

- ▽柱背負い
- ▽深夜の水浴
- ▽喰込む縄
- ▽あんよはお上手
- ▽捕われ人
- ▽奇妙な椅子縛り
- ▽水道責め
- ▽答打ちの果

特写写真（グラビヤ） （百十六葉）

悶悦姿態特選集

- ▽逢瀬のポーズ
- ▽しずかなる受縄
- ▽はかなき悶え
- ▽美囚第十四号
- ▽羞姿晒陽
- ▽悦びの一刻
- ▽綾なす白縄
- ▽乳れ咲く哀花
- 絹川文代
- 花坂道子
- 田中芳代
- 絹川文代
- 愛川悦子
- 浜本喜美
- 三木敬子
- 絹川文代

往年の好読物集

- ▽妓の影
- ▽凌辱の幻想と期待
- ▽僕の記録
- ▽くすぐられるよろこび
- ▽キヤメラ愛好会
- ▽被虐の愛情
- ▽責苦
- ▽アブノーマル・ファンタジー
- ▽変の字問答
- ▽マダム紅鶴
- ▽哀艶責め場絵噺
- ▽蜘蛛と蝶々
- ▽由紀子のお仕置
- ▽聖画の誘惑
- 泉辰之助
- 古川裕子
- 黒井珍平
- 山本百合
- 岡田咲子
- 若林啓子
- 竹谷十三
- 岡田咲子
- 浮家鷹三
- 野村恵美子
- 岩広志
- 飛田良二
- 大川由紀子
- 近見啓

悦・特 第二集 定価三百円

口絵（四馬孝傑作集）

- ☆密質倉庫
- ☆悪魔のような女
- ☆春美の受難記・四点
- ☆新品第一号
- ☆嫉妬の鬼
- ☆地下室の苦行
- ☆苦悶
- ☆吊し責め
- ☆黒目鏡の女
- ☆アクロの訓練
- ☆捕われた商品
- ☆乳房責め
- ☆人間フープ
- ☆檻禁
- ☆奴隷船
- ☆妙な吊責
- ☆雨中の引廻し
- ☆奈落のリハーサル
- ☆鼻責めテスト
- ☆犬の訓練
- ☆女体脱馬
- ☆役ながし

グラビヤ 被縛女体特選集

- 仇姿黄八丈
- 縄さばき
- 挑発の笑み
- 被海魚
- 哀れなる賓客
- 豊胸
- 網布と絹肌
- 飾り人形
- 台上的賛
- 若妻の秘美
- 白い若鮎
- 麗囚
- 四馬孝

責めの美人と皮革について 四馬孝
緊縛フォトと緊縛モデル夜話

限定版サド特集号第二集

定価 三百五十円（送共）

覆面子白頭巾

◎本誌月極購読料◎

- 一月分一冊（送料共）二百円
- 三月分三冊（送料共）六百円
- 半年分六冊（送料共）千二百円
- 一年分十二冊（送料共）二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方は景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方は景品としてキヤビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十三巻第十号
毎月一回一日発行
定価三百円

七月号

昭和三十四年六月二十日印刷
昭和三十四年七月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 秘
大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号

電話 天下茶屋 三六〇七番
電報 口座大阪五〇〇四二番

御送金は振替、為替、現金書留、切手代用（八円切手にて一割増）等どんな方法でも結構です。送り先は必ず欄書ではつきりお書き願います。尚、振替用紙御入用の方は八円切手封入の上お申込下さい。お送りいたします。

奇譚クラブ臨時増刊

SADO特集号

第二集

美の縛縛 集大成！

—— 第一集の爆発的好評、絶讃、要望に

ら選集したグラビヤ写真は、どの一枚を抜き出してもアツと肝を奪われるものばかり、しかも本文中の挿絵もすっかり新しく描きかえ断然「悦特第一集」を上廻る充実ぶりを示しております。『悦特』第一集、第二集の二冊を描えられたなら、これで、たつぷりとSの美酒の中に全身をしたして痺れるような桃源境の中で羽化登仙の愉しみを味わうことが出来ること必至であります。

- ▽柔肌の喘ぎ……………平野笑子
- ▽荒縄と美貌……………絹川文代
- ▽未知の驚き……………岩井知子
- ▽悦虐狂奏曲……………大塚啓子
- ▽造形美術……………花坂道子
- ▽艶肌の拘束……………絹川文代
- ▽ロープ・ブラジャー……………愛川悦子

悦虐小説と緊縛寫真特集号

(悦・特第一集)

定価 三百円

(グラビヤ写真・百十四葉)

(口絵・四馬孝画集)

- 妖精 (ニンフ) ……花
- 三ツ葉葵の ……縄
- プロフィール ……ズ
- 誘拐 ……心
- 羅致 ……敗
- ブレ ……め
- 木洩れ陽 ……ツ
- 夢路 ……念

- 競 ……花
- 首 ……縄
- シユミーズ ……ズ
- 放 ……心
- 間諜成敗 ……敗
- 三処責め ……め
- 黒タイツ ……ツ
- 観 ……念
- 白魚の悶え (「燐光」より) ……花
- 苦悶の前奏 (「女奴隷の手記」より) ……縄
- 鉄鎖のきしみ (「続・囚衣」より) ……ズ
- 籠の白鳥 (「縛られた妻以前」より) ……心
- 宙に踊る (「妻は縛らず」より) ……敗
- アクロバット (「色狼」より) ……め
- 濡れる朱唇 (「長期刑」より) ……ツ
- 土蔵の花 (「夕の朝顔」より) ……念

(悦虐小説傑作集)

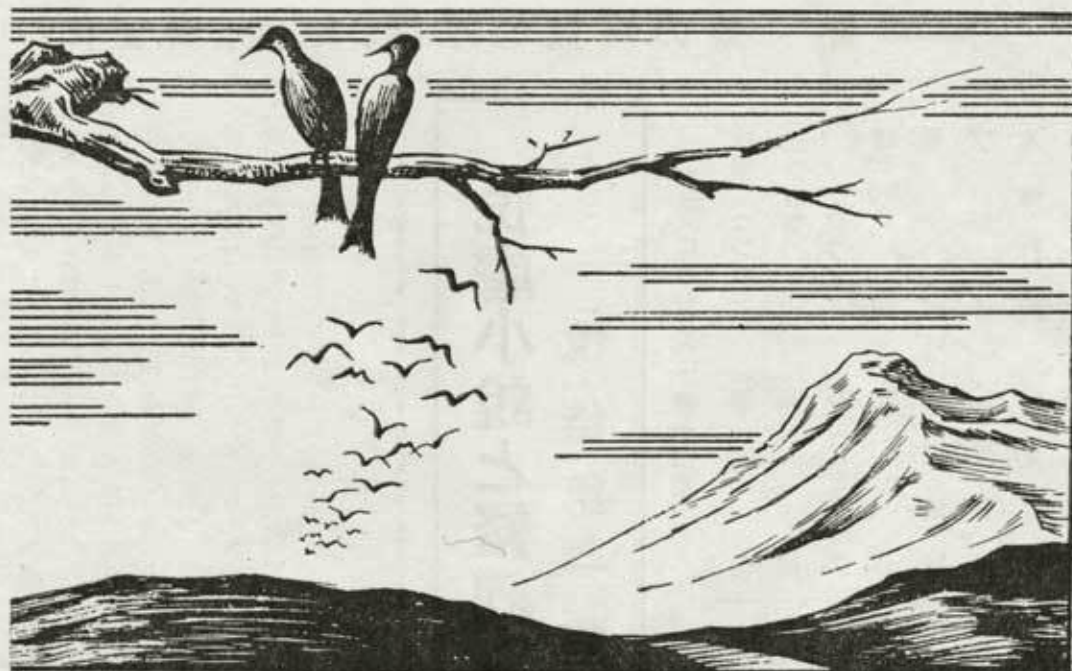
- 雌獣の手記……………近見 啓
- 妻は縛らず……………岡田 圭介
- 夕の朝顔……………那須不二雄
- 続・囚衣……………古川 裕子
- 私の主題……………岡田 咲子
- 色狼……………児島 光
- 女奴隷の手記……………北山カオル
- 受難記……………岡田 咲子
- 怪奇曼陀羅教……………緑 猛比古
- 呪縛……………辻村 隆
- 悦虐の旅役者……………青山三枝吉
- 長期刑……………古川 裕子
- 私の想い出……………岡田 咲子
- 片耳伝奇……………窪村 弘
- 縛られた妻以前……………早川新二郎
- 燐光……………久留木 栄
- 地獄絵行脚……………長岡愛一郎
- 鉄格子の中に……………小坂多美枝

：お申込は：

大阪市阿倍野郵便局 私書函第十四号

天 星 社

振替口座大阪第五〇〇四二番



奇譚クラブ

復刊第四十六号
七月

目次

巻頭口絵

四馬孝傑作集 高層ビルの恐怖……………四馬孝・画
特写写真 「雁字搦目」……………絹川文代嬢

「赤と白」……………大塚啓子嬢
「ハイヒール」……………絹川文代嬢

責め絵 焼アイロン……………北原純子・画
映画に現れた緊縛シーン……………

大映映画「血文字船」……………沼正三・提供

女性自身表紙(手帖雑報欄)……………沼正三・提供

縛り絵 新妻遊戯……………滝れい子・画

お仕置をめぐる一考察Ⅱ女性と忍耐についてⅡ……………近藤 一……………18

レポート「テレビ雑記帳」……………難波 武雄……………23

告白自分をハダカにする(三)……………松井 籟子……………24

公開通信Ⅱ土路草一氏へⅡ……………千草 忠夫……………32

創作 謎の緊縛フォト(その一)……………久留木 栄……………34

春の時代劇映画・縛りシーンの花盛り……………嵯峨美也子……………42

創作 僧 堂(後篇)……………榎村 奏……………44

緊縛テレビ・スナップ・フラッシュ……………牧 高志……………53

女体切腹と回想……………須藤 律夫……………56

創作 湖畔の裸女……………蒼野 礼……………58

話の肩籠……………辻村 隆……………70

愛好家の記録……………とやま・かつひこ……………74

創作『満月の島』……………三条 卓史……………76

新稿 ある夢想家の手帖から……………沼 正三……………82

緊縛映画スナップシリーズ・夕顔の巻……………

新東宝映画「剣姫千人城」……………牧 高志……………88

マゾヒズ百景……………馬場 好男……………96

手帖雑報欄……………沼 正三……………98

婦人用下着愛好者の弁……………細田 隆……………100

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品……………

『市河家の人々』……………近藤 一……………102

K・K五月号の感想……………近藤 一……………119

告白 ある女のカルテ……………藤山 秀緒……………120

今月の縛られた女優達……………河崎 晴夫……………124

レーゼ・シナリオ『旗本退屈男』……………大河原 珠樹……………126

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品……………

「恐怖の悪戯」(乳房に火をつけるな・第四回)藤木 仙次……………140

K・KスクラップよりⅡ馬化白書Ⅱ……………鞍 良人……………152

読者通信…………………………166

縛られた女体ばかりの写真集 第一弾!! 限定版『緊縛フォト・アラベスク』

各冊、限定番号押捺 特価 五百円 (送共)

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルによる各種緊縛ポーズの中から選集いたしました。題して「緊縛フォト・アラベスク」。文字通り表紙から巻末に至るまで若き美人モデルの緊縛写真ばかりを網羅いたしました。可憐愛すべき緊縛フォトアルバムとして、どうか一冊を皆様の座右にお備え下さい。

収録内容 二十六項目、写真七十七葉

- | | | |
|----------------------|--|--|
| 一、鏡……………愛川 悦子 | 十五、鏡台と腰巻……………花坂 道子 | |
| 二、銘花二輪……………花坂 道子 | 十六、腰巻と鏡台……………花坂 道子 | |
| 三、鉄鎖……………大塚 啓子 | 十七、奇妙な休憩……………絹川 文代 | |
| 四、諦観……………大塚 啓子 | 十八、田代悠子表情集(その二) | |
| 五、庭園にて……………絹川 文代 | 十九、脱がされた高手小手……………愛川 悦子 | |
| 六、謎の微笑……………田中 芳代 | 二十、亀甲縛り……………愛川 悦子 | |
| 七、田代悠子表情集(その一) | 二十一、吊責折檻……………村井知可子 | |
| 八、誇る脚線美……………田代 悠子 | 二十二、立木縛り……………村井知可子 | |
| 九、この足どうかしら……………田代 悠子 | 二十三、豊 醇……………愛川 悦子 | |
| 十、裏と表と……………愛川 悦子 | 二十四、乱れ髪三景……………大塚 啓子 | |
| 十一、落陽の丘……………愛川 悦子 | 二十五、椅子と絨緞……………愛川 悦子 | |
| 十二、ポリウムの花園……………大塚 啓子 | 二十六、組上の美鯉……………絹川 文代 | |
| 十三、緊縛感の綾……………大塚 啓子 | △本限定版特集号は一切書店売りは致しませんから直接発行所宛お申込願います。▽ | |
| 十四、奔放な肢体……………大塚 啓子 | | |

臨時増刊号 『青い廃院』 定価 二百円 (送共)

青い廃院 弓沢俊二郎作、四馬孝画

美貌の踊子に執拗につきまとう無気味な男。婦女誘拐団の魔手に陥ったレビユースター。蒼白き灯影に照り映えて痺れるような甘美な悦唐の妖気が全巻を蔽い、淫虐な責めは頁を追う毎に愈々酸鼻をきわめ、息もつかせず一気に最後まで読了させずにはおかぬ弓沢俊二郎氏の才筆は、ここにサド文学の金字塔を打ち建てた。

与那国奇談 永山久美雄作、杉原虹児画

南支那海に浮かぶ与那国は世に云う女護ヶ島。女ばかり住むこの孤島に展開される男性共有の風習、漁船が難破して、この孤島に漂着した一日本人漁師の経験した世にも不可思議な体験記。巻頭から結末に至るまで緊縛と処刑シーンの連続。諸君を夢の国女護ヶ島パラダイスへ案内して暫しの粹夢に浮世を忘れさせる一大ドラマ。

四馬孝画 「青い廃院」 画廊

○美貌の人 ○美女誘拐 ○モデル責め ○救出

○苦悶する美貌 ○屈辱の責め ○変ったレッスン (表紙裏)

○踊り責め ○廃院の中 ○受 縄 (目次裏)

青い廃院 (弓沢俊二郎)

一、三人の男 二、地の底にあるもの 三、美貌の人

四、劇場に居た二人の男 五、忠告 六、美女誘拐

七、苦悶する美貌 八、屈辱の責め 九、踊り責め

十、探索行 十一、廃院の中 十二、モデル責め

十三、手繰りの網 十四、救出 十五、勝者の心

与那国奇談 (永山久美雄)

女護ヶ島与那国 女百人に男一人 股裂きになる女

股裂きと火焙り 人肉の炙り焼 孤島の殺人

残流しの刑罰

高層ビルの恐怖

「ホラ、どうだ。こうすれば眺めも一段といゝだろう」
眼もくらむ高層ビルの高窓で彼女は恐怖の悲鳴を挙げる。「あゝゝゝ」風に
身体はゆらりゆらりと揺れる。



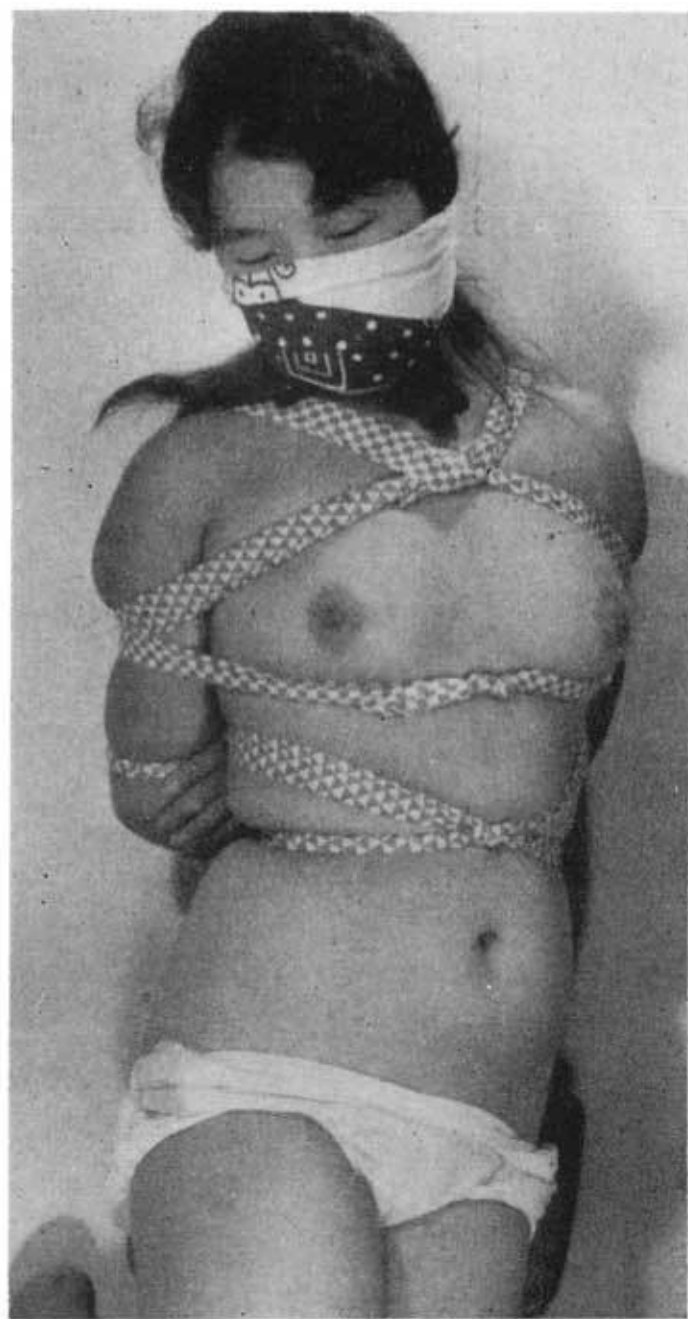


雁字搦目

モデル 絹川文代



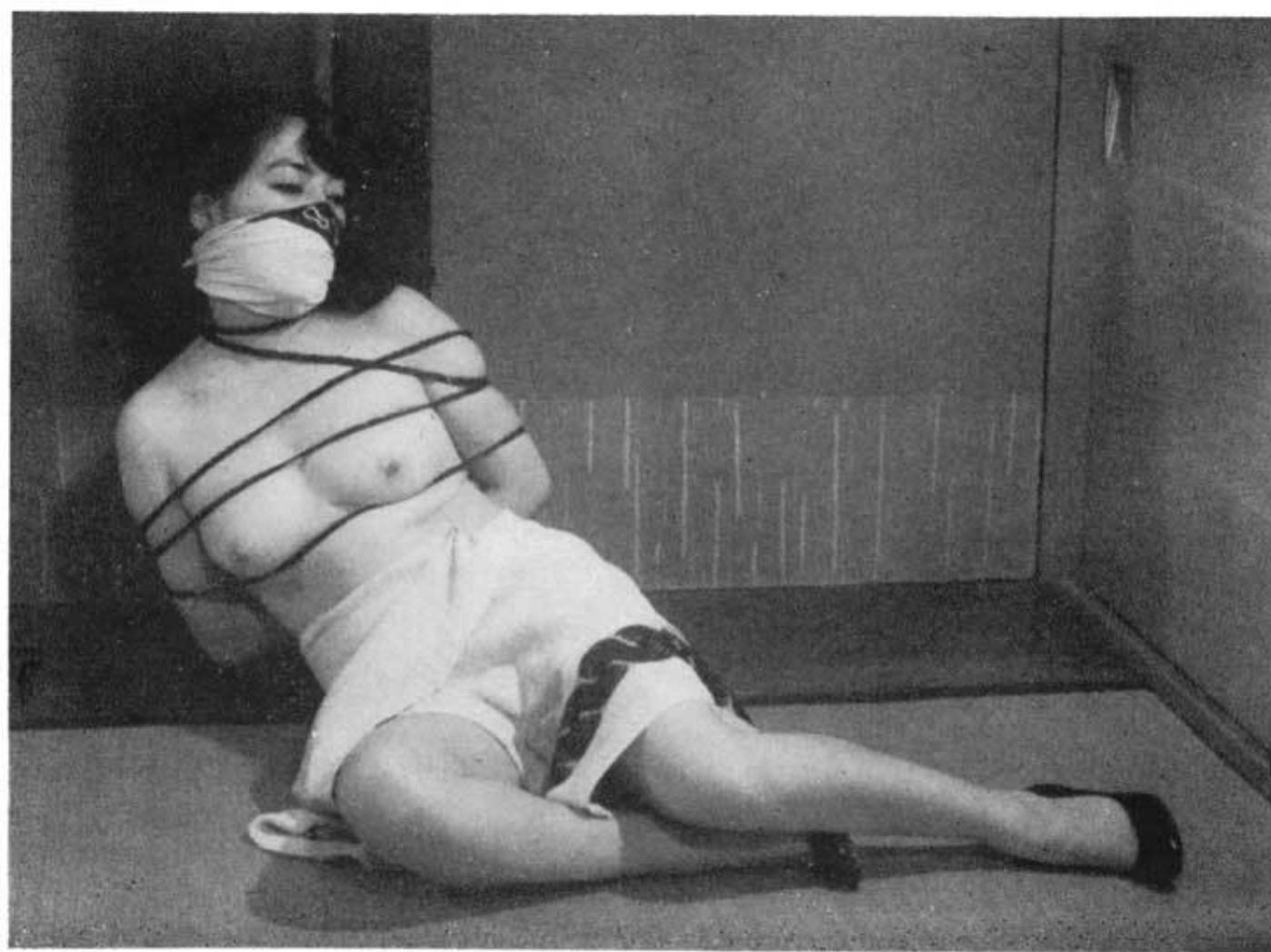
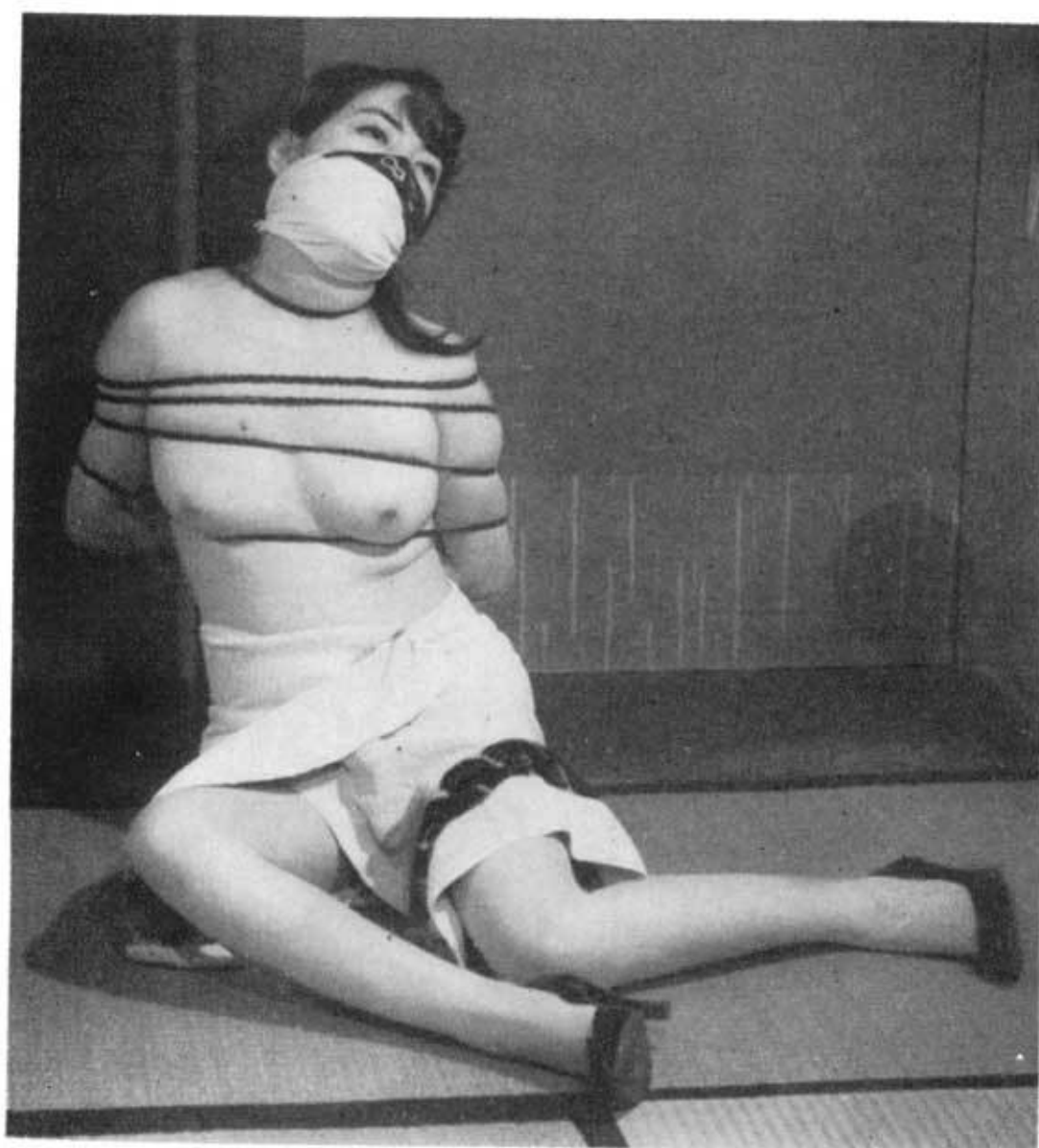
赤
と
白



モデル 大塚啓子

ハイヒール

モデル 絹川文代



焼 アイ ロ ン

純子の頬に焼けきった電気アイロンの熱気がむッと感じられた。「この顔を
焼き潰してやる！」そう叫んだ女の表情に、冗談でない緊迫を覚えて、純子
は「アッ」と驚愕の叫びを挙げた。

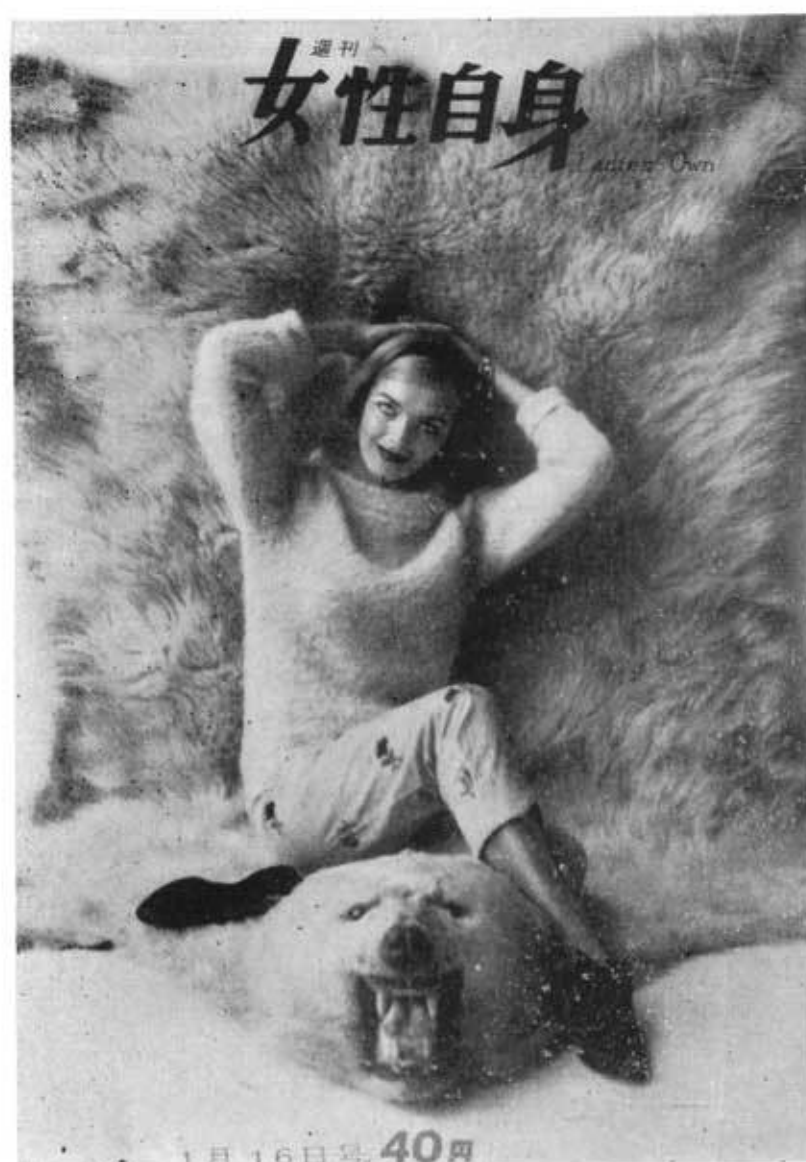


北原純子・画

映画に現れた緊縛シーン



大映「血文字船」



女性自身（1月16日号）表紙



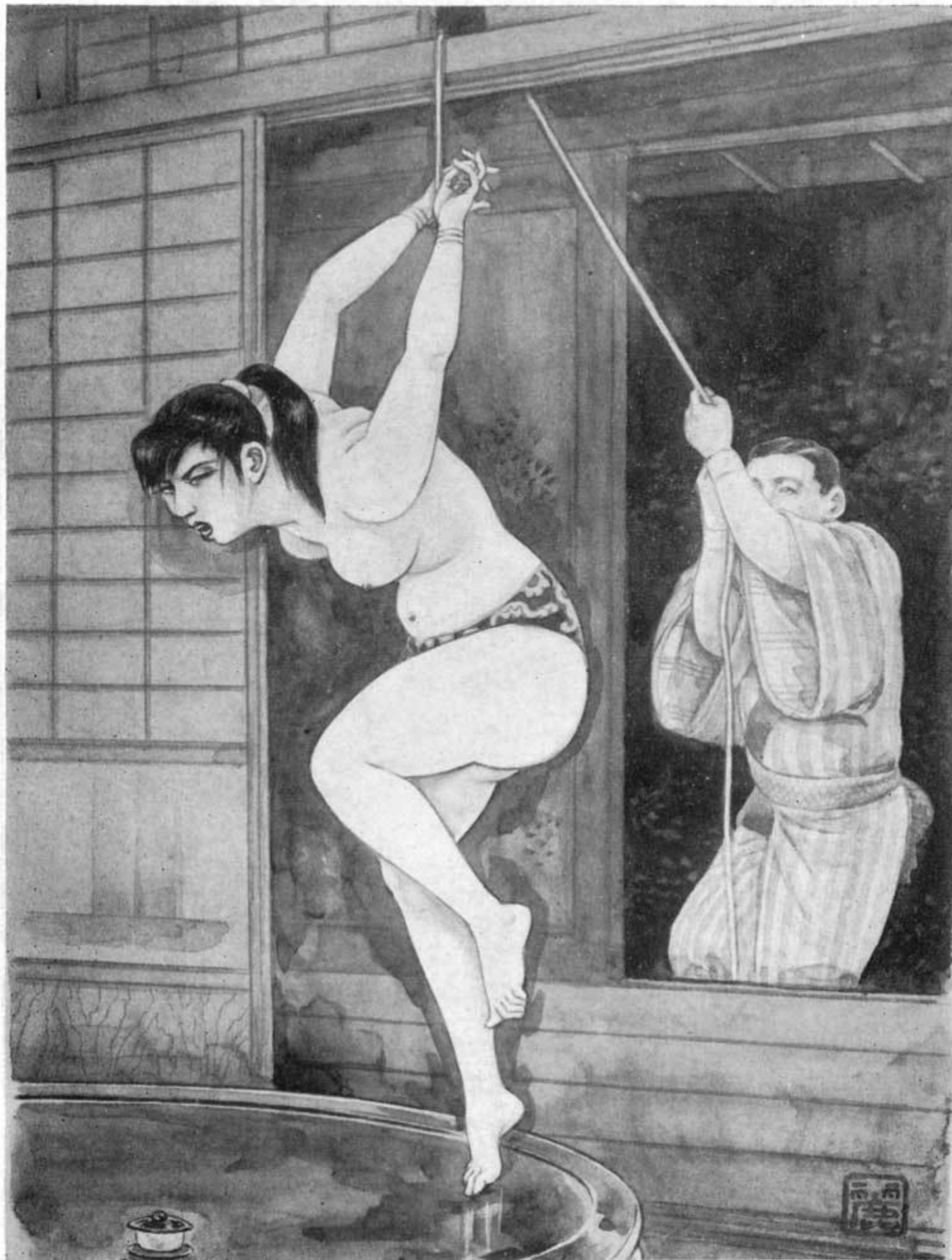
女性自身（1月30日号）表紙

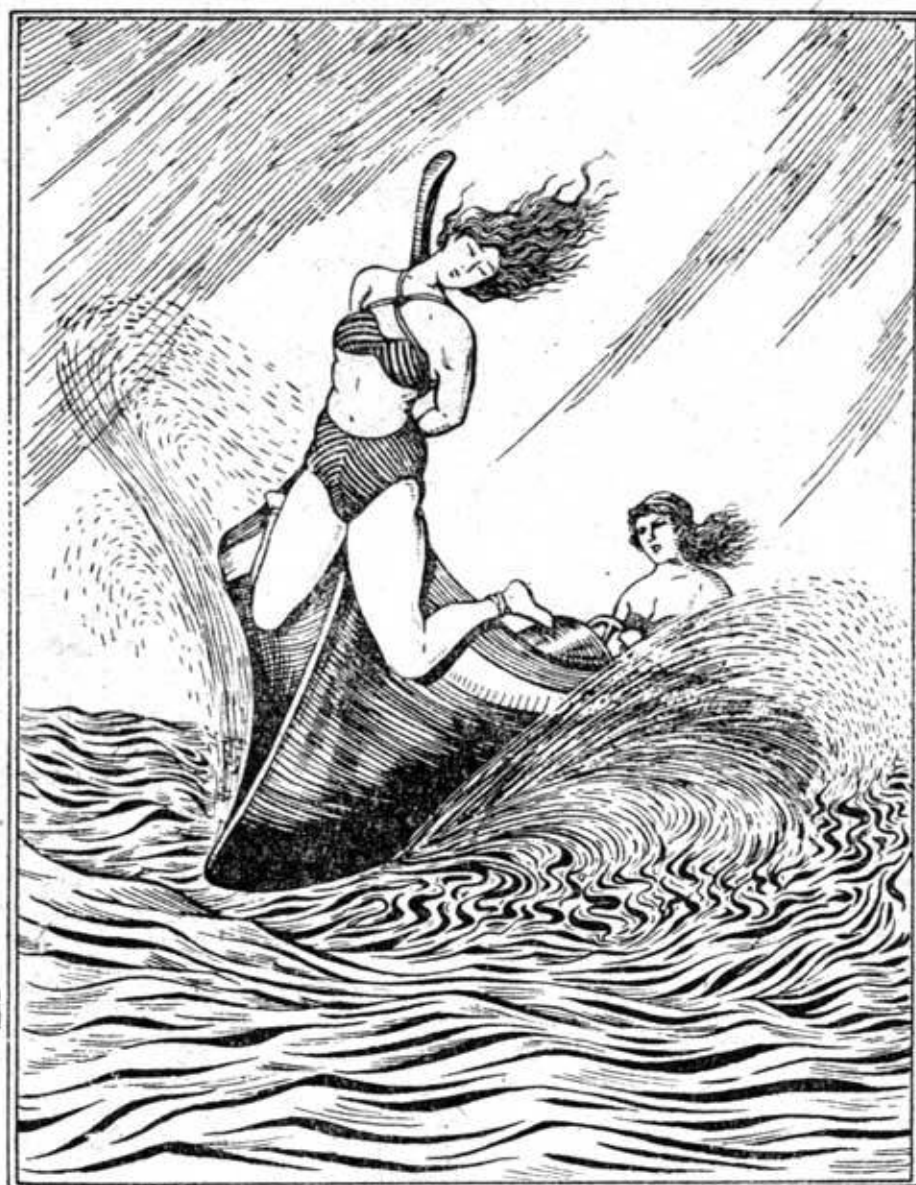
＜手帖雑報欄（沼正三）99頁参照＞

新妻遊戯

鴨居に通された細引がジリジリと引きしほられる。「あゝ、あなた、痛いワ、痛いワ、宥して……」新妻の白い裸身が卓の上で踊り狂うのを彼は面白そうに眺めるのであった。ある日曜日の午さがりである。

滝 れい子・画



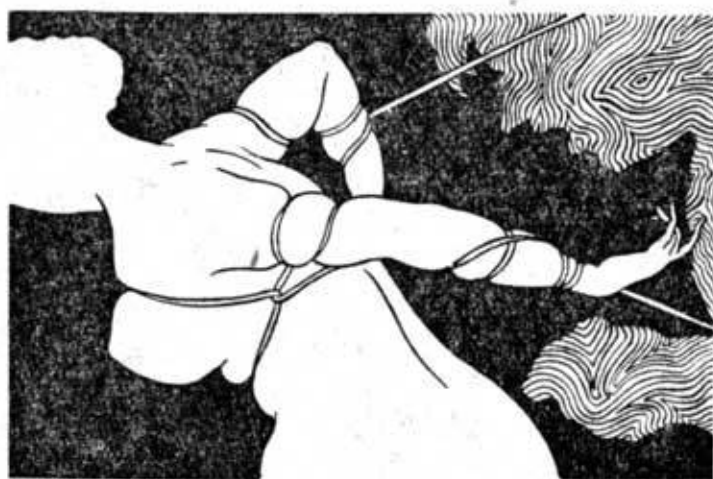


新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1959年 7 月 号

(第十三卷 第十号 通刊第百二十六号)



お仕置をめぐる一考察

Ⅱ 女性と忍耐についてⅡ

近 藤

一

忍耐ということとは、人間の賞讃すべき美德であると思えます。そしてそれに随伴する寛容ということも、また人生に得難い価値を、もたらすものと思っています。苦しみに堪え忍んで大きく成長を遂げることは大切なことです。それ故に向上心の旺盛な魂は、決して苦難を厭いません。私は、然し「艱難汝を玉にす」という言葉の悪用に反撥を

感じています。艱難は、それに耐え得る素地の無い処や弱い処では、ただ歪みを育てることにはしか役立たないからです。所謂、功成り名遂げた人達の間に、自分達の経験が至上だと思ひ込む独善や、先輩と呼ばれる人達の間に、自分達の味わった苦しみを後輩にも味わえと企むような怯懦な根性は、やはり歪みとして認められると思います。単なる忍耐は、やが



て反撥に通じる可能性があり、それでは優れた玉の輝きは出ない筈です。苦しみをのり超えて許すことを知る時に玉が誕生することを思うと、忍耐に続く寛容が玉になるために必須のもので、極言すれば忍耐と寛容に満ちた人格は、敢えて艱難を求めずとも素晴らしい玉であると思うのです。

忍耐は、苦痛に遭って初めて意味があります。そして苦痛は快楽に反するものの総称です。苦痛にせよ快楽にせよ、心外の事象ではなく、心裡の価値判断ですから、精神作用に違いはありませんが、人が受ける刺激には、二様のものを区別できると思います。一つは、いうまでもなく心理的なものであり、他の一つは肉体的なものです。

人は苦痛を避けて快楽を追い求めるものです。これが自然の姿です。「艱難汝を玉にす」といった処で、玉になった快楽を希求すればこそその便法に過ぎないと思いますし、実際に人間の総ての行為の動機を快楽購求に見出だした思想家もあつたではありませんか。

苦痛と快楽が截然と区別され得るか否か、断言はできないと思いますが、私は区別して考えています。その際の大きな問題は好きでも嫌いでもないものを、どう見るかということ です。好きなもの（積極的快楽）と嫌いなもの（積極的苦痛）のどちらにも帰属しない事象は、果して快楽なのか苦痛なのか、或いは、どちらにも属さない第三の事象なのかという事です。活動的な人にとって、このような無事の状態は苦痛となるでしょうし、憩い？を必要とする人達は、この平穏を快楽と考えるでしょう。概して、積極的快楽の不存在

を苦痛と思う層は幼く、積極的苦痛の不存在を快楽と観る層は大人であり、そして女性の多くは後者に属すように思います。

希望に満ちている若い世代の理想は高遠であり夢は広大であつて積極的快楽の無いことが即ち不満なのですが、利害の相互的控制の強い大人の社会では現実が大きな価値を持っているのです。他からの不必要な制肘を受けない自由は貴重なものです。現在への依存度の高い大人が秩序の安定を求めて保守に走るのは当然の帰結ですし、人間の弱さなのです。

女性の多くが、静的なものにも快楽を見出だすからといって、私は決して女性を大人であるというのではありません。それ処か、女性とはかく感情に走り易く、頑迷で手に負えないことは事実ですから、少しも大人らしくないのです。これらの特性は社会環境が大きく影響していると思います。女性が生まれ、育ち、生活して行く社会組織、女性の置かれている地位を分析すると、これは充分に首肯できる結果です。

女性の望みは極めて目前の、しかも男性のそれに比して極く微細なもので満たされます。これは女性の生活環境が現在への高い依存度の内に在ることを示しています。活動範囲が社会的制約過多のために狭小であり、かつ、理想を抱懐する余地のない存在だということです。

つい最近までの日本には姦通罪がありました。有夫の婦はいかなる事情にあつても姦通を罰せられながら、有婦の夫は蓄妾を男の働きとして許容されていたのです。新憲法が施行されて刑法から姦通罪が消えた時、女性が夫以外の男性と情



を結ぶことが、男性が妻以外の女性と関係することと同じ位までに増加したでしょうか？

女性の好物は一口に、イモ、タコ、ナンキンといわれています。量があって廉くて割合にうまいものばかりです。女道楽はお金がかかります。夫の女狂いに歯ぎしりして口惜しがつてみても、おサツやカボチャを十貫目（三十七・五キロ）も買えるものでないという落語のまぐらは一面の真理です。

女性が感情的だということは多分に生理的機能に起因するかも知れません。しかしそれだけではない筈です。もしそれだけならば、女性として完全な肉体的機能を享受する人はそれだけ理知の世界から離れることになりますが、事實はそうではないからです。女性の感情過度は社会環境の影響で、それは男性から作用を受けた結果なのだと思います。一体、過去において女性に理知が有り得たでしょうか？

女性は概ね男性の従属物であったのです。人間ではなく物なのですから、生活の単なる彩りに過ぎず、安価な労働力でしか無かったのです。そういう存在に理知は有害無益であり、目前の小さな利害に喜怒哀楽を豊かに表現するものに仕立てておくことが最上の策であると、唯一の人間である男性が思いつくことは極めて自然である訳です。いつの頃からか、この思想が社会全般に浸透し、男性の足許に置かれた檻の中へ女性を閉じ込めておく為の女性倫理なるものが、もつともらしい形を採って生まれてきました。勿論、創ったのは男性ですが、これを後代に伝え、遵守を強いたのは女性自身です。婦徳と呼ばれる掟に雁字絡めに縛り上げられた女性は

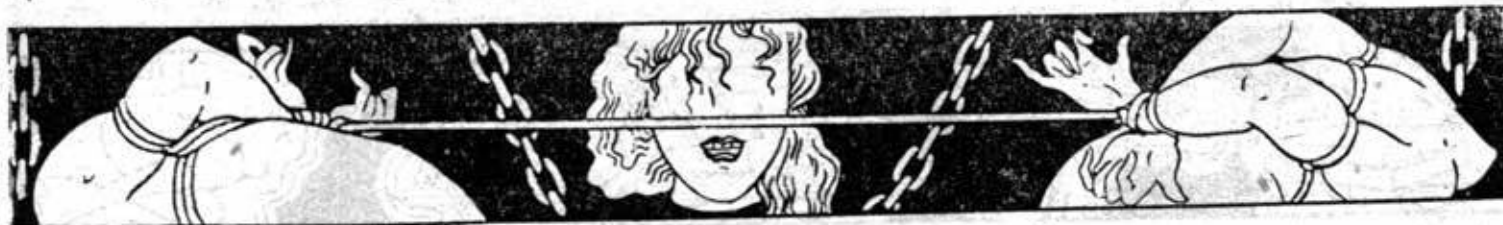
年少の女性に対する優越を以て心の僅かな安らぎを得るために、この婦徳の利用を考えた訳です。その結果、婦徳は根強く護持されていたのです。

婦徳は掟ですから、違反には厳しい仕置が加えられます。婦徳の欠如をいい渡された女性は、犬猫なみの取扱いに甘んじなければなりません。女性の下には畜生しかないからです。そして、それがいやなら掟に背かないことです。掟が苦痛であっても掟に背いた結果の苦痛と較量すればまだましです。もしも掟を遵守することに安堵を覚えれば掟の苦痛は解消しますし、よりよく遵則できることに優越を感じ得れば、苦痛どころか快楽が生まれることにさえなるではありませんか。

生まれながらにして鎖に繋がれ、その長さの範囲にのみ生きていく女性には、鎖の長さが問題になることはあっても、鎖そのものは価値判断の対象にならないのです。現代の女性解放論は鎖の長さの段階で、鎖自体の段階はまだ先なのです。短かい鎖が少しも苦にならない女性が多いのに、鎖の苦痛を教えようとしても無意味ですし、私は鎖に繋がれた女性が愛しいのです。月並な女性でなく、苛酷な「お仕置」を覚悟の上で、せめて今までの半分ぐらい鎖を長くしてくれと叫ぶぐらいの、活き活きした女性が欲しいと思うのです。

むごたらしい「お仕置」に呻吟しながらも鎖の長くなる日を待ち望む心、これが忍耐の姿であり、「お仕置」の苦吟を忘れて行くのが寛容の姿です。

忍耐は苦は、楽の種と識る者になしうる処です。苦しみに叫



喚し、のたうつような人には、逆に楽は苦の種になるのです。忍耐は先の楽しみを待ったために今の苦しみを、じっと我慢することであり、今の苦しみが大きければ大きい程、先の楽しみは比例して大きくなることを経験が教えてくれるのです。人間の知識は経験の累積です。幾度か苦痛を経て快楽を得ると、人は苦楽の循環を信じ込み、それを実証して行きます。苦痛が長く深い時、人はその重荷に耐えかねて、自らの確信に従って、それより軽度な苦痛を、快楽として歓迎するようになります。かつては不満でしかなかった積極的快楽の不存在は、積極的苦痛の不存在として快楽の中へ押し込んでしまうのです。

苦痛のうち肉体的なものについては、いずれまた考察したいと思っていますから、ここでは精神的なものについて考えてみます。精神的な苦痛は、虐げられるとか苛められるという感覚です。そして忍耐は苛められても我慢し通すこと、虐げられても忤え抜くことです。肉体的な苦痛は、全神経が痛覚によって占拠されて、思考を停止させますから、それから発する苦痛の感情は、羞恥や屈辱に因る憤怒であると思います。羞恥や屈辱は相手のある感情です。羞恥とは他人が自己に与えるであろう評価を気にかけることだといった人があります。

「苛められる」ことに対する忍耐は、苛められている意識の下にあって、じっと救いを待つことです。救いというのは、積極的に現在、自分を苛めている主体を排除することもあるうし、消極的に自分を苛めることを止めて貰うこともあるう

と思います。いずれにせよ、現在の苛責のない事態はそのまま快楽です。その快楽を待って、女性は目下の苦痛に諦めを抱いて身を委ねてしまうものです。

ものは思い、様とか好き、好きとかいうことがあります。他人の嫌うことでも好きなことはありますし、ある意味で苦痛と信じて別の意味で快楽になることがあります。快楽の豊富なことは安心であり、人は安心を得るために快楽を追求するのですが、その際、快楽獲得の可能性の乏しい人は、入手したものの内に快楽を発見するために種々の角度から見直す訳です。

苦痛に遭ってそれを排除すべき方途を期待できれば、現在の暫らくは我慢して待っていることができるでしょう。苦痛が微弱になりうるものなら、その時まで待つのもよいでしょう。痛みの去るまで、じっと忤えたり「赦して」とか「御免なさいね」とか哀願して苛責の止むのを望んだりすることは屢々、見られます。処が、現在の苦痛の持続が長期に亘る見込みで、永久ではないにしても、差当っては苦痛が解除される可能性がない場合はどうでしょうか？何を待ち望んで耐え忍ぶのでしょうか？こんな時には心当てにする救いは皆無です。苦楽の循環の確信が、ゆらぐことは生活の自信を喪うことになり、それを意識することが耐え難い人は判断の基準を変えるのです。そしてその苦痛の持続する状態を常態と思うようにするのです。そうすれば我慢なんかなくなってしまいます。

女性とは、そういうものでした。娘時代は、それでもまだ



自由がありますが、一旦、妻になると虐げられて哭く日が続き、やがて、もうどんなに虐げられても不思議とは思わない生き方に馴れて死んで行くのです。結婚を人生の墓場といってみても、墓場もまた住めば都です。客観的には苦痛ともいえるものの起伏の中に快楽を見つけ出して行けるのです。

人は確かに苦痛を堪え忍ぶことによって成長して行きます。ですから、考えようによっては苦痛の忍耐は快楽かも知れません。忍耐の先にあるべき喜びの大きさを別にしても、忍耐がそれ自体、快楽と考えられることはあり得るでしょう。処が更に忍耐から独立に、苦痛だけを切り離して快楽とすることが女性にありがちなのです。つまり苛められることが喜びなのです。虐げられ、辱められることが嬉しいのです。これをマゾヒズムと呼ぶ人もいます。マゾヒズムと異常心理を別個に考えているのなら別ですが、私はこの段階の心理を正常なものと考えるので、マゾヒズムとは呼びません。私が例示するのは女性のいじらしい表愛の一態様で、愛しい人からの無関心に耐えられず、せめて苛められることによっても彼の意識の中に這入り込みたいというような場合です。彼女はその苦痛を愛情の表現として快楽にすり代えて甘受してしまうのです。

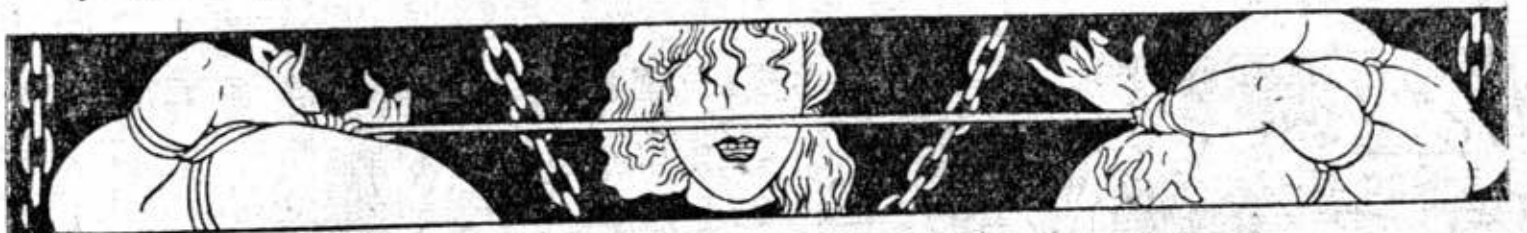
こういう女性の一般的特性は普通に生来的マゾヒズムとして、女性の受働性に由来するものと説明されがちですが、私はそれ以上に社会環境における女性の習性であると考えたいのです。女性が受身であるというのは万人の認めるところです。

女性が社会的に自立度に乏しいのは、法律の視野からは、女性の無自覚、無気力のせいだと思われます。社会学的に観れば女性は男性より、かなり劣弱な存在であることが現実です。女性が男性より劣等である限り、女性を男性から観れば実に忍耐強いものと映り、平然と、時によっては嬉々として苦痛を迎える点に注目する時、女性を本質的にマゾと断ずることにもなるのです。

人は誰でも愛されたいという願望があります。愛されることは自尊心を満たす快楽であり、嫌われることはプライドを傷つけられる苦痛です。女性が愛されることを男性に希う時、男性への依存度が高まり、女性は男性に従属することになります。自己の一手手、一投足がウカツにはできず、生活の総てを挙げて男性の意を迎えるのに汲々としなければなりません。そして鎖の長さを論ずるだけで、自ら進んで自身を鎖で繋いでしまうのです。

でも私は、女性のそういった愚かしさを好ましいと思っています。自分自身の手や足を縛り上げている鎖を一寸、長目に伸ばして、私の足許に跪いて微笑を湛えているような、そんな女性を私は探し求めています。もう、そろそろ見つかったもいい頃だと思ひながら……。

人間としてでなく。女性が女として愛されたいと願う限り、女性の苦痛と快楽の質量は男性のそれと等しくなることはありません。それでいいと私は思います。せめて私の生きている間は、女性の自然的特性である忍耐強さと寛容が変らずに、而も新鮮であって欲しいものだと思うのです。



テレビ雑記帳

二月頃だと思いますが、KTV（関西テレビ）の「てれび武芸帳」の時間でした。この番組は、武芸百般を詳細に実演説明してくれる時間です。この日の時間は「竹内流の捕縄術」と題して僅か十分足らずの時間でしたが私達のマニアには貴重な時間でした。

先ず男性二人が立向います。一人が捕手です。捕手が相手の右手を取りねじ上げて後へまわす。所謂逆手です。相手はたまらず、その場へ俯せてしまう。捕手は逆手にとった手を膝頭で押さえる。こうなれば相手は動くに動かない状態です。捕手は捕縄をとり出し先ず左手首をしっかりと縛る。その縄を首にかけて回し背中まで十文字にして今度は逆手の右手首をしばり左手と一緒に結びあげる。その余った縄を左手の二の腕にまわし、それを右手の二の腕にまわして両手の自由を奪ってしまふ。この間僅かに三十秒位だったと思います。所謂高手小手に縛りあげられたもので

す。

これは簡単でしたので見ていてもすぐわかりましたが、もう一つの本縄の菱型縛りは少し複雑で、はっきり判らず残念でしたが僅か一分余りで、前後菱型の本縄縛りを見せてくれました。もっとゆっくりと、じっくり見せてもらえればと、つくづく惜しく思ったものです。

次には、全身がなじがらめに縛られた時の遊泳法を実演してくれました。縛られた裸体の男性は、細縄でしたが、前は菱型縛りで首縄、両手の二の腕にも縄が巻きつけて縛られていました。後もし論菱型で後手高手小手の本縄縛りで、肌深くグツと喰い込んでありました。両足は揃えて、足首、膝、太股、と三カ所三重にしっかりとゆわえてあり、立った儘の姿は、ほんとにがなじがらめという恰好でした。前後左右と丁寧な縛り工合を見せられました。その泳ぎ方ですが、これは僅

かに動く膝の屈伸を利用して泳ぐらしいです。ほんの少しの膝の屈伸しか出来ません。併し、実際に両膝の屈伸も奪われた時には、どうにもならないだろうと思いました。

次は三月二十日のNHKテレビの番組で、越路吹雪と中村勘三郎のドラマ「雪解け」の時間でした。これは恋人殺しの囚人と元目明しの恋をえがいたドラマで一時間にわたるものでしたが、その囚人に越路吹雪がなっており中村勘三郎は元目明しの役です。始めから約三十分位は、越路が縛られた儘で勘三郎と芝居をするのです。残念乍ら越路の縛り方が余り本気に縛ってないことでした。細縄で一重に後手縛りでその結び目は手でもっていった？のは私達にとっては面白くありませんでした。

三十分の間、縛られた場面が見られたのですが、緊縛した縛り方であれば、実に満足して見たのですが、残念でした。併し越路の色気と名演技で縛られた儘、勘三郎の膝ににじり寄っていくときおとす所など、これがもっと緊縛した縛りであればずっと実感が出たと思うのですが、越路の縛り方は巧かった。いつもながらテレビの縛り方はマニアにとっては物足りないものです。

白

告

自分をハダカにする

(三)

松 井 籟 子

私は二回に亘って、私の被虐や加虐への欲求は、愛する人に苛められたい、愛する人を苛めたいという思いなのだを書いてきた。

しかし、文章として書いてしまつて、自分を振返えてみると、まだまだ自分の中に別の感情があるのに気がついた。

ひとり寝の床の中で、悦虐ということを経験する時、必ずしも愛している人にいじめられている自分だけを、頭に描いているのではないのだ。

誰か別の愛してもいない男に、ひどい目にあわされている姿を想像することもあるのに

気がついた。

自分で自分を贖めて、本当に自分をハダカにしてみたい気持ちから書き出した告白だから昨日云ったことと、今日違うことを云ったとしても、それも私なのだと思つてほしい。

いいえ、思わなくてもいい。

どうせ、告白という形をかりた小説か読物なのだと思つていてくれる方が、気が楽だ。

だから、私が私をハダカにしてみたいのは一種の自己愛なのかもしれない。

私は人一倍自分の性質の中に、矛盾を発見する。

気が強いかと思うと、とても弱い。短気かと思うと、気の長い時もある。誰でも私のことを明るいという。賑やかなことが好きだと思つている。たったひとりで京都まで旅をして、竜安寺の石庭の、石を前に膝小僧をかかえている私と、男友達とつれ立って、銀座裏を飲み歩いている私とは別人のように思ふらしい。そのどっちもが私であるということに私自身は自己愛を感じているのだ。

私は一時間でも二時間でも、だまつて寺から寺へ歩いてくれるような静かな恋人がほしい。

そして又私は、胸に花を飾って、リンゴを丸かじりしながら歩いてくれるような恋人がほしい。

私の気まぐれに歩調を合わせて、千変万化してくれる恋人がいたら、どんなにすばらしいだろう。

そういう人がみつからないので、私は私自身を恋人にするか、それとも夢想の中の男に恋いこがれるより仕方がない。

ただ、前々から書いているように、私は惚れたら始末の悪い女なのだ。火のように燃え上ってしまう女なのだ。これだけは、どう裏表もつけられず、恋の為にはどんな犠牲でもはらってしまう性質は、恋というものを知り初めた十代の時からいまだに続いている。

その性質故に、私が悦虐ということに興味を抱くのも無理はない。

恋しくて恋しくてたまらなくなると、いても立ってもいられない気持になってしまうのだ。

勉強をしながら、気が散るのをふせぐために、我と我が腿へ錐をさしたという話も、偉人の逸話となると、世間の人が感心してくれる。

同じように、寒い最中に水をあびたという

話もある。

目的が立派だと、誰もこれを自虐だとはいわない。よくしたものである。

私は誰かを激しく恋して、体が燃えてくると、自分を傷つけてやりたくなることがあるのだ。それをあえて出来ないのは、見栄坊だからだろうか。

夜中に、水を浴びる音など聞こえたら、隣家の人が変に思いはしないかという気ずかいがあるからで、見栄坊でなければ、てれくさがりやなのかもしれない。

しかし、一週間に一度会う約束の恋人に、一週間が待ち切れない時がある。ところが妙な意地が働いて、待ち切れないといえない時にはただ自分の燃える心と体をもてあます。そして、水を浴びてもみたくなくなるのだ。

そんな時、本当に水を浴びてしまえばいいのかもしれない。しかし、そういかないうちの事情というものがあるので、ふとんをかぶって、自分で自分をおさえるより仕方なくなる。そして、時にはそんな自分がたまらなく厭になるのだ。

悪魔のような男が現れて、私をひどい目にあわしてくれないかと思うのはそんな時だ。その時は、相手は私の恋している男でなく

ていいのだ。

むしろ、「どうしてそんなに彼が好きなのだ？　きらいになれ、きらいにならないか。ならなければ、ひどい目にあわせるぞ」といって、私の腕をねじあげてもらいたい。

「いくらお前が彼を好きだといっても、彼が愛想をつかすような姿にしてやろう」

といって、私をはずかしめてほしいのだ。そういう時は、思いきりみじめな姿にされる方がいい。

荒縄をふんどしのようにしめられたら、さぞおかしな恰好だろう。太い、太い荒縄のふんどし……。

そして、犬か猫のように、四つん這いに這わされて、首へは縄をまいて、鈴をぶらさげられる。手と手、足と足を、這えるだけの間隔をあけて縄で結び合わされる。縄をいろいろとかけて、立ち上れないようにされてしまう。

「お前がいくら彼を愛しても、そんな姿をみたら、彼はお前を捨てるだろう」と男が笑う。

私は大粒の涙をポロポロこぼすだろう。「いいわよ、私は好きなんだから……どんなめにあわされても、好きなんだから……」

そういうと、男は私を蹴とばすだろう。足も手も縄をかけられていると、私は転んだ体を自分で、もとのようにするのに、もがくだけだ。首の鈴が、リンリンとなる。

男は足の先で私を起してくれるだろう。そして又、蹴る。

私は首の鈴をならしながら、おかしい恰好で男の足の下で転げまわらなければならない

のだ。

男は泣いている私の顔を足で持ちあげて

「悲しいか？」

といって笑う。頬に伝う涙を、わざと足の

指で拭いてくれる。

私は、もっともっとその男に、はずかしめられなかったら、到底、恋する人に対する慕情を沈められないと思う。もっと自分の体が、くたくなになって失心してしまえたらいいだろうと思う。

どんなに男が私をいじめても、私の慕情は募るばかりだろう。男は、きつと疲れるに違いない。

私は、そこでもう猫や犬の真似は止めてくれという。もっと他の方法で私を、くたくたにさせてくれという。男が疲れないで、私ひとりかみじめに踊らされる方法はないだろうか。

そんな時、きまって私の夢想するのは遊園地にあるメリーゴーラウンドの木馬なのだ。

自分の体が上下にはずんで、しかも、ぐるぐるまわされながら、いつ



までも回転していたらどうだろうと思う。

もし、メリーゴーラウンドのような大がかりなものが無理なら、十円入れると上下に動く木馬でもいい。

あの木馬の背へ罪人のように縛られて、何時間も何時間もとめどなくゆられていたら、綿のように疲れてしまうのではないだろうか。首を垂れ肩をおとして、ぐったりと、唯ゆられるのにまかせて放心したようになると、男が来て、首をあげ姿勢を正すことを命じられる。それでも、自然に首がうなだれてくると、鞭をふるって、真直ぐ前を向いていなければいけないといわれる。

それでも首が下を向くと、下を向けないように首枷をはめられてしまう。

首枷の板には鎖がついていて、後手に縛った縄を上へ持ちあげるようになっていて、私は、きちんと前を向いて、上へ下へと、

ゆすられつづけなければならぬ。

そうやって私の体が疲労しつくして、物もいえなくなったら、私は私の恋情を沈められるのではないかと夢想するのだ。

だから、悦虐というものが、いつの場合でも恋情につながるの、私の決定的な条件だが、こうなると、恋人でない男に責められて

もいいことになる。しかしその時は、責められることで、より一層、恋人への慕情が募るだろうから、責める男に対して愛情はもてないだろう。もし愛を求められたら、舌をかみ切って死ぬかもしれない。

そうなると、まるで子供の漫画本にでもあるように、悪い男にいじめられて、いろいろな折檻を受けたあげくに、強い男に助け出され抱擁される夢を、子供の頃から見つけているということになるのかもしれない。

×

いったい、いつ頃から自分の中に、そんな感情が動き出したのかと、よく考える。

曾て、私は「私の求めた男」という自伝的小説を書いて、幼時に見た光景から刺戟を受けたように第一章から書き出したことがある。

しかし、あれは半分本当で半分嘘だった。

いわば「小説」として書いたものだった。

だから東京の下町の花柳界で、下地ッ子が芸妓にいじめられる光景は、自分の目でみたわけではないのだ。

しかし、そういう芸妓がいて、そういう話をきいたことはたしかだ。今は、もう死んで

しまった人だが、長唄と清元の名取で、芸達者売りものにしていた人がいた。戦争が激しくなる前に二十代の若さで死んでしまったが、私は、いまだにその人の夢をよく見る。幼い時の友達だったが、お座敷着姿のその人に街角で会うこともあった。

そんな時、足もとあぶないように酔っていることが多くて、次に昼間、しらふの時に会った、「あんた、あれから私がどこのお茶屋へ入って行ったか知らない？」ときいたりする。

この人が酔うと、下地ッ子を柱に縛りつけていじめる癖があったのだ。

裾を長く引いた、出の衣裳で、つぶし島田のびんが乱れたその人が、美しい目を酔いでとろんとさせて、半玉をいじめている姿を想像すると、身がしまるような思いがしたが、現実には見たことはなかった。

「裸にして、赤い紐で縛ってやるのさ。すると若い妓って、つぶみのようにきれいだろう。何だかよけい憎らしくなって、ヒイヒイ泣かせてみたくなるのさ。」

そんなことを云っていた。

しかし、そういうおしやべりを私にするのも酔っている時で、ふだんはふれなかったし、

私も、そういう話題を引き出すことが出来なかった。

ただ、雑誌のさし絵を切りとって、大きな文庫へ入れていたのを見せてくれたことがあったが、縛られている絵が多かった。

世界の違う人なのに、いまだに私がこの人の夢を見るのは、少女期の私の心に強い印象を残しているからだと思う。

その頃から私は、縛りというものに平気ではいられない感情を持っていたのだ。

小学校へ上る前頃の遊びで、近所の男の子に縛られたことがあるのは、多分、前にも書いたと思う。

しかし、私を縛ったその男の子も、不思議に若くて死んでしまったし、もうひとりの男の子は私が小学校一、二年の頃、引越していったっきり、どこにいるのか知らないし、名も思い出せない。

明治の頃の洋家具をそのまま並べていた私の家の洋間の、丈の高い椅子や卓が、ひどく大きく、がっちりしていたように思われるのだが、その椅子の脚へ縛られた自分が、小さかったせいかもしれない。

谷崎潤一郎の初期の作品に惹かれたのも、そこに描写されている洋間などが、私の幼い

時の家に似通っていたからだ。

この間、偶然そんな明治調の洋間が、東京の真中のある家に残っているのを発見して、とてもなつかしく思った。

そして、その家の主人が同じ好みを持っていることを知ったのだが、私は夢想家のせいなのか、その装置の中で、幼い時に自分の肌に残された縄の記憶を、ひとりでたのしんでいられたら、嬉しかったろうにと思われた。

本当なら、そういう洋間で、そういう好みの人に会うということは、あぶないことだったのだ。

まして、その家へ私を案内してくれた人も同じ好みを持っていることを知っていた。

悦虐というものにあこがれを持っている私なら、又とないチャンスだったかもしれない。その人達は私をおさえて、声の出ないように猿ぐつわをはめ、古い大きな椅子へ縛りつけることも出来たのだ。

丁度、五つか六つの幼い日に、二人の男の子によって椅子へ縛りつけられ、私が恐がるのを承知で上まぶたを、くるっと剥いて、赤貝のような目を向けるかわりに、もっと大人の恐がるいろいろな方法が行われる可能性はあったのだ。

しかし、その人達は紳士的すぎた。或いはもっと若い美しい女ならともかく、私などはその対象に出来なかったのかも知れない。

そのかわり、今まで見たこともない、すばらしい悦虐の写真を見せてくれた。

一枚、二枚……と、私は体をこわばらせてみていた。

私は、つれを気にした。

多分、私が体をこわばらせているのを知っているのではないだろうか――。

そこで私は、つとめて平気を装うことにした。

まるで風景を写した写真を見せてもらっているような表情をしていた。

そのうち、だんだんに、平気な顔を装わなくても、平気になってきたから不思議だ。

同じ好みの人があるということが、自分の秘密をおかされたように恥しくなってきたのだ。

私は、よっぽど見栄坊で、うぬぼれやなのだろうか。悦虐なんてものに興味をもつのは自分ひとりで沢山だと思われてくるのだ。何かしらん、自分の大切にしていたものを人にとられたような厭な気持がしてくるのだ。

いつだったか、大阪の中の島公園を私は男

友達と二人で歩いたことがあった。その人に私は好意をもって、二人で歩くことに楽しさを感じていたのかかわらず、中の島公園に歩いてすてる程いるアベックの群を見たら、自分が男の人と歩いていることが何ともいえず厭になってきたことがある。折角、湧きかけていたその男の人に対する好意が、どこかへ消えてしまったのだ。

あまのじやくなのだろうか――。

だから、私の体を、入った瞬間しびれさせた明治調の洋間で、私の好きであるべき写真をみせてもらって、かえって燃えかけていたものが消えてしまったのを、私は何と説明したらいのか、とまどう。

もし、その方が、この文を読んでいたら、折角みせてあげたのにと怒るだろう。

しかし、その時、燃えなかった私は、今こうして、その洋間を思いうかべ、いろいろ見せて頂いた写真を思いうかべて、ひとりで楽しんでることを、御礼の言葉として申し上げます。

そして私は、自分が髪の毛を邪慥につかまされて、海水へつけられることを想像する。息がつまりそうになると、海面へ引きあげられ、又、浸けられる。塩辛い水が鼻へ通って、鼻

がツーンと痛くなる感覚まで、自分のことのように感じられてくるのだ。

見せて頂いた写真が一つ一つ新しく、よみがえってくる。そうして想像は、そこから更に延びていく。

同じ海水へ浸けられるにしても、縛めの縄がないのは物足りない。囚人のように亀甲形にかけた縄付で舟に乘せられ、沖へ出て自分だけ海の中へおとされる。縄尻は舟の中の人に握られていて、私はどうにか足をバタバタさせて、顔を水面に浮き上らせている。すると、長い竹竿を私の髪の毛にからめて、それで頭をおさえつけられ、ブクブクと沈められてしまうのだ。

もう、息がたえるかと思う頃に、竹竿を引き上げられると、私は髪を吊られて、水をし、たたらせながら、苦しい息をつく。

竹竿で引かれ、手の自由をうばわれていると、大きな波がくればよけるすべもなく、ガブッと私は海水を飲んでしまうかもしれない。くらげが私の肌をさすかもしれない。海草が気味悪く、ぬめぬめと肌にまつわりつくかもしれない。水に濡れた縄は、よけいに私をしめつけるだろう。

そして私は、何度も竹竿であやつられて、

その度に海水に頭をつけ、だんだんに苦しさが増し、息もたえだえになってくるだろう。それでも、まだ許してもらえず、古雑巾のように舟の端にぶらさげられて、塩水をあびながら、唇の色も真青になって、浜までつれてこられる。

そして今度は、全身から水を、しतरさせたまま浜辺の杭につながれて、焚火の火に赤々と照されるのだ。

そんな夢を目の前にえがいて私は楽しんでるのかかわらず、写真をみせられても平気な顔をしているのは、私の自己愛であり、マスターベーション的被害なのだと思う。

よく少女時代の悪癖から、正常な夫婦生活の出来ない女がいるときく。私は悪癖の覚えもないし、正常な夫婦生活が出来ないわけでもない。女のよろこびというのも、充分知っている。

しかし、こと悦虐に関する限り、悪癖に近い夢想家なのだ。

夢想していることの楽しさ以上に、現実になんか満足しないのか、しようとしんないのか、わからないが、いったいこれでも私はマゾヒストか、サジストなのだろうか、我ながら考えてしまう。

しかし普通の人は、正常な夫婦生活以外に、あまりこうした夢想はしないらしいから、やっぱり精神的マニヤとでもいうのだろう。

私を迎えて下さったこの洋間の描写を刻明に書かなかったのは、その主人に対する遠慮からだし、どんな写真ということも、書くことが出来なかった。

もし書いてもいいというお許しを得たら、筆をあらためて、東京のある町で、同じような好みを楽しんでいる人があることを、もっとくわしく御紹介してみたいが、おそらくその方も私と同じことで、人には知られたくないのだろうと思う。

ただ、これだけは同じ好みをもつ方達に伝えたい。

私は少数の人しか知らないが、悦虐というものに興味を持っている人達が、世に好色といわれる人達よりも、外見的に上品で深みのある美しさを持っている人が多いことだ。

好色と、悦虐の好みとは違う。

それがたまたま一つになる人もいるだろうが、人柄という言葉からいうと、好色の人に見られる下品さが感じられないのは、どういうわけだろう。

もっとも私なんか、男がなければいられない



いようによくいわれるのだから、好色そうにみえるのかもしれない。

しかし、親しくつき合っていると、私に好色さがないことを知り、同性愛趣味かと疑われたり、不自然な行為に耽溺しているのかと疑われたりする。

私が世の普通の浮気に興味をもたないのは夢想家だからだ。

恋人を選ぶのさえ、好き嫌いがあるのに、そこへ悦虐という道が一つ加わっては、軽い浮気なんてもので満足出来よう筈もないし、浮気程度の相手に本心を知られるのは尚更いやだ。そんなら男なんて欲しくないということになる。

x

男だって女だって、やっぱり相手の中に、こうした趣味があるかないか知りたいと思うだろう。

男は娼婦を買っても、少しずつ、相手の反応をためてみられるかもしれない。

妻に対しては、どうするのだろうか？

たまたま、同じ好みの人が一緒になればそれにこしたこともないだろうが、何度、奥さんを取りかえてもうまくいかない人もあ

る。だから、何かしら言葉のはしに、相手の好みを知ると、妙な楽しさをおぼえてしまう。

先日、この雑誌の読者通信の中で、NHKのテレビで、谷崎潤一郎好みの場景があったことが書かれていた。

そういう時、私は、その作者の中に、被虐があるのか、加虐があるのかと探ってしまうのだ。

たまたま私の友達が、このテレビの作者を知っていて、その人が友達の長い髪に対して「どうして髪の毛を長くしているのか？」ときいたことがあると話していた。

私の友達が「べつに理由はないけど、切るのが惜しいので……」ということ、

「その長い髪で、男の肌を洗ってやるともいうかと思った」と云ったそう。

私の友達は

「いやらしいわ」

と笑っていたが、その時、私はドキンとしたのだ。

その作者の中に、何かある。何か正常ではない血の流れを感じたのだ。

勿論、狂気というのではない。つまりは、

谷崎潤一郎の血の中に流れているものと、同じものがあるように思ったのだ。

私は一と月つづいたそのテレビドラマを二回しか見ていないので、読者通信にあった場景は見のがしていたのだが、前に友達との話があったので、あらためてその会話を思い出した。そして、やっぱり何かあると、あらためて思った。

まだそれ程、活躍していない著作家だがあえてその名を記さないのは、もし私のカンが間違っていると恥しいと思うからだ。

ただ、犬がクンクン鼻を動かして、同じ犬の匂いをかぐように、時々自分の鼻をクンクンやってみることがあるのを云いたかったのだ。

というのが、幼い時から何十年、いろいろな友達はあったが、幼友達の芸者以外に、同じ好みの友達にぶつかったことがないからだ。相手が隠しているのかもしれないが、犬の嗅覚のように、何か漂うものは解る筈だ。

それが案外ないのは、全体のパーセンテージからいうと、こんな欲求は誰でもが持っているのではないということになる。

女学校の時は、新宿のおえんさまへ友達をつれて行って、地獄極楽の絵を見せて、そ

の反応を探ったこともあった。

関西にいる時は、祇園から清水へ行く坂道に、地獄極楽の絵をかけている店があるので、京都見物にかこつけて、それとなく相手の顔色を見たこともある。

しかし、残念にもまだ、私の望む反応をしめしてくれる人はいないのだ。

鬼に苛められる亡者の群というのは、痛々しくて、美しさをとまなわなければ、針の山の針に刺って、もがいている亡者など一人一人が違った苦痛にのたうっているし、首枷をはめられた亡者の姿や、体が犬になっている亡者など、一つ一つ刻明に見ていくと、本当に体の中で得体の知れない波がよせかえす時がある。

芥川竜之介の「地獄変」という小説の中にこの地獄の様相を、大宮人の姿そのままにえがかせる話があるが、本当に美しい男女や、昔の風俗の下人が、鬼に鞭打たれて様々な責苦にあっている絵があったら、どんなにすばらしいだろうと想像する。

ポパイの女房のような、針金のような女が責められていても、感慨は薄いのだ。

しかし、たとえ何にもせよ、地獄極楽の絵ほど惨虐な情景を白昼堂々と披露出来る絵は

ないだろうし、新宿のおえんさまの、ガンガンなる鐘の音の中で、この絵巻物を見た私の十五、六の頃の胸の高鳴りは相当激しいものだった。

私は一度ゆっくり、この地獄極楽の絵を見てみたいのだが、あんまり長いこと足をとめて、絵にみいつているのがどうも恥しい。

そんなら、巻物を買って来て、家でゆっくりみればいいのだが、それを買うということが又恥しくて出来ないのだ。

江戸川乱歩の小説にも、地獄極楽の場景を人形と人間を使ってパノラマにしてみせる話があるが、本当に美しい人形で、あらゆる状態で責め苛まれる亡者の姿が展開されたら、

たいしたみものだろう。

場末の掛小屋で、それに似たものは見たことがあるが、貧弱な人形は、ただ煽情的で当局ならずとも、劣等意識をかきたてることしか思われぬ。

もっと芸術的で、しかもセンシブルな見世物はないのだろうか。

いつか神戸で竹藪を背景にして、若い女が裾を乱して横坐りになっているのを、縄を持った男が、今にも縛ろうとするように立っている人形を飾った掛小屋があった。

その時は、ひとりで夜の神戸を見物したくて、タクシーをとめて新開地を素通りしてみたのだが、どうしてもその人形の縄が気にな

『公開通信』

土路草一氏へ

「魔教園」の完結（というより中絶）を知り愕然と致しました。ついこの間「前座」が終って、いよいよ「本座」になる——と抱負の程を語っておられたのに、これは又

余りにも突然すぎました。実際大げさでなく、それを知って以来全く意気消沈している有様です。私は何も、路子達がどうにか救出されるまで続けると、要求するものではありません。今の運命のまま、生きて行かざるを得ないところに、一層の感慨を生ずるのだらうと思いますが、今度の完結は筋の発展を予想させるものを多分に含みながらのそれなのです。

それが、かくも早期に中絶を余儀なくされたのは何故でしょうか？ 出発の際に見

って、そのまま東京へ帰ってこれなくな
った。

そこで会わないつもりだった神戸の知人に
わざわざ電話をかけて、前日、新開地を通
ったことは内緒にして、あらためて新開地を
案内してくれるように頼んだ。

そして、わざと、小屋がけの見世物を一つ
一つのぞいて歩いて、最後に目的の小屋の前
へ来た。

「入りますか？」

という知人に、

「何だかいやらしいわね、やめましょうか」
と、わざと言って、

「でも、まあ東京では見られないから入って
みましょう」

と云って入った。

私は、きつと中へ入ったら女の責め絵がい
っぱいかけられているのではないかと思っ
たのだ。

ところが中は田舎の映画館のように、長い
床几が並んでいて、大昔の無声映画をやっ
ていた。

それが終わったら、何か看板の人形に、ふさ
わしい映画でも写るのかと、ドキドキして待
っていたら、性病予防の映画だった。それで
おしまい。

悦唐の好みを求めて、時々、こんなからま
わりをやることもあるのである。

透しが甘かったとは思えません。何故なら
ば、まだまだ物語りは発展の可能性を多分
に秘めていると思われるからです。そこで
私は推測するのです。路子を家畜に落すの
が早すぎたのではないかと。あまりにも心
理の曲折が単純過ぎはしなかったか？ 始
めはハレムに仕える事で一応納得した。し
かし聞くとなるとは大違いで、予想はもろ
くも崩れた。だまされたのだ。しかも谷子
は敵であった。ここに何等かの大きな苦悩
がなくてはならない筈です。しかも更に奴
隸より下等な家畜への道であったとしたら
二段、三段に路子の心理は曲折し、苦悩は
数倍した筈です。ところが、この心理的苦
悶が案外軽く扱われ、肉体的な責めに重点
が置かれたきらいはなかったでしょうか。
肉体的苛責は、責め方を変えたところでマ
ンネリズムに墮する危険は十分にありま
す。そして路子が、美加子が人間性を完全
に奪われてしまつて、ただ鞭の下に呻吟す
るだけの家畜となった現在、そこに内面的
な変化を求めることは出来ません。要は過
程が重要なのです。その心理的曲折が重要
なのです。それをやや安直に通り過ぎたき
らいがなかったでしょうか？ そして今で
は形骸と化した路子や美加子に情熱を感じ
なくなつたとしたら——。あなたは（そし

て私もそうなのですが）美女を奴隸の、更
に家畜の地位にまで落すその過程に、最大
の情熱をお持ちなのではないでしょうか？
若しそうであるならば、落ちてしまえば物
語りはそれでザ・エンドです。路子をもっ
ともっと反抗心に富んだ女性にして下さ
いたならば、吾等の楽しみは、もっと長く続
いたことでしょうか。今はただ、畜生
の道を完成へと急ぐ彼女を見守るより他に
仕方がないのです。唯一の望みは（若しこ
れがあなたの情熱をかきたて、再度筆をと
られるキッカケともなれば、望外の喜びで
すが——）。日本に未だ残っている筈の二
人の女性（名前失念）を、人間として黒天
使塔につれ込み、眼前に路子の畜生姿を晒
しめ、そこに新たな悲嘆の念を彼女の心に
起させることです。この心理的苦痛は、あ
るいはマンネリズムを破ってくれるのでは
ないでしょうか。終末は必ず来るでしょう。
その時は決してハッピー・エンドであつてほ
しくないのですが、かといって中途半端で
は尚更困ります。願わくば、再び筆をとら
れ、路子の行末、美加子の運命を見極めら
れんことを——。妄言を費やして失礼致し
ました。誌上で再びあなたの名前に接しま
すことの祈りつつ擲筆致します。

創作

謎の

緊縛フォト

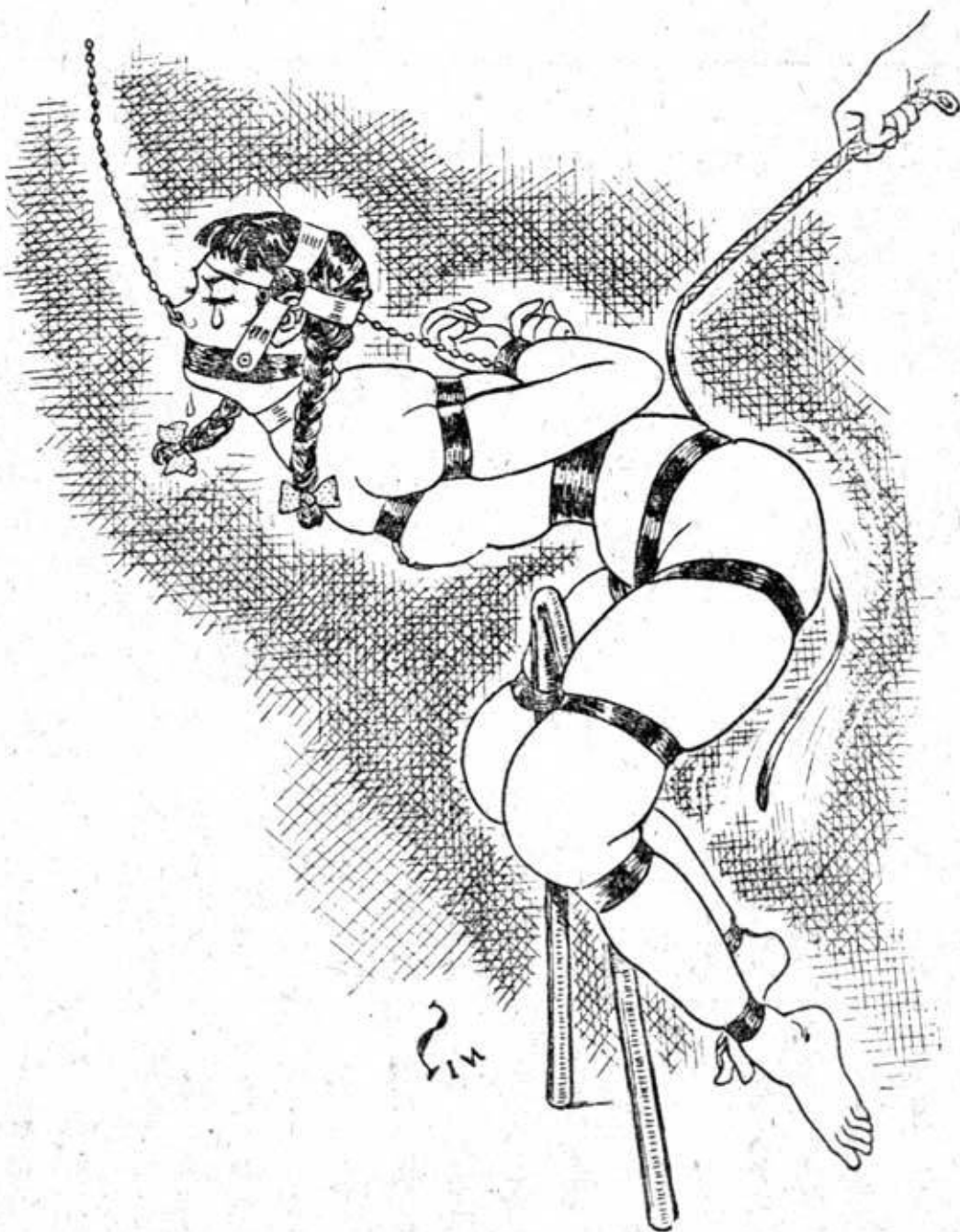
(一) 行徳寺角での落とし物

新聞記者の上田敏雄は、一ぱい気嫌でT市の繁華街を歩いていた。紺の背広に紺のネクタイ、ダンディないでたちで肩をゆすっていた。生暖い春の夜風が、ほろ酔い加減の身にあたって気持が良かった。三軒ほど梯子酒を

し二、三度、同僚と激論をかわすと、新聞記者らしい誇りが彼の身を包み、気持が一そう良くなった。彼は、そこで皆と別れ下宿に向かった。

郊外に出て或る町角——行徳寺町といわれる町角に来た時、上田記者は、ふと電柱のそばに歩厚い封筒が落ちていたのを発見した。

普通なら、何げなしに通り過ぎる筈であるのに妙に魅かれる何物かがあった。彼は近づいて、それを拾った。そして拾い乍ら、もしや金が入っているのではないかと思ってみた。封筒の大きさが絵ハガキ大のハترون紙で、丁度、彼の新聞社の月給袋に似ていたからかもしれない。彼は無意識に封筒に手をつた



久留木 栄

んだが、しかし中身は金ではないらしかった。
「チエッ！」と彼は舌打ちして、その封筒を拾てようと思ったが、思い直して背広のポケットにつつまみ、再び下宿の方へ歩き出した。

上田記者の最近の悩みは、金と情熱であった。金は不足、情熱は過剰であった。いくら仕事に熱中し良い記事を書いても、情熱のない文章は、つまらない気がした。それと同時に、金のない悩みは、つらかった。良い記事を書いて心が浮き立った時や、デスクにボツにされた悲哀を慰めるため酒を飲むにしても金が必要だった。しかし上田記者は、まだ駆け出しで金が沢山ある訳はなく、思わず落ちていた封筒に目が眩んだというのも無理からぬ話である。彼は下宿に帰ると、封筒を机の引出しに入れ、そのまま蒲団の上にゴロリと横になった。勿論、封筒の中身を改めなかったし、まして、その中身が重要な事件の発端を握る動機になるものとは全然、思いもよらなかった。生来のんき者の上田記者は、忽ち心地よい寝息をたて、夢路を辿っていった。

(二) 池田巡査部長の冗談

翌朝、上田記者は封筒の事など、すっかり

忘れていた。午前六時頃、ねむそうな目をこすり乍ら警察を一廻りした後、再び一時間ほど寝、十一時過ぎに出社した。そして社会部のデスクに「本日異常なし」と報告、そのままパチンコ屋に直行した。そこで一時間ほど時間をつぶし、それから警察記者クラブに顔を出した。しかし暇な日の警察記者クラブほど、つまらないものはない。そこで、碁、将棋、麻雀の二人委員会、四人委員会が開催されていた。A紙のN記者の肩をたたき、肩ごしに四人委員会を覗きながら上田記者は、ふと淋しい家計の事を考えてみた。どうも昨夜は、ボラれたらしい。月給日には、またぞろ飲み屋の姐ちゃんから追いかけられるか……：そういう考えが、しきりに明滅した。やがて昼食を食べると、ぶらりと庁内散歩に出かけた。どうせ暇だから鑑識課でも一つ覗いてみようかと思い、庁内の一番奥の部屋に入りこんだ。その途端、

「おう、敏しやんか。鼻がきくのう」

「何んや、事件か？」

「それ、二、三日前、服毒自殺した高校生があっただろう。ちよっと、おかしな節があったんだ」

「何んや、そのおかしな節って？」

「そう目くじらたてんでもいい。記者さんは直ぐ目の色を変えなざるから、話にくうて困る。おかしな節というのは、手と足に赤いアザがついとったんだ」

「赤いアザ？」

「そうだ、紫色のアザといった方がいい。多分、縄かなんかで括られとった跡だろうな。とに角、服毒がおかしいちゆうことになってトイちゃったんだ。けど結局、鼠一匹いなかった。残念でなあ！記者さん、何んぞ面白い話ないかいな。ニュース教えてくれよう」

池田巡査部長は冗談とも真剣ともつかぬ顔で、上田記者にいった。そしてニヤッと笑った。

「僕は今に好結果が出ると思うな。怪しいものは怪しいさ。おかしいものは、おかしいさ。自殺の背後に何かあるとするなら敵は必ず自滅する。どこかに馬脚を現すよ」

「そうだと面白いんだがなあ、敏しやん」

「じゃ、また来るよ」

上田記者は、そそくさと外に出ていった。警察署長との記者会見で発表された時、自殺の原因は神経衰弱、女はT高校生で十六才、井上和子。両親は市役所の吏員で、出来るだけ公表は見合わせて欲しいということであっ

た。その時、上田記者は、公表は避けられな
いと思うが原因が本当に神経衰弱であれば、
殆んど問題になるまいと答えたことを記憶し
ていた。

(三) 緊縛フोट発見

その日、上田記者が下宿に帰りついたのは
午後八時半頃だった。珍しく酒気を帯びてい
なかった。その半面、非常に疲れていた。疲
れたのは神経質になったせいだった。事件の
多い日は神経を使わなくて済む。というのも
他紙との競走が事件に集中されるからだ。処
が事件のない日は、他社に出しぬかれないか
と気をつかうのだ。そういう日は早寝して、
夜廻りするに限ると思った。それで、一息い
れようと下宿に帰ったのだ。彼は疲れを癒す
ためにビタミン剤でも飲むと思って机の引
出しをあけた。その途端、先日拾った封筒が
目についた。おもむろに中味を引出してみ
ると、洋紙でくるまれた十枚ばかりの写真が出
てきた。

「ほほう。写真か」

上田記者は何んの気なしに広げて、アッと
いって驚いた。それは縛られた女の写真だっ
た。そういう種類の写真があるということは

聞いていたが、見るのは始めてだった。それ
だけに驚きは大きかった。そして、その写真
の中の一枚を見るに及んで、彼の驚きは更に
拡大され完全に彼のドキモを抜いた。という
のは何んという偶然か、その写真は、まぎれ
もなく井上和子だった。

写真は十枚あり、井上和子の写真は三枚で
あとは年増の女の写真だった。口に革の猿ぐ
つわをはめ、胸と二の腕を金具のついた革バ
ンドで緊縛、両手首に鉄の手錠をはめ、その
手錠と革の猿ぐつわの尾錠とを鎖で連結して
締め上げ、天井から吊らされ、金属のパイプ
を逆V字型に組立て、それに膝頭の下を革バ
ンドで固定したもの等、画面の基調は明るく
映像も鮮明だったが、かもし出す雰囲気は悲
惨で、思わず顔を背むけたくなるぐらいの凄
味があった。これは余程、明い光線のもとで
撮ったか、良いカメラを使ったに違いない。
いずれにしても、何か重大事件のカギを握る
ような気がしてならない。

井上和子の緊縛写真——自殺。それは一体
どんな因果関係なのかしら？他の女の素性は
？又、この写真は何処で撮したのか。どうし
て行徳寺町の角に落ちていたのか？いろんな
考えが上田記者の頭の中に浮んだ。

彼は、むっくりと起き上ると、直ぐ電話を
かけようとしたが、「いや、待てよ」と思っ
た。池田巡査部長に報告するのは、あとでも
よい。それ以前に何かすることはないかと彼
は考えた。それは、井上和子の家を調査にい
った中村婦警に会うことだと思った。しかし
中村婦警に会って話を聞く一方、やはり池田
巡査部長に報告した方がよいのではないかと
も思った。幸い中村婦警の家は良く知ってい
たし、池田巡査部長の家の電話番号も知って
いた。

上田記者は中村婦警の家を尋ね、その家の
前の公衆電話から、池田巡査部長の家に電話
した。

「ああ、もしもし、池田さん。上田ですがね
例の井上和子の件、早速だが素晴らしい証拠
を発見したよ。緊縛フोटさ。もう、わかっ
たろう。やっぱり貴方のいうとおりさ。いず
れ写真を持参しますよ。何、直ぐ署に行くっ
て。では僕も二時間後、美しい参考人でも連
れて署にうかがいますよ。それまで待ってて
下さい。話は、それからまた。じゃ」

上田記者は簡単に話を済ますと、急いで中
村婦警の家の敷居をまたいだ。

(四) 中村婦警の驚き

中村婦警の家は目抜き煙草屋であった。先ず高校生の妹が出てきたが、上田記者が来意をつけると、あわてて奥に引きかえし、しばらくして座敷に案内した。

中村婦警は名を美美子といった。上田記者より五つ下の二十四才だった。一見、ひ弱なお嬢さんだが、十九の年からこの道五年のベテランで、ずっと前から少年係であった。上田記者は新任の日、丁度、今から三年前の春町で下宿への道を聞いたのが、この中村婦警だった。その時は日曜日で平服だったので、婦警だとは知らず、非常に親切なお嬢さんだなどという印象が上田記者の胸の中に留められた。それが翌朝、警察で顔をあわした時の驚き——それ以来、何かしら交際する仲になっていた。深い愛情とはいかぬまでも、ほのかなものが通いはじめたことは事実だった。それだけに、こんな問題でも彼女に相談し協力を求めるのが一番よいと上田記者には思われるのだ。

「どうしたの、今頃」

中村婦警は真剣なまなざしの上田記者の意

中をはかりかねて、心配そうに聞いた。

「それが……」

と上田記者は頭をぼりぼり掻いた。彼は緊張すると、よくこうしたはにかみの動作を行うことがあった。上田記者は意を決して語り出した。

「どうも十分いいにくいんだが……実は二、三日前、井上和子とかいうお嬢さんの自殺事件があったろう。あのことに少し詳しく聞きたいんだ。署長から社会的な影響も考へ、公表も遠慮してくれと頼まれたことのある、いわくつきの一件さ。だから貴女も、いいにくいかも知れないと思うんだが、僕はあの事件のことを、くわしく知りたいんだ。特に井上和子の日常をね。というのは、井上和子のことについて多少、変な話を聞き、この程やっと、その確証を手に入れたんだ。それで直接、調べた貴女にも協力して貰って、事件を調査したいと思うんでね。池田さんにも署に出てもらおうように今、電話してきたところだよ」

「そう。で、一体、何なの。その怪しいことというのは」

「怪しいということには違いないんだが……それより貴女が調べにいかれたとき怪しいこ

となかった？」

「なかったといえば、なかったようね」

「なんだか頼りない返事だな。池田巡査部長が、なんかいつてたろう？」

「ええ、縛られた跡があるとおっしゃっていただんでは。確かに聞きしたわ、部長から。でも彼女の家庭を調査した処、何ら疑わしいことはなかったのよ」

「僕は、自殺の裏に何かあると考えていたが先日、参考になる品を手に入れたんだ」

上田記者は、そういいながらポケットから封筒をとり出した。

「一昨日だったかな。相当、酔っぱらって家に帰る途中、行徳寺町の角でこの封筒を拾ったんですよ。中身は写真で、その中に井上和子のものもあったわけです。全く偶然の結果の所産ですがこんな写真を見ると益々疑問が深まるばかりです。」

中村婦警は封筒を手にとって裏表を念入りに見てから、写真を引き出した。そして一目みた途端、アッといって目を伏せ、思わず顔を赤らめた。それから震える手で一枚ずつ丹念に眺めた。やがて紅色の頬が真青になり、表情がこわばるのが良くわかった。

二人の間に重苦しい沈黙が、しばらく流れ

た。やがて上田記者は、その沈黙を払い除けるように

「中村さん。とに角、署へ行きましょう。もう、かれこれ池田巡査部長が来ているでしょう。幸い今日は、捜査課長の柏木警部が当直なので、いい相談相手になれます。私も新聞記者だが捜査には協力しますよ」
そういつて立ち上った。

(五) 第一回の捜査会議

警察では、いらいらしながら池田巡査部長が待っていた。勿論、柏木捜査課長もだ。

「やあ、待たせたなあ。十分、口説いたちゆうような、つらがまえ（顔付）だぜ」

開口一番、池田巡査部長がひやかした。上田記者は鋭い目玉を、ぎよろつかせている男たちを見まわしながら

「重大発表は慎重にするのが当局のやり口なものな」

と応酬した。それから小声で耳うちしながら捜査室になだれ込み、部屋をしめきって密談がはじまった。中村婦警の手から、先ず池田巡査部長に例の写真が渡され、回覧がはじまった。その間に上田記者は、こと細かに経過報告した。問題は先ず写真そのもの、それ

から井上和子一家の情報交換、井上和子の解剖所見、写真の落ちていた場所等に集中した。

池田巡査部長は、やおら立ち上ると席をはずし、鑑識課の棚からアルバムを出し、皆の前に開いた。

「わしは、その方の権威ではないから、はっきりと断言できないが、従来のものと較べてこの写真は多少、惨虐すぎるということだ。このように惨虐なものは普通のモデルでは、

よう我慢しきらん。したがって、このモデルは特殊なものだ。たとえば特殊な感情の女、いわゆるマゾヒストだな、そういう女がモデルになったと思うんだ。次に無修正のままだ

ということは、ただ単に売る目的でこのフोटを写したのではないと思う。売る目的なら普通は修正する。しかし興味本位だけでは、余り撮影や引伸しが上手すぎる。とくに天然色のものなど、好事家向きのものとしても傑作中の一つと思われるくらいだ。してみるとこれらは何の目的なのだろうか。或は脅迫だろうか。早急に判断がむづかしいが、いろいろな目的が組合わさっていると考えてよさうだ。そして若し売るとしても、国内市場より国外市場向けとみたら、どうだろうかと思

う。というのは、国内向けにしては調度品が粗末すぎるようだし、多分に外国の緊縛フोटの行き方を、まねたと思われる点がある。たとえば革の拘束具のつけ方などがそうだし編成の仕方も多分に外人好みを入れている。赤い長襦袢の絲のしごきと、ちよっと日本人ばなれした派手な色の組合わせもそうだ。日本の女に世界の女の理想を見出す……といった外人好みから見て全く垂涎ものと、わしは思うんだが……」

「なるほど。すると池田巡査部長のいう、この写真製作の動機は単に脅迫、趣味だけではなく、販売、いやそれ以上のことがあるということだな」

「左様。わしは、柏木さん、二つの目的があると思うんだが、一つは世界の好事家に、この写真を売ることに。今一つは、この写真のよ

うに徹底的に奴隷化した女を国際市場に供給するため、この写真をカタログにするということ。この二つの意味があるんじゃないかと思う。」

「じゃ、背後に国際的な人身売買団があるとでもいうのかな」
「多分、そう思われるんだ。井上和子の場合、そう見えないとしても、少くとも他の二

人の女の体の線は、くずれている。こいつらは奴隷だと、わしは思う。」

「すると井上和子は？」

「それが問題だ。この方は……」

「フォトを売るといいうわけか」

「まあ、そうなるかなあ」

そこで池田巡査部長は困った表情をして頭をかかえた。

「とに角、わしは、そこに問題があると思うんけんど。あの年頃の女は皆、純情で騙されすいし、裸にすれば綺麗だもんなあ。課長、この年増の方は、こりや美術的にはゼロですぜ」「そうだろうなあ。池田巡査部長、よくわかったよ。君の考え方は、いずれこの写真の女の身許を調べれば、ある程度、判断できるだろう。中村さんは、どう思う」

柏木警部は話をうまく中村婦警についだ。

中村婦警はしばらく考えていたが静かに語り出した。

「私には、池田さんのように写真上の判断は出来ないんですけど、これまで井上和子の家庭を調べてきたことから考えて不審な処があると思うのです。というのは、今後の調査で多少かわるかもしれないが、現在の段階では、あの子の家には暗さがない。家庭的には



少くとも不幸ではなかったと考えられる。して見ると家の人は自分の娘が、そういう恐しい目にあっていることを知らなかったのではないか。しかし家人に知られずに、あんな特別な写真をとるのは非常に困難なことだ。学

校の帰りを巧みに利用するとか何とかして、何かのきっかけを作り日曜日に強行したに違いない。薬で睡らすかして……そして一度、写真におさめると、それで脅迫する。こうして次第に彼女を手なずけていった。一方、彼女

の方は両親や学校へ自分の行動が知れることを恐れ、遂に自殺しなければならぬはめに至ったと思われます。」

「すると中村さんの意見によれば、彼等はよく家庭の事情を知っていて、一種のモデルとしてのみ利用した。ということになるんですね」

「ええ、そして今度の自殺は彼等にとっては思いもかけないものだったと思うのですけど上田さん、どうでしょうね」

「確かに僕も、そういう意見も考えられると思うのです。まして池田さんのいうような場合なら、なおさらです。特に写真の落ちていた附近に相当、探し廻った跡があります。でも今度のことだけで、それを判断するのは早計だと思うんです。写真が普通のものと違うからといって直ちに、それを犯罪に結びつけるのは早計で、十分調べてから結論を出すべきだと思います。或は金を貰ってモデルになったのかも知れない。そうなると犯意はないわけだ。自殺したのは中村さんのいうように自分の行動を恥じて、単純に生きていられないと思ったとも考えられる。しかし又、どうも犯罪の臭いがするような気もする。それを確かめるには、もっと調査を進めるべきだと思

う。井上和子の家庭をもう一度よく調べたり他の二人の女の身元もよく洗う。この二人は或は家出して調査願いが出されているかもしれない。或は最近、売春禁止法の施行にともない、売春婦の行方不明が多いといわれるので、そういった人の動向と関係がないか、そんなことを調査してはじめて、この問題は或る程度の輪郭が掴めるのではないかと思う。」

「なるほど、さすがは新聞記者だ。しかし、とに角、事件は発端したと考えるとよさそう

だ。これから早速、捜査を開始するとしよう。上田君は新聞記者だから、こちらから社に挨拶をした方がよさそうだね」

柏木捜査課長は、そういつて腕を組んだ。

こうして夜遅くまで会議が行われ、その夜の中に署長に報告が行われ、署長と課長が上田記者のデスクと報道部長を尋ね、警察に対する報道の協力要請が行われた。こうして捜査は早くも一步を踏み出したのだ。

(六) 井上和子の家

翌日は絶好の春日和だった。重りあった黒い屋根瓦からは、ゆらゆらと陽炎でも立登りそうな暖さだ。新聞記者の上田敏雄は、公園の西角で午前九時半に中村婦警を待ち合わせ

ることにしていた。グレイの背広にグレイのスボン、カシミロンの白のワイシャツに、白地に水色の斜線をあしらったミナロンテックスのネクタイをしめて早目にやって来た。青いすきとおった大空を時たま仰ぎながらベンチに腰かけ、暖い春の日ざしを両肩一ぱいに浴びていると、彼は不思議な感動を覚えるのだ。これが「生の喜び」というものであるのか。突然、訪れた幸福感——それは敏雄だけしかわからぬ秘密である。敏雄は思うのだ。

「私は愛している、死ぬほど深く。だが、まだ口には出すまい。愛しているからこそ特種を提供して、協同捜査を行っても良いと思っただのだ」……と。少くとも中村美美子に対して抱いた恋心は、この事件が終るまで秘めておきたいと思う。その思いが、こうして彼女を待つ間、彼を宇頂天にさせるのだ。中村婦警の柔しいまなざしと潑刺とした勇姿を思い浮かべると、あわただしい仕事の疲れも、わずらわしい記者仲間の競争意識も、ふっ飛ぶような気がする。やがて

「上田さん、随分待ったでしょう。お約束の時間に十五分も遅れているわ」と中村婦警が声をかけた。

「やあ、中村さん」

「池田さんがね、指紋の検出をしてから、あとで例のフォトの複写をされたでしょう。それで手間どっちゃった。でもね、その代り何枚も複写できたわ。いやらしい写真だけど捜査には絶対必要でしょう。ああ、それから指紋ね、三人分も四人分もついているんですって。きっと上田さんのもの、ついてるんですよ。だから後で貴方の指紋もとって下さって。これは池田さんのことづけです」

「なるほど、それじゃ僕も指紋をとらにやいかな。勿論、貴方の指紋もついていたんでしよう。中村さんは随分たんねんに見ていましたからね」

「ごあいにくさま。私の指紋は、もうとくに登録済みよ。それで写真のとも照合済みですって」

二人は顔を見合わせて笑った。それから二人は井上和子の家へ出かけた。

井上和子の家は生垣をめぐらした小じんまりした家だった。庭の手入が非常に行届いていて色とりどりの花が咲きみだれていた。

「いい庭だな。市役所の吏員の住宅にしては立派すぎる」

「そうね、御主人のお父さんが銀行につとめていられた頃、買いとったそうですよ。建物

も、その頃のものだから、かれこれ五、六十年になるっていつてらっしゃったわ」

「ふうん、それにしても羨しいな。僕なんか一生かかっても、こんな家には住めない」

「あら、あんなことおっしゃって。でも、ほんと。周囲の落ついた環境といい、こんな立派な家に住んだら、のびのびとするでしょうにね」

「同感だね。でも、それにしても今度の事件は腑におちない」

「まったくね」

そう合槌をうちながら美美子は玄関のベルを押した。

(七) 井上和子の母、和枝

「ごめん下さい」

中村婦警の澄んだ声が家の中に流れた。

「はい」

と、これまた物柔かな返事があり、年の頃四十五、六の、やや小ぶりの和服の女が出て来た。和子の母、初枝であった。

「まあ、中村さん！中村婦警さんですね。先日は娘のことで本当にお世話になりました。

大層とり乱してしまって、どうも失礼しました。さあ、どうぞお上り下さい」

「そうね。それじゃ上らせて貰いましょうか。あ、それから小母さん。この方は私のお友達の新聞記者の上田さんです。気のおけない柔しい方ですから、どうぞよろしく」

「僕、上田です。どうぞよろしく」

上田記者は挨拶した。座敷に案内されると中村婦警は仏壇の前にいつて手を合わせた。上田記者も、それに見習った。仏壇の前には和子の写真があり、日進妙蓮大姉という戒名が書いてあった。ふと見ると、和子の母も静かに合掌していた。上田記者は、その姿から何かしらけだかいものを感じた。さきほど玄関に立った時から、どんな人間だろうかと、そのことばかりが妙に頭にこびりついていたが、初対面の印象からは苦勞人という感じが強かった。それが今、多少の好感に変わるのを禁じ得なかった。たわいもない世間話が、あれこれかわされて、和子の件について中村婦警が話を切り出したのは、三人の話し合いの場が完全に出来てからであった。

「実は、お話しにくいことですが、上田さんが先日、行徳寺角で、たいへんな写真を拾ってきたのです。お宅にとっては、まことにお気毒な写真ですが、これがその写真なのです

けれど……」

中村婦警は封筒に入れたままの写真を机の上に置いた。

「和子さんの自殺の裏には何か事件が隠されているような気がしてならないんです。それで、お母さんにも、ぜひ協力して頂きたいと存じまして、おいした伺わけです」

「すると娘が何か、そのような大それた……」

「いや、私達は飽くまでもお宅のお嬢さまは

お気毒な被害者だと見ています。したがってお嬢さんの死を無駄にせぬためにも協力をお願いしたいのです。先日もお話しいたしましたように、和子さんの手首に縛られた跡のうなあざが残っていました。この写真をくらんになって何をお気付きの点はありませんでしょうか」

和子の母の初江は封筒を手にとって、おそろるおそろる写真を引き出したが、一目、見ただ

けで顔色が変わった。じっと喰入るように眺めている中に手や膝頭がびくびくと痙攣して、激情をこらえているのがよくわかった。が、ついにたまりかねて、その場に突俯し声をあげて泣きくずれた。中村婦警はハンケチで、そっと目頭を押えた。上田記者も、つと鼻先につき上げるものがあつたが、やっとの思いで我慢をしておした。和子の母の初枝は、泣きたいだけ泣くと、やがて気を引きたてるようにしてポツポツ話しはじめた。

(続)

春の時代劇映画

縛りシーンの花盛り

嵯峨美也子・記

春とともに時代劇も花盛り。一時、縛り映画のなかった東映も、このところ心を入れかえてか、美しい女優の縛りシーンをふんだんに採り入れ、マニヤ達を楽しませてくれる。

まず東映では、「たつまき奉行」で東京

のホープ、佐久間良子が、花も恥じろう長襦袢姿で縛られるというアデ姿を見せる。金山へ行った与力の父の行方を尋ねるため薬売りに変装して佐渡へ乗込み、居酒屋の女になり秘密を探る。そして遂に海賊の頭目の手文庫から秘密の金貨を取り出すと

ころを見つけられ、長襦袢の上からガンジガラメに縛られて、白布で猿ぐつわを噛まされ蔵に監禁される。そして共に潜入した与力の居場所を白状せよと、ムチ打ちの拷問を受ける。一寸した見せ場だった。

「新吾十番勝負」では、薬種問屋の娘に扮した長谷川裕見子が、橋蔵に切り掛ってとり抑えられて、腰紐で後手に縛られシトネの中に横たえられる。フト眼を開けば、身動きも出来ず。目の前に居る橋蔵。「俺達はどう他人ではない。お前の胸に聞け、身体に聞け」チョットしたセリフである。結婚して色気の増した裕見ちゃん、後手に縛られて身悶える様は実に素晴らしい。さすが縛られ役のベテランである。

「美男城」で、野性的な女、朝路に扮した丘さとみが活躍し、両腕もあらわに、女ロビンフッドのような姿で、荒縄でギッチリと縛られた上、柱にくくりつけられる。縛られた縄から脱れようと身もだえするところは、仲々の悲壮美が感じられた。又、珍らしく大川恵子が、ヨロイ姿で敵方に見つかり、捕われようとする寸前に救われるが一寸惜しいシーンである。

これからの作品では「紅顔密使」で「大帝の密使」よろしく、橋蔵の武磨が捕われてゴウモンされるが、そのとき彼を救わんとする姫、狭霧も火あぶりのゴウモンに遭うという。誰がいじめられるか知らぬが楽しみである。

松竹では「女肌地獄」で新人、佳通子が花嫁姿で台上に縛りつけられ、ロウで生人形にされようとするシーンが迫力があつた。他に人形で色々の縛り姿を見せてくれたが、あれが美しい女優だったらと思ったマニヤも数多いことだろう。

「江戸遊民伝」のラストで、青山京子のお浪が、遊女に売飛ばされるシーンで、カゴの中の猿轡姿を見せた。縄の見えなかった

のが惜しいものである。

青山京子といえば大映の「弁天小僧」では柱に縛りつけられたり、ろづるで責められたり、最後は猿ぐつわに後手縛りで近藤美恵子と連縛され、よろよろと兩人がよろめくシーンがよかった。二人をつないでいる縄を刀で切られるところは、ハツとした。と彼女に云ったそうだが、伊藤監督は流石にうまいものだ。彼の「女と海賊」が楽しみである。京マチ子の町娘お糸が、恋人と一諸に海賊船に捕えられ、鎖で手足を繋がれる。「地獄花」で素晴らしい縛られ方を観せた彼女だから迫力があるだろう。三田登喜子も捕われの女で一度海中へ飛込むが、引上げられて肌襦袢の上からス巻にされる。頭領の前で、襦袢の胸元をサツと開けて体を投げ出すなど、体当りの演技をしている。

「紅あざみ」では、毛利郁子が縛られて運ばれたり、長襦袢一枚で柱にガンジガラメにされたり、グラマー時代劇女優として大いにかわいがられていた。「風呂を使って」ところへ飛び込んで来て、さんざ打ったりたたいたり、その上面白が……」

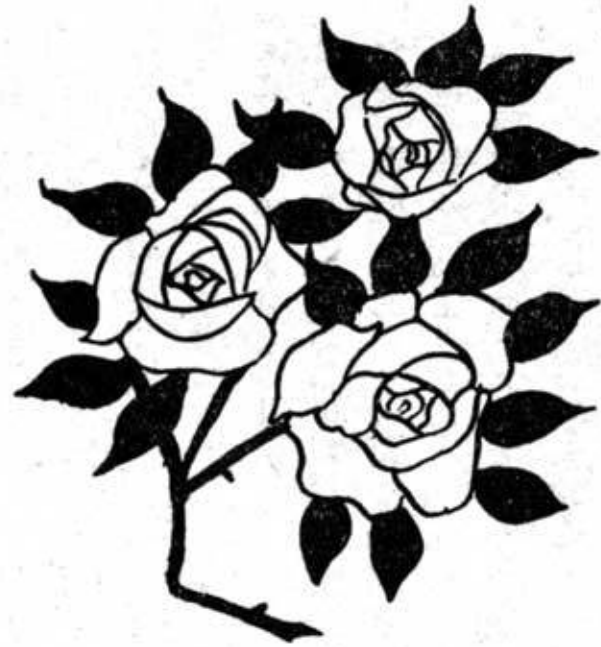
というセリフが利いている。

田中徳三監督の「お娘吉三」では、雷蔵のお嬢吉三を囲み、浦路洋子のお民、小野道子のお加代、加茂良子のお美和が色模様を添えるが、お加代は番所で柱に縛りつけられ、お民もまた縛られる。新人監督がどのような縛り姿を見せるか、注目の的だ。

新東宝はこのところ、吊り責めがお盛んだ。「剣姫千人城」では敵将の奥方吉野が、雪中の井戸端で吊り責めに遭う。白雪フンブと舞う中で長襦袢一枚、荒縄でしっかり後手縛りにされ、ムチ打たれ、最後は斬られるが、カットも長く、後手縛りも充分に見せ、近來にない見ものだった。女優は山村邦子、若杉嘉津子という、吊り責め女優が多い。

最近作では小畑絹子の「南部騒動・姐妃のお百」で、北沢典子の腰元が、密書を盗んだ罪で捕われ、地下室に半裸で吊り下げられて拷問に遭う。「伊達騒動」で吊り責めのいい姿を観せてくれた北沢典子の、半裸の吊り責めシーンというから、大いに期待出来よう。

(おわり)



創作——僧堂

(後篇)

榎村 奏 青木 審・画

第四章

蓮丈は、開枕かいちん後も水行のことを考えると容易に寝つかれなかった。今迄はどんな辛い修行にも耐えてきた彼だったが、あと十何日間続く水行には、僧堂を逃げだしたいほどの苦痛を覚えた。

取材に來た新聞記者は「寒いでしょう?」とか「冷いでしょう?」とは訊いても「恥しいでしょう」とは云わない。それは、きわめて当然のことに違いなかったが、蓮丈にとって、寒いよりも冷いよりも、羞恥と屈辱のほ

うが問題なのである。俊戒にも指摘されたように、彼は、己が人並以上の激しい羞恥心をもっていることを、自覚しないわけにはいかなかった。

二日目の水行のとき、蓮丈は、わざと遅れて水行場へいった。そのせいか参観者は少かったが、ちよつと意外だったのは、昨日と同じ顔がまた来ていることであつた。それは、昨日一番あとまで残っていた長身の男で、やはりカメラを頸に掛けている。彼のフィルムの中に、自分の裸身が感光されていると思うと、身が竦むようになった。できることなら

そのフィルムを買いとりた。しかし、そんなことを云いだす勇氣は、とてもなかった。

二、三人の雲水が駆けてきて裸になると、蓮丈は、その陰へ隠れるようにして帯を解いたが、男の視線が気になって、落着きなく絶えず眼を動かしていた。衣を脱ぎずると全身がカッとなり、寒さなどまるで感じなかった。蓮丈には、男が自分一人を視ているように思えてしかたがなかったのである。

濡れた躰をろくに拭いもしないで、そそくさと衣類を纏った蓮丈は、目の前に立っている俊戒に気づくと、思わずハツとして俯向い

た。

「蓮丈。おまえの作法はなっていない。雑念があつて駄目だ。心身統一し、腹に力を入れてやるのだ。いまから私がやるのをよく見ていなさい」

俊戒が衣を脱ぐのを待っていたように、長身の男はカメラをかまえる。彼は、ファインダーに眼を当てたままで、少しずつ躰の位置を変えながら、急がしくレバーを操作し、次々とシャッターボタンを押した。そして、最後に俊戒が姿勢を正し、真直に立って合掌したとき、正面に回った男は、素早くその姿をカメラにおさめた。

(なんと無遠慮な！……)

蓮丈は、腹だたしで胸が固くなったが、俊戒は男に一瞥もくれない。悠々と衣を纏い終ると、

「あとで私のところへ来なさい」

と云い残して戻っていった。

長身の男は、蓮丈がいきかけると、足早やに近寄って来た。

「——アノ、私、こういう者ですが」

さしだされた名刺を受けとって、中畑という文字だけを読みとると、蓮丈は、

「何かご用でしょうか？」

ときり口上で云った。

「いまの人の名前を知りたいんですが——」

「いまの人の？……」

(名前を訊いてどうするのだ)と云いたかったが、それはのみ込んで、

「俊戒といわれますが——」

と答えた蓮丈は、嫉妬のようなものが、胸中を昏くするのを感じた。

午後の作務のあと、個人的な時間が与えられると、蓮丈は、たち騒ぐ心を制えて、俊戒のところへいった。

俊戒は、何も云わず外へ出た。二、三步後から従っていくと、境内にある池の畔で俊戒は足をとめた。相当に大きな池で、周囲が千メートルはある。青みどろの浮いた水面は、薄曇りの空に鈍く光って、寒々と小波だっていた。

「蓮丈。いまから、私の命ずる通りにするんだ」

「はい……」

「では、裸になりなさい」

「アノ、裸にでございますか——？」

「そうだ」

「でも、このような場所で——」

「口ごたえは赦さぬ。云われた通りにするんだ！」

蓮丈は、蒼褪めた顔で衣を脱り、禪一本になった。

寒い日なので、境内の人影はまばらだが、場所が場所だから、いつ人目につかぬとも限らない。それに、蓮丈が惧れているのは、毎日のように裏山や境内へ遊びに来る子供達だった。

「裸になったら、跣足になって池の周りを一周するんだ。わかったな。速く走らなくてもよい。マラソンの要領でやれ。では、いきなさい」

蓮丈は無我夢中で駆けだした。周囲のものは何も見えない。心の中では、誰にも見られないことだけを願っていた。

しかし、この異様な情景が、人の目につかぬ筈はなかった。遠くから見つけて、わざわざ近寄り、吃驚したように見送る者も一人や二人ではなく、幼児を連れた若夫婦が指でさしながら、「ホラ、ホラ。お坊さんが裸で走ってますよ。強いねえ。速い速い」と云っているのも聞えた。

それらの人々の前を通り過ぎても、蓮丈は振り払うことのできない視線を感じていた。

脂汗を垂らして戻ってきた蓮丈の歪んだ表情を見ると、俊戒は、

「よし。今度は、私もやろう。もう一周だ。頑張るんだぞ」

と云って、同じように禪一本になった。

はたして、どこからか子供達が集まって来た。彼等は、最初のうちは、ポカンとして二人を眺めていたが、すぐにワアワアと囃して始めた。

冷い屈辱感が、蓮丈の全身をつらぬいた。

(畜生……!)

唇を噛み、蓮丈は、正確なホームで前を走っていく俊戒の逞しく躍動する背中を見つめながら、一心に駆け続けた。

「おまえは、私を恨むかもしれない。しかし人間は鍛えなければ強くならん。これが私の信条だ。私は、おまえが、いや、雲水の一人が、揃って立派な人間になってくれることを念願している」

衣を着け終ると俊戒は、いつもの穏かな口調で云って、蓮丈を見返った。

(この人になら、どこまでもついていける!)

蓮丈は胸の中でそう己に云いきかすると、晴々とした気持になって、敬慕する維那の男

らしい貌を抑いだ。

次の日の水行のとき、蓮丈は自分でも不思議なほど平然としていられた。多くの見物人の目の前で行を勧めることが、何か誇らしくさえあった。

「蓮丈。今日は美事だったぞ。この後も最後まで立派にはたしてくれ」

軀を拭く蓮丈の側へ来て俊戒は、そう云うと静かに微笑した。

第五章

「蓮丈。おまえも、とうとうやられたってえじゃアないか。俊戒の奴にヨ」

了覚は、東司で鬼の首でもとったように云った。

「可哀そうにナ。おまえだけは特別だと思ってたんだが——」

「あの方は、私を鍛えて下さったのです。」

「え?— あ、なある……。ウフフ。か

えてますます好きになったってわけか。」

「私があの方を尊敬する気持に変わりはありません!— ただ、それだけです」

蓮丈は思わず憤然とした調子になり、それから、心の底をみすかされはしなかったかと

惧れる気持になって、慌てて東司を出た。

年が明け、正月気分も漸く抜けきった頃になって、この地方では、その冬初めての雪が降った。

小やみするかとみえては、まだチラついてくる粉雪を網代の笠でよけながら、外出から戻って来た俊戒は、山門の近くまで来たときに一人の男から呼びとめられた。

「——失礼ですが、俊戒様では?」

「そう、私は俊戒だが、何か——?」

見知らぬ男の顔を見て、俊戒は怪訝そうに眉を寄せたが、白っぽいオーバーの襟を立てた若い男は、沢野であった。

「実は、川本、いや、蓮丈のことで、お耳に入れたいことがあります——」

「蓮丈?— あれがどうかしたのですか?」

「ここで立ち話というわけにも——いかがでしょう。ご迷惑とは存じますが、ちよつとそこまで足労いただけませんでしょうか?— いえ、決して、おひまをとらせるようなことはいたしません」

そう云われて俊戒は、いつとき考えるふうだったが、

「よろしい。お伴しましょう」

と云うと、上げていた笠を下した。

二人が歩きだすと、お休み所と看板を出した家の軒先に雪をさけていた長身の男が、オヤという顔つきで往来へ踏みだしたが、二人ともそれには気がつかなかった。

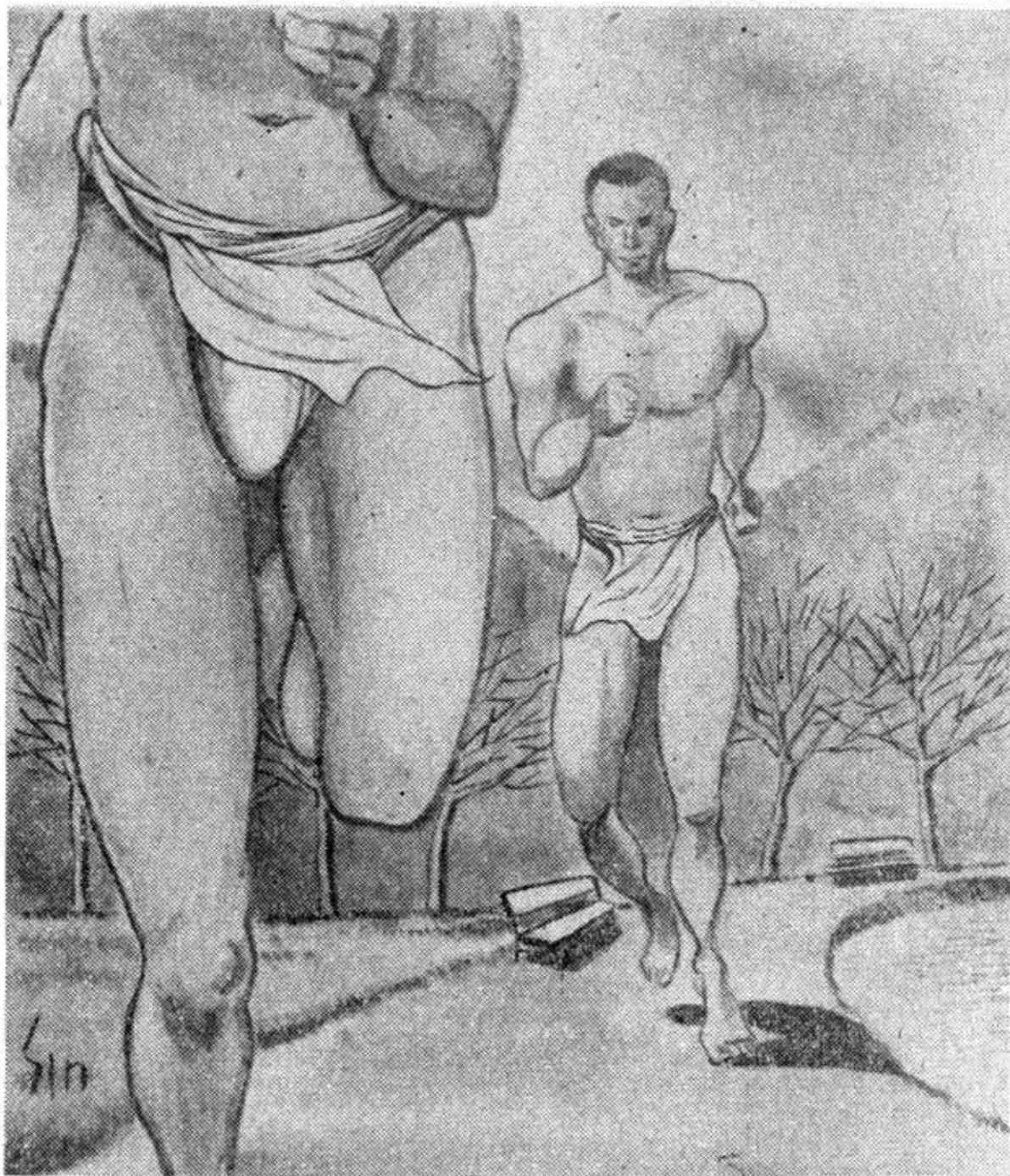
俊戒が案内されたのは、畠の中にポツンと建っている、崩れかけた納屋のようなところだった。

「こんなところで恐縮なんです、人目につかないほうがいいと思つたもんですから」

「そんなことかまいません。お話というのをうけたまわりましょう」

笠を脱した俊戒は、衣の雪を払いながら沢野の荒んだように見える貌を見つめた。

沢野は入口の戸を閉めると、ポケットから



出した蠟燭にライターの火を移して、
「俊戒さん。まあ、そうか急ぎにならないでも——それとも、蓮丈がお待ちかねですか」
「寺へ戻るのが、あまり遅くなッては困るのだ。話というのは何ですか？」

「判りました。では、てっとり早く申しませう。俊戒さん。あんた、蓮丈から手を引いて貰えませんか」
沢野の態度が妙に太々しくなったのには、俊戒も気づいていたが、相手の云っている言葉の意味は、さっぱり掴めなかった。
「それは、どういうことですか？」
「フフ、白ばっくれても駄目ですぜ。こっちにやア、ちゃんとネタがあがってんだ」
「もう少し判るように話してくれませんか。私には、何のことだか——」
「そりやアね。蓮丈を可愛がるなア、あんたの自由かもしれませんよ。しかし、彼奴は俺のものだ。あんたも一かどの坊さんだ。他人のものを横どりするような汚ねえ真似はしたかアねでえしようが」
「大分判りかけてはきたが、あんたは、何か誤解をしておられたるようだ」

「じゃア、あんア、蓮丈を愛していないとでも云うんですかい？」

「それは、愛している。しかし、私が愛しているのは蓮丈だけではない。維那として、雲水全部を愛しているのだ」

「利いたふうなことをぬかすな！ ようし。あくまで云わねえ気なら、俺の流儀で訊いてやる。あとになって後悔するなよ」

沢野の形相は、蠟燭の光を下からうけて、悪鬼のようにひきつた。

「おい。みんな。この坊主を裸に剥いてフン縛ってしまえ！」

沢野の声に、どこに隠れていたのか、三、四人の黒い影が、不気味に浮かびあがった。

「縄はいらん！ 私は、逃げも隠れもせん。打つなと蹴るなと、おまえ達の気の済むようにするがいい」

俊戒の声が凜として響いた。

「フン。さすがは元軍人だけあって、いい度胸だ。みんな。縄はいらないとおっしゃるから、裸にしてさしあげな。丁寧に脱がせ申すんだぜ」

気圧されたように突っ立ったままだった男達は、沢野の言葉で我に返ったように、バラバラと俊戒を取りまいた。

「寄るな！ なるほど、着衣の上からでは張りあいかなるう。望みどうり裸になってやる」

そう云うなり、俊戒が衣をかなぐり捨てると、岩乗な体軀に固く締め込んだ六尺褌が鮮かな白さで際立った。

「ますます恐れ入りました。坊さんにしとくなア惜しいくらいだ。ところで、こっちは、お陰で仕事がしやすいってもんで——オイ、石原。おまえ何か一言云いてえんだろ？」

沢野に促されて、華奢な躰つきの男が前に出た。

「大尉殿。お久しぶりです。自分をお忘れですか」

大尉と呼ばれて俊戒の顔が一瞬、曇った。

「石原ですよ。あんたの部下だった石原上等兵ですよ」

そう云われなくても俊戒は思い出ししていた。石原上等兵には、忘れることのできない昏い記憶があったのだ。

俊戒、当時の坂上大尉は、石原上等兵の希望を知ってひどく煩悶した。殺伐とした戦場であらゆる人間性を制さえられ、一刻一刻を死の危険に晒されている若者達の心情を想うと、哀れでもあったし、自分自身も確かに淋

しくはあった。にもかかわらず、大尉が石原の望みを拒んだのは、石原の傷つきのを惧れたからだ。不自然な形での、若さの発散を未然に防ぐのも、上官としての義務だと信じていた。大尉は、石原を部下としても人間としても、深く愛していればこそ、絶対に許さなかったのである。いや、石原だけではない。同性にも、俊戒は、一度たりとも接したことはなかった。彼は、三十八才の今日まで全く清浄無垢で通してきたのである。それはあるいは、ナンセンスかもしれない。しかし、彼には、それが相手を必ず幸福にするという確信がない限り、己を甘やかすことができなかったのだ。

その後、石原上等兵が、某中尉と親交をもったと知ったとき、坂上大尉は、腹の中が煮えたぎるような思いを味わった。一おもいに相手の中尉を叩き切ってしまうとさえ考えた。それは嫉妬ではないと自分では思っていたが、はたからはそう思われても、しかたのないことだったろう。彼は、ひそかに男泣きに泣いた。

「——石原。おまえにこんなところで再会しようとは思わなかった。私は何も云うまい。

残念ながら、私にはその資格がない。ともかくも、無事であったのは嬉しい。おまえ、少し痩せたようだな。軀は丈夫なのか？」

惘然として云う俊戒に、石原の眼は、陸軍大尉の凛々しい軍服姿を見ていた。

「大尉殿。私が、いま、どんな生活をしているかは、多分、ご想像がつくと思います。でも、私があんたに対する気持は、昔とちっとも変っちゃいません。だからこそ、この仲間に加わることになったんです。はなは気が進まなかったんだが、対手があんただと知って私ア飛びたつ思いだった。私はね、一度でいいから、あんたを思いきり責め苛んでみたかった。憎いからじゃない！ 真実惚れてるからだ！ この気持が判って貰えますか……」

「……………?!」

熱っぽい石原の言葉に、俊戒が戸惑ったように口を噤むと、沢野はニヤリとして、

「もうそのくらいでいいだろう。みんな、いか。この坊主が泥を吐くまで打ちのめすんだ。手加減はいらんぞ。やれッ！」

忽ちのうちに、男達の荒い息使いが乱れ、肉を打つ鈍い音や、鞭の唸りが交錯し、狭い小屋の中は殺気が漲った。

俊戒は膝を大きく開いて坐し、両肘を張っ

て合掌の形をとり、ジッと臉を閉じている。

それは、恰で、荒行をする僧のように、猛々しくも、また、静かな姿であった。不動明王を想わせる逞しい腰は、土間に根を下したかのように、如何なる打撃にも微動だにしない。しかし、どんなに強靱な筋肉でも、生身の人間である。肩や脊の数力所は、皮膚を破って血が噴き、生々しいみみず脹れは、腹や腿にまで無数に這った。

「おい、坊主。 いい加減に白状したらどうだ。それとも、もっと痛い目をみたいというのか」

沢野の怒声に眼を開けた俊戒は、

「どう云われようと、どうされようと、事実でないことを云うわけにはいかん」

その口調の落着いているのが、沢野をいっそう苛立たせた。

「ようし！ どんなことをしてでも、その口を割らしてみせるからそう思え。そして、蓮丈から手をひくことを必ず誓わせてやる！ みんな。こんな手ぬるいことじゃ駄目だ。此奴を裏へ引きずり出して、梯子へ括りつけるんだ」

「兄貴、そんなことをして大丈夫か。もし、人に発見されたら——」

石原が口をはさんだが、逆上している沢野の耳には入らなかった。

「かまやしねえ。裏には竹藪があるし、この雪だ。サア、早くしろ」

俊戒は、あくまでも無抵抗だった。

男達は、俊戒を梯子に縛って固定すると、沢野の指図にしたがって、逆さに屋根へ立てかけた。

外は、いつか吹雪になっていて、逆流する血のために静脈が怒張し、みるみる朱を注いだようになっていく俊戒の顔へ無慚に吹きつけた。

第六章

禅宗の修行が如何に酷しいとはいえ、こうまで人間を鍛えてしまうのかと呆れるほど、俊戒には動揺した気配がまるでなかった。軽く眼を閉じた表情は、諦めがいいのか、豪胆なのか、底が知れない。しかし、このまま放置すれば、凍えるのは時間の問題だろう。

「ふうむ…………… さすがは筋金入りの禅坊主だ。これでもまだこたえねえとみえる。それにしても、このまま凍えちまったんじやア、元も子もない。 お慈悲に少うし 暖めてやるか。オイ、みんな、此奴の頭の下へ藁を積

め。火は俺が点ける——」

「兄貴。そりやア、あんまり酷い！」

石原が、蒼白な顔で沢野の前に出た。

「フン。おめえは嫌なら手をださねえでもいいんだよ。そっちへ引っ込んでな」

沢野は、吐き捨てるように云うと、カチッとライターに点火した。

その小さな焰に、誰もが一瞬、息を呑む。

弾丸のように黒衣の男が飛び出して来たのはそのときである。

「ま、まってくれッ！」

そんな酷いことをしないで……た、たのむから、それだけはやめてくれ！」

そう叫びながら、沢野の手からライターを叩き落したのは、意外にも了覚だった。

「何を……ッ！ オイツ、糞坊主。てめえ、いま

さら何を云うんだ」

沢野の額に青筋がたつ。

「わ、私が悪かった！ 私が、間違っていた。

おまえ方が、まさか、こんな恐ろしいことをするとは、考えてもいなかったのだ……あ

あ、私は、大変な罪を犯してしまった！」

了覚は、狂ったように叫び続け、果ては声を放って号泣しはじめた。

「チッ。オイ、誰か、この坊主に猿轡をかましてしまえ。ついでにフン縛るんだ」

沢野の命令で、了覚はたちまち惨めな姿にされて転された。

「フフフ。そこでそうやって見物している。おまえだってまんざらじゃアねえ筈だ」

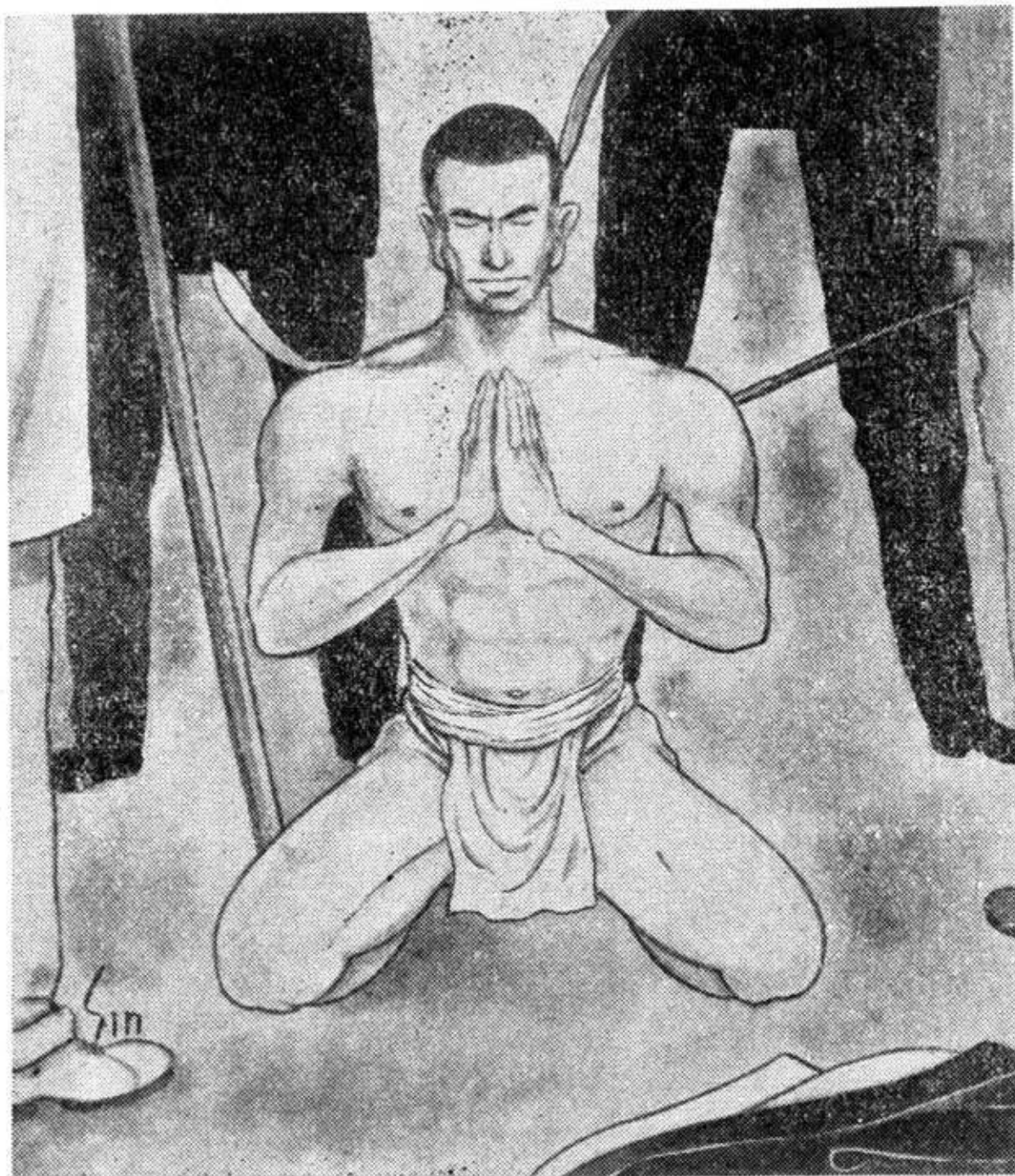
沢野は唇を歪めると、ライターの拾いあげ、点火した火が消えないように風を避けながら、俊戒の頭の下に積みあげられた薬束に近寄っていった。

湿りをもった薬は、すぐには燃えあがらず、焰を内攻させてブスブスと燻り、次第に濃い煙を噴きだしはじめた。

激しく咳き込む俊戒は、全身を波打たせ梯子がユサユサと揺れる。顚顚を伝う涙は、搾り出る脂汗と混ってポタポタと滴り落ちた。

あまりの苦しさに耐え兼て、

あまりの苦しさに耐え兼て、



かりに俊戒が、助けを呼ぶか悲鳴をあげるかしようとしたとしても、間断ない咳嗽がそれを不能にしたに違いない。

煙は、ますます勢いを増し、強風にもかかわらず、ときどき俊戒の体を包むほどに渦巻いた。

悍馬のような体軀が全身の力で跳くので、梯子は踊るような揺れかたになり、屋根からはずれる危険さえあった。

パト・カーの到着するのがもう少し遅かったら、俊戒は、おそらく窒息してしまっていただろう。

沢野等は、傷害現行犯として、その場で逮捕された。

下された梯子に駆け寄った長身の男は、中畑だった。彼は、自分のハンカチで俊戒の顔の汗を拭ってやりながら、何故か深い溜息を洩らした。

雪の日の気違いじみた私刑事件は、俊戒の申し出により、示談が成立して、ケリがついた。蓮丈と沢野の関係を感知し、密かに沢野をたきつけて、俊戒を陥れんとした了覚は、良心の苛責に耐えかねて、自から山を下りようとしたが、

「苦しむことは尊い。今度のことで、かえっておまえが生長すれば私も嬉しいのだ。解間（げあい）ももうまじかではないか。己のなすことは、修行以外にはないと思いなさい」

と、俊戒に諄々と説きかかされて思い止まった。了覚は、俊戒の寛い心を知ると、胸に巣くっていた嫉妬からも解放されて、人が変わったようになった。

何も知らない蓮丈は、それを不思議に思ったが、修行による賜物かと師兄（しえい）である彼を見なおす気持になっていった。

蓮丈が、掛搭（かた）のために山門をくぐってから、はやくも一年の月日が流れようとしていた。

二月の下旬から三月の月上旬にかけては、解問（かいもん）といって、今まで掛搭（かた）していた雲水達は、修行の跡と思ひ出を残して、山を下り、各々の寺へ散っていく。

このままでいけば、蓮丈の帰省も、旬日に迫っているわけである。彼は、次第に落着きを失っていく自分の心をあさまじいと思ひながらも、どうすることもできなかった。

坐禅中（ざぜんちゆう）、直堂（じきどう）という堂内巡視の役の僧が、警策（きやうさく）と呼ばれる棒を手に点検して歩くのだが、雑念に心を乱されている蓮丈は、ともすると

酷しい一打を与えられた。

彼が帰省をおそれる気持の底に、不純なもの、の潜んでいることが、彼を、いっそう懊悩（おうなう）へ追い込んでいた。

了覚は、帰省を明日にひかえた日の午すぎ蓮丈を裏山へ誘った。

「早いものだナ。ここで、俺が、おまえに無理難題を云ったのも、つい昨日のような気がするが……」

齒染の葉を爪先で軽く蹴るようにしながら了覚はまだ迷っていた。俊戒に確く口止めされていたが、彼としては、蓮丈に黙ったまま山を下りることは、どうしても気持が許さなかった。

「明日は、いよいよお別れですね……」

蓮丈は、何故か俊戒に敵意を持っているらしいこの師兄（しえい）を、素直に尊敬はできなかったが、いざ別れるとなると、やはり惜別の情が湧いてくるのを禁じえなかった。

「蓮丈。俺は、黙って山を下りるつもりだった。それが本当かもしれん。それに、約束を破るのは悪いことだ。しかし、俺は、どうしても云わずにはいられないんだ——」

「……………」

「蓮丈。おまえは、俊戒を、イヤ、俊戒様を

尊敬しているといったな」

「はい」

「それは正しい。あの方は、尊敬すべき方だ……！」

「……？」

「ハハハ、不思議そうな表情をしているな。無理もない。俺がこんなことを云うんではナ

……俺も、目が覚めた——！」

了覚の語る事件の経緯を蓮丈は、しまいまで聞いていることができなかった。彼は、駆けだしたい衝動を凝っと制えて顔を覆った。蓮丈の胸を噛んでいるのは、奇妙にも沢野に対する云いような嫉妬だった。いわば自分の為に危難に遭った俊戒へ、済まないと思う気持の余裕はなく、責められる俊戒の姿を見ることができなかったのが、ただ口惜しく腹立たしかった。いっそ、こんな懺悔を聞かなかったらと思うと、了覚へ対しても鬱勃たる怒りが込みあげてきて、罵声を浴びせそうになるのを、やっと抑えた。

僧堂へ戻って、いくら心が鎮まると、蓮丈は、俊戒への贖罪の重さで胸が潰れた。そして、それには命を捧げるしかないと思いつたると、法悦に似た喜びが、慈雨のように胸の底を濡しはじめた。

しかし、彼の決心が本当に固まったのは、法堂の前で、連れだって歩いて来る、俊戒と中畑を見たときだと云ったほうがいい。

二人はいかにも親しげに語りあい、俊戒は白い歯列を見せて、快活な笑い声さえあげていた。

釘づけになったように佇立している蓮丈の側へ来ると、中畑は鷹揚に目礼したが、その表情には充足感が溢れるように漲っていた。山門まで中畑を送った俊戒は、もとの位置に立ったままに蓮丈の姿に、オヤという顔つきをした。

「蓮丈。そんなところでどうしたのだ——？」

「はい。いいえ……アノ、いまの方は誰方ですか？……」

「ああ、あの人は中畑さんといって、高校の先生だ。禅林生活、それも、特に雲水の生活に関心を持っておられてな。色々と訊かれたが、なかなか鋭い質問をされるんで驚いた……」

それを聞けば、あの、水行のときの撮影の熱心さも肯けるが、俊戒に示した、異常なほどの執拗さは、やはり気にかかった。

そんな蓮丈の思惑も知らぬげに、俊戒は、

屈託のない足どりで大股に歩いていく。

（たとえ如何なる障害があろうとも、この人の側を生涯離れまい！）

厳然として巖のような峻しさのうちにも、大慈悲の包容力を潜めた、巾広い俊戒の背に向かって、蓮丈は強く心に叫んだ。

勿論、僧堂には、何年も帰省をせずに修行を続ける者もあるし、一生を雲水としておくる者すらある。

行雲流水と表現され、いっさいの執着を否定断絶するのが雲水ではあっても、人間を愛し慕う気持に嘘はない。

あと何年か、あるいは一生を、僧堂に留まる蓮丈の決意を、純粹な求道心からではないと誹謗できる人が、はたして何人いるだろうか。

点鐘は、今日も澄んだ響を伝え、伽藍の甍は月光に洗われて清らかに輝いているが、僧堂の古い壁は、男の体臭を吸って黝み、単の畳は、夜毎夜具を透す脂が、黴のように付着しているのだ。

（完）

緊縛テレビ

スナップ・フラッシュ

牧 高 志

夕べのひととき、テレビを観覧、一家団らんの中に仮借もなく緊縛シーンが映って、ひどく驚かすのが昨今のテレビ状況である。関心を持っているからこそ、ドキッとするだけのお話。

「アラ……またあの腰元は縛られちゃったわ」「おう……凄いや、ガンジがらめだ」なんて丁度、戦後の接吻が大っぴらになったと同じように、これらの緊縛が日常茶飯事ともなれば、一向に気にも留めなくなることだろう。ソファに寝そべってアメリカの娯楽雑誌をめくると、ふんだんに緊縛がのさばっているのと全く同じことである。

何んせ、五つの放送局がひしめき合い、僅

か二日間で七十何人もの人斬られたり殺されたりするというドラマ合戦に、待望の緊縛がチョイ、チョイ押めるのは、大いに嬉しいことに違いないが、裏を返せばコマースヤル放送が大部分なのだから正味二十分そこそこの劇に過ぎない。

——その一夜漬けの劇中に、長時間の緊縛シーンなどを挿しはさむのは仲々の難事らしい。

ただ、独りよがりな考えられることは映画のフィルムのようにプリントされた

ものが、全国津々浦々までも持ち廻られて映写されるのと違って一応、空間に霧消してしまいう代物だから縛られる女優……（男優の方は眼を塞いで見ない）も、恥のかき棄て処？と見てよからう。

多少、不鮮明な処は我慢して頂くとして、ここに広い宇宙を飛ぶ緊縛の映像が、運よく私の家のテレビ・ボックスに飛び込んだ処をすかさず愛機でキャッチした断片の二、三を御披露申上げてみたいと思う。

その一つは昭和三十四年二月九日、KRT V、御存知、銭形平次捕物控の内「水車の音」であった。



前篇を見損っていたので、いきさつはよく判らないが、これは後篇と称する解決篇だそう、平次公然の留守居を聴き及んで女房のお静(田代百合子)に「平次親分が大怪我をなすった。早く見舞っておくんなさい」と注進する悪党の一派。お静は取る物も取り敢えずそのまま差出された駕籠に乗って出掛けるがこれが真赤な嘘言で、その途中、忽ち後手に縛られ猿轡をかまされた上、村のはずれの水車小屋へ運ばれ檻禁された。



殊の意外に驚いた平次は単身、追っとり刀で水車小屋まで悪人を追いつめ、アワヤ捕縛寸前と云う処で

「神妙に手を退けッ。退かぬと……あれを見よ」

そこには水車小屋の中から曳き出された女房のお静が、悪の一味の女に短刀を突きつけられて風前の灯といった情景……。

「どうじゃ、アハハハッ……」

御馴染の映画手法の一駒である。丸鬚を結った田代百合子の年増振りは至極色っぽい。映画で縛られた曾ってのスターが、またまたテレビで縛られる。誠に御愁傷さまの限りである。

続いてこの銭形平次捕物控と前後して、昭和三十四年一月二十六日午後八時のNTV、連続時代ドラマ「快傑黒頭布」で素晴らしい緊縛シーンに巡り合ったのである。

もともと、この題名は既に東映の手で映画化され、数カットの緊縛があつて拙作スナツプ・シリーズの候補ネガの一つになっているが、今回のものは大映の「血文字船」とよく似た場面があつて面白い。テレビの方は広い海岸の場だの長い並木の街道と云った風景は狭いセットの内では事実上、不可能に近いか

ら、映画で撮ってセットの分と巧みに組合わせて放送している。

筋は極めて単純である。隣国、支那の武器弾薬輸入と交換に娘達を提供。勿論、密輸出を企てようとする悪党の一派を、チャント嗅ぎ分けて風の如く現われた快傑黒頭布が、小切味よく斬り倒すというお粗末。

観て楽しむのに、筋はどうあろうと何かお土産物がなければとカメラを向けていると……遂に到来。先ずは、その序幕篇から御報告申上げましょう。

子分等が何やらゴソゴソ話し合っていると親分が部屋の一隅に閉じ込められて、恐怖に



戦っている掠われた娘達に因果の鞭を振るっている。用意が出来たらしく、

「……じゃ、上玉揃いだ。大事に運べ」テナ具合と相成って、娘達はそれぞれ後手に縛られ、その上、御丁寧にも素足の、ちよい上の処を、もう一縛り縛られて、野郎一人が二人

の娘を肩車にかつぐ。仲々、以て大胆な演出振りである。かつがれた娘達が土間にズラリと置かれた長持ち然の箱の中に、後手のまま泣き叫ぶのを尻目に押し込んで蓋をしめてしまふ。但し箱に押し込んで蓋をしめる処は流石に気がとがめたと見えて省略——拙作イメージの延長と思われない。

処で一方、これらの悪党の計画を知ってか知らずか、将又、妾にでもされようとするのであろうか、部屋の一隅で半ば口説かれ、半ば責められている銀杏髻の女が写った。

引伸して印画にしてみると、仲々の別品である……（こんな美形が、ふんだんに縛られちや映画館の方は、余計なことだが、もうからないであろう）

ただ惜しむらくは、テレビでは映画式の折檻の鞭や青竹は、ちと無理である。教育テレ

ビの娯楽番組とは云え、吊るされた女が映った映倫ならぬ文部省からお小言が出るに違いない——事程左様に、この銀杏髻の女は、ただ二巻き、両手を後にされて縛られ、薄色目の長襦袢を乱れた裾前から出しているに過ぎないのは惜しかった。



ただ、テレビの公開に先立つての抜け道はビデオテープであるとすれば相当、派手な責めを撮った分はカットしておいて編集子のみホクソ笑んでいるのではないかと……これこそ余計なマニアのヒガミであろう。

それはさて置き場面は海岸の場となって支那側到着、商談成立という処に刻やよし、忽然現われた快傑黒頭布。勇ましい伴奏と共に今や獅子奮迅の大剣劇。「あなたは、あの小屋へ即刻行つて娘達を……」「ハイッ」とうなずいた女（初めは悪党側にいたのが感化されて正義派になったものらしい）が、急ぎ足で小屋へ単身近づいて行く。場面はセットで小屋の内、入口近く置かれた箱の蓋をいとも簡単に開けると、ヌーと後手に縛られた娘が立ち上る。直ぐさま後手の縄を解いてやると、続いて二番目の箱へ、処が二番目の女が箱の中から立ち上った時、件の救い娘と視線が合い、敵視の気配を示した。多分何らかの、仔細があったのであろう。

斯くして兎にも角にも、本篇快傑黒頭布に目出度し目出度しの日本晴れを迎えることが出来たのであった。

以上、誠にお粗末ながらも、ホンの断片をセレクションして御披露申上げた次第だが、本文を起草中、OTVの「びっくり捕物帳」で腰元お小夜が後手に縛られ納屋の中の柱にくくられているシーンが写ったので、ペンを投げ棄てて、スナツプするなど仲々の多忙さである……と云う訳で、ここに敢えて放送局

やテレビ屋の肩を持つ訳ではさらさらないがスイッチをひねると同時に、待ってましたと

ばかり色とりどりの後手の女性が、いとも身近かに飛び込んで来るわが家の映画館——テ

レビを是非一台備えられることを、おすすめして妄言を謝する次第である。——完——

女体切腹と回想

須藤 律 夫

最近私は二人の読者から、期せずして数葉の女体切腹写真を送られた。従来も手の及ぶ限りは一応蒐集して、もう可成りの枚数が集めてあるのだが、モデル演出による擬態と異り実際の女体切腹は、ほんとうに生々しい。血紅使用の擬態は何処となく写実性というか迫真力に欠けていて実感に乏しく、また噴き出る血汐（チヨコレート）を使うのもある由だが）なども筆で描いたようで盛り上りに乏しいものが多いが、実際の切腹写真となると何

度見ても飽きがこないのは不思議である。その中の一枚（詳しい描写は避けねばならぬが）は、構図といい、採点といい総てに無駄が無く、全く素晴らしいものだった。文字通り豊満なうら若き女体、就中、乳房と腹部は殊の外、美事で、普通よりは稍、上部に位置したお臍の窩は僅かに上を向き、謎を秘めるかのように奥深く凹んでいる。その臍窩の少し下まで届く長い緑の黒髪は、女体の切腹をより凄艶なものとしている。姿勢は立膝。左

手は、ふくよかな左脇腹を軽く押え、右手は確かりと短刀の柄頭を握っている。写真は丁度、左脇腹から切り進んでお臍の少し手前迄切腹したところ。然し長さにして四寸余りはある。最初の一、二寸は僅かに血の一筋を引いているが、お臍の近くで手許に力が入ったためか切先は、かなり喰い込み、一塊の血汐は、もう滴り落ちる寸前にある。顔は少しうつ向いて、引き伸しの際トリミングしたのである。すんなりとした鼻から下が写されている。唇は稍、小さめに静かに結んで、其処には何の苦痛も、激しさも感じられない。全く美しい切腹写真である。季節は夏でもあるだろうか。薄い衣を纏っただけで、アクセサリーといったら僅かに左中指に嵌めた指輪だけだ。ルーペで覗くと血汐は全く噴き出るように滲みだしている。そんな事から想像して私は二十才前後の女性割腹（真剣による）と断じたのだが、事実は果してどうだろう。この写真が、送って下さった女性御本人であるかどうか、もとより私には知る由もないの

だが（手紙では写真の事に何も触れていないので）じっとそれを見ている中に、私は何時だったか聞いたある切腹マニヤの女高生の告白など想いだしていた。

その女はある都立高校の三年生で比較的、

恵まれた環境に育ち、五人姉妹の長姉として進学コースを辿っていた。その頃、私はある証券会社の重役に頼まれ、英語、英会話の家庭教師として通っていたのだが、ある小雨の降る晩であった。辞書を索いていた彼女が、ふと私に妙な質問をした事がある。Hark（聴く）という単語を索いていた彼女が、

『先生、この Hari-Kari というのは英語で何かしら？』スペルを指し乍ら私の顔を覗き込んで尋ねた。

『いや、それは英和辞典にはあるけど、日本語のハラキリを訛ってしまったものだよ。つまり切腹の事さ。外にも“Moxa”（艾）とか“Bonze”（坊主）とか紛らわしい単語もあるけどネ』

こうした偶然の質問が発端となって、私は更に“切腹”に関する二、三の質問を受けたのだが、それは妙国寺事件や、南総里見八犬伝、近くは戦前に刊行された実録記“御楯の

花”等に就いてであった。それ等のものを彼女は、みんな本で読んだといっていたが、語り乍ら異様に輝く瞳や、少しうわずった様な口吻に私は、ただならぬものを感得するのだった。

それから数日経って行った時の事である。

何時ものように激しい会話の“Drill”（練習）が終ると、彼女は鉛筆を削り始めたのだが、突然、ナイフを逆手に握ると、

『先生、Hari-Kari よ！』にっこり笑うとそういつて可憐な切腹の擬態を演じたのだがそればかりではなく、その前日、友達に誘われて映画を見に行った事など話したのだった。それは――。熱心にスクリーンに魅入っていた彼女だが、偶々、白虎隊の切腹シーンが写しだされると異常な迄の感動を覚え、何時しか自分も画中の人となっていた。悲壮美勇壮美の溢れる集団自決、殊に腹一文字に掻き切る様は壮絶そのもので、彼女が気が付いた時には秘かにメタル型のナイフを強く脇腹に当てていたという。（彼女は洗礼こそ受けていなかったが熱心なクリスチャンで、銀座の菊秀で求めたという開くとナイフになる十字架を待っていた）

『……でもお腹切るの、とても勇壮で素敵だわ。つい夢中になって仕舞うんです。この前もテレビでの切腹の場面がありましたけど、すっかり感動して……何時もその人物になり切って見てるの。あたしって少し精神異常かしら』

『いやそうではないよ。英語の気違いという言葉にも Madly と Crazy とがある。然し Madly の方は同じ気違いでもある目的貫徹のために狂人の様になる事だよ。だから余り自分を卑下しない方がいいね』

自嘲する彼女を、こう口からでまかせに慰めてはみたものの、これはあるいは私自身を慰めていたのかも知れない。

附 記

貴重な資料をお送り下さった愛知県の K 子さん、東京都の S 子さん、茲に誌上をお借りして厚く御礼申述べます。（筆者）

【伝 言 板】

モデル嬢着用済の下着類、少しばかり残っておりますので御希望の方は返信料同封の上、御照会下さい。在庫の分につきお返事いたします。

湖畔の裸女

蒼野

礼

一

映子は未亡人の身だったが、朱実には同齡の若い夫があった。親代々の質屋業を跡いで詩作に耽るのが好きな温和しい夫だった。瘦形で、肩まで長髪を垂らして帳場に座っている姿は、商人らしい匂いがなく、いかにも抒情風な詩人に見えた。帳簿の横には、いつも原稿用紙が展げられていて、ひまがあると背を深く曲げて彫りつけるように黒い太い万年筆を動かしていた。

映子は、朱実に会うとき、いつも店先から上って彼の傍を通りぬけ、庭向うにある二階建の離れの朱実の部屋にいくのだが、朱実の夫は常に愛想よい微笑で映子を迎えた。格子窓から射す陽差しが彼

の顔を染めていて、前歯の義歯が脆弱な感じで白く光った。

中庭に沿った回廊を渡り、白壁の大きな土蔵を改造した離家の二階に上って行くと、階段を踏む柔かな足音から朱実は映子と察して、衣桁の蔭に隠れてみせたりした。苦もなく映子は見つけだすと、
「さあ、罰よ……」と早速、責めにかかったりした。

朱実ばかりが責められる側ではなかった。豊富な映子の姿態も、朱実の振う鞭の下に打伏して喘ぐこともある。

裸の美女同志の艶めかしい責め模様が、脂粉の香に満ちた六疊の部屋一杯に、くりひろげられるのだった。

一種の不貞を犯すような罪の想いを、朱実は夫に対して仄かに抱くのだけれど、映子の鞭が白い肌を焼きだすと、もう一切を忘れて

しびれるような甘美な悦感に酔った。

「お尻も打ってヨ……」

羞恥を、かなぐり捨てたポーズを示すのだが、映子の番には同じ羞しい姿態を朱実が映子に命じた。

「もっと腰を高く上げて……もっと」

「……精一杯だわ」

犬のように四つ這って、映子は畳に額をすりつけるのだ。流石に頬を染めた。桜の青葉を透した陽が、磨硝子の窓越しに白い裸身を明るく匂い立たせる。

「いい。その姿勢を変えてはダメよ」

いうと同時に、ぱしっと円い尻が打れた。

朱実の夫は、終日、帳場に座っている工合だから、この離家に来ることはない。妻の部屋には、みだりに足を入れないという、日本的な古風な町家に育ったにしては進んだ生活規律を持っていたからたとえ店の客の出入りが閑古な時でも、おもむろに詩稿に筆を染めるだけで、ついぞ妻の部屋を覗こうという気持ちにも、ならないようだった。

温和しいといっても、これほど温和しい男は珍らしい。亡くなった粗野で横暴だった夫と比較してみると、映子は、水と油のような全然異質なものを感ずるのだった。

「一体、あの人、あなたを可愛いがることあるの？」

ときにふれ、こういう質問を映子は朱実にする。もっと露骨な言葉でいう時もある。

「……」

幽かな恥らいを浮べて、決して朱実が答えようとしませんが、映

子には不思議だった。冗談めかしてでも答える術はある筈だ。

が、問題が問題だけに、しつこく突込んで訊くことは映子にも、ためらわれた。

しかし、そういう質問を放つ底に、朱実の夫の座に座っている一人の男性へ対する嫉妬が、流れていることに映子は気がつかなかったか？……無論、彼女は意識していた。

全身ミルク色の剥きたての果実のように若くて美しい朱実を、自由に賞玩することのできる権利を有する男への嫉妬感、蔽うべくもないことだ。

朱実の体を汚したことがないから一そう、それは強いといえる。

二人の関係は清かった。同性愛の不具的交渉は一度もなかった。

珠の如き互いの体を責めあうことのみに、二人の美女は命を賭けるほどの哀切で花やかで烈しい情熱を炎していたのだ。

姿態の上のみに於て、彼女たちは愛し合った。天性の恵まれた美しい姿形を、鞭痕の花びらで飾る快感に没我するのだ。

が、朱実が映子だけのものではない。夫という共有者がいる。

嫉妬を覚えるのは当然だった。

二

二人が知合った時期は、かなり古い。

単に互いの顔を知ったということなら、小学五年生の昔までに遡るが、親しく口を利くようになったのは、中学を経て高校に進学しその二年生のとき偶々、一緒に水泳部に籍を置いたためである。

二年の名花二輪が、水泳部にはいったというので、男子生徒が夥しく入部を志望して、ために水泳部は開設以来の大繁昌になった

ものだ。

F 高校といえ、都内きっての名門で、伝統に輝く学園に学ぶ女生徒には、有名人の娘が多く、演劇人や映画人の子女も多々いて、一堂に美少女が集った趣があったが、中でも映子と朱実の美貌は抜群だった。映子は「小園みち」という芸名で名を売っていた女優

(本名を柳原冴子という)の娘で、母親にも増した美形で、切れの長い澄んだ美しい眸が、ひととき印象的に映ったし、朱実は呉服屋の末娘という境遇だったが、色白な顔立に下町娘的な小粋な美しさが秘められていて、人気があった。

夏の白炎の下、白い肌理を栗色に焼いて日々、共にプールで過す

ようになって、初めて二人は打ちとけて話し合うようになり、成熟期の直情性で急速に親しくなっていた。

その親感密が、甘美な感情までに昇華したのは、プールの水面から夏の陽が衰えて、学園の周りの広大な郊外の林や田畑にそろそろ秋が優雅な姿勢で立ちのぼる頃だった。

夕ぐれの中二人は向い合っていた。

「脱ぐの?……」と云って真赧に顔を染めたのは、映子だった。なす紺色のシックなセーラー服の上衣を脱いで、スリッパの肩紐をはずし、乳首が苺のようになく、紅い胸乳を曝して声をふるわせた。

朱実は、すでに微風に肌をな



ぶらせてためらう映子の前に突立っている。ストッキングも靴も脱ぎ捨て、稍、顔が青ざめて妖しいまでに美しかった。

「私をごらん。あなた、まだ、ぐずぐずするの……私をごらんないってば」

「許して——」と映子は、朱実の脚に身を投げるようにとり纏った。白い柔かな皮膚に思わず唇が触れた。その唇が喘えいだ。

「ねえ、勘忍して——」

「……わ……私に恥を掻かせる気——」

初秋の夕ぐれは落水のように速い。林の周囲は、いつのまにか薄闇が棚曳き、向うに見える校舎の一部に燈が入った。閑散とした校庭をラケットを担いで帰って行くテニス部の生徒の姿が、豆粒のように小さく見える。

「私がしてあげる」

朱実は相手を押し倒すと、素早くスカートのチャックを引いた。

「ああ」という悲鳴を映子が喉で抑えたのは、近くの小径を自転車で人が行ったからである。

松の小枝が、びしびしとむきだしにされた映子の肌を打った。湿気を含んだ冷たい風と、無数の針を持った即製の鞭が、円く張った柔い臀部を責めた。ひっ……ひっ……と忍んだ悲鳴が映子の唇を衝いてでる。

「……い……いたいわ……いたいわ」

「ふふ……すなおにしなかった罰よ……さ……さぞ痛いでしょう……ほほほ」

「ああッ……お……おしりが……」

「お臀がどうしたのよ……ほほほほ」

しゅっ、しゅと松葉が風を切る。夕闇の中で朱実は踊るが如く、足下の草叢に伏した無抵抗の映子へ烈しく鞭を振った。

夜の闇が垂れ込めてから、ようやく朱実の作業は熄んだ。全身に汗を帯びて大きく息を吐いた。松の幹を支えて暫く声もでない。

映子は、低く呻いて伏したままだ。「立てないわ」と嗚咽して云った。

「立てるように、もう一度打って……あげましょうか……」

「イヤ……イヤよ……もう許して」

やっと身づくろいして、いつもの広い下校路に出ると、西の都心の方角に燈が群がって煌めいていた。美しかった。「怒った？」と燈を見つつ歩みながら朱実は訊いた。後で映子は頸を振った。それから、

「いいえ」

と声に出して云った。やっと歩いていた。朱実は、ふいに立ちどまると、やにわに映子を抱き寄せた。

朱実が映子の唇を吸ったのは、このとき一度だけである。以後、どちらからもそうした行為には及ばなかった。唇を合わせながら映子は夜空を見た。星が飛んだ。

その日から四日目頃に朱実は映子を自宅に招んだ。朱実の部屋の隣りは中学に行っている弟の部屋で、此日は大勢、友達が来て幻灯を写して興じていた。部屋に鍵を掛けて、朱実はためらいがちな映子を叱りつけた。観念した工合で映子が命令どおり四つ這いになると、

「打ったら音がするわね。……… 抓ってあげるわ。起きて起きて。さあ、これに掛けて」と、朱実は無強椅子を部屋の真中に据えて映子を座らせると、細い扱帯を幾本もつなぎ合わせて一本の縄にし、映子の手を後手に回させて、椅子の背に十重二十重に縛りつけた。「打てないのが残念だけど、代りに、こうしてあげる」
低く云うと同時に朱実は、少女にしては豊かな太腿や肩や胸をぎゅっと抓りあげた。

「うっ……」

悲鳴を辛くも嚙んで映子は齒をくいしばった。全身の筋肉が反った。

「声を立てちやだめだよ……」

云いつつ朱実の指には、ますます力がこもる。映子の眸から涙が噴きこぼれ、固く結んだ唇から声が洩れる。

「く、くち……口も縛って——」

隣室では中学生たちの談笑が起っている。幻灯は終わったらしく、若い、のびのびとした声が壁一重越しに響いてくる。弟らしく、非常に朱実によく似た声があった。

有合あせの風呂敷を朱実は、猿ぐつわにすべく手に持って、美しい奴隷の後に回ったが、

「そうそう。いい物を喰べさしてあげるわね……」

と壁の隅に脱がれてある映子の下着を手前に引寄せると、

「さあ、可愛いお口をウンとあけて——」

「ひどい……ひ……ああ」

いやがる映子の口の中へ、むりやりに押しこまれた。頬が一杯ふくらんで、ものも云えぬ。その上から朱実は、きりりと風呂敷をま

わして締めた。

責めの無言劇が始った。

顔を反らして苦悶するたび、ぎいぎいと木椅子が軋む。

青い実にも似た若い乳房には、ペン先が槍となって突立って、キラキラと林のように光っているのだった。ぷつぷつと血が浮きだしている。

許しを乞う泪に濡れた瞳を、朱実は満足げな笑みを浮べて見入った。

ササっと庭に陽が翳った。庭伝いに帰って行くらしい中学生の声が窓辺にする。

弟も一緒に遊びに出て行ったらしい様子に、朱実は映子のいましめを解いた。乳房の痛みと両脚の関節がしびれて、その二重の苦痛に、映子は容易に椅子を立てない。猿ぐつわはそのままだ。

「ぐずぐずしないで」

細いベルトを右手に垂して、朱実の口辺には妖しい微笑が、たゆとうている。

まだ更に責めようというのだ。

声なき責めは再び始ったが、今度は皮膚が破れるような烈しい鞭音が部屋一杯に響いた。まだ、あの林の中での責め痕が消えやらぬ臀部に、新しい赤条が縦横に縞模様を描いた。

やがて日が暮れると、朱実は食事を運んで来て、一緒に喰べようと云う。

「………ママが心配するから」

帰りたいと映子は云った。

服を着て中腰にしゃがんで、激痛を覚えていた。焼け爛れるよう

だった。

「怒ったのね？」

怒ってはいないと知っていて、朱実は、わざと云ってみる。

「ううん……」

と映子は云う。

その返事が朱実には愛らしいのだった。

三

杏^{あんず}のように甘美なものを含んだ美少女同志の関係は、翌年の早春まで続いた。

ここで云って置くが、それまでの期間は、ずっと一方的に朱実が責める立場に立ち、映子は受難の快美な感覚に酔うだけだった。朱実は時々、逆になってみたかったが映子は、いやがった。彼女は被虐に酔いきっていた。

あの学校の傍の松林の中にも、二人は足跡を繁く残した。雪の降る日に落葉を踏んで分け入ったこともある。全身、鳥肌だちながら雨と降る鞭に映子は喜悅した。あるときは全身を松葉で刺し虐げられた。

——早春、二人は卒業した。

卒業しても変らぬ仲を、前々から二人が誓い合っていたことは云うまでもない。よくあるSの仲だったら、卒業と同時に嘘のように交際が消えることもあるが、二人の胸にはそういう懸念は少しもな



かった。

卒業したら、より一そう緊密した日を過そうという希望のみが、あった。

その希望は無惨に碎けた。

映子の結婚である。

二親の強引な命令で、映子は富裕な五十男と結婚した。この婚姻に無論、裏がある。父親のプロダクションが行詰っていて、千万円を優に越える金を彼から借入したためだ。父親は、自殺しても追いつかぬ羽目に立ち至っていた。夫を救うため、美貌女優のママが、或る、いかがわしいシヨウに出演らしい様子を映子は察していた。察していたから、その結婚を断れなかの。情に哭いたのである。三月の末には挙式の運びとなった。

幼い妻となった映子は、熱海に住んだ。夫（塔と云う）の別荘がそこにあつたからで、東京にある本宅には実は彼の妾が居た。

塔は、その熱海の別荘で、いたいけな若妻を愛はしんだが、しかし、あの朱実からもたらされる苦痛とは全然、異質な苦痛を映子は味わった。朱実が恋しく、朱実の責めが慕わしく、毎日のように手紙を送った。朱実の返便の文面にも相手を失った苦痛と寂寥感が、のたうっていた。

●朱実も半歳後に人妻となった。

季節は、めぐった。海に臨んだハイカラな別荘にも、下町にある質屋の中庭の草花にも、春が訪れ、夏がめぐった。

結婚して両三年、文通は跡絶えなかったが、二人は会うことはなかった。妻の座という位置が二人を制御していたのである。

三年後の晩春に塔がみまかった。

映子は莫大な遺産を跡いだ。無論、帰京したが、実家には帰らず世田ヶ谷に手頃な家を買って其処に住んだ。朱実と自由に交渉を待ちたい気持からである。

三年ぶりに会った二人の感激が、いかばかりであったかは、筆舌に尽し難いほどだ。

今にして、三年という月日の空しかった苦しさを、泌々と語り合った。

晩春の生暖い絲のような雨が降る日で、世田ヶ谷もずっと奥まった閑静な映子の新しい住家は、蕭条たる雨の音ばかりしか聴えない。庭の竹叢に雨を避けたうぐいすだろうか、時折、佳い声で啼いた。

玉虫色の和コートに身を包み、履きなれぬ高下駄の足もとを気にしながら、私鉄電車の駅まで迎えに来た映子に導かれて、朱実は訪れていたのだが、駅から坂を登って来る途中、レインコートの下に何も着ていない様子なのに朱実は気がついた。映子の躰の動きから、それと感じられるのだった。

果して玄関に這入って、映子が白玉模様を散らしたゴム引のコートを脱ぐと、パンティだけの裸形だった。

女らしさの増した、ふくよかな体である。匂うように白い。

「……………」

感動のあまり、朱実の声もなく、ただ、まじまじと見つめるばかりだった。

「朱実……………」

映子は小声で云い。頬を紅潮させた。

「……………映子」

と朱実も低く相手の名を呼んだ。

やにわに、朱実の掌が剥きだしの肌に乗った。びしびしと柔かい

肉が鳴る。

「さ………三年ぶりよ」

同時に二人は云った。

四

二人は足繁く訪ね合うようになった。朱実が映子の家に来れば、次は映子が訪れて行くという工合に、世田ヶ谷の奥から錦糸堀までの遠い距離を全然、労としない二人だった。そして、その甘美な遊戯は、被虐と加虐を交互にするように変ったのである。責める身が責められる身になり、亦責められる身が逆になる新鮮さは、世界が一つ展けたようにも愉しく、遊戯に巾が生れた。変化の妙に、二人は新たな喜悅を覚えた。

しかし、朱実の夫の存在は始終、映子の心にこだわる。………まるで男性的魅力は何もなさそうな、柔弱な詩人型の男だとは云え、朱実に対して絶体的な権利を待つ男性には違いない。

それが映子の胸に嫉妬感を生む。

月が移り夏になって映子がD湖畔のキャンプに朱実を誘ったのは、その嫉妬感のためである。朱実の夫から遠く離れた場所に、映子は彼女を伴いたかった。夫と離婚して貰いたのが、実は血を吐くような切実な映子の本心である。

それが叶わぬのなら、せめて彼の翳の射さない野外の天地へ朱実を同伴し遊戯に耽ってみたかった。

微妙な映子の心理を察し得ないほど、朱実は鈍い神経の持主ではなかった。

乳房に針を突立てながら映子が、それを誘ったとき、朱実は喘ぎながら肯いた。

その日から五日後に、二人はD湖畔へ向けて出立した。

T県の人里離れた山間に在る小さな湖水である。地利不便のため、キャンプ場としては向かず、誰一人テントを設営する者がいないということを、映子は予備知識していた。

「そんな淋しい処なの？」

山峽を縫って進む軽便列車の中で、朱実は初めて知らされて驚いたが、

「でも、そうだったら本当に別天地でいいじゃないの」

「そうよ、だから来たのよ。毎日原始人のように暮らしましょう」

が、山の崖の部分に一日中、陽影になっているような佗しい駅に降り、それから山道を四時間以上も辿って、ようやく目的の湖を眼に映すと、その荒寥たる景色に映子も流石にためらひを感じた。

周囲は、すべて峻しい山である。

池を大きくしたような楕円形の湖水は、蒼く澄んで静まり、天地、寂として声を呑んだ風な静寂は、なにか不気味でさえあった。

「今更、帰るなんて云わせないわ」

リュックを背から下ろして映子は云い、流れる汗を拭いて、もう一度、淋しい風景を見まわした。

「誰が帰るなんて云うの。………映子」

朱実は、ジャンバーのポケットから革鞭を出して、映子の後に立った。

「テント張るまで待って………」

「だめよ。到着記念に早速、喰べさせてあげるわ………」

「気が早いね。三日間、一緒に暮すというのに……」

細い紺ギヤバ地のスラックスを映子は脱ぎにかかると。

「喰べさして……」

陽は、さんさんと降って、草地に這う白い肌を、むざんなほど明るく染める。

山々の陰影は色濃く

湖水に倒影した山影の

色もまた濃い。白銀色

の入道雲が、山脈の屋

根の遙か下に頭をもた

げている。

明暗の翳濃ゆい真夏

の湖畔に二人の美女の

遊戯が、くりひろげら

れた。

夜はひどく冷えた。

夕方、しばらく湖水

で泳いだ朱実は、体が

冷えきるような感じで

「火が欲しいわ」

テントの中で蠟燭に

手をかざした。太い蠟

燭の火が風に揺らぐ。

映子は、死んだ如く



朱実の後で仰臥している。肩や胸にも生々しい鞭痕があった。両手を、だらりとひろげて、疲れきった姿態だった。

「澤子……」

「なーに……」

「幸福？」

「ええ……」

「ほんと？」

「幸福だわ。……貴女は？」

「は？」

「バカ。きまつてるじやないの」

くるっと向きを変えて、

朱実が映子の手を握りしめた。強く烈しく……

翌朝である。霧が一面立ちこめていた。牛乳を溶したように白く濃い朝霧の中で、二人は枯枝を折って炊飯の火を焚いた。

その枯枝が時々、びしりと朱実の白い背を打つ鞭とも、なった。

食事を摂る頃、霧が

打つ鞭とも、なった。

食事を摂る頃、霧が

打つ鞭とも、なった。

打つ鞭とも、なった。

打つ鞭とも、なった。

打つ鞭とも、なった。

打つ鞭とも、なった。

晴れた。視界が、にわかに展げ、暑い陽が降りそそいできた。

「さあ、外に出るのよ」

箸を措くと、映子が鞭を手に執った。

責める前にトイレに行かしてと、朱実が云う。

「早くすまずのよ」

ぴしやりと背を打たれて、朱実は羞らうような嬌声を残して、附近の立木の茂みの中に身を没して行った。

草の上に身をくねらせて臥して、映子は黒く細い革鞭に口づけをする。彼女は幸福感に酔うようだった。

此処には誰もいない。朱実の夫の姿も見えない。ただ二人だけの別世界だった。

できるものなら、一生こうして暮したい……

その甘く切ない想いに溺れながら、映子は革鞭に齒を当てた。ひとと噛む。

そのとき、二つの人影が眼前に射した。

「あっ……」

色を失って、映子は、かたずをのんだ。

五

D湖畔から帰って、朱実は一編の手記を書いた。湖畔で過した三日間の想い出を綴ったものである。それを次に写してみるが、第一目目のことは伝えるまでもないから省略する。二日目の朝、映子の前に突立った二人のことを書いた箇所から、掲げてみよう。

朱実の手記

彼等は大学生だった。私立のあまり名の知られていない校名を告

げ、休暇を利用して登山に来たのだと云った。二人とも見るからにくましい体格をしていた。

身を小さくかがめて映子は、ものも云えなかったが、私は案外、平気で言葉を交した。二人の眼に裸形を曝していることの羞恥が、しかし全然なかったのではない。人並に、それは羞しかった。

けれど、私を大胆にさせていたのは、ある着想のためにだった。そのすばらしい着想を実現したためだった。

私は学生の胸に身を投げた。

「私たちの躰を責めてみない……」

「……」

しばらく、彼等は無言で立っていた。

「どんなふう……」

と、やがて一人が云った。陽に焼けた顔にひげが粗く伸びた学生の方だった。(小高という名前を後で知った)

「こんなふうにするのかわ」

私は笑って云い、やにわに映子の手から鞭を奪った。

「映子、四つ這いになるのよ」

「いや……」

真赧な顔になって映子は、ためらった。

「人の前ではイヤよ……」

「云うこと肯かないの」

「私たちの仲は、おしまいね」

と私は云った。無論、本心で云うのではなく、脅しだ。

「ひどいこと云うのね……」

ああ、若しも私が本心でこの言葉を云うときがあったら、私は神

に呪われてもいいと、そのとき私は思った。

二人の学生の前で、私は映子の臀部に鞭を浴びせた。

「ああッ……ああッ……」

ほとぼしる映子の悲鳴を、彼等が、どんな気持で聴くだろうと、鞭を振いつつ私は二人の表情を読んだ。二人の瞳は妖しい光を湛えて、虐げられる映子の姿と、私へ注がれていた。

「面白いでしょう。私たちを責めてくれるわね……」

映子とともに、被虐の甘美さに酔いたいと、私は希ったのだ。

その一心同体の想いに、つながる殉難の心地こそ、私達の遊戯の昇華した世界かも知れない。私は熱心な求道者のように、新しいアブの境地を拓いてみたかったのだ。

「OK」

異口同音に彼等は答えた。

「僕は君を責めたい……」

進み寄った眼許の涼しい彼を、私は感謝の眼差しで見入った。

「名前は？……苗字だけ訊かして……」

「僕は山脇、こちらは小高。――貴女は？」

「私は名前の方を云うわ。いいでしょう」

仕方がないというように、山脇という学生は笑った。小粒に揃った歯が陽に白い。

「朱実」

私が氏素姓を隠したのは、この若い二人の青年と交際関係が生ずるのを恐れたからだ。今後縁を繋ぐことは、ある危険を生むことになるかねない。

二人が今、暴漢と化さないのは、身に体した知性の批制のためだ

ろう。若し彼等が制御を失ったら、私と映子は死を以て身を守ったことだから……

とにかく、私はこの場限りの汚れない馴合いとしたかった。又、そうせねばならぬ。勿論、映子も同じ想いだったろう。

「なんだか素晴らしいみたい……」

映子が立上って、私の肩に顔を凭せた。風が出ていて、映子の髪が乱れて私の衿首に絡んだ。

昨日と、そっくりの形で、山の屋根の下に積乱雲が、むっくりと聳え、こればかりは風にも動じないように白銀色に光り、山影となった蒼い湖面には、さかんに波が立っていた。

山脇は私の背中に馬乗りに逆に跨り、私の頭に尻を向け、小高も亦同じ姿勢で映子の四つ這った背中に跨った。

「鞭を使う前に、まずマンボの太鼓を叩く要領で行こう」

小高が云った。

「よしきた。可愛い音をださしてやろうぜ」

云うと同時に、私のお臀は、ものすごい力で平手打ちを浴びだした。

「あ……あ……も、もう許して……」

鞭痕が生々しく真赤な双丘へ、つづけて加えられる責めに、映子が早く哭いた。耐えきれず、私も悲鳴を放った。

しかし、私は酔っていた。映子とともに責められる、かつて知らぬ快美な陶酔に浸っていた。

全天地が黄金のように燦爛と私の前に輝いた。神々しいほど美しく、きらびやかで妙なる天地を、私の魂は逍遙した。映子と手を携



えて……その甘美なる幻想の裡に私は失神して行っていた――

この手記は、ここで途切れている。執筆を続けえないほどの当時の感動が、朱実の胸に甦ったためだと筆者、蒼野は思う。人は大いなる感動にあるとき、静かに無言でいたいものだ。

朱実と映子の遊戯は、その後も烈しくつづけられている。映子の

家や朱実の家で……。

朱実の手記を綴り終えたら夫に示し、離婚を乞うつもりでいる。彼を愛していないというより、朱実は世の男性すべてを愛し得ない女なのである。

しかし、その彼女の性を、誰が咎め得よう乎？

(了)

〔新版〕女体緊縛フオート オンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙 9×13 寸)

各組一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

R 10	鎖しはり晒責 (萩千恵子)
R 11	股間しはり正面 (伊吹真佐子)
R 12	女学生制服しはり (須川令子)
R 13	尻立後手しはり (萩千恵子)
R 14	開股しはり (川辺砂登子)
R 15	猿ぐつわの魅力 (伊吹真佐子)
R 16	トイレでの縛り (須川令子)
R 17	立木野外しはり (村田那美子)
R 18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R 19	足湯梯子ゼメ (伊吹真佐子)
R 20	いたふり (春日ルミと伊吹)
R 21	帆立しはり (萩千恵子)
R 22	強烈な梯子ゼメ (伊吹真佐子)
R 23	梯子責め (佐賀美智子)
R 24	逆さ本吊りゼメ (伊吹真佐子)
R 25	後手吊りゼメ (同右)
R 26	股間しはり後手 (中塚文子)
R 27	逆エビ責め (伊吹真佐子)
R 28	高小手しはり (加賀利江子)
R 29	変型足手しはり (萩千恵子)
R 30	松樹後手しはり (村田那美子)
R 31	くさりゼメ (伊吹真佐子)
R 32	薄羅の後手緊縛 (加賀利江子)

R 33	股間タテしはり (中富綾子)
R 34	首縄股間しはり (坂口利子)
R 35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R 36	和服の後手しはり (藤田節子)
R 37	日向全裸悦虐責 (川端多奈子)
R 38	後手首縄ジメ (加賀利江子)
R 39	乳房下しはり (村田那美子)
R 40	肉体美への折檻 (伊吹真佐子)
R 41	お灸ゼメ (春日、伊吹二嬢)
R 42	後手猿ぐつわ (萩千恵子)
R 43	松樹縛り晒責 (村田那美子)
R 44	コルセット縛り (中塚文子)
R 45	股間しはり (同右)
R 46	手と足と緊縛 (萩千恵子)
R 47	後手しはり (加賀利江子)
R 48	御開帳 (萩千恵子)
R 49	くさりゼメ (川端多奈子)
R 50	折檻の魅力 (須川令子)
R 51	全裸の股間しはり (愛川悦子)
R 52	逆立の折檻 (大塚啓子)
R 53	開股椅子ゼメ正面 (花坂道子)
R 54	振袖の緊縛 (村井知可子)
R 55	腰元の吊り責 (愛川悦子)
R 56	ヌードしはり (田中芳代)
R 57	本縄しはり (中塚文子)
R 58	股間しはり (萩千恵子)
R 59	落花狼藉の緊縛 (川辺砂登子)
R 60	樹間のハリツケ (益田房子)
R 61	帆立舟のゼメ (同右)

R 62	逆エビ責め (愛川悦子)
R 63	変形全裸股間縛 (花坂道子)
R 64	ヌード縛り (萩千恵子)
R 65	全裸横臥緊縛 (村田那美子)
R 66	ビクニツク (須川令子)
R 67	ハイヒール (同右)
R 68	湖畔の宿にて (大塚啓子)
R 69	尻立逆しはり (田中芳代)
R 70	下着の色模様 (愛川悦子)
R 71	目隠し開股縛り (花坂道子)
R 72	後手高小手 (萩千恵子)
R 73	乳房しはり (愛川悦子)
R 74	開股ベツド縛り (愛川悦子)
R 75	全裸床柱縛り (愛川悦子)
R 76	亀ノ甲縛り (萩千恵子)
R 77	ヌード股間縛り (大塚啓子)
R 78	全裸乱れ髪 (川辺砂登子)
R 79	ガソジガラメ (愛川悦子)
R 80	腎臓責め (中塚文子)
R 81	後手股間しはり (伊吹真佐子)
R 82	腹部丸出し猿轡 (萩千恵子)
R 83	破れたシユミーズ (須川令子)
R 84	女学生のしはり (萩千恵子)
R 85	仰向開股しはり (村田那美子)
R 86	乳房くさりゼメ (川辺砂登子)
R 87	野外バンド責め (村田那美子)
R 88	トイレ正面排世縛 (中塚文子)
R 89	開股正面いじめ (伊吹真佐子)
R 90	乳房搾りゼメ (佐賀美智子)



話の屑籠

辻村 隆

先日、編集部気付で私宛に本誌の一読者から次のような一文が舞い込んで来て、妙なからず私を狼狽させた。次に原文のまま紹介して見よう。

『前略、突然で御めん下さい。私くしはいつでも先生の書いた小説や、裸モデルのこうせいを愛書している物です。私くしはあまり教育ありませんので、あんな小説をじょうずによう書きませんが、女を縛たり、いじめることは大好物です。そして、よく私くしの妹を

縛たりします。妹の年は十九才で顔もベツピンですから、きっと先生は気に居るでしょう。先生のじょうずにこうせいで妹を縛たらきつと妹も多喜ろこびすると想像しています。先生のかだらのすいてる時、いつでもお目にかけます。その時は、私くしも一生に居って先生の縛かたをべんきようします。私くしがいつも妹を教育してありますから、どんな縛かたでも心棒するつもりです。カタワにしなければなら、どんなにいじめても縛てもかまいませんから、何卒々々、妹を一ぺん縛て、私くしに色色と縛かたの教育をおしえてください。妹は初栄と言ひ、先生の家なら多喜こびで居くといっ申てます、折込し先生の良心できな返じを、首を氷くしてまて居ます。

小夜なら

京都市下京区……………地

辻村隆先生

原田 慎 一

× × ×

誤字だらけで、その上、かなりの悪筆から察して、余り程度の高くない人ともとれるが妹云々が興味をひいたので、さして当にもせず、一度連れて来られたらという返事を出しておいたら、それから十日程経って、原田慎

一君が現われた。

見かけたところ、私とドッコイドッコイの年恰好である。それに肝心の初栄と称する、大喜びする筈の妹も連れていないひとりきりである。名前から想像し、妹の年令から推察して、私はもっと若い人であるとひとり合点していたので些か、がっかりした。

何か迂散臭く思えたので、玄関で立ったまま、妹君はと問うと、原田慎一君もじもじし乍ら、実は急用あつ今日はどうしても来られなかったから、誠に相済みぬが、次には必ず連れてくるから、今日の処一回だけ、裸モデルさんを縛るところを見学させてくれと仰有る。今日、今すぐでは間に合わないからと断ると、では何時なら裸モデルさんを見られますか、その日を連絡してくれと仰有る。妹さんの約束じゃなかったのかと、こちらはもう欺された気持から、面倒臭くなっている加減に受け答えしていると、これは駄目だと漸やく察したのか、玄関脇に置いた京都の土産包みを、やおら持ち直して、スゴスゴ出て行かれた。アカンとなると、土産物を持帰るチャツカリさに半ば呆れ貴重な時間を費した事に半ば腹立ち結局、落ちる処、モデルの縛り見たさにうった、下手な一芝居かと今更気付いた

た莫迦さ加減に我乍ら自嘲した次第……

× × ×
読者が渴仰するだけに、緊縛モデルとなると、仲々おいそれと、そうザラには見当らない。ヌードモデルとなると、近頃のヌード・スタジオの雨後のたけのこ式の簇生で、可成りの数が出廻っている様だが、それだけに、緊縛モデルは貴重な存在でもある。彼女達を見出す迄の編集部の苦心も並や大抵ではあるまいと思う。

モデルを募集しても、緊縛と絞ると、結局ふるいにかけて残る者は殆んどいない状態である。良いモデルが見当たっても、御当人許り撮っているのはバラエティにも乏しかろうし、いつかは彼女達も崩れていくのを、どう防ぎようもない。

かつての名緊縛モデル、川端多奈子が始めて読者の前に姿を現わしたのが昭和二十七年だったが、当時、彼女は二十二才の娘盛りであった。読者のイメージは二十二才のムッチリ張り切った川端嬢にあるのであって、既に三十路に手の届こうとする、現在の彼女に、恐らくは昔日の、あの爆発的な人気を再び得ようとしても、それは無理であろう。

結婚に破れた彼女が、近頃、再三再四、箕

田氏宛に、緊縛モデルを希望して来ても、情に於ては一度お願いしたい気持は充分あっても、今更、彼女のマゾの性質により、極度に崩れた肉体にカメラを当てる気にならないのは、その被写体が所詮、掲載出来得ない肉体にあるからに過ぎない。

三十路を越え、未だ若々しい肉体を保持するモデルは、近頃数多あるが、川端君の様にモデルの限界を越えて、自ら進んでマゾの世界に没入し、耽溺した女は事実、私達にとって、貴重な存在ではあるが、彼女とアブの世界に惑溺するのはいいとしても、モデルとなると、これは困るのである。

恐らく川端君自身、昔から金銭に恬淡とした人だったから、モデル料欲しさからではなく、マゾの欲求を充たして欲しい一心からであると思うが、彼女を、そうした性格に迫りやった原因は、緊縛の被写体であるとしても遊びでない限り、彼女のこの欲求は、編集部としては満し得ないのではあるまいか――。

× × ×
モデルも或る意味に於てスターと同様な運命を辿っている様だ。女の若い命の短かさ果敢なさ――。

私の若い頃、恐らく現在のハイティーン族

にも負けぬ程、私は映画に溺れ、当時の女優の縛り映画に熱い血汐を燃やした事がある。

今の人達なら殆んど知らない女優で、縛られたスターを脇に浮べれば次から次へと浮んでくる。

酒井米子、大林梅子、桜井京子、東輝子、木下双落、佐久間妙子、初代の大江美智子、原駒子、深水藤子、大倉千代子、伏見直江、……。

彼女達、一世を風靡した緊縛女優も謂わば川端君と同様、今は忘れられた存在である。

既に物故したスターもあれば、原駒子、大倉千代子、共同経営の『花車』伏見直江、信子姉妹の『ふしみ』と云った大阪でのバーの経営者もある。

生者必滅、会者常離の世の中であれば、やがては絹川文代、大塚啓子、愛川悦子諸嬢も数年後には、忘れられた緊縛モデルとなって誌面にも載らなくなる事であろう。

若い、パツと桜の咲いた女優が縛られ、いつの間にか散って姿を消して行く……。それでもいいのかも知れない。

× × ×
年と共に、映画を見るのが段々と億劫になり、友人が、それ縛り映画だ——、どぎつい

映画だと、本誌の速報欄以上に早く知らしてくれても仲々みこしが上らない。

大映の助監督から、『弁天小僧』の青山京子がいいよ、と知らされていても、試写会には遂に行けず、三番館辺りでやっと覗いた程度である。

親切な、おせっかい氏が居て、縛り映画が出るとすぐ知らせてくれる。やいのやいので先日、新東宝の『姫妃のお百』を見たが、成程おせっかい氏の云う如く、北沢典子と云う可愛い女優が、腰元になって、密書を見たと思ふが、この女優をストレートに真向から吊して、弓折れで責めている構成が、正直、第一級の責場である事は間違いない。

この社の、若杉嘉津子、宇治みさ子、北沢典子、魚住純子、高倉みゆき、久保菜穂子辺り縛られ女優の右翼が新東宝は二流なりに又嬉しいものがある。最近、封切り予定の『恐怖の罠』ではグラマー女優が主演に抜てきされたが、その代り彼女は縛られてしまった。

× × ×
セクシイな、どぎつい映画が、臆面もなく羅り通って、検閲問題さえも惹き起している。『危険な曲り角』『恋人たち』の一連の

外映ものが、ハイティーン族に評判な様だ。兵庫県では『恋人たち』を特に有害興行に指定したが幻想的な恋のムードが今の若い人々に受けるのだろうか、有害興行の見事なラブシーンに、場内殆んどを埋めるハイティーンが固唾をのんでいるから、妙な指定をしたものである。

B・B旋風にとって代って、『三月生れ』のジャクリヌ・ササル。『危険な曲り角』のパスカル・プチ。『奥様ご用心』のダニイ・カレル。その他ミレーヌ・ドモンジョ。パスカル・オドレー・ロミーシュナイダーとチャイルド・ウーマン(小妖精)の氾濫である。日本の女優でも、『四十八才の抵抗』の雪村いづみをはしりに、日活の中原早苗、東宝の中島そのもと云った、小便くさい、小女優が幅をきかす時代にかわりつつある。

セクシイの氾濫が、果して何に起用するかは今更、事新しく云々する必要もないが、セクシイの氾濫が氾濫を生んで、大映ではそのものずばり、セクシイの『氾濫』と云う映画のクランク真最中である。

一見してセクシイには縁遠い本誌に、『氾濫』の中では凄く本誌向きのシーンが撮られている。何れ詳しくは沼正三氏あたりが採り

上げると思うが、助監友人の言をかりると、辻村君なんか、興味深々だろうと云う。縛りじやないんだけどねと前提して、こんな話をしてくれた。

× × ×

原作はチャアタレー問題の伊藤整氏。監督は『巨人と玩具』の増村保造というパリパリの若手。

俳優は船越英二がアゴを出したと云う話。

ピアノ教師、船越英二が、沢村貞子夫人によるめいたのを、恋人である三宅川和子と云うニーフェイスにばれて、その挙句、お仕置として寝室で船越は、十五貫もあると云う女角力の如き三宅川（名は体を表わすとね）を四ツ這いの背にのせて、馬になってグルグル部屋中を這いづり廻る。男はパジャマ、女はネグリジェ一枚と云うから、船越も如何に仕事とは云え、恋女房の長谷川裕見子には見せたくない図であろう。フェミニストの彼のことだ。若しヒョイと浮気した場合、それこそ、映画から出たマコトで、長谷川裕見子の馬になって、寝室を這い廻らねばならぬ羽目に立入らぬとも限らない。

『痴人の愛』の宇野重吉と云い、どうも大映は、男を馬にするのが好きな様である。

『氾濫』の中では尚、伊藤雄之助が、セクシイな腋毛と、オヘソに定評のあるグラマーマーノード山崎和子にナヤマサれると云う一幕もある。眼前一尺のところでもクネクネやられては彼の長い顔は、ひとしお長く伸びた事だろう。（鼻ではありません）

× × ×

最初の映画が縛られて、それが厭になって駄々をこねたのであるまいが、東宝の上原美佐が『隠し砦の三悪人』に引続き『戦国群盗伝』で、再び姫の役で出演している。

嘗ってPCL当時、前進座一党と千葉早智子の姫役で上映したものの再演で、私の臉には、未だありありと中村翫右衛門の盗賊や若かりし頃の加藤大介の姿が焼きついている。再演ものにいいものなしの例えで、あれに勝るものを期待出来ないが、上原美佐が又縛られそうな期待でたのしみが持てる。

映画では、縛りの前姿が、十中八九迄であるが、『隠し砦の三悪人』では、馬上、三船敏郎と並んで、実にはっきりと、後手縛りの彼女を撮ってあった。凝り性の黒沢明だけに、余り縛らぬが、縛りの必要性に迫られると、誤魔化しなしに、判っきり縛ってあるのが好感がもたれる。リアリズムに徹した同監

督の、吊し責め、はりつけ等の映画があれば映画の愉しみ、又何をかいわんやである。

× × ×

映画から八ミリに話は移るが、過般、座談会の席上、八ミリ映画を展示して以来、その種のお問合わせが山積していると箕田氏から昨日連絡があった。八ミリブームの時代なればこそ、さこそとうなずけるが、最も多いのは八ミリ映画を、何とかして見せて戴き度いと云うのが圧倒的だそうである。勿論、削るべきは削り、インサーカットも新たに挿入して、非公開とはいえ、羊頭狗肉のたぐいの、『X-28』などとは同型のものでない事は論を俟たないが、雑誌が本命の本誌として、是の発表機関がないだけに、読者の方すべてに見て戴くわけには行かない。ネガで撮っておけば、又プリントにして頒布すると云う手段もあるが、最初の試みで、反転現像で、大きく云えば日本中で唯一本きりのものであるだけに、おいそれと貸出しも出来ない現状であるらしい。

フォト同様に採算がとれるかどうか、検討した上で、読者諸賢の御希望が多い様であれば、本格的にネガフィルムで撮影を初め、簡単なストーリーも漸次織り込んで行くとの話

であった。

そうなれば、私の構成も自ら立体的にならざるを得ない。微少なりといえど、映画の監督である。編集長の依頼あった上は、私も腹をくくってひとつ過去の経験を生かして、ウンと喜ばれそうなものを撮って見たいと、シーンズを待ち兼ね張切っているのであるが……。先立つものは、よき緊縛モデルである。

× × ×

最初に書くべきが最後になって、誠に恐懼の到りであるが、皇太子殿下が目出度く、御



愛^マ好^ニ家^アの記^ノ録^ト

……わが愛する被虐の記……

と や ま

かづひこ

(93) 従卒の悲哀

読売新聞の三月九日、朝刊に出ていたコラ

ム『従卒の悲哀』を先ず読んで頂こう。

さすがにジャーナリストの文章だけにムダ

がなく、然も要点をついている。

然も、ノーマルな筆者が書いているその書き方も、吾々のとは少々おもむきが異なり、これはこれなりによいと思う。

結婚にゴールインされ、よきベターハーフ、

美智子さんをお迎えになられた事は国民の一人として慶びにたえない。ミッチイ・ブームにあやかって、編集部での話に、今度のニューフェイスのモデルは何々美智子にしようかなどと話し合い、私の小説にも美智子なる女性を登場させる予定でいたが、四月十日の御成婚式をテレビで拝見するに及んで、そんなフラちな妄想はケシ飛んでしまい、今後すくなくとも、私の書く小説には美智子と云う名の女性は絶対登場させない等と、ひとりで考

え、ひとりでに恥じていた。

過去のモデルの中に、本名、田中美智子なるモデルがいたが、こんな事なら苗字だけかえて美智子の名はそのまま使ったらよかったと、箕田氏が苦笑されていたが、諸賢も御存知の昭和三十二、三年頃、しきりに誌上を賑わせた、あのモデルが美智子さんと云う本名とは、恐らく誰一人として知らなかったに違いない。その人の名は云えない——。

(この項了)

従卒の悲哀

日本の旧軍隊に、従卒という役目があった。将校の下僕としてこまごまと身の回りの世話をするばかりか、その家庭にまで出かけて行って、いろいろと家事に使役された。

五味川純平「人間の条件」の中でも、主人公、梶がこういう役目を命じられてセンタクをしたり女のクツをみがいたりする場面が出てくる。

戦前の日本軍隊にしかない話だと思っていたが、AP電によると、あの民主主義の見本みたいなイギリスでも、陸軍にこういうシキタリが現在している。最近、イギリス下院で、陸軍のこういうシキタリが問題になった折、労働党のある議員は「従卒に細君のパンティまで洗わせる将校がいる」とバクロして陸軍当局をあわてさせた。このバクロによると「従卒はこのほか床みぎ、子どものおもりをさせられているが、これは当然他に人を雇ってさせるべき仕事で、兵士にさせる仕事ではない」そうだ。全くどうも信じられない話だが、国と時代

を問わず、軍隊というものにつきまとう人間性無視の現われだろう。(風)

奥さんのパンティを洗う役目を強制させられるところもよいし、クツを磨かされるのも嬉しい。

(94) 痔の治療

親しくする友人のKの奥さんが、病気というので見舞に行った。

病気といっても、これは又色気のない病気つまり『痔』だという。

一週間ほどイタイ、イタイとうなり通したたが、やっと昨日あたりから痛みが治まったとかで、Kを交えて三人で、しばらくは痔のはなし。

『なにしろ、場所が場所でしょ。いちばん辛かったのは、おつうじの時よ』

K夫人は、美しい顔をしかめて言う。

トイレへは立てず、ベッドの上で、用を足したという。

『先生に見て頂くときに、汚れていてはいけないと思って主人に頼むのですが、この人ったらキタナイ、キタナイって、あとで指をアルコールで拭くやら、大さわぎなのよ、薄情な人!』

清浄を自分では出来ないで、Kにやってもらったという。うらやましい役目なのに、Kにはコプロのケがないので、これは宝の持ちぐされ、全く以って嬉しいものである。

(95) 愛妻記

東宝映画、フランキー堺、司葉子主演の、『愛妻記』のスチールに面白いのがある。

フランキーの夫が、愛妻である司葉子の、鼻のアタマをペロリと舐めているところ。

かづひこは、このスチールを映画館のウィンドでも見たし、『週刊朝日』の映画紹介にもこのスチールが出ていた。

解説によると、主人公が、愛情を表現するときに、細君のハナのアタマを舐めるのだそうである。

ここで面白く感ずるのは、このようなアブノーマルに近いテクニクが、堂々、映画のシーンとして扱われ、一流雑誌新聞などマスコミに活躍している点である。

これがハナのアタマだからよいようなものの、他の部分だったら、世論がだまっていなだらう。ハナだって、他の部分だって、その思想は同じことなのに。

満月の島

晴れた日には老岐の島が見えるという肥前の小さな島に五作とおりんという中年の夫婦が住んでいた。

或る夜、五作は朋輩の太平の処へ仕事の漁



三糸卓史

作
画

の事で話しに行って一杯馳走になり、大分夜も更けた頃、良い機嫌で月明の浜を帰って来た。

建付けの悪い表戸をガタピシいわせて入っ

一寸変だ。

五作は酔にはてった頬を夜の潮風に吹かせながら、本村の方へ磯伝いに一丁ばかり歩いて行つたが、さて本村へ行って何処を尋ねる

て見ると家の中は真暗である。手探りでランプを探し、火を灯して見廻すとおりんの姿が見えない。敷いてある布団が乱れているので―― 厠にでも行ったのだろうか―― 思いながら蒲団にもぐり込んだが、眼が冴えて眠れない。

そこで、ふいと又起きて戸外にある便所を窺ったが、其処にいる気配もない。

―― 変な奴だな、こんな夜更けに一体何処へ行ったのだらう―― そう思いながら少し離れた処にある隣りのお高婆さんの家まで行き、耳を澄ませたが、ここでも何の物音もしない。

もともとこの浜には、お高婆さんの家と五作の家の二軒しかなく、殆んどの家は岬を廻った向うの本村にあるので、もしもおりんが本村の方へ行っているとすれば

というあてのないのに気が付くと、急に臆劫になって足を停めた。

十五夜の月が西へ傾いて、足許に引潮の波がザーッ、ザザッ、と寄せては返している。

五作が思い返して再び家へ戻って見ると、先刻は藻抜けの殻だった布団の中に、おりんが死んだようになって眠っていた。

——変なことがあるもんだなア——と彼は小首をひねりながら

「おい、おりん、おりん」

と肩口へ手を当てて二、三度、揺ったが、ぐっすりと眠っているのか眼を覚まそうとしない。——変だなア——と思いつつも、彼も眠気を催して来たので、そのまま布団に潜りこんで眠ってしまった。

翌朝、五作が

「おりん、お前、昨夜遅く何処へ行った」

と訊くと

「別に、どこへも行きはせん」

と茶を啜りながら、けろりとしている。

「それでも、俺が夜中帰った時、居らんだが」

と不審そうにいても

「あたいは昨夜、繕い物をしていたが、あんまり帰りが遅いもんで、先に寝たのに」

と、却って五作の言葉を不思議そうにいうのであった。

「そうかな、ほんなら俺が酔うていて、夢でも見たのかな」

と、五作も何だか頼りなくなつて、そういうと、膳の前を立って鳥賊釣りの支度に取りかかるのであった。

この島は元来、半農半漁で、男は漁に、そして女は島の畑を作るのが仕事であつたから

おりんは地下足袋を穿いて籠を背にした。

「お弁当は此処へ置いておくけに、今日はじやが薯を掘つて来るよ」

というとひさしの広い古びた麦藁帽子を冠つて出て行つた。

そんな事があつてから数日、五作には解せない事が又一つ出来た。それは、おりんが時折ぼうつとして、何か夢でも追っているような様子をする事であつた。また、急に顔や皮膚に色艶が増えて来て、三十近い年なのに一日一日と若返つてくるように五作には思われた。そして一番、はっきり判る事は、あの夜以来、それまでかなり積極的だつたおりんの愛情が、まるで泉の涸れたように、ふつりと消え去ってしまったように、そっけないものになつてしまつたことである。

こうなつて見ると、五作もあの晩のことを自分の錯覚であつたとは思えなくなった。

——きっと隠し男でも出来たに違いない——

そう思うと、釣をしていても胸がむしやくしやして落着いていられないのだが、それかといつておりんの相手の男を島の者の中から誰彼と疑つて見ても、皆、従来から実直な者ばかりだし、殊に家が本村から離れていて、余り懇意になる者も思い当らない。だが、おりんの近頃の様子は普通ではない。きつと何かある。そう思うと五作の胸は一層騒ぐのであつた。

或る雨の夜、五作は珍らしく晩酌を傾けると、酔いも手伝つて今夜こそおりんを糾明して泥を吐かせてやろうと氣負ひ立つた。

「おい、おりん。もう一本つけて呉れ」

膳の前へ、どつと胡坐を組んで、空の徳利を振り廻すと、ランプの灯蔭で着物の縫い更えをしていたおりんは

「今夜はどうしたの。沢山飲むじやアない」

といいながら、手にしていた縫針を束ねた罎の後に挿すと、針箱を押しやって五作の傍へ来た。

「あれ、何をするの」

徳利を取ろうとした手を不意に五作に掴ま

れて強く手許へ引かれたので、おりんは彼の膝へよろめいた。

「おりん。お前、俺に何か隠している事があ
るだろう。え」

五作は、おりんの片腕を背中へねじ
曲げ、彼女を膝頭で押えて、おッ被せ
るように怒鳴った。

「何をするんだえ、お前さん。痛いじ
やアないか。離しておくれよ」

おりんは五作の不意打を喰って、吃
驚した声を立てた。

「お前の相手は誰だッ。いえ、いわな
いか」

「何の事だえ、お前さん。わたしや、
さっぱり分らないよ」

「何だと、分らないッて。分らにや分
るようにしてやるぜ。なア、おりん。

町内で知らぬは亭主ばかりなりッ
て文句があるが、俺アそれ程、間抜け
じゃねえ」

「お前さん、それは何か思い違いを…
…」

「まだそんな事を——ようしッ」

「ああッ、あんた、そんな……」

日頃は、むしろ内気な五作であった



が酒の酔も手伝って急に荒くれた心にした。
彼はおりんの腰紐を抜くと両手を背に廻して
その手首を二巻き三巻き縛り上げ、まるで芋
俵でも転がすように、ごろりと仰向けに転が

した。

「痛い痛い。あたいをこんなにして、どうし
ようというの」

おりんは転がされて乱れた裾前を合わせよ
うと足をばたつかせたが、それは却って逆効
果で、白い膝頭が露わになってしまった。

五作は今度は、おりんの帯に手を掛けて、
するすると解いた。大分くたびれた朱子の帯
が膳の向うに、ぐねぐねと大蛇のようにうず
くまると、五作は邪慳に、おりんの左右の前
襟を引きはだけ、襦袢もろとも肩をすべらせ
て肘の所まで引き下げた。ランプの光に照ら
されて、肌理の細かいおりんの肌が、ほんの
りと桜色に浮び上った。

「こら、おりん。この肌を誰に触れさせたの
だ」

そういうと五作の平手が、おりんの胸へパ
シッと飛んだ。ふっくらと大きく盛り上った
二つの乳房が、ぶるんと揺れた。

「知らないよ、この人。あたしや何もしない
のに」

「したかしくないかは、お前の心にきけ。いわ
れなきやア、こうして」

と眼を、ぎらぎらと輝やかせながら、傍の
針箱から木綿針を抜き取ると、彼女の上へ馬

乗りになって、じーッとふくらんだ乳房へ突き立てた。

「ああッ、いたいッ。やめてッ」

絹を裂くような悲鳴と共に、おりんは頭を左右に振り両足を、ばたつかせて藻掻いた。

「どうだ、まだいわねえか」

五作は憑かれた者のように三針、四針と突き立てて行った。

「ひえッ。ああッ、くッ、くるしいッ。た、誰か来てッ」

おりんは必死で叫んだが、それは雨の音に消されて戸外へは洩れなかった。

「ええ、じたばたするんじやアねえ。強情な阿魔だ」

五作は、そういいながら庭へ下りて行くと先日、取り換えた艀綱の古いのを持って来ておりんの両の足首を一つにして縛ってしまった。

おりんは必死で上体をくねらせながら

「お前さん。わたしや、ほんとに何もしていないんだから、乱暴な事はしないでください。早く紐を解いて」

と哀願するようにいったが、五作は初めて女を縛った喜びで夢中であつた。初めのうちは嫉妬心が大部分で、腹立ちまぎれでやった

事が、彼の心の底に潜んでいた責めの好奇心を喚び起して来たのであつた。

手足を存分に縛られて、自分ではどうしようもない女体。どんなにしたって構わないのだ。そうだ、不貞の妻は、こんなにされるのが当然なんだ。

五作は一旦、おりんを俯伏せにして手首の紐を解くと、着物の袖を腕から抜いて、足首を縛った艀綱の端で右手と右足、左手と左足という風に別々に縛った。綱が短かくて両足は膝を曲げて直角になるような恰好になった。着物も襦袢も部屋の隅へ押しやられて無惨な湯文字一枚の姿である。

五作は針箱の横の物差を取ると、

「仰向きになれ、こら」

といいながら、おりんの背をピシッと打った。

「ああッ、あなたッ」

「動かないかッ」

ピシッ、ピシッと物差は、おりんの白い腰へ脛へ飛んだ。肘をすばめ足を開いて、必死で仰向きになろうと藻掻く。大きな人魚が浜へ打上げられたように。その人魚が海を慕つてのたうつように、それは妖しいまでに美しい姿であつた。

おりんが、やっと体を横に捻じたとき、

「こうして仰向くんだ」

という声と共に、おりんの右の乳房の乳首のあたりに、五作の突き上げた物差の先が、無惨なまでに深く喰い込んだ。

「ひえーッ」

と魂切るような悲鳴と共に、おりんの白い身体が、ぐらりと大きく揺れ、赤い裾が翻った。

こうして仰向きになったおりんの胸に腹にそして太股に、五作の持つ物差は容赦なく飛んだ。

「あッ、うッ」

と、その度に、おりんは呻き叫びながら身をよじらせて悶えた。暫くして、五作は物差を投げ出すと、再び、木綿針を持って赤い湯文字の上からおりんの体を処きらわす刺した。その度に彼女は訳の分らぬ悲鳴を上げ、まるで大きな芋虫のように、橙色のランプの光の下で、のたうつのであつた。

その夜、おりんは、そのままの無惨な恰好で寝かされた。そして綱を解かれたのは朝になってからであつた。

次の夜も夕食が終ると、五作は

「おりん、早よう膳を片付けて着物を脱げ」

といった。

「あんた、もうあんなひどいことはやめて」と、おりんがためらうのを

「お前が本当の事をいうまでは駄目だ。早ようせんか」

と睨み付けるようにして綱を取り出した。

そして、おりんが諦めたように部屋の間へ行って、するすると帯を解き、するりと肩から着物を滑らす姿を、しみじみ美しいと思い、それを責める喜びに身を震わせた。

そうした日が幾日か続いて、やがてまた満月の夜が来た。

その夜、おりんは宵から散々責められて、ぐったりと布団の上へ横たわっていた。彼女を責めるために作った二本の竹が、おりんの手足を大の字に繋ぎ止めて身動きも出来ない姿にされていた。

針責めや棒責めでは物足りなくなった五作が、テグスでおりんを縛る事を思いつくと、彼は冷飯草履を突っ掛けて急いで浜へ出た。

今夜も空はよく晴れて、銀盤のような円い月が中天に懸っていた。

「ああ、間もなく満潮だな」

そう呟きながら、舟からテグスを取り出して家へ帰って見ると、おりんの姿が見えな

い。布団の上に二本の竹と、それを結えた綱があるだけだった。

「やッ、これは」

五作は、思わず驚きの声を上げた。

——舟へ行っている間に、誰かが来て、おりんを連れ出したのだ——

咄嗟にそう考えると、テグスの杵を其処へ投げ出して、慌てて浜の方へ飛んでいった。

五作は浜の松林の蔭を縫って、あちこち

と探したが、

それらしい影は見えなかつた。

彼が狂気のようにな

って本村とは反対の、ごつこ

つした岩の折り重なって

いる岩鼻の崖の上から下を見

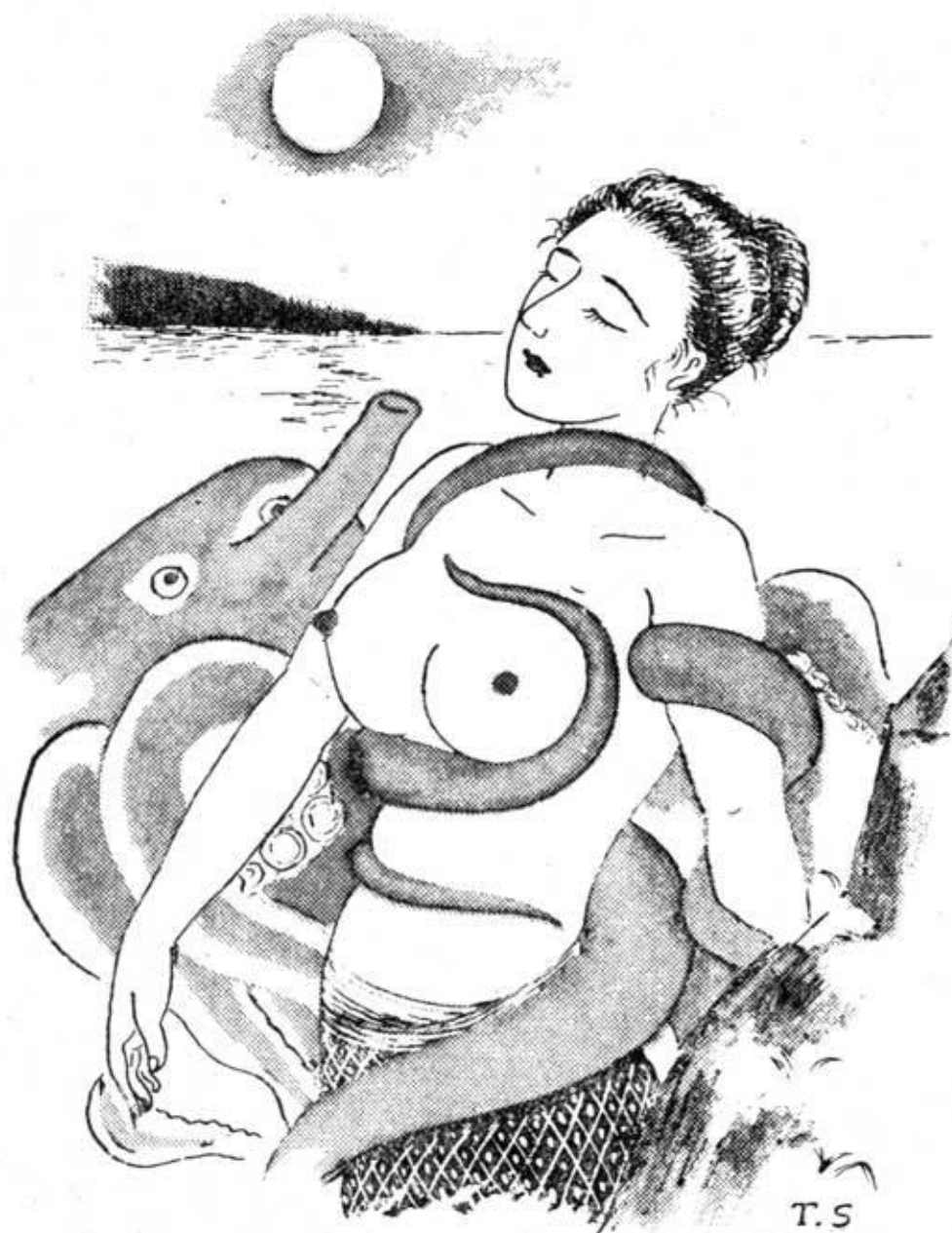
下した時、思わず

「あッ」

と小さく叫んで声を呑んだ。

切り立った崖の真下、舟で行くか泳いででも行かなければ行けない眼下の平岩の上に満潮の汐が、ひたひたと浸している。その岩の上におりんが先刻、五作の家の中で二本の竹で縛られていたと同じ姿勢で白い体を横たえていた。

五作は、思わず大声で彼女を呼ぼうとした



が、又急に眼を睜った。

波が動くかと思う途端、海中からおりんの横たわっている平岩の上へ、もくもくと這い上った動物がある。見るとそれは、とてもなく大きな蛸であった。

蛸は、グロテスクな頭を斜後にもたげ、三尺程もある無気味な八本の足を、するすると伸ばして、見る見るうちにおりんの身体に巻きついた。おりんは眠っているのか、氣を失っているのか、眼を閉じて大蛸の玩弄に身を委せている。蛸は八本の足を巧みに操って、まるで人形浄瑠璃の人形使いのようにおりんの肢体を自在に躍らせる。月の光に輝くような光沢のあるおりんの身体を、「く」の字に曲げたかと思うと急に、ぐらりと「へ」の字に反り返らせ、数本の足で胴体を巻く。ぐにや、ぐにやとした灰色の大きな頭が動いて、彼女の身を被うと見ると、すらりと白い二本の足が出て、とんぼ返りのように空に向く。その足首に又、蛸の吸盤が吸いついて膝折りの形となり、やがて彼女の全身を横向きに空中に支えた姿になる。

五作は、あまりにも奇異なこの光景に、思わず固唾を呑んで見まもっていたが、急におりんの身が氣遣わしくなってきた。

急いで近くにあった手頃の石を両手で持ち上げると、その蛸を追い払うつもりで、おりんの身体に当らぬよう平岩の端を眼がけて投げ下した。

——グワン——

と石の碎ける音を聞いて、五作が再び崖の上から下を覗くと、その大蛸はおりんの身体を抱えたまま、ずる、ずると平岩から海の方へ動き出した。

「ああッ、おりんが溺れる。アッ、おりん、

おりん！」

大声をあげて必死に叫ぶ五作の声を後にして、おりんは眠っているのか、意識を失っているのか、丁度背泳のような格好で大蛸に抱えられたまま、満月に照り映える隠やかな海の上を、引潮と共に沖へ沖へと遠ざかっていった。

それ以後、今日まで、この島の人はおりんの姿を見かけたことがないという。

(おわり)

〔代理部便り〕

絹川文代緊縛姿態新作集

大手札判 (9×13) 印画紙焼付

○全裸緊縛集 略号 (きぬ)

三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号 (きこ)

三枚一組 二五〇円

○全裸高手小手 略号 (きた)

三枚円組 二五〇円

○緊縛全裸立姿 略号 (きり)

三枚一組 二五〇円

花坂道子緊縛フオト集

大中判 (13×18) 印画紙焼付

○全裸緊縛集 略号 (はな1)

八枚一組 八〇〇円

○股間縛り集 略号 (はな2)

八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛り 略号 (はな3)

二枚一組 三〇〇円

○股間縛り 略号 (はな4)

二枚一組 三〇〇円



新稿

ある夢想家の手帖から

イデー
タート
エロチック
理念と行為とは性の分野に
おいては等質である

——キント——

沼 正 三

第一〇章 ある夢想家の哀願

女主人にとっても、自分の奴隷に、つまり犬に、自分の足を舐めさせるといふことは楽しみであるのではないでしようか？

——マゾヒストの手紙 その一——

「慈悲深き奥様！女主人様！女神様！」

最も深き畏敬の念と、最も賤き謙遜の心を以てかように申し上げます男は、ザッヘル・マゾッホ風の一夢想家でございます。

かかるマゾヒストとして、私は「毛皮外套を着たヴィーナス」の理想をそのまま具現なされた御方である貴女様の足許に身を投げ出し、「私に対して、その値打ちに相応した足跡をお与え下さい。貴女様の半長靴の底を、貴女様の犬として、舌で舐めることをお許し下さい」と、卑しげにお願い致します。そして、奥様よ、どうぞ御慈悲をもちまして、私が貴女様の前に土下座し、小さ

な御足を自分の項うなじの上に戴いたままの姿で、簡単に身上話を致すこととお許し下さいませ。

既に子供の頃から私の心は、美人の足に接吻を許され、その足に踏まれたり、蹴飛ばされたりすることを、私の女主人である方から奴隷として扱われ、犬のように仕込まれることをこいねがいました。

サーカスの女猛獣使いを見たとき私は、この上なく喜ばしく思いました。この女調教師が、踵の高い優美な半長靴を穿いた足で獅子や虎の身体の上を歩いた時、私は有頂天を感じました。

その後、私は「毛皮を着た貴婦人達」という本を手に入れました。就中、私を夢中にさせたのは「赤い御殿」でした。と申すのは、私は女主人の犬となって彼女の足の裏を舐めさせられるという

考えに恍惚となったからです。

この時以来、右の考えが私の夢想の頂天であります。そして女主人にとっても、自分の奴隷に、つまり犬に、自分の足を舐めさせるということは、楽しみであるのではないでしょうか？私の夢想の中に現れる光景では、米国南部の女主人が奴隷達を虐待して、馬に騎ったり、犬のように訓練したりするのです。嗚呼、貴女様が私にもそういう喜びを味わせて下さいましたら！

もしお気に障りませぬなら、せめてはこの紙を貴女様の御足で踏んづけて下さいませ。そうしましたら私は、この上ない賜物として、それを私の唇に押しつけることができるのでございます。

私は想像致します。これをお読みになりながら、貴女様の御唇は嘲けるようにひん曲げられ、快楽の光が侮蔑と混ざって貴女様の御目から輝きだすのを。優雅な上靴をお穿きになった可愛い御足はピクリと動いて絨氈をしっかりと踏みつけ、小さな御手はしっかりと犬鞭を握っておられます。そして御齒の間から洩れてくる御言葉は――

「おお、奴隷奴、私はお前の心を知っている。犬奴、お前がクンクン啼いて何を欲しがるのか私には分っている！今ここに、私の足の下にお前がいるのだったら！そうしたら私がお前の渴望を裏切らないことをお前は充分納得したのだろうに。私は女ながら人の主人たるに堪える人間だ。奴隷奴、私にはお前の望みは分っている。犬奴、私にはお前の下賤な感覚がよく分る。丁度、私が支配者としての欲望を知り、残酷な専制の快楽をば理解し尊重するように。私はお前の右の目玉を靴の踵で踏みつけて眼玉を飛びださせてしまおう。そして、犬奴、お前に命じてその靴の踵の血を舐めさせてや

る！私の乗馬靴に鋭い拍車を取付けて、それで以てお前の肉をズタズタに切裂いてやる。お前はそれを、やはり舐めて綺麗にしなければならぬのだ。そればかりではない。私はお前の舌に、もっと他の全々、別な仕事をさせよう。私の体から出る、いろいろのものを、お前は胃の腑に収めるのだ！お前は私の中にお前の理想を見出さねばならないし、それを望んでいる！」

私は謹んでお返事をお願い致し、貴女様の足許に横たわり半長靴の踵を舐めます。そして奥様の奴隷であり、犬であります。

× × ×

この手紙を「前章の投書の主が、その隣家の夫人Cに送ったもの」といつても、少くとも内容からは、何の不審も感ぜられないであろう。共に犬になって女主人の足を舐めたいと願っている。いやそれ以上に、その胃の腑が彼女のある種の容器となることを欲している。同じだ。全く同じ犬と便器、空想の表出だ。

ところが、これは前項の文とは全然、無関係な数十年前の独逸人の書いた文章なのである。同じ空想を抱く者として、驚かすにはいられないことだが。

マゾヒストが女主人——職業的女主人（後章詳述）でも堅気の女性でもいいのだが、文献に載るのは前者へのものが多い——に送る、いわゆる「奴隷の手紙」は、こういった点で、時と所を越えて、マゾヒストの文章として鑑賞が可能である。そこで、その傑作を選んで、随時この欄で紹介してゆくことにしよう。

第一着として、ここに訳出したのは、クラフト・エビングの「病的性心理」十一版に載っている（十二版以後の諸版では削られているから注意）ものだが、私自身の分身の叫び声を聞くような気のす

る点で、愛誦措く能わざるものである。

題辭に引いた「女主人にとつても、自分の奴隷に、つまり犬に、自分の足を舐めさせるということは、楽しみであるのではないでしようか？」という質問は、女を自分の快樂の手段とするのを嫌がり、自分が女の快樂の手段となるべきだと考えるマゾヒストの心理を反映したもので、私なども同様に問うて、女性からの答を待ちたいところであるが、これに共鳴するのは私ばかりではないと見えて、かつてF誌の読者交歓室に、全く同じような発想で書かれたのがあった(附記)。恐らくこの手帖の一文(旧第一七項)の内容が影響していると思う。「私の体から出るいろいろのもの……」の條りは、当然の義務を示す強い表現で自分の意志を主張しているのである。「飲ませてやるぞ!」という意味である。——勿論この裏では、職業的女主人に対して、自分が便器願望者であることを知らせ、遠廻しに、今後の取扱われ方の注文をしているのである。

二つの刺戟物を除いても、「毛皮のヴェヌス」その他の書名を挙げ、サーカスの女猛獸使や米國南部の奴隷所有女性に憧れ、鞭あり、乗馬靴ありで、マゾヒスト好みのお膳立は、相当豊富である。「赤い御殿」(der rote Edelhof) はゲーテとマゾッホとに同名作品があるが、パウル・エングリッシュの「好色文学史」(丸木砂土による抄訳「世界艶笑芸術」がある)によれば、「毛皮を着た貴婦人達」(Die Damen im Pely)がマゾッホの著作としてあげられているから、ここではマゾッホ作の「赤い御殿」を指しているよう。私自身は未見であるが、富岡陽夫氏の御教示(二九年一月号読者通信参照)によると、女主人公マルブカの恋人が彼女の犬にされてその足を舐めさせられる場面がある由である。(尙、二九年二月

号手帖「二つの赤御殿」及び同年六月号読者通信拙稿参照)。

附記 その投書を参考の爲抄録しておく。

『女性サディストの皆様!小生二十三才で大学生であります。貴婦人の犬となって飼われることを人生最高の理想としている者であります。所詮空想に止まっております。ただ顔がブルドックに似ておりますので、「ブルちゃん」と呼ばれることで、僅かに自分が犬であるという気持になることができます。しかし、もっともっと徹底的に犬として扱われたいのです。どうか願望をかなえて下さい。(中略)相手の方としては、上流に属する十八才から三十才位までの美しい女性で、特に医者様の奥様は尊びます。(中略)あなたの足の裏を犬として嘗めるとき、それは貴女にとつてもお金に代えられない愉快なのではないでしようか。これ対して何物もあなたから要求しません。犬として扱っていただけたら、それで十分なのです。(下略)(傍点は引用者)』

第一章 西洋人への劣等感

自分は白状するが實際西洋の女が好きである。……自分は西洋婦人の肉体美を賞讃する一人である。その曲線美の著しい腰、表情に富んだ眼、彫像の様な滑かな肩、豊かな腕、広い胸から、踵の高い小な靴を穿いた足までを愛する……

——永井荷風「あめりか物語」

前々章の投書と前章の手紙は、特定の女主人への犬のような愛情の告白という内容において合致している。それはマゾヒストの家畜化願望の所産に違いない。唯一つ、後者になくて前者にあるものがある。それは、後者が独逸人同志でやりとりされているに對し、前

者は日本人男性の白人女性への愛情を語っているという点である。私が後者の類の文献から得られぬ親近性を前者において感得したのは、正にこの点であった。あの投書青年が、英人夫婦の隣人となつて、それまで覚えなかつた家畜化願望を感じるにいたつたのは、何故であらう？ 私はその答えとしてマゾヒストの白人崇拜を以てする（第一章末尾）のであるが、先ずその前に、日本人一般に在する西洋人への劣等感ということに触れておきたい（附記第一）。

近頃は威勢の良いことをいう人もある。「西洋崇拜は今やひどい時代錯誤となった。それが西洋人自身の優越感となつてあらわれる場合には滑稽であり、西洋人以外の有色人種の劣等感となつてあらわれる場合には、卑屈で、不体裁で、悲惨である。」（加藤周一『ある旅行者の思想』）など。

だが事態はそんなに簡単なものではない。アジア・アフリカを縛つていた白人の帝国主義の鉄鎖が緩んで、植民地の民族主義が勃興したことは事実だ。政治的経済的独立に酔う有色人が白人との対等意識を強調する態度も分る。然し、万邦無比の国体を誇つて排外思想を昂揚させた日本人の心理に、裏返しになつた——排外思想に通じる——劣等心を見出すことのできる人は、ナショナリズムの火の手に目のくらむことはないだろう。それに政治的、経済的独立は、文化的風俗的な面における西洋の侵略をどうすることもできないし、しかも、この面での西洋からの独立は絶対に望めない。中華の、印度の、サラセンの文明が、欧州文明と対等の（時には先進の）地位で、世界史の主流となる可能性を持っていた時代は去つた。ギリシャ思想、ローマ法制、西欧近代科学……圧倒的なこの主流に比しては、爾余の文明は畢竟、支流に過ぎない。東洋の精神文明などい

うが、植民地の民族主義運動を支える自由と独立の理念、人類の栄光たるこの思想は、遂に有色人種の中に生ぜず、白人から教えられたものだ。東西文化の融合といつても、実は異質の文化が欧州文化の肥料として吸収せられるに過ぎない。交通通信の発達で地球表面は文化的に渾一化されつつあるが、その文化は白人の文化であり、後進諸国はその恩恵下に進歩した上で、応分の寄与をなすに過ぎない。現代日本の文化水準の向上も、結局この種の白人の文化の模倣（日本の〇〇——例えば医学——は世界的水準——といわれる場合、多少の寄与をなし得ることは認めてよいが）によることは否定できまい。

この文化的渾一は風俗面での顕著な西洋化を伴う。我々有色人は白人と同じ風俗の下に暮らすことを強制されてきている。この場合どうにもならないことは、生活、風俗の文化というものは人間の肉体と高度に関連を持ったものだということだ。物質文明は模倣できる。然し、肉体的条件は模倣できない。風俗文化に関する限り有色人種は常に「借り着」の意識を味わされる。そこに癒し難い劣等感が生れる。

肉体美ということについての考え方一つ取り上げても、それは明瞭であろう。維新以前の日本人は天狗のような鼻をし、もじやもじやの髪をした肉体に異人を感じたれ、美を発見することはなかった。それ以後の一世紀は西洋文物による吾人の審美感の馴致の間である。——考えて見れば、「鼻が隆くて色が白ければ美人」という日本人の昔ながらの標準には宿命的なものさえあった（これについては尙第一三章附記第一）。——和服は捨てられ、髪はパーマになった。ビューティ・コンテストの優勝ミスの肢体は八等身とい

う白人的標準から讀えられ、胴長の古来の日本美人は美人でなくなつた。丈なす黒髪的美も過去のものになりつつある（附記第二）。然し日本国内では洋装に自信のある女性も洋行となれば和服持参が普通である。洋装した肢体と容姿へのこの自信のなさも無理はない。西洋人と同じ審美感で日本人と西洋人の女性の肉体を観察する限り、どちらが美の理想に近いかは言をまたない。西洋人並みの審美感は有色人女性に劣等感を覚えさせるのだ。そして、これを男性の側からいうなら、自国の女性より西洋女性の方がヨリ美しく見えるということである。

一体、皮膚の色の異なる種族間に特殊の魅力が生じてくることは、広く承認されていることだ。黒人舞姫ジョセフィン・ペーカーの人氣は半ばはその漆黒の皮膚の魅力に基いたといわれ、イワン・ブロッホなどは、これをフェチシズムの一種として説明している。

然し、彼等西洋人の学者は、白人の側の心理には詳しいが、有色人の方の心理には疎いのだ。白人男性対有色人女性にせよ、白人女性対有色人男性にせよ、白人側の愛情は正に右の魅力を相手に覚えることからくるので、これをフェチシズムと見ることも無理からぬが、有色人の方は、そのような異種族への興味以外に、一種の心的傾斜を伴う。白人にとっては有色人の異性を愛することは一種の好事と考えられ、変った味を求めたと思われるに反して、有色人にとっては、白人の異性は同じ種族の異性より優れたものと感じられるのが現代なのである。異種族間の魅力が特殊異常の現象とされるのはその故である——、同種族の異性より異種族の異性がヨリ良く感じられるという現象は、考えて見れば、奇妙な話であり、わびしいことだといわねばならないが、金髪碧眼の美女に対する私達の氣持を

内省して見れば分るとおり、これは否定できぬ事実である。西洋化に比例する点で、インテリや都会人において特にその程度が強いといえるし、同じ理由から風俗西洋化の最も進んだ日本で特に顕著な現象のようである（附記第三）が、いずれは田舎でも、他の植民地諸国でもそうなると思う（附記第四）。中国でさえも（附記第五）

こうして白人に対して意識の開放される時の有色人側の心的傾斜は優劣美醜の価値の序列に裏打ちされているから、換言すれば、劣等コンプレックスの表現である。

世界文化の渾一は進む一方である。——今迄ハリウッド映画を主要媒介物とした西洋風俗攻勢は、今後はテレビという強力な援軍によって一層その浸透を容易にし、美意識に対する西洋的標準は愈々支配力を増すだろう。——とすれば、威勢の良い加藤氏の意見にも拘らず、時代錯誤どころかむしろ今後こそ、有色人の西洋人への劣等感は大きな問題となり得るであろう。

附記第一 旧稿（第二四項）では、日本人の白人崇拜という表現を用いた為、吾妻新氏から私の本意とはややくいちがった批判を受けたので、今回は、日本人一般の問題としては劣等感という言葉を用い、白人崇拜は日本人マゾヒストの問題として扱うことによって誤解を避けた。

附記第二 近頃は髪色を変えることが流行してきている。（例えば下着デザイナー鴨居羊子さんはブロンドにしている。女優にもよくある）色彩学者、田口澄三郎博士は、これを日本人の配色美の進歩として喜んでいる（服装の方での色の調和が頭髮の黒色でぶちこわしになっていたが、明色の髪ならその心配がないと）が、ズバリといえば、日本人の劣等感が、八等身のようなおよば

ぬ望みをあきらめて人工的に接近の可能な白人の肉体的条件に飛びついたという感じがする。いずれ瞳の色や肌色の人工変化薬が問題になるだろう。——頭髮といえ、本誌誌上に、かつて黒髪とパーマと優劣論争があつて、後者が多数派であつた。これは、特に劣等感のなんのといわずとも、男性の美感が西洋的標準に馴致されたことを示している。その中には髪色についても進歩派が登場するだろう。

附記第三 日本文化自体が生存競争に弱いということもある。例えば中国文化に比して衣食住どの方面も特殊化し過ぎ、繊細矮小で逞しさが無い。中国人は白人と結婚しても家庭内用語を中国語で押し通すのが多いと聞くが、日本人は、私の知る限り、そんな場合、白人の母国語に譲歩している。これは日本人の方が白人への劣等感に富むという点もあるが、日本語自体の言語としての弱さにも原因がある。マゾヒストには、そういう日本文化の劣後性も意味あることに思える。

附記第四 植民地、原住民の劣等感は私達以上であるが、余り極端だと魅力を感じないのである。旧稿であげたアフリカ黒人種族の女王が混血児である例(旧第一一二項)、戦前のフィリッピン男性が米国女性の愛情狩猟の対象とされた例(旧第一〇四項)は、この点で何事かを語っているようである。

附記第五 日本娘の開放性に比し、中国女性の門戸の堅さは明治前から定評があつた(戸伏太平『洋娼史談』)が、これが、多分に西洋文化吸収の度合に因る——もっともその度合の強弱に既に民族的自尊心(中華意識)が影響してゐるのだが——ことは、人種的には中国系のシンガポール出身の英国留学生の女子学生六人が連名で「夫を持つなら英国人を」と故国の新聞に投書し物議を醸したという話(週刊女性誌三三・二・二号)などを聞くと、思ひ半ばに過ぎる。

女体緊縛フオートE組

9×13印画紙焼付

- | | | | |
|-----|-----------|------|-----------|
| ES1 | ヌード緊縛集 | ES6 | あわや寸前 |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| ES2 | 全裸悦虐集 | ES7 | 剥れたズロース |
| モデル | 須川 令子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| ES3 | 臀羞 | ES8 | 乙女のすべて |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 花坂 道子嬢 |
| ES4 | 酒宴の弄者 | ES9 | 女学生の縛り |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 須川 令子嬢 |
| ES5 | 脱がされる娘 | ES10 | 緊縛のベッドシーン |
| モデル | 須川 令子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| | 五枚一組 三三〇円 | | 六枚一組 四〇〇円 |

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型(9×13センチ)印画紙焼付

- | | | | |
|-----------|-------|-----------|----------|
| 愛川悦子嬢の巻 | ☆全裸縛り | 田中芳代嬢の巻 | ☆セーラー服縛り |
| 四枚一組 三〇〇円 | (略号1) | 五枚一組 三五〇円 | (略号5) |
| ☆全裸強烈縛り | (略号2) | ☆段間しぼり | (略号6) |
| 四枚一組 三〇〇円 | | 四枚一組 三〇〇円 | |
| 大塚啓子嬢の巻 | ☆股間縛り | | |
| | (略号3) | | |



御存知八五郎「親分……てい変だッ。たった今しがた、何んのかんのと、それがその、蜂須賀さまのお屋敷内で、えれい責め折檻事がぶっ始ってさア——」

銭形平次「何んだ、草履ばきのまま飛び込んで来やがって……蜂須賀さまと云やア阿波の国じゃねえか。ここは江戸だ。十八番の早耳が、どうかしたのか？」

八「ヘッヘッヘッ……違いねえ。いえ、その、何んですが。あっしがネ、ひよいと飛び込んだ処が八丁堀の映画館でさあ。で、ゴチャ、ゴチャとならんだ字幕が消えるといきなり綺麗な別嬪が後手にくくられて井戸吊に、また、そばに突立って居るつぼねの憎くたらしいの何んのって……」

平次「そりや耳よりな話で御苦労だったーと一先ず云いてい処だが、ひるのさ中から、お役目を追っ放り出して遊んでいちやいけねえ。顔でも洗って出直して来いッ」

八「チエッ……、これだから親分は話せねえや。野村の胡堂先生も仰言っていましたよ銭形の親分は昔から女を縛るのが好きだって……」

平次「何い？」

八「……という訳で、親分、素敵な滅法イ



カスな別嬪でしたよ。多分、あっしの見た眼
じや、腰元の一人と睨んだんだが、まあ、事
の次第を、とっくりとお聴きなすっておく
なさい」

平次「口八丁で手のからっしき利かねえお
前にかかったや、どこのつまりが笑いの
だ、事と次第によっちゃ、十手も握らなけ
なるめい。八、話してみな」

八「何んしろ、あっしも親分知っての名代
の映画狂、事もあらうに女を責めるのに、何
も開幕の初鼻から折檻事がカックンと映り出
す映画ってものは、これが初めてでさア。新

東宝ってね、その方面での元祖ナンで。いえ
筋は……ハテナ、何んだっけ。こうっと、左
様、親分、まあ一つ、この番付をちよい御覧
なすって……」

平次「成る程——阿波藩の城下、剣山に埋
められた百万両をめぐるってのお家騒動。その
陰謀に美ぼうの女剣士と、それを助ける一党
が挑戦、悪の一味を倒すと云う極付娯楽時代
劇……とある。処で、八、今お前が云った折
檻される腰元とは何んという御仁で。いや、
どうして責め折檻されたのか、まず訊きたい
のはそれだ」

八「それが……親分
あっしにもよく判らね
えんで。何んでもその
腰元は山下明子という
新人？スターだと思
うんですがネ。勿論、亭
主持ち、夫婦揃って
きつと剣山百万両の在
りかを知ってるんで御
座んしよう。で——運
悪くスパイが入った腰
元の彼女が捕って責め
られ、拳句の果てに亭



主まで水をぶっ掛けられる始末なんで。素直
に白状しまえば釈放される処を、それが死
んでも出来ねえ。そこへもって行ってまた悪
家老にそのかさね側妾の色香に迷った殿さ
まのタチがよくねえと来てやがる。

「斯くなる上は殿、殿直々の御成敗を……遊
ばせ

ナンテ側妾（若杉嘉津子）の流し目でジロ
リ催促されちや、牡丹雪の降る庭先に、ツツ
ツ——と降りて行くのが当り前でがしよう。
そのまた庭先が何んと、お眺め向きの立派な
折檻場でさあ……」

平次「そのお前の控帳に矢立で描いた素描



きを一通り見ると、あらまし判るような気がするが、この車井戸に吊られた腰元の左の女は何んだ？」

八「これが一等初めに親分に申上げた憎くたつらしい責め役の局なんで……、どうです、海千山千の年増振りのぶざまなことは……これが親分、ささくれた竹ん棒で打ちのめすんで、よくある場面じゃ御座んせんか。親分の好きそうな……」

平次「いちいち、減らず口をたたくんじゃねえ。それはそうと、八、こいつはどうでも只事でもなさそうだ。たとい、もめ事が百万両の争奪戦であるにせよ、当の相手は、か弱



い婦女子。それを車井戸に吊り責めにしての御成敗は誰が見ても聴いてもよくねえ事だ……ただ……」

八「何んです？ 親分」

平次「これが江戸八百八丁のど真中で起きたとしても、相手は名に負う大名屋敷内、公儀のおとがめで何分の御沙汰があるまでは由来、殿さまには手出しが出来ねえ。齒のたたねえ骨をしやぶるのと同じ事さ」

八「成程、それじゃ、親分、この映画は黙って見逃すより外に手が無えと仰言るんで。



畜生、いまましい。せめてあの局の野郎でも、ふん縛って……」

平次「まあ、落ちつけ。こういう時には壁に耳あり、舞台が廻って隣り部屋の客人の……どうやら、ドライな女同志と見受けるが、八、一つ聴き洩らしのないように、そっと耳の穴を追つけてみな……」



× × ×

A子「……それで、あんたよく承諾したわネ」

B子「だって、しようがなかったんですもの、相手が課長さんよ。そんな事、事務員のサービスだ位しか考えていないのよ」

A子「いくらあたし達が事務員だって、悪質よ。場合によっちゃ人権じゅうりんものだわ。だけど、そちらさんの御希望がそれだけで、変な関係ナンかにならないなら、きっと面白いかも知れないわネ」

B子「嫌だあ、急に賛成ナンかしたりして。」



多分、大丈夫。一応紳士ぶってるんだから」

A子「じゃ、それはまあ、いいとして何処で演るの？芝居小屋でもあるまいし、スターでもないのに……」

B子「特別約束で借りたお屋敷なんですって。で課長さんたら、あたしに昔の腰元にな

れって云うのよ。真似事だから心配せんでもいいって……」

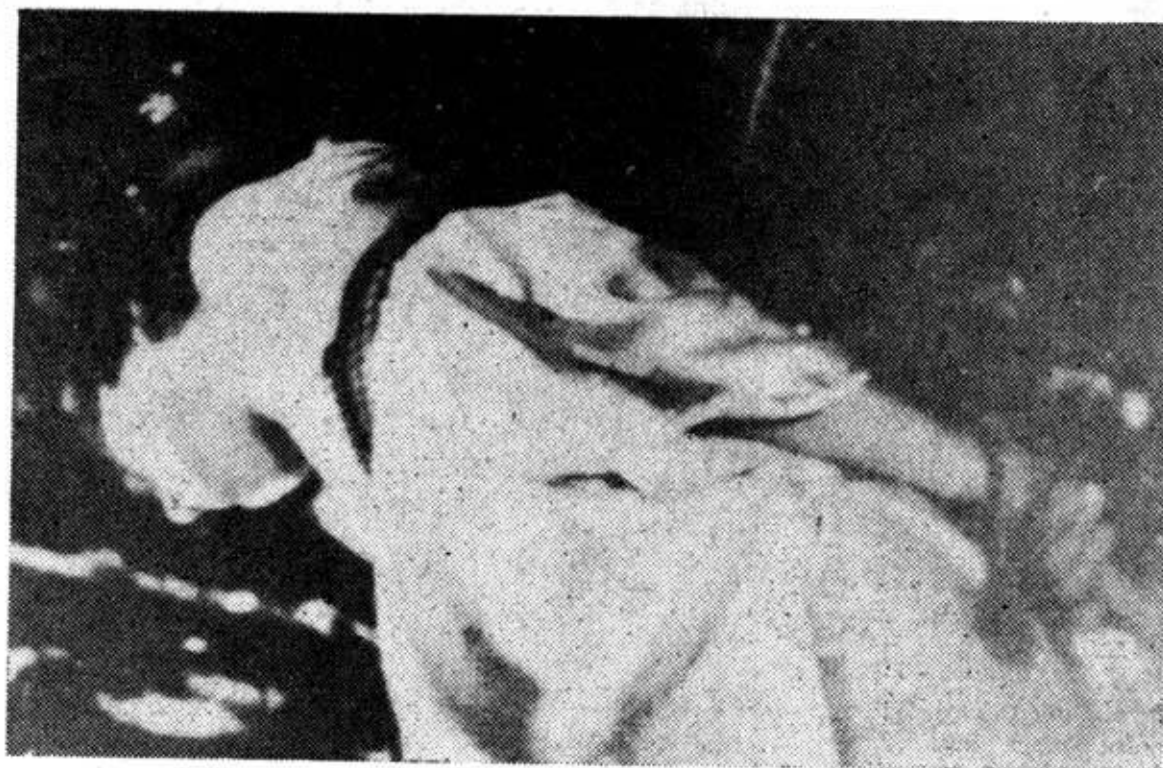
A子「真似事だナンて、あんた本当に井戸にくくりつけられて吊るされるのよ。何んだか知らないけれど、お菊さんになったつもりで演らされるのよ」

B子「縄だけは新らしいから、一っぺん、



吊るされてみるわ。もうチャンと覚悟はしちやった。但しモデル代一万円ですって。ホホホ……」

A子「あきれた人ねえ。まあヌードでないからいいけど、長いキモノを着て帯しめて、ブラリンコとぶら下るのと違うのよ。お芝居



のように、あんたの手が後手にカッチリと縛られて、島田の鬘をバラリと乱して……ワア……凄、大丈夫？」

B子「もう斯うなったら矢でも鉄砲でも来いだわ。観念して縛られてみる。そもその始めは、あたしの身体を縛らせて呉れと云っ

ていたのが、腰元にして井戸吊りを写真に撮りたい、に変わったただけだから、いじめない約束。いじめたりしたら承知しないから……」

A子「馬鹿ネ、そのカメラが曲者なのよ。

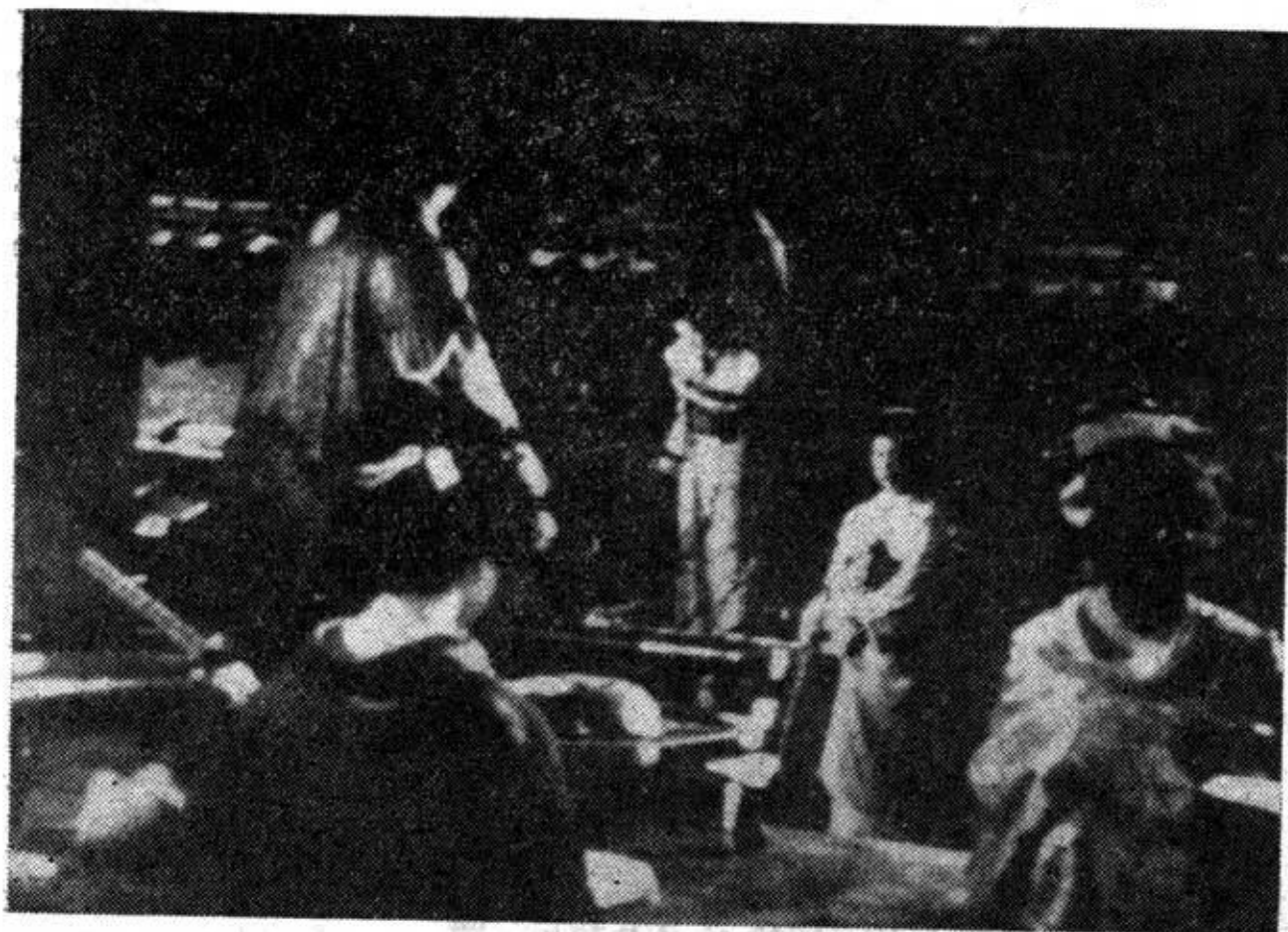
吊るされる女の裾の具合がどうの、帯を解いて長襦袢一枚になれだの、赤い腰巻と白い脛のコントラストがどうのこうのって、ウルサイわよ。その間、あんたは後手に縛られっ放しで我慢出来て？」

B子「へっちやらだよ。うんと色気を出して逆に課長さんを惑わしてみてやるわ……」

× × ×

八「なる程ーネ、親分、こりや凄世の中になりやしたぜ。今時の娘さんにかかっちゃ、かないませんやねえ」

平次「岡蒸気がエレキで動いて、矢立の筆の先きがカメラに変わろうとも、女の責めはよくよく魅力があるものと見える。処で……話は飛ぶが最前の阿波公のお殿さまは、最後にその腰元を井戸に斬って落したんだらうな」



八「そりや、もう、あっさり殺っちまったんで……」

「この恨みは果さで置くべきか……なんてね、肩先きを先ず峯打ちでたたかれ、ぐっと

のけぞった処を女の胸、左様、乳の処から刃の先が腋の下へ通るように斜め上に刺し込んだから堪らない。ガラガラドン、ビシャンと車井戸が鳴って、腰元は井戸の奥深く斬り落されて庭の松の雪が散る……ていのいい播州皿屋敷の焼直しみたいんでさあ」

平次「目明しはクドクドしい廻り道は禁物だ。その腰元の恨みは、何も今、俺達が飛び出さなくも、必らず映画の終る前一時間半後にはケリがついただろう？」

八「凶星、その通りナンで……。ただネ、親分、この映画で面白い新興宗教の祈禱場が映るんでさあ。あっしも祈禱師になればよか



った……一寸、これを御覧なすって。ねえ、グルリと赤い湯文字一枚の巫女に取り囲かれて、これで子宝が授かるんだから奇妙でさあ……」

平次「これだから映画という奴は始末におえねえ。察する処、側妾に後継ぎが懷妊して、そのまま事が運んでお家横領となる。よくある手だ処で、八、もう一度、ホラ、あの部屋だ。見えるだろう。俺には踏み込まねえでも、ちゃんと若僧手代と娘

の道行相談……と見受けた。御苦労だが、もう一っぺん盗み聴きして披露してみな」
× × ×
お糸「ねえ、新吉。このあたしを、そのよ
うな処に連れて行って、まだ嫁入れもしない
のに、どうしようというんだらうねえ」





新吉「お嬢さまの前でこう申しちや何んですが、何者かに頼まれての悪だくみ。噂にきけば、お嬢さまは人質に、娘盛りのそのお召物を剥ぎ、湯文字一枚にむかれて怖ろしい祈禱師の手に渡されるとの事、そればかりか、あまた湯文字女の群れの真只中でお嬢さまは

ただ一人、そのお美しい肌に荒縄がからみつき、後手に縛り上げられて組上の供養物同然誠にお傷しい限りで御座ります」

お糸「糸はそのような目に逢わされるのは嫌や、嫌や……。新吉、いつそのこと、このあたしを連れて逃げてお呉れ」

新吉「滅相もない。そのようなことを仰言っても……。この新吉に大それたことは出来ませぬ。先様のたつてのお望みとあろうともよもお嬢さまを殺める……。などと云うこともありますまい。ハテ、どうしたらよいか、ほとほと思案に暮れてしまいました……」

お糸「いくじなしッ。新吉の薄情者ッ。それでよく番頭の多兵衛をさし置いて、あたしを丸め込んだわねえ。へん……。供養物が何さ。ナマコの腐ったような男の助け太刀を頼むより、女のピチピチした身体がどんなものか論より証拠。新吉ッ。よく眼の玉をあけて拝むがいい……」

新吉「もし……。お嬢さま、何をなさいます？帯を解いたりして、いけません。飛んでもない。あれ……。お召物まで、ワァーいけない。長襦袢

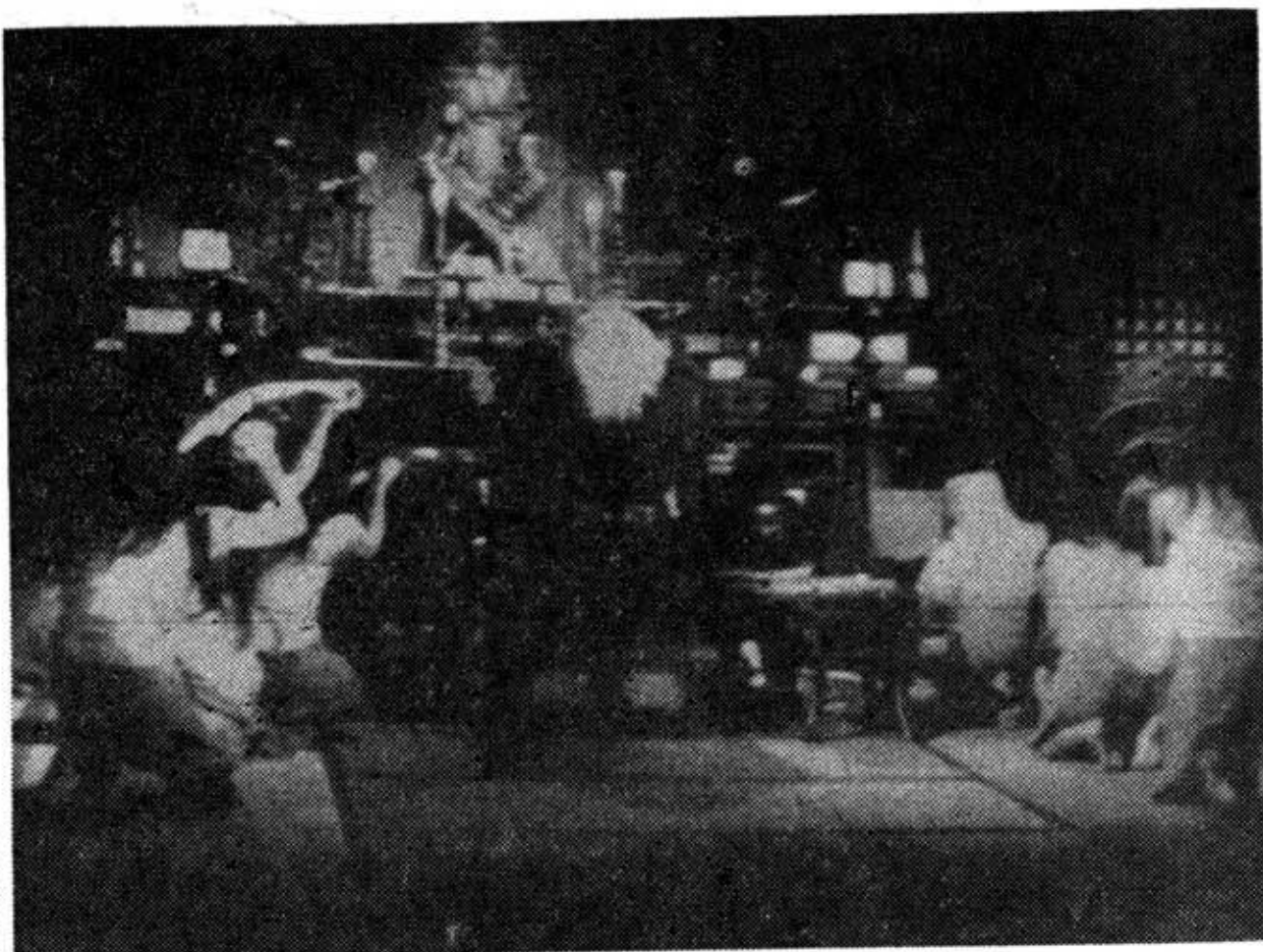


でお止めになって……。その、いえ、あの、それまで、真赤な湯文字は殺生で御座ります。とうとう、何んというお姿に……。それじゃ、男の新吉が目を廻して死んでしまいます」

お糸「ホホホ、さあ、お縛り。それとも祈禱師になるのがお嫌かえ？娘盛りを裸にむいて後手にするなり、このまま駕籠で運ぶなりどうとも、そなたの勝手。それとも、この真っ白なあたしの身体に荒縄がからみつくのが

怖いのかい？」

新吉「滅相も御座いません。新吉、男冥利につきて、お嬢さまをお縛り申上げます。どうぞ、御かんべんなすって……」



お糸「くすぐったいッ。何処をお縛りかい？この乳房の下を、ぐうっと締めて後手首を縛るんだよそれからその縄で湯文字の上からお腹をくびれるように縛ってお呉れ、ブルブル震える序でに白足袋の足も一緒に……とうとうあたしを縛ったんだねえ。女のわたしが後手に縛られちゃった。さあ、新吉、何をぐずぐずおしだい。さっさと、あたしに猿轡を噛ましてかついで行ってお呉れ。さあ、急いで……」

× × ×

八「親分ッ……いけねえ。飛んだ道行になっちまいやがった。手代が赤い湯文字の娘をかついでますぜ。待ちぼうけの祈禱師の顔が見てえや……」

平次「聴いたか、八。見て極楽たア、この事だ。長生きはしてものだ。好きこのんで女を湯文字一枚にしたが、これで子種が胎ったら、もうけもの。宿らなかつたらあの娘さんは、なぶり物になる処を手代の奴、うまい事をしやがった。八、

＝ 八月号掲載予定 ＝



斯うしちやおられねえ、すぐ仕度をするんだッ」
八「合点だッ。で親分、何処へ？」
平次「知れた事、江戸は西方、新東宝のスタジオだ」
八「おやおや、これだから『剣姫千人城』は見るんじやなかった……」

緊縛映画スナップシリーズ

第10回作品——完——

マゾヒズム百景

馬場好男

第二十一景 お嬢さん武勇伝

此の景の話の前に一寸新聞の切りぬきを二つほど紹介する。どちらも昭和三十三年十一月五日附朝刊で一つは、東京中日新聞で海外版の処に小さく、

尼さん、泥棒をKO

アフリカはウガンダのグルーという町の修道院へこのほどアレクサンダー・オーローなるコソ泥が忍びこんだ。ところが物音に目をさました尼さん六人がオーロー君にとびかかつてノックアウトをくらわせ、手足をふんじばって床の上にごろがし、お巡りの来るまで泥君の上に馬乗りにおさえていたという。この泥君、尻さんをアマク見くびっていたというわけ。

とあり、もう一つは読売新聞で、

日本刀ぬいた女社長

四日夜九時、東京都台東区松葉町六四、小林産業株式会社（社長小林斗志子さん）（四〇）に覆面の五人組強盗が押し入ったが、日本刀を振り上げ大通りまで賊を追う斗志子さんの「斗志」に一味はなにもとれなかったばかりか、うち二人はだらしなくしぼり上げられてしまった。Ⅱ後略Ⅱ

以上二つの記事は国外と国内だし、記事内容も違うが何となく似ている点がある。それは泥棒の話と云う事と我々マゾ愛好者が好んで見られた記事と云う事である。さて此の景の本文に入るが之も泥棒の話。

春子さんは二階の自分の部屋にいたが何となくつまらなくなつて部屋を出た。晩秋に近い季節だったが、春子さんはさっきその頃流行のフラ・フープをやっていたので、その時

のままの軽装で短袖の運動シャツにショートパンツと云う姿である。

ハイティーン最近の十九才だが、のびのびと育った彼女は、まさにグラマータイプ。脚もすんなりと伸びてとても美しい。勿論美人の春子さんが性格も又とびぬけて明るく、早く云えばお転婆である。

彼女は階段を降りようとして、ハッとスリッパの音をおさえた。手すりに掴まってそつと階下の部屋を伺う。

「おかしいわ？」

彼女は、留守番をしているはずなのに誰かいるらしく。ゴソゴソと妙な物音がする。

「次郎かしら？」

と弟の名を呼ぼうとしたが、思い直して彼女はスリッパをぬいでそつと彼女の隣室の弟の部屋から木刀を持って来ると再び階段を降りた。障子の間から見て

「泥棒だ！」

春子さんはゴクンとツバをのみこむと足がふるえた。八畳の間のタンスの引出を下から順にあけて、あさっている男。まだ若いらしいワイシャツにずぼんの姿で学生らしくも見える。泥棒の後姿をキツと睨んだ春子さんは勇敢にも、ガラッと障子をあげたのだ。

「ウワアッ」

男は驚いて飛び上ると、身構えた。

「あんたは誰ッ!、泥棒ね。失礼よ、人の家に黙って入るなんて」

春子さんは剣道のように木刀を青眼にかまえると、ジリジリと男の方に歩みよった。

泥棒はヘタヘタと青くなって坐り込むうとしたが、春子さん一人と見くびったのか、

「や、やい、俺をだれだと思ふ。し、しずかにしろ。さ、さわぐと、た、ただでおかねえぞ」

とガタガタふるえ乍ら眼をむいた。

「何よ、泥ネコのくせに。さあ、来いッ」

春子さんは木刀を構えたまま、片手を横に眼の前にさし出し乍らかまえている男に、にじりよった。

「ち、ちく生ッ、ゆくぞッ」

男は僅かの隙を見つけて、パッと春子さんめがけてとびかかったが、春子さんはさっと身を引くと

「えいッ」と一度、斜めうしろに戻した木刀が真正面から、ブーンと男の頭上にとんだ。

「うーん」

ハッと頭を木刀に打たれた男はそのまま、頭をおさえてかがみこんでしまった。

「エイッ!」

春子さんは木刀を男の首すじへつきつけ乍ら、ポンと足で肩を蹴りつけた。

男はうつむけに両手で頭をかかえてうずくまったが、春子さんは尚も男の背に木刀を打ちすえた。

「さあ、うつぶせにおなり!うつぶさないともっと打つぞ、ホラ、これでもか!」

春子さんの木刀はビューンビューンと音をたてて、男の背に、腰に、尻にとぶ。男は悲鳴をあげ乍ら逃げようとしたが身体が動かず、その場にながながと俯伏せに転がった。すかさず春子さんは男の背に馬のりになると、両手を後手にねじあげた。

「さあどうだ。これから縛ってお巡りさんに引きわたしてやるから」

男は春子さんの一撃で、めまいをおこしていたらしいが捕われたと知ると

「ゆ、ゆるして下さい。始めてやりました。もう三日も食べていません。お嬢様、ゆるして下さい」

と泣き声をあげ始めたのである。それでも隙をみては、ねじあげられた手を振りきって春子さんをはね返そうとするが、春子さんは悠々と馬のりになったまま、しっかりと男の

手をねじあげて動かせない。

「これでもか、これでもか」

春子さんは尚も、ぐいぐいねじあげ乍ら困ったと感じたのだ。それはこの男を縛る紐がなかったのだ。部屋の中央で組みふせたものの紐をとりゆけば、男がおき出してしまおう。しばらくあたりを見廻していた春子さんは

「かまうものか、誰かが来るまで、こうしておさえつけているんだ」

と覚悟をきめてしまった。

「手が、手が折れます。ゆるして、ゆるして下さい」

男はぐいぐい両手をねじあげられて、息もたえだえの悲鳴をあげている。

春子さんは男の背に馬のりになっている自分を、私って女かしらと考えたり、此んな姿を母がどんな顔をしてみるかしらとおかしくなったり、こうして上手に此の泥棒の両手をねじって組みつけているのも、ふだんに次郎を相手に護身術とばかりに組み伏せて、やってばかりいたおかげだワと考えたりしていた。

手帖雑報欄 沼 正 三

二五九 大江賢次『アゴ伝』文士の自伝だが、武者小路実篤邸の書生になった時の夫人からの下男扱いの有様が「召使願望者」には興がある。

二六〇 三橋一夫「あべこべ夫婦」(『拳銃先生』所収) 二〇〇の「サカサマ天国」と同人物を再出させる。有能な妻に奴隷として奉仕し、夜は妻のベッドの下に犬の様に寝る……といった工合。特に注目すべきは、妻の命令一下、ある女流作家の家に忍び込んで原稿を盗み出すという犯罪行為に出る点である。前作でやはり妻の命を受けて放火をするのと同断だが、どちらも自分自身では動機がなく、わけも分らずに妻の命令に盲従してする犯行である。後に手帖でマゾッホ自身の奴隷契約を紹介する時に触れるつもりだが、主人の手足となる奴隷化の一極限が、この犯罪行為を行うことにためらわないという段階に到達することなのだ。この作品の主人公はそこまで奴隷化されているのである。

二六一 池田みち子「気まぐれお嬢さん」(『女と男と』所収) ゲイボーイに対し嗜虐的に振舞うお嬢さんが出る。然し大したものではない。他に「よろめきマダムとゲイボーイ」

二六二 雪山慶正『ニグロ』(三一新書) 黒人問題について関心ある向きに。

二六三 望月衛『性の人生案内』(教養新書) 三三年刊で少し古い。が、「MとW」の章に男のW化を論じて、進駐軍に対する日本人男性のW的態度を一因としているのが面白かったからあげておく。ホモでない男がGIからホモの対象として取り扱われた実例が語られている。

二六四 佐野博『禁断の楽園』 皇后様の衣服仕立の為、全身三六項目の計測数値によって実物通りの生人形を各種姿勢にわたって製作し、仕立屋が用いたという実話。直接マゾヒズムとは関係ないが、貴婦人の尊厳の度合を知るのに。

二六五 林語堂著・小沼丹訳『則天武后』 厳密に史実に拠ったツワイク張りの史伝。訳文もよく、非常に面白い。武則天は史上最大の嗜虐女性である。手帖の一項を費すこととうから予定しているけれども、そこまで辿りつけるかどうか分らないので、サジスチンに関心ある向きは是非一読されよとお薦めしておく。なお柴田錬三郎「皇后狂笑」(単に「皇后」とも)も武后を扱った佳作である。

二六六 八尋不二「金狐伝」(キネマ旬報別冊三月号「未発表秘蔵シナリオ集」所収) 岡本綺堂の「玉藻前」によったもの。これもサジスチンを扱った作品といえるのであげておく。マゾ的感興は少いが。三国渡来の金毛九尾の狐も日本へ来ると淫虐味を感じるのはお国柄か。

二六七 南条範夫「復讐鬼」(オール読物四月号) この作家にはアブノーマルな行動を解する資質がある様である。「灯台鬼」以来雑報にあげて来た作品でも分るが、この小説も、主人公が女であったら、マゾッホの「キエフ流血婚」(「公妃の復讐」)を思わせる。戦国時代の領主間の復讐譚なのだが、一旦は敵将の腹心になり

裏切って自がが城を乗っ取り、敵将の奥方を自分のものにし、敵将自身は同一人と見定の難い程に不具化して、阿呆として身辺に召し使うのである。これは公妃オルガが夫の仇である敵将マクを不具化して犬にして飼ったのと同じ「憎ければ生けておけ」という思想である。ところが、この作品ではもう一度どんでん返しが来て、数年後敵将は再び身分を回復し、当の相手を捉える。そして、相手とその幼子とを犬にしよう。犬小屋の中で子供が死んだあと、相手自身は糞壺の中で溺れ死にさせられる。……サデイスの諸君にも——むしろマゾ派以上に——面白いだろうと思う。

二六八 週刊漫画誌「グラビア」美女は競走馬がお好き（三月一号）
一八才の白人美女の騎馬図、女性乗馬ファンに。そういえば——

二六九 東宝映画「大学のお姐ちゃん」重山規子・団令子・中島そのみが、それぞれスラックススタイルで、夏木陽木・江原達治・久保明を馬乗りにして跨っている場面のスチールを見たので、あげておく。手帖新稿第四章附記第三で書いた「痴人の愛」映画の場面など、今でも珍らしくなくなっていましたことが分る。五月号通信欄で姫馬痴人氏のあげられたテレビ場面なども、そういう傾向の一例であろう。

二七〇 土曜漫画誌「泉京子のオツパイの皮」（三四年一月二三日号）映画「人魚昇天」（雑報既出）のロケの時剥けたオツパイの皮を助監督が貰って、売った金で外套を買ったという話。フェチズムを揅る。

二七一 同誌「サムライ・ストリップ」（二月二〇日号）ある記者がグレース松原に対しコカコラの瓶のクビレ迄入れさせて写

真をとったが、中を洗ったコカコラの味を試みる方を忘れたので云々……。この種のCがかった話をもう一つ——

二七二 漫画読本誌五月号の西洋小咄クリームを塗って犬になめさせることを仕込んだ奥さんあり。ある日、犬がベッドから這い出して言うには、「クリームは好きだが、ジャムはいやだ」

二七三 裏窓誌のマゾもの 二月号に「魔女の神酒」を書いた南村蘭という人が四月号に「女神の壺」というのを書いている。混血白人美女に奴隷化され、彼女の液体固体を受ける壺にされる話。同号の藤見郁「馬乗り仙女」は（犬願望と馬願望が不統一だが）藤田小乙女姫見たたいな少女占師への憧憬を語る。五月号には「惣太の黒魔術」「肉塊」があるが、前者は浅薄。後者は顔面が女体の下部に合わせて凹んでいる三尺の矮人を登場させる点、私好みだが不得要領な作品だ。

二七四 犬肺利用の人工腎臓（三四・三・三一・各紙）東大研究グループの成果が四月中旬米国的人工内臓学会で研究発表される由。犬の腎臓が……というのでは何も感じないが、肺が……という点で、私は楽しくなる。犬の血液と人間の尿とは価値等しいのだ。ヤプーにおいてもまた。だからヤプー二五章三節の「尿血液」なんてものを考えたくなる。

もう一つ新聞記事——

二七五 男性チームに美少女が主将（三四・四・五・朝日海外トピック）インドネシアの話。一七才の美少女ゴールキーパーが他の全団員が男性というフットボールチームを牛耳っている。ふだんはしとやかだが、フィールドでは男をノックアウトしてしまう由。勇ましい……

勇ましい美少女にやっつけられる男で思い出すのは、旅先で読んだ新聞にあった次の連載小説。東京の新聞にも出ているのかも知れないが……

二七六 富田常雄「河岸の朝霧」(信濃毎日四月上旬頃) には、男装の美少女が恋人の道場の師範代になって、彼女に懸想する余りに入門を志願して来た旗本の馬鹿息子を打ち据える条りがある。この馬鹿の美少女への愛慕には、同じ作者の「女やわら抄」(連報所引)と同じマゾ的執念が感じられる。「女やわら」で連想させられるのは――

二七七 近代柔道誌四月号表紙写真黒帯女優として有名なグラマ―万里昌代さんが男を投げつけようとする雄姿。
番外 表紙写真といえば、先には雑報二五六であげた週刊「女性

婦人用下着愛好者の弁

細田 隆

最近、婦人下着についての記事が少ないのですが、マニヤの一人として淋しく思っています。私は、毎月の小遣の殆んど全部を下着類の購入に当てている者です。私が他の同好者との好みの違う点は、私は、ど

ういうものか、どんな美人のそれであつても、お古は何か不潔感を持ってしまつて、余り魅力を感じません。従つて相当量のスリッパ、ブラジャー、パンティ、ネグリジュ、コルセット等を集めていますが、他人の手で水

自身」の表紙二葉が手違いで載らなかつたけれども、これは是非紹介しておきたいので、今回載せて貰うことにした。説明については、本誌四月号一五五頁二五六参照。

二七八 清宮様の御婚約その他 相手は銀行員という腰の低い職業(五月号「マゾ百景」で馬場氏は銀行屋の態度をマゾ的と表現している)で、旧華族とは言え、貧乏。そこへ千五百万円持つて御降稼。さてどんな御家庭ができましたか、というクイズ。

これは、平凡なおとなしい男である皇太子様と非凡有能なしつかりものの女である妃殿下との御家庭についても問題になることで、週刊漫画誌の御成婚記念号に、テーブルで待つ美智子さんに皇太子がエプロン姿でオムレツを作つてサービスしている漫画があつたのは、これに対する庶民の回答を示唆しているといえようか。

を、くぐつた物は一枚ありません。全部新品ばかりです。

その購入方法は、百貨店では若い売子の手前、妙に気はずかしくて買いにくく又、以前に一度、下着専門店はどうせ買うなら自分のサイズに合うものと思ひ色々注文を並べたら、中年の女主人のような人が横で聞いていて、売子と交替していいました。「生憎と、そういうチグハグなサイズのものは御座居ません。女の人でしたら普通の品で充分間に合う筈ですがネエ」

と。私は羞しさに真赫になって逃げ出したことがあります。尤も、こんな特殊な注文さえせねば、さして買いにくい筈もないのですが、以来、専ら代理店や問屋から直接に送付して貰うことにしています。勿論、前以てカタログを取寄せするのが、この方法ですと、何のサワリもなく購入出来ます。また、自分がウロウロ盛り場をウロつくより、経済的にも安く上ります。

私の仕事は、各家庭を廻るセールスです。で、特にアパートなどでは、外聞を憚ってか部屋の中に干綱を張って、そこに色物のパンティやスリッパなどを一杯にブラ下げてある場面に、度々ぶつかることがあります。何時だったか、松原女史が「東京の人よ何を書く」で、ウィークリー・パンティを書く人の少いことを報告しておられましたが、決して少くはなく、お風呂などへは取替えてから行くのだろう事は、間違いないと思います。

昨夏のことですが、訪問したアパートでノックをしたはずみに扉が開いてしまい、奥さんの（でしようか？）ピンクのパンティを穿いた旦那さんと鉢合わせして吃驚し

た事もあります。後で、扉に錠をおろしていなかったことを、さぞ悔んでいるだろうと思うと、可笑しいやら、気の毒やらで、一日中、変な気持でしたが、その反面、我が意を得、我が友を見出したような充足感を味わいました。

またその他、明らかに婦人用と思われる白のパンティを穿いた人になら、数多く逢っています。ピンクなどの色物はともかくとしても、普通の下穿などは、最早や男女兼用の時代になったといってもいいのではないでしようか。然し女性の禪姿というものには残念乍らまだお目にかかったことはありません。

私は、出勤時、在宅時を問わず、背広の下には冬なら、フリルの附いた真赤なブラジャー、刺繍のある真紅のナイロン・パンティ、豪華なレース付きのナイロン・スリッパを着用しています。然し夏は、透けて見えるのを怖れて、パンティだけにしています。その他休日などには閉め切った部屋で、不相応に大きな鏡に向って、私の全財産、ありったけの下着類をぶちまけ、取っ替え引っ替え、着てみたり脱いでみたり。跳んだり、はねたり、しなを作ったり、よくまあ飽きないものだ

と自分ながら感心する位楽しみます。時には良き理解者がいてくれたらと思う時もありますが、独りの方が誰に遠慮気兼ねなく振舞えて良いと思っています。ともあれ他人では真似も出来ないような贅沢を、自分だけが思う存分に満喫しているのだという自己満足には一種格別なものがあります。が、これはやはり同好の志でないと真に理解しては戴けない性質のものではないでしようか。

また近頃、製織各社が宣伝に躍起となっている新しい繊維、種々の化繊類も夫々に秀れた特徴があるらしいですが、私はやっぱり、丈夫で見た眼にも美しく、乾きも早く肌触り万点のナイロンが一番気に入っています。男のくせに女性の下着に愛着を覚えるのは確かにアブに違いありません。が、誰にも迷惑をかけず、自分一人で楽しみ満足しているのですから、至って結構なことだと思っています。私はこのことを他人には秘めてはいますけれど、決して罪悪感に捉えられたり、羞しいけれども恥だとは思っていません。これからも毎日着用して行こうと思っています。

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

市河家の人々

近藤

ひっそりと静まり返った市河家の深夜であった。

美栄（はるえ）は、ふと眼を醒まし、手洗に立った。手洗の窓から覗く夜は月の出ない、うつすらと暗い空をしていた。そんな中に、ぬうっと立っている土蔵が見える。三百坪に余る地所の中で、昭和二十年の五月、唯一つ焼け残った建物だった。夫の戦死に次ぐ長男の戦死に、戦争が終っても家を建てる才覚もなく、僅かに改造しただけの土蔵に、残された子供達と起居して来た美栄であった。以来、十数年を経るうちには、大きな苦勞も数え切れないが、とにかく美栄はこの地所を大切に守り通して来た。この場所には夫と長男の魂が宿っていると信じて来たし、そして何よりも靖国神社に近

いということが決定的なものであった。財産税の嵐にも歯を喰い縛って耐えて来たし、しばしばあった土地の買手の話にも喉から手が出る程に欲しい金額の誘いを振り切って応じなかった。この辺りの土地は分譲が利かない。そっくり買おうという話には応じる術もなかったのだ。

そうこうするうち子供達が大きくなった。二男の誉志雄、三男の謙、長女の美美子の三人につけた教育が無駄ではなかった。誉志雄は奨学金で学校を出て今では某生産会社の係長になっていたが、学生時代アルバイトで得た報酬は殆んど家計に入っていた。兄に力を協せて美美子は高校入学と同時に近くの小学校の上級生を集めて小

さな塾を開き、学費はやはり奨学金で賄っていた。謙は頑張り屋だった。中学を出てすぐに就職をしたが、これも奨学資金を得て夜間高校に通い、高校卒業の年に四級職の公務員試験を取った。算盤の二級、そして小型自動車の運転免許を取り、大学の夜間部二年の年に公務員の五級職にパスしていた。

美栄自身が或いは保険の外交をやり、お茶やお習字の出張教授をして来た挙句、二年前に土蔵に続く十坪ばかりの建増しができ上った。親子四人が手を取り合って喜んだものだが、しかし今は美美子と謙がいない。美栄と誉志雄と、そして誉志雄の妻の直子の三人には静か過ぎる家になっていた。

美栄は土蔵から光の漏れているのを認めた。土蔵の二階は誉志雄夫婦の寝所に充てているから美栄の関知することではないが、電灯が揺れているのは一階のようなので、何かしら気懸りで自分の寝所の四畳半へ戻れなかったのも、いつまでも子供を独り占めにしたい、かかずらいたいと希う女親の愚かしさであつたらうか。

土蔵との境の防火壁は開いていたが、襖はしまっていて、その隙間から灯の光と話し声が洩れて来る。聴耳を立てるでもない内に、美栄は、ふっと眉を曇らせた。話声と云うよりは怒声であり、誉志雄の頼りに嘲罵する声がしていた。勿論、叱られているのは妻の直子であろう。誉志雄は今年二十八、その誉志雄より六つ年長の直子が子供のように叱られている光景は些か奇異な想像であつた。

「聞抜け！馬鹿っ！一体何度云ってきかせたら分るんだ！おいっ！俺はお前の主人だぞっ！分らんのか、それが？」

何やら小さく呟くようなのは直子の声なのだろう。

「お前のようなウスノロは本来、俺のそばに居られる女じゃない。」

お前が俺のそばで、しかも妻としていられるのは、みんな俺の慈悲なんだぞ！分っているのか？有難いと思っているのか？どうなんんだ？そんなばんやりした面をやめて、はっきりしないかっ！」

掴みかかっているような権幕の誉志雄に、聞きとれぬ声の応答がしていた。

「お前は表向き、世間態だけの妻なんだぞ！お前の実体は奴隷だ。俺の女奴隷なんだ。お袋が起きている時はうるさいから、お前を妻のように扱つてやるが、二人っきりになればお前のそんな仮面はすぐにひん剥いてやるんだ。どうだ、嬉しいか。」

話の合間に、ぴしやっ、ぴしやっと思く音は肌を撲つ音だったのだと美栄は思った。自分のことが云われ、直子が虐待されていると知って、美栄は慌て、胸が痛んだ。

「お前は俺に何て云った？『奴隷としておそばへ置いて戴けなければ殺して下さい。奴隷にさえして戴けたらどんな苦しいことでも飲んで致します』なんて云ったな？あれは嘘か？嘘なのか？俺を欺したのかよ。」

女が恋をする時、誰しもそれに似たことを口走るのは美栄も知っていた。直子の落度が何であるか知らないが、美栄には息子の苛め方が、あくどいように思われた。

「俺には、もっと若くて美人で教養のある女がふさわしいのだ。お前みたいなウスノロはお袋の足許にも及びはしない。どだい市河の家には向かない女なんだ。お前は、いずれ俺にふさわしい嫁が見つかるまでのつなぎに過ぎない奴だ。新しい妻が来たら、お前を二人の共有の奴隷として飼殺しにするか、それともゴミ屑のように抛り出してやるか、それは、お前の心掛け次第だ。しっかり気を入れて

奉仕しないと、いつまでもいい顔ばかりは見せないぞ。いいか？」
自分のお腹を痛めた子の言葉としては信じられない美栄は、暫し
耳を疑う想いであつた。

「いいんだな？ よしっ！ これから鍛えてやる。ウスノロの怠け根性
を叩き直して、徹底的に仕込んでやるぞ！ 奴隷の癖に、ふざけやが
って。覚悟はいいだろうな。それっ！ どうだっ！ どうだっ！」

柔い豊かな肉が撲たれるらしい音は、鈍くて厭な響きを持ってい
た。

うっ！ ううっ！ ううっ！

気立ての良い、可愛い嫁の呻き声を聴きながら、美栄の手は襖に
かかるのが憚られた。直子の名誉のため
に、そして二人の秘事を立聴いた、やまし
さからの気兼ねであつたろうか。

「どうだっ、これでも応えないか！ 死太い
女め、これでもかっ！ まだか！ どうだっ
！」

ああ、ああううっ、うわあっ！ 耳を覆い
たい気持で足音をひそめ、その場を去りか
けた美栄の後姿に、直子が怵えきれずに上
げた悲鳴が、喉の奥で押し殺したように、
くぐももの声になって追いかけて来て、耳に
残って寝つかせなかった。

「直子さん、貴女、家で何か辛いことはな
ア？ 誉志雄に云えないことでも、私でよ



かったら何なりとおっしゃい。聞いて上げますよ。」

「アラ、いいえ、別に。私、何も。」

微笑に紛らわしても、直子の表情に、はっと胸を衝かれた驚きが

一瞬、走つたのを美栄が見逃す筈もなかった。

「そう、それならいいんだけど。誉志雄はしっかりしているよう
も、なかなか我儘ですからね。貴女にも苦勞をかけると思うのよ。
親の教育が悪かつたのだもの、結局は私の恥になる訳だけど、誉志
雄の悪い所があつたら、貴女からは云い難いでしょうから、私に云
つて。そうすれば私から改めさせますからね。」

「いいえ、お母様。とんでもございませんわ。あの方、とても優し

くて良い御主人様ですわ。私なんか至らないことばかりで、いつも申し訳ないと思ってるんです。謙さまも芙美子様も、皆さん優しくして下さるんですもの。」

美栄は、利口な良い嫁だとしみじみと思った。こうまでの夫想いの従順さは、世間で云う姉さん女房のせいかも知れない。謙も、もう二十五なら、ゆくゆくはこういう優しい妻を持たせてやりたい。芙美子は、——あの娘は小学生の頃から母親代りだったから、いい奥さんになれるだろう。美栄は、そんなことを考えた。

いつになく誉志雄の出勤だと云うのに直子が送りに出なかった。

「お母さん、直子は頭が痛いとか云ってますから、済みませんが今日一日、寝かしといてやって下さい。」

「そりやいけない。お薬は？」

「薬は飲ませましたが、大したことじゃなさそうです。疲れですよ、きっと。」

「先生をお呼びしなくていいのかい？」

「いいですよ。土曜日だから僕、早く帰ります。あいつ、僕が看病してやれば、すぐ元気になるんだから。」

誉志雄は母をからかうように明るく笑う。

「お母さん、お稽古に出かける時は鍵かけてって下さいね。どうせ直子は眠ってるんだから。」

「ハイハイ。直子さんのお昼食は？」

「いいですよ。僕が帰って来てするから。それまで、あいつ、そつと寝かしといてやって下さいよ。」

夫の見送りもできないとは余程、苦しいに違いない。そんなこと

は素振にも見せず、慎ましく、そして、にこやかに朝食を済ませ、跡始末に食器も洗い終えてから夫に頭痛の苦しみを訴えた嫁が、いじらしく可愛かった。

誉志雄を送り出すと、美栄は土蔵の二階へ行ってみた。クッションの利きそうなベッドに、美栄は微笑まじさと安堵と羨望と、それに嫉妬まで含めた複雑な感慨を味わった。

「直子さん、どうお？気分は。」

声をかけたが返事はなかった。直子は枕に顔を埋め俯伏せになっていた。毛布の襟からウェーヴの綺麗な黒髪が覗いている。

「駄目よ、変な寝方しちゃ。苦しいの？」

枕許のスタンドの台に薬の小函を見つけ、手に取って見ると真先に眼に入った横文字は opiate。訝しいとは思いつながら、熱は？と手の甲を直子の額へ当てようとして美栄は、はっとした。見覚えのある白いタオルで覆われた顔の下半分が現われたのである。

「……………？？」

三十過ぎの女とは見えぬ綺麗な寝顔のプロフィールだった。尤も直子が手早くすませた上手な朝化粧のせいかも知れないが。閉じた瞼から長い睫が揃って色白の顔に映えていた。タオルを解こうとして、美栄の手は直子の滑らかな素肌に触れた。毛布をめくった下に白い艶やかな裸身が痛々しく縛しめに噛まれて伏していた。タオルに包まれていた顔は醜く歪んでいた。誉志雄の大型ハンカチが無雑作に丸められて口の中へ詰め込まれ、それを吐き出させないように細紐が、ぐるぐる巻きつけられていた。余程きつく締めたのか、そのために頬が括れて丁度、口が耳まで裂けたようになっていた。

ハンケチは唾液を含んでベトベトした。どこに擦れたのかルージュ

ユが少し剥げていた。

「直子さん、直子さん！」

肩を小突いても直子は、ぐったりしていた。毛布ごと抱くようにして仰向けにすると、美栄は直子の両肩をしっかりと掴んで、ぐいぐい揺すった。

「直子さん！直子さん！しっかりして！」

直子は漸く、ふうっと眼を開けた。とろんとした眼だった。確かめるように見詰めていたが、やがてまた臉を合わせてしまう。

「しっかりして！どうしたの？」

「ゆ、る、し、て。」

仰向けにぐったりとした寝顔は安らかだった。後手の手首に持ち上げられて豊かな胸は高らかに息づいていたし、露わになってしまったウェストの辺りまでが見事な統肌で、三十四才というものの、まだ妊ったことの無い女体は、端々しく輝やいていた。

「許して」という直子の一言を聴いて、慌てて縛しめの結び目を探った美栄であったが、初めて見る嫁の華麗な裸身に、自らの過去を探っていた。夫が在世中は、四人の子供を持っていたが美栄も、まだ若々しかった。年令も丁度、今の直子と同じ位、それが焼け跡に呆然と立ちつくしてから十何年という時の流れの間に、いつしか五十の声を聞くようになった吾が身にひき較べて、直子の肌の艶と張が憎い程美しいのだ。その色白の軀に喰い入って後手の高手小手を創り、喉までを締めつけている中細の綿ロープに凄艶なものを感じながら、それでも美栄は、まるで自分自身がこのようなむごたらしい恥辱を受けている想いで、みじめさと憤りに、ぶるぶると顫えた。

「僕が直子にしたいことをしただけなんだからいいじゃありませんか。」

「いいえ、貴男のしたことは人の道に背くことです。」

「お母さん、直子は僕の妻ですよ。夫が妻を躰ることは他人が容喙することじゃない。たとえ、お母さんだって同じですよ。」

「程々になさい。夫婦が協力してこそ良い家庭ができるのですよ。

妻の人格を無視するようなことは今の世の中で許されますか。お互いに欠点を直し合って行くのが夫婦ですよ。直子さんばかりを責め立てて自分の欠点を反省もしないで良いと思うのですか。」

「僕と直子とのことは二人で決めます。別にお母さんの御迷惑になる訳じゃないんだから放つといて下さい。」

「私は貴男を、あんな残酷な人に育てはしなかった心算ですよ。」

「どうせ残酷な人間ですよ、僕は。でもね、直子は僕のものだ。僕は僕なりに直子を愛してるんだ。只、それが常識的な、お母さんの頭の中にあるようなありきたりの方法で無いだけなんだ。直子が厭がらなかったら、それでいいじゃありませんか。」

「なんて悲しいことを云うの。直子さんだって厭に決ってます。誰が酷い目に遭わされて何ともないもんですか。馬鹿々々しい。」

「お母さん、僕はね、……」

「貴方！やめて、お願い。」

母と子の争いを、嫁は聞くに耐えなかった。

「お母様に口応えなさらないで。」

縋るように夫を見上げた眸に、早くも光る露が溢れている。夫をその場から去らせたのも涙の懇願であった。

「お母様、申し訳ございません。旦那様がなさることも、みんな私

が悪いのですから、どうか私を御存分にお叱りになって。」

「何をいうの、直子さん。」

「私は悪い女です。市河のお家には不似合な至らない女なのです。それは、もう充分に承知しておりますけれど、只、何とかして旦那様のお側に置いて戴きたくて、我儘なんです、私。」

「私は貴女を軽蔑しますよ、そんな卑屈な貴女の心をね。」

「ハイ。でも、お母様。私は苛められるのが好きな女なのです。どんな酷い目に遭わされても何とも感じない、いけない女なんです。旦那様はお母様想いで、私にも優しくして下さい、いい方です。決して残酷な方じゃありません。私が、私がお願いして苛めて頂いたんです。ほんとです。旦那様は、よそう、よそうっておっしゃったのに、私が……」

「いいのよ。直子さん。貴女のお気持は有難いわ。でも事實は事実。私は自分を信じますよ。」



直子の瞳が、きらりと光った。

「御自分のお子様をお信じになれないなんて、私、嫌いです！」

美栄は、たじろいだ。

「直子さん、私は子供を信じますよ。でも貴女だって私の可愛い子供なのよ。誉志雄と貴女を自分の子、他人の子と区別できますか？分りますね？」

「ハイ。でも、それなら私の申し上げたこともお信じになって下さいますのね。私は本当に悪い女なんです悪いのは私です。ですから決して旦那様をお叱りにならないで。」

あれ以来、初めての大阪出張で誉志雄は留守だった。直子は美栄と二人きりの静かな茶の間で、夕餉の後、頻りに編物の手を進めていた。その直子が、美栄の眼からは何か息苦しうに見える。思いなしか顔色もすぐれぬようで、体全体に張りが無く、頸筋の辺りも、ほっそりとして見える。

「どうしたの？気分でも悪い？」

「え？あ、あの、別に。」

と云ううちにも編棒の動きが停まり、手の甲で額を拭ったり、頻りに生唾をのみ込む直子である。重苦しい沈黙が美栄との間に滞った。

突然、胸を掻き抱くように直子は突っ伏した。僅かに身を起すと仕事を纏めて脇へのけ、喘ぐように云った。

「お母様、私、お先に、失礼して、休ませて頂きます。」

女の匂いを撒き散らすような悶えに、美栄は、もしや？と想い、あの遺瀨なく甘酔っぱい、わりを思い起こしていた。手早くその辺を片づけて、姑は嫁の様子を案じて見に行った。土蔵の二階の寢室で直子は寝間着に着換えていた。人目の無い処でも、スリッパを体から滑らせる時、既に夜着を羽織っている程に、肌を愛おしむ直子が、美栄の眼には好もし嫁として映った。

直子は淡紅色の扱帯を巾広く結んだ。腰紐を何本か取出して、ベッドに上り、自らの足首を重ねて括り合わせた。次には腿の上をぴたり締めつけた。それから脛と膝の上を縛った。裾の乱れを怖れるには嚴重過ぎた。

「そんなにして、苦しくないの？」

「でも。」

直子は細縄の束をほぐしながら、憑かれたように云った。

「お母さま。私、また病気が起りそうなんです。滅茶滅茶にされないと気が済まないんです。いつもは旦那様が、うんと酷い目に遭わせて下さるんですけど、誰もいないと自分で自分を傷つけてしまうんです。ですから少しも動けないように縛られていないと、暴れ出して何するか分らないんです。お願いです。これで私を、きつくき

つく縛りつけて下さい。さ、遠慮なさらないで力一杯、縛って下さいませ。」

余りのことに美栄は言葉もなかった。

直子は自らの口の中へハンケチを詰め、タオルで頬がくびれる程に覆ってしまった。両手を背で合わせ、美栄を振仰いで眼顔で訴えた。押しつけられた縄の束を持て余している美栄の眼に、ふくよかな感じの白い十指が誘うように、ひくひくして見えた。

「気違いなのかしら？」

そんな疑惑が、ふっと一瞬通り過ぎた。

魅せられたように美栄は縄を捌いていた。美しいものを創り上げるかのように、美栄は何の躊躇もなく、温かく柔らかな生き物に、荷造りの嚴重さを以て縄をかけていた。豊かな丸味が幾重にもくびれて、直子は蠕動した。縄目に皮膚が挟まって引きつれたのか、それとも肌を噛む痛みに耐え兼ねたのか、喉の奥が、ううっ！と哭いて、鼻に抜けて曇った。そんな動きも見逃さず、それこそ身じろぎも許すまいと美栄は一生懸命になっていた。出しただけの紐を纏いつけて、直子はベッドに伏せていた。上体ばかりが、やけに慌だしく呼吸している。

喰い入る縛しめの苛責は激烈だった。だから、寒気を案じて自分の湯たんぽを入れてくれたり、夜具の襟肩を優しく抑えてくれた姑に、直子は微笑を見せることもできず、じいっと眉をひそめて覚えていただけだった。

眠りつけないまま、美栄は独り考えに耽っていた。あの苦悶の表情は本物だと思う。もしも直子が気違いなら、苛め抜かれることが

嬉しいという悪い女なら、痛味など感じない筈だ。喜びを表わさない迄も、少くとも平気でいられる筈ではないか。あの苦しみは正真正銘だ。とするとあの狂態は？

——お芝居！——

はっと胸を衝かれた。さっきは自分が年甲斐もなく昂奮していたと思う。懷妊？と想い、初孫？と飛立つ思いが束の間の喜びと消えて、反動が大きな落胆と激しい憤怒を呼んだ。自分が産んだ誉志雄を傷つけないための、お芝居だったのかも知れないのに。短い間とは云え、自分は直子に、直子の肉体に烈しい憎悪を感じたのだ。市河の家に精神異常の血を持ち込んだ憎むべき女として虐げずにはいられなかったのだ。自分は嫁に詫びねばならぬ。だがあの行為はやむを得なかったのだとも思う。余りにも、うますぎる演技であったし、噛んでしまいたい身のこなしだったから、可愛くて酷いことをしないではいられなかったのだ。云ってみれば痛めつけられている直子にも罪の折半は負わせてもよいと思った。

恥ずかしい。冷静に考えてみれば、たとえ直子が精神異常の女であつたとしても、それは誉志雄が日夜の加虐の床に仕上げてしまったものではないか。とすれば、その誉志雄の生みの母である自分が、むしろ犠牲者である直子を何で憎むことが許されよう。傷つけられた嫁に詫びの言葉もない癖に。

十二時近く、謙と芙美子が一緒に訪ねて来て泊って行ったのを直子は知らないでいた。縄の苦痛で一晩中、うつらうつらとしていた。

躰は疲れ切っているのに一向に眠りつけなかった。うとうとと

すると、すぐ現実の苦痛に呼び醒まされる。そんな繰返しの中に、やがて朝を迎え、直子はベッドの中で昨夜のことを思い返していた。

あの発作は嘘である。全くの造り事なのだ。然し、あのような気違いじみた真似をしてみせたことで、母が息子に対して抱いたらしい疑惑を払拭して貰えれば、それでよかった。少くとも夫だけは妻の心を分ってくれると思う。

だが、直子は、みじめな立場に立たされる事になった。元来が夫より年上の、六つも違う妻である。唯でさえ歓迎される筈の無い女が、今また被虐の嗜好を持つ異常者だと決まったら、針の席に坐る心地を犇々と感じずにはいない。後悔に似た気持すらして来るのだ。夫を救おうとしたことが馬鹿げた無駄骨折に思われる。直子が自分を気遣い女に仕立てなくても、母が息子を信じない筈はない。だとすれば直子はタダで自分を悪者にしてしまったことになる。無意味な愚行だったのだ。

——いけない。そう考えちゃいけないのだ。私は夫を疑われたくないから、死ぬ気になってお母様を欺いたのだ。私のした事が、たとえ無駄であっても、とにかく夫の疑いが晴らされればいいのだ。それでいいではないか。迷うことはない。私は黙って屈辱に耐えればいいのだ。市河の家の人々に気の済むように軽蔑されるのだ。私はそれで満足できる筈だ。夫のために生きた屍になるのだもの——。

出勤のために朝の仕度をして貰おうと謙が廊下から声をかけた。直子はそれを妙な錯覚の裡に、ぼんやり聞いていた。直子の早起は母から聞いていたし、親しみ易い性格だったから、謙は何の躊躇もなく寝室へ入って来た。直子は無表情な眼で迎えた。

——あら、謙さんだったのね。——
 そう思っ、それから、はっと氣附いて慌てた。
 ——いけないっ！出て行っ！——
 だが声を立てはしなかった。



——見られる！いやよ、見ちゃ——
 夜具に潜ろうとして却って露わになった。謙は見ってしまった。華麗な嫂の装いを痛々しそうに見つけて、解き去ってしまった。問われる儘に直子は自分が暴れて物を毀す発作に見舞われたと説明し、

恥ずかしいから誰にも云わないでね、と小さく付け加えた。

出張から帰った誉志雄を芙美子が喫茶店へ呼び出した。

「ね、兄貴。お姉さんて時々、暴れ出して手がつけられなくなる病氣があるんだって？」

「ほう。誰が云った。」

「此の間の出張の時にね、お姉さんたら病氣が起ってお母さんに縛ってくれて云ったんだって。いつもは兄貴がしてるからって、随分きつく縛られたんだそうよ。」

誉志雄には、出張後、直子に対する母の他人行儀の原因が、やっと擱めたような氣がした。

——お袋は直子を輕蔑してたんだ。物の分ったお袋だから嫁いびりなんかできやしないものな。然し、直子も馬鹿な奴だ。そんなにまでして俺

を救けなくなつていいのに。第一、直子が気違いだつてことになれば、俺がどんなに苦しいか分りそうなものだ。――

目先だけの思慮しかないような直子の細工が、誉志雄には却つて腹立たしかった。

――畜生！今夜はあいつ、グウの音も出ないまでに締め上げてやらなけりや。――

芙美子は、そんな兄の心の動きを見取ろうとするかのように、眸の中をじっと見詰めていた。

「お姉さま、今日はまだ起らないの？」

「まだ？何が？」

「病氣よ。お姉さまが無性に暴れ出したくなるっていうの。」

穏やかな午前家の家中には留守居の直子と機会を狙つて訪れた芙美子の二人だけである。直子はさりげなく応えた。

「いやよ、そんなこと。そうちよいちよい起りはしないのよ。」

「ちえっ、つまんないの。」

「あらどうして？」

「二人っきりの時、病氣が起つたらいいのに。私ね、お姉さまを思いつきふん縛つてみたいんだもの。」

何を答えたものか直子は迷っていた。

「お願い。一度でいいから、私に縛らせて。どんな気持がするか、ね、お姉さま、一生のお願い。この通り、いいでしょ？」

困ったとは思つたが、むげに拒絶もできず、直子は自分のふとした思いつきの意外な反響に苦笑を抑えながら、しおらしく云つた。

「あんまり痛いことしちやいやよ。」

だが勇み立つた芙美子は、嫂をギリギリと縛り上げた。手首が擦れて千切れそうに痛み、直子は素直に悲鳴を上げて痛がつていた。

「痛い、もっと緩くして。」

「いいこと？お姉さまは美しくて心の優しい嫂。私は嫂を嫉んでゐる不器量で底意地の悪い小姑。これからうんと苛めてやるんだから覚悟しな。」

「ね、痛いから緩めてよ。」

「へえ、お前さんに痛いなんてことが分るのかい？生意氣な顔してるよ。」

「ふざけないで、ね、ほどいて！」

「ふざけないで？誰がふざけてるんだい。お前はね、市河の家の名誉を傷つけた氣違い女なんだよ。お前の罪の償いをさせてやろうと云うのに厭だとても云うのかよ。それこそふざけるなつて云うんだ。」

「許して！芙美子さん、許して。」

「それとも妾のすることじやもの足りないつて云うんなら、ムチにやつて貰つてもいいんだけど、どうお？」

鼠を弄ぶ猫のような残忍さが芙美子の周囲に立ち籠めているようだった。

不明瞭な言語を許しておいて、芙美子はその耳触りを独り愉しんでいた。云いようもない屈辱の言葉を、十数回も繰返させて飽きなかった。少しでも云い淀むと、男には加えられない責め手が待っていて、少しの休みもない針になつてチクリチクリと胸を刺した。

疲れると芙美子は休憩するが、その間も直子を赦しはしなかった。縛しめは女性特有の緻密さで、ぎっちりと締まって緩まなかつた。

た。直子の両眼からは止めどない涙が流れていた。肉体と精神の苦痛に因るものであり、直子は恐怖を覚えていた。自分の浅墓な思いつきに甲斐の無い後悔が起つてすぐに消えた。

昼食は抜きだった。ひくひくと泣き入る直子の眼の前で、美美子は美味しそうに食事をした。激しい運動で覚えた空腹に食は進み、その腹ごなしにはまた烈しい運動が必要であった。軟らかい直子の躰の中でも柔らかい部分ばかり狙いながら、力を籠めて抓った美美子の指先はズキズキして熱っぽい程だった。擦ることが、まどろこしくなると、拳や平手でやけに叩いた。直子の上に腰をおろして、どしんどしん反動をつけて暴れたり、馬乗りに跨って脚で挟みつけたりした。

夕方になって縄を解かれた時、直子は立上ることはおろか、声を出す気力すら無かった。美美子は何か訝しげな面持でそれを見ていた。そして、ぐったり伸びてしまった直子の手を取って、否応なしに誓約書へ拇印を取ってしまった。

誓 約 書

私は市河家の名譽を汚す呪われた女です。罪の償いに私は一生涯、市河家の奴隷としてお仕えさせていただきます。そして美美子様の為には何事をも厭いません。お好きな時にお好きなことを御命令下されば、どのようなお云付にも飲んで従わせて頂くことをお誓い申し上げます。

直 子

市河美美子様

名前の下に無抵抗で取られた拇印が捺されていた。

正座している処を押倒されたのか、直子は脚を折曲げたまま、仰向けになっていた。腿は今にもはち切れそうにピリピリと緊張している。後手の腕が下に在って一層盛上っている胸の上に、美美子の重味がどっしりと跨っていた。口からの呼吸を奪っておいて、鼻をつまむ。ゆっくりと数を算えて放してやると、小鼻がヒューヒューと鳴って慌しく収縮する。面白そうに繰返しながら、美美子は歌うように耳許で云う。

「お前、いつまで兄貴の奥さんでいるつもり？分相応な考えにならないの？別れなよ。妾達が云うと角が立つからさ、お前から頼んで離婚して貰うんだよ。兄貴にはいい処から奥さんを貰って、改めてお前を家の奴隷にしてコキ使ってやるよ。いいだろ？」

苦しい呼吸を十秒、二十秒と停められると、ぐっと充血して白い顔が赫くなる。眼をあけていながら何処を見ているのか分らない眼付だったし、恐らくは美美子の言葉も耳には入らない様子であった。強い指先をはずそうと必死に顔を振立てて逃れる足掻きを繰返す徒勞を示していた。

「どうだ。別れるか！——苦しいだろ？苦しかったら、うんと云いな。声は出なくなつて首くらい振れるだろ？さ、早くうんと云いな。いつまでも強情張つてると、それだけ痛い想いをするんだよ。バカ！横に振るんじゃない。こうやって鼻をつまんでいるだけで、妾の指先がお前の命をとることだってできるんだから。」

美美子の馬鹿げた云草になど、拒絶する必要すらあるものかとは思つた直子だが、必要な酸素を断たれた肉体がまず屈伏してしまつた。直子の歪んだ表情が縦に動くのに、美美子は三十まで数える必

要さえ無かった。

「別れて下さらない？」

「……？」

「あなた、私を離婚して下さいませんか？」

直子は誉志雄と二人きりの機会に恐る恐る切り出してみた。本心でない、あのような拷問によって強制された芙美子の命令に従う気ではなかった。然し、命が惜しい、呼吸が苦しい、助かりたい一心の行為でも、「別れるか？」と問われて領いてしまったことは、心にひっかかって無視できなかった。そして、それ以上に直子の心は、誉志雄の心を識りたがっていた。自分が愚かにも一身を犠牲にしたことに意義を認める保障が欲しかったのだ。

「別れろって理由は？」

——理由なんてないわ、捨てないって云って欲しいのよ。意地悪！——

「私は貴方に相応しくない妻でしょう？何にもできやしないし、市河のお家の厄介者ですもの。皆さんに悪いわ。それに第一、私が妻でいるなんて貴方にも御迷惑でしょう？」

「それはお前の本心じやなさそうだな。」

——そうよ。そうよ、勿論。私はただ貴方から……——

直子は、誉志雄の愛の言葉だけを待ち侘びていたのだ。それによって心ならずも責苦に屈した重い気持が晴れるのだ。できるなら、離婚というような不愉快な言葉を口にした罰に、力一杯、頬に平手打ちを喰わせる位のことをして貰いたかったのに、誉志雄は、それきり黙りこんでしまった。

——冷い人。私、つまらないわ。——

誉志雄は、こう考えていた。

直子が別れたいと云うのは一面の真実かも知れない。勿論、絶対の要求というのではなく、現在の苦悩に比較相對のものとして、「出て行け！」と云われる方がまだと云う意味に於てである。問題は、何故、直子がそんなことを持出す気になったかであり、それを以て直子の本心ではなさそうだと云ったのだ。母の人柄はよく分っているつもりだが、決して出て行けがしに直子を扱うような人ではない。が何も知らぬ母は少くとも直子を軽蔑しているだろう。あの何ということはないよそよしさはその表われではないか。敏感で思い遣りの深い直子が、あの一件以来、殊に感受性が強まっているとしても自然だし、そのような心には、非難めいたことを何もせず、従来通りに接しようとする母の努力が、却って大きな重圧であることは充分過ぎる程納得できる。馬鹿げた気兼ねだと云っても直子には無理な話だ。

誉志雄は直子を愛している。誉志雄には直子が必要であり、不可欠であった。誉志雄には直子を離れての人生を考えるなど無意味になっている。既に誉志雄の意思は決まっていた。たとえ母と別れて暮すことになっても、直子は、しっかり捕えて放すまいと思っていたのだ。

唯、その意思を即座に表明したのでは、直子への愛情の元帳を見られてしまうし、それに、できれば家内の者の直子への風当りを少しでも柔らげてやることと、直子にいい加減心配させてみたかったこと、できるだけ恩を売っておこうとしたこと等があって、直子を

喜ばすことを延ばして没面を作っていた。

誉志雄はまず謙を呼んで離婚の可否についての意見を求めた。

「結局は兄貴次第だろ？俺は自分の女房じゃないから深刻に考えられないのかも知れないけど、兄貴が姉さんを放したくない程好きなら、お袋に気兼ねなんか要らないよ。姉さんだって兄貴が好きで好きでしようがないんだろ？年上だなんて云ったって、そんなことは初めから承知じゃないか。何も一遍に年を取って兄貴を追い越した訳じゃないんだからな。ま、俺は好きだよ、姉さんが……」

直子は押入の中へ抛り込まれ、一部始終を聴かされていた。頬が熱くなって来た。

誉志雄は次に美美子を呼んで聴いた。押入の中で、直子が折曲げられた軀を顫わせているのを知ってか知らずにか、美美子は陽気に云った。

「あら、お姉さんは何処？お出掛け？」

誉志雄の視線が慌ててチラと押入に走ったのを、美美子は決して見逃さずにいた。

「お姉さんを追出すって？馬鹿ねえ、できもしない癖に。うふふふ……、妾知ってるのよ。兄貴が何故お姉さんを好きか。何故あんなにまで結婚したかったか。」

「力ずくの様にして迄望んだ俺だし、それに直子の人柄が好きだったからさ。」

「償い？結婚してから力ずくじゃないって云うの？兄貴にはお姉さんが必要だったのよ。だから初めっから力ずくだなんて無かったんじゃないの。」

直子は縛り上げられた身を固くして、誉志雄に最初の求婚の囁き

を受けた時のことをまざまざと思い起こしていた。あの時も縛られた軀に抵抗は許されなかった。だが形式は強制であっても、内実は果して強制と云えたらうか。

「駄目々々、そんな恐い顔したって、みんな分ってるんだから。妾はね、因果と兄貴と全く同じ血が流れてるのよ。だから兄貴の考えることなんか手に取るように分っちゃう。お姉さんは素敵よ。健康だし、辛抱強いし、凄く素直で随分、年上でもまるで可愛らしくって、妾でもオダリスクに欲しいわ。」

——オダリスク？なあに、それ？——

「いい？絶対に別れちゃ駄目よ。お姉さんに逃げられたら兄貴の人生は暗黒よ。向うがどうしても出て行ってくていったら、表へも出さないようにして土蔵の中へ鎖で繋いでもいい。離婚なんてこと考えるだけでも軽蔑したい位だわ。」

聴いている直子には美美子の真意が分らなくなってしまった。

三人目に誉志雄は母親に来て貰った。美栄は、問いを受けるや、きつとなって云った。

「人の道に背いてはいけませんよ。直子さんは貴男を想えばこそ私に病気があるなんてことを云ってるのですよ。云ってみれば貴男にとっては恩人、市河の家にはかけ替えのない人じゃありませんか。私にとっても優しく仕えてくれる本当に良い嫁なのに、それを追出すなんてもってのほかですよ。」

誉志雄は気の無い返事をしていたが、内心嬉しくもあり、また迷ってもいた。美栄は直子を敬愛こそすれ、決して軽蔑などしてはいない。謙はあの一件をさして重要視してはいない。とすれば残りは美



美子だ。独断で芝居をしてしまった直子だが、まさか夫の誉志雄を欺くような演技をするなどは考えられない。芙美子は「兄貴と全く同じ血が云々」と云った。するとサディズムの血に悶々としていた妹が、あの一件を良い口実に姉を弄んだのかも知れぬ。何も知らぬ純情な直子が酷い目に遭わされて、それを市河家の総意と思い誤ったのかも知れないと誉志雄は思いついた。

再び呼ばれた芙美子は、カマをかけるでもなく詰問するでもないうちに、あっさりと自分の犯行を認めてしまった。

「確かにお姉さんをオダリスクに拝借したわ。だって妾、お姉さんが好きなんだもの。でもね、妾は女だからその点は安心していいわよ。」

誉志雄は気拔けがしたし、押入の中の直子は呆れて怒る気にもならなかった。

「兄貴は妾に罰を加えたいんだろうけど、妾は苛められる方は全然お弱いよ。素直に喋ったんだからこの辺で勘弁してね。苛めたかったら妾の代りにお姉さんを苛めた方が面白いでしょ？妾、推薦しとくわ。妾だと思ってどうぞ御遠慮なく。待ちくたびれてるわよ、きっと。早く押入から出してお上げ遊ばせ」

引止める間も与えず、芙美子はいたずらっぽく笑うと、さっと風を残して逃げ出してしまった。

直子の浅慮が招いた混乱も、結局は家庭の平和を増すのに役立っただけであった。美栄も従来通り、否、それ以上に温

かく直子を包容してくれたし、それにも増して、芙美子が直子に示す親愛の情は最大の収穫だった。芙美子は都合をつけては兄の留守宅を襲って来る。母も兄も苦笑しているが、何しろ当の直子が却って歓迎する風さえ示している以上、芙美子を叱ることはできなかった。

芙美子は自ら名乗る通り、サディスティンであるのだろう。唯、血を見るのは嫌いであつたから、酷く肉体を傷つける恐れはなかった。そして極めて冷徹に責めのツボを衝くこつを心得ていた。常に裸身を強いることは避けていたし、衣類を許しておくことの効果を充分に計算に入れていた。時には風変りな衣装を強制して裸形以上の辱しめを与える工夫も愉しんでいた。

直子が承認した関係であつたから、虐待の口実は適宜選択すればよく、直子が市河の家に有害な存在だというような理由は、自らを貶しめるように忌避されてしまっていた。直子は市河の家に無くてはならない人であり、まさった資質を備えた女性であることを前提として、それ故に受難を味わう口実が作られた。

芙美子が採る方法は主たる比重を心理的加虐の要素に置いていた。芙美子は姉を「ナオ!」と呼び、直子は妹を「お嬢さま」と呼んでいた。

直子は終日、まめまめしく立働かねばならない。「お嬢さま」は直子を、じつとしておくことが好きでなかった。「旦那さま」は自己流の愛情表現を押付ける。その間にはいろいろ家事の雑用も一人で片付けねばならなかったから、直子がもし人一倍の健康体でなかったなら、早晚倒れてしまうかも知れない。有難いことに直子は丈夫であつたし、そしてまた健康には細心の注意を払っていた。だ

が、直子の躰を案じる点では芙美子も劣らない。注意深く疲労度を見究めていて休養を許したし、運動は全身に施した。概ねテレビの美容体操が利用され、直子の四肢五体は、きびきびした屈伸や捻転を展開していた。体の一部だけを責めつける方法とか、全身を痛めつけるにしても苛酷な拷問の如きものは用いられない。縄には当りの柔らかいものが選ばれ、細くて硬いものはなるべく避けていた。勿論、大体が緊縛だが、細く強いものでは肉に噛み込ませると不測の事態も起りうるし、時間が長期に亘ると腕が捻曲げられたまま凝り固まってしまうたり、昂じて神経麻痺を来したりするので感心しない。

学校の研究旅行で長崎へ出張した芙美子から直子へ宛てた次のような手紙が来た。

『愛しいナオ。私は昨夜、貴女の夢を見ました。私がナオにお菓子を食べさせてやる夢です。貴女は女性に珍らしく甘い物をあまり好かないでしょ?だから私が「お食べ!」と云つても躊躇してしまいました。「ナオ!」と叱ったら一口だけ食べてすぐやめてしまいました。私は怒って貴女を後手に縛り上げ、鼻をつまんで無理矢理あけさせた口の中へお菓子を、ぎゅうぎゅう詰め込みました。貴女は眼を白黒させ、幾度も戻しそうにながら涙を浮かべて夢中で呑み下していました。すぐに胃の辺りが膨らんでゲップが出ました。何だか甘い匂いがして、私は面白くなったので、苦しがるナオを抑えつけて幾度も幾度もお菓子を食べさせました。もうどうしても入らなくなり、戻しかけて口まで出て来そうになると、私は、そんな汚いのなんか見たくないから「早くトイレへ行きなさいよ」と云つて背を向けてしまいました。貴女は、よろよろと立上って、それから掌

で口を抑えて、背中を頼りながら小走りに出て行きました。いい気味。でも汚い夢だとは思いますが。

貴女は甘いものが嫌いだからお菓子の責はグッド・アイディアだと思います。長崎にはカステラ始めヨーロッパ風の名菓がいろいろありますし、東洋風のものや和洋折衷のものも多いので、名物のおいしいお菓子を貴女だけに食べさせるため沢山買って帰りたいと思います。

身を大事にして、元気で待っていて下さい。

芙美子

私のナオへ

直子はこれ以上、真実を隠し立てできないものを芙美子に感じている。

「貴女は兄貴と知合う前からマゾだったのね」

「マゾ？何のこと？」

「マゾヒスト。苛められて飲む人のことよ」

異常心理については興味を持っているだけに芙美子が直子の先輩であった。そして直子の被虐性を、蒼志雄との結婚によって創造されたものとしては、不自然に急激なものと感じ取っていた。特殊な専門語を知らなくて聞き返した直子も、身に覚えのある感覚を衝かれては平静でいられる道理もない。

知っている限りのことを芙美子は教えてくれた。芙美子の話を聴くことは楽しみだった。芙美子は自分と兄の生長過程を事例としてサビズムを説明し、マゾヒズムに就いて識りたがった。芙美子が示してくれる信頼に感激して思い切った話してみようとしたこともある。女性の通弊である噂の種の知りたがりではなく、誠実な情愛が

あるだけに心苦しくて、いっそ喋ってしまおうとしたが、いざとなるとやはり気恥ずかしくて駄目だった。考え抜いた末、直子は芙美子宛に手紙を書いて直接、手渡して読んで貰うことにした。

『……あの晩、後手の厳しい縛りしめで抵抗を奪われていた私は、突然その場に押倒され、旦那様の暴力に悲鳴を上げていました。私は確かに形の上では襲われたのです。少くとも旦那様は、そのことに責任を感じていらっしやうでした。私もびくりして、わけもなく泣けて来ました。……私に関する限り偶然の出来事ではありませんでした。私の心の片隅では、いつかそんな事が起れば良い、凄くサディスティックな方法で苛められてみたいというような欲望が確かにありました。でもそれは、ほんの浮気心ではありません。もっと着実な、というより狡猾な考えだったのです。旦那様に暴力で引寄せられる。旦那様が結婚を持出さずにはいられないように振舞う。そして旦那様を私のものにする。そしてこの考えは一応、計画通りに進みました。……私には旦那様が必要だったのです。何故なら、私はマゾヒストだったからです。……そんなことがあってから私は不安でした。旦那様から結婚の話があった時、私は一瞬うまく行ったと思いました。でも、じきに物凄く淋しくなりました。結婚というようような人生の大事を策略で決めるようになってしまったことが無性に寂しかったのです。私がマゾヒストで、それ故に旦那様が必要なのだというのを全部話してしまえたら気持ちも楽になったでしょう。でも、それで旦那様のお側に居られなくなってしまうと、とても怖ろしくて打明けられませんでした。……旦那様には内緒にしておいて下さい。旦那様を傷つけないのは私です。私が旦那様をひっかけた悪い女であることが知れて一番傷つくのは旦那様

那樣ですから。ただ私の罪は罪として償わねばと覚悟を決めています。私の躰で許されることなら、どのようなことをなさっても結構です。飲んでお受け致します。ただこの事は貴女と私と二人だけの秘密であることを呉々もお守り下さい。……貴女の奴隷であり、貴女のお兄様を欺いた憎い女に御遠慮なさることは無いわ。新しい奇抜なアイデアを、どんどん実験なさって下さい。関節が外れたら、気絶したりする位は心配なさらないで結構です。でも、そんな時は一応、旦那様のお許しを受けてからにして下さい。私の躰や健康は私一人のものではないので、私の自由に行かないからです。御免なさいね、こんなこと云って。……』

直子は誉志雄の手でマゾヒストに育て上げられたものとなつてゐる。美栄も、そして誉志雄さえそう信じてゐるし、直子もそのように振舞つてゐた。

唯一人、真相を知らされた美美子は、この頃、頻りに「人生は複雑怪奇なり」などと利いたような言葉を口癖にし始めた。その言葉通り、欺されてゐるのは本当は美美子なのかも知れない。

直子が誉志雄との人生で新しいマゾヒストに生まれ変わつてゐることを、当の直子さえ気づかず欺されてゐるのかも知れないのだ。

そうになると、誰にも欺されていないのは、直子を兄貴に似合いの優しい嫂だと信じてゐる謙だけなのかも知れない。

そろそろ真剣に結婚を考え初めた謙と美美子を抱えて、市河の家は今日も平和で多忙で、ほのぼのとした雰囲気包まれているのである。

傑作縛りフオト新作発表

大手札印画紙焼付各組三枚一組二五〇円

聖壇の裸女

略号(けい)

全身をぐるぐる巻きに縛られた裸の美女が聖なる灯に両手を吊り上げられて、瀆罪に身もだえする麗しくも美しき裸身の乱舞目も彩な縛り地獄。(モデル絹川文代)

カーテンのかけ

略号(け)

花模様のカートンのかけに見える豊富な色白き肌の緊縛ポーズ。肉づきよき太腿を八の字に押しひらげて椅子に坐らされたうら恥しき羞花一輪。(モデル大塚啓子)

艶姿色模様

略号(けは)

艶麗花をあざむく全裸の姿態にきびしくも痛ましく、ひしひしと喰い込む縄目、のけぞって、うつふとして、転々反展の苦痛に堪えかねた表情美。(モデル絹川文代)

浴場の欲情

略号(けに)

豪華なタイル張の浴槽に沈められた緊縛美人のポーズ。紐は胸から後手、太股から膝にまで掛つて湯に濡れていや憎しに肌に締めつけてくる。(モデル大塚啓子)

いけにえ

略号(けは)

美しき裸身のすべてをさらけ出して憐れないけにえは、悪魔の前に無抵抗のその姿を捧げる。悪魔はその柔かき肌を肉を心のままにむさぼり喰らう。(モデル絹川文代)

のぞき見

略号(けへ)

がらりと開けた襖の向うに展開されてゐる光景は、ああ、また何というセクシヤルなシーンだろう。両足を蹴り乱し猿ぐつわの下に呻めく美女一人。(モデル絹川文代)

開股三番勝負

1 略号

(けと) 真昼静かなビルに於ける洋間の一室。両手を背後に括られ、或は頭上に括られたうら若き女性が嫌が応でも、無理に構えさせられた鮮鋭なるレンズの前。(モデル大塚啓子)

開股三番勝負

2 略号

(けち) 煉瓦造りの暖炉の前に引き据えられたお合羽の乙女。咽喉には首縄、口には猿ぐつわ、胸に回わされた黒紐の縛しめ、苦痛と羞恥にあえぐ新人モデル。(モデル田原美佐子)

開股三番勝負

3 略号

(けり) あのポリウムのある豊胸をふるわせて縄の悦虐に泣く三態各様の背景場面雰囲気を変えての強烈な開股しばかり。もう身動きはまかりならぬ絶対絶命のピンチ。(モデル愛川悦子)

開股三番勝負

4 略号

(けぬ) 首から胸、胸から二の腕、胴、太腿へと。更に太腿をぐいと締め上げられては、流石の美女も思わず悲鳴を挙げて、かくは開股二番勝負と相成る。(モデル絹川文代)

表紙は特異なものとは思いますが、女子選手のホッケー、ラグビー、サッカー等の複合で雑然としていて、私には余り親めませんでした。それに反し、目次カットは例によって素晴らしく、一つのストリーをなしていますね。女流画家とモデル嬢の対照も面白く思います。

口絵写真では、絹川嬢の右ページのもの
と左ページ左上の一葉が特に優れていると思います。顔や躰全体の表情が清潔な感じでした。大塚嬢については、右ページのものが第一だということに異論はありません。口や鼻を覆われた時の眼の輝き、くびれた柔らかないボリユーム、逞しいヒップの張りは貴重な存在ですね。

記事について順を追って行くと「地獄の誘惑」が面白いものでした。ストーリーのテンポも快調で、愛川、絹川、両嬢の写真の活用も娛しく拝見しました。スナップ・シリーズで「弁天小僧」を採上げて頂きましたが、一〇一ページに青山京子が首を締

K・K

五月号の感想

められるアップがあったことは有難いと思いました。連縛の場面は暗いシーンのためか、余りハッキリしません。近藤美恵子も活躍のしようがない有様でした。むしろ女賊阿井三千子の捕縛でもあれば面白かったでしょうが、縄をかけられるところが無くて残念でした。羽村京子さんの文は珍しい事例を紹介して下さい、楽しい解説がついていて

愉しく拝見致しました。「王宮の浣腸室」は次回が楽しみです。蒼野礼氏のヒップ責めも独特の描写で本誌の一つのポイントになっています。一三八ページの挿絵も綺麗です。「魔教圏」が突然に終わりましたね。土路氏の御努力には敬服しております。読者によって好みも違うためか、賛否も半々でしたが、しかし乍ら現実を離れた楽しいシリーズであっ

近藤 一

たことは確かですから——。松井籟子さんの告白は最も惹かれた一篇でした。最近の余り本誌に作品を発表して頂けなかったのですが、今回の告白は強い共感を呼ぶもので、今後事情の許す限り作品の発表を続けて欲しいと思います。文章の潤いあるやわらか味や、内に秘めた烈しさは、やはり松井さんの独壇場だと思うのです。悦虐ということはその基調は愛情である筈で加虐、被虐の行為それ自体が、独立に渴望されることには私はついて行けません。愛するが故に責め、愛するが故に責められることこそ私が望むもので、畜化小説と共に、或いは拷問等の作品と共に、本誌に不可欠の一分野だろうと思うのです。私の「緊縛フォト・アラベスクの感想」「私のイメージ」「通信」と誌面を頂いたことを感謝致します。以前、私あてに通信欄で呼びかけを下された奥田氏への応答文が掲載されずにいることは残念ですが編集方針に依るものでしょうか。

☆

(告白)

或

る

女

の

カ

ル

テ

藤山秀緒

小雨けぶるS町の駅前通りを、一人の若い女が歩いて行きます。郊外の文化街として有名な此の界限にも、小雨の中を傘もささず、男仕立のササール・コートのフードを立て、

乗馬靴の音をひびかせて歩いて行く彼女の姿は一寸異様です。その魔法使いのように、まぶかにかぶったフードの中には、ぐッときつめにひいた眉、きりりとむすんだ唇が男装マ

ニアらしい倒錯的なかげりをみせています。

物思いに沈んだように、コートのポケットに手をつこんで彼女は歩き続けるのです。

街路を濡らして音もなく降りつづく小ぬか

雨。そここの生垣には名もしれぬ草花が、

ひっそりと夕闇の中に咲きつづけています。

ベージュのササール・コートの肩が、しつ

とりと雨水を吸って、重く冷たく彼女に、の

しかかって来る。フードも、いつか雫を含ん

で頬に冷たく流れ込んで行く。

彼女は、ただ、長靴の音をひびかせて歩き

つづけるのです。

彼女は、その男仕立のトレンチ・コートの

下に、きつと凜々しい乗馬服と、厚地の乗馬

ズボンを着けていることでしょう。

雨水に濡れて、蔽いかぶさるように、まぶ

かにかぶったフード。重い長靴。脚をしめつ

ける乗馬ズボンの緊縛感。彼女は、男装のな

やましさにおののきながら、いつまでも歩き

つづけるのです。

そして、トレンチ・コートのポケットへつ

つこんだ両手が、誰が見るでもない、ただ自

ら悩み、励まし、いとほしむ乗馬ズボンの桎

梏に堪えようと悶えつづける——その男装の

女……藤山秀緒。

秀緒は、のめりかけては氣をとり直して歩
きつづけました。次第に息も乱れ、何度も立
ち止って前のめりに齒をくいしばりました。

今日からまた一カ月——菊枝と別れて暮さ
なければならぬのだ。お前は今、菊枝を羽
田へ送って来たばかりではないか。

そんな事で、あと一カ月の間、一体どうし
ようというのだ。

私の心が私の体に云いきかせている。でも
ササール・スタイルのトレンチ・コートに身
を固め、乗馬ズボンに乗馬靴を穿いた完全武
装の男装をした此の倒錯者は、灼熱の瞬間を
求めてやまぬのです。

秀緒は仕方なく、道を家路へ辿りました。

S 駅からあまり遠くない自分の仮住居へ小走
りに戻って行くのでした。

鍵をあけて、室内へ入った私は、等身大の
姿見に駆け寄っていました。

その姿見には、昔の若衆の顔を思わせるよ
うな、きつい眉、きりりと引いた口紅に、心
持ちやつれた頬を、ごわごわとしたトレンチ
・コートのフードが包み、きゅっと絞ったウ
エストから、コートの裾へかけての、しっと
りと水気を吸ったベージュの生地肌のざわり
さえ悩ましく、こわばった完全武装のスタイ

ルが余すところなく写し出されているのでし
た。

私は、いつまでも憑かれたように見入って
いました。私は、うっとり自分のレインコ
ート姿に見入っているうち、矢も楯もたまら
なくなってしまうたのです。

私は長靴を脱いで、それから私だけのプレ
イの準備にかかります。

先ず白禪を締め、その上から肌着をつけま
す。次はナイロンのシャツ・ブラウス、そし
て厚地ゴム引きの乗馬ズボンを穿き、同じ
く、これもゴム引きのカー・コートを着てベ
ルトを引きしめ、プレイ専用の乗馬靴をはく
のです。

このカー・コートには、フードがついてい
て、すっぽりかぶると、旧号にあった飯田靖
子さんの告白と、そっくりのゴムスタイルに
なるのです。これは、プレイが進むにつれて
内部が次第に汗ばみ、その灼熱の苦悶を、も
っともっと激しいものにしてくれる服装なの
です。

私は、その異様なスタイルを姿見に写して
心の準備をととのえ、ふるえる手にK誌を取
ってページをめくるのです。

今日のレスン。——それは今、取上げた号

の私の記事なのです。

——卅三年五月号。……「夕陽に散る華」
でした。

私は立上って、テープレコーダーをひらき
ます。青黒いテープの色さえ、私にとっては
汗の結晶のように思える。

スイッチを入れます。流れて来るのは、菊
枝がここへ来た日、二人でレコーディングし
た「夕陽に散る華」の朗読でした。

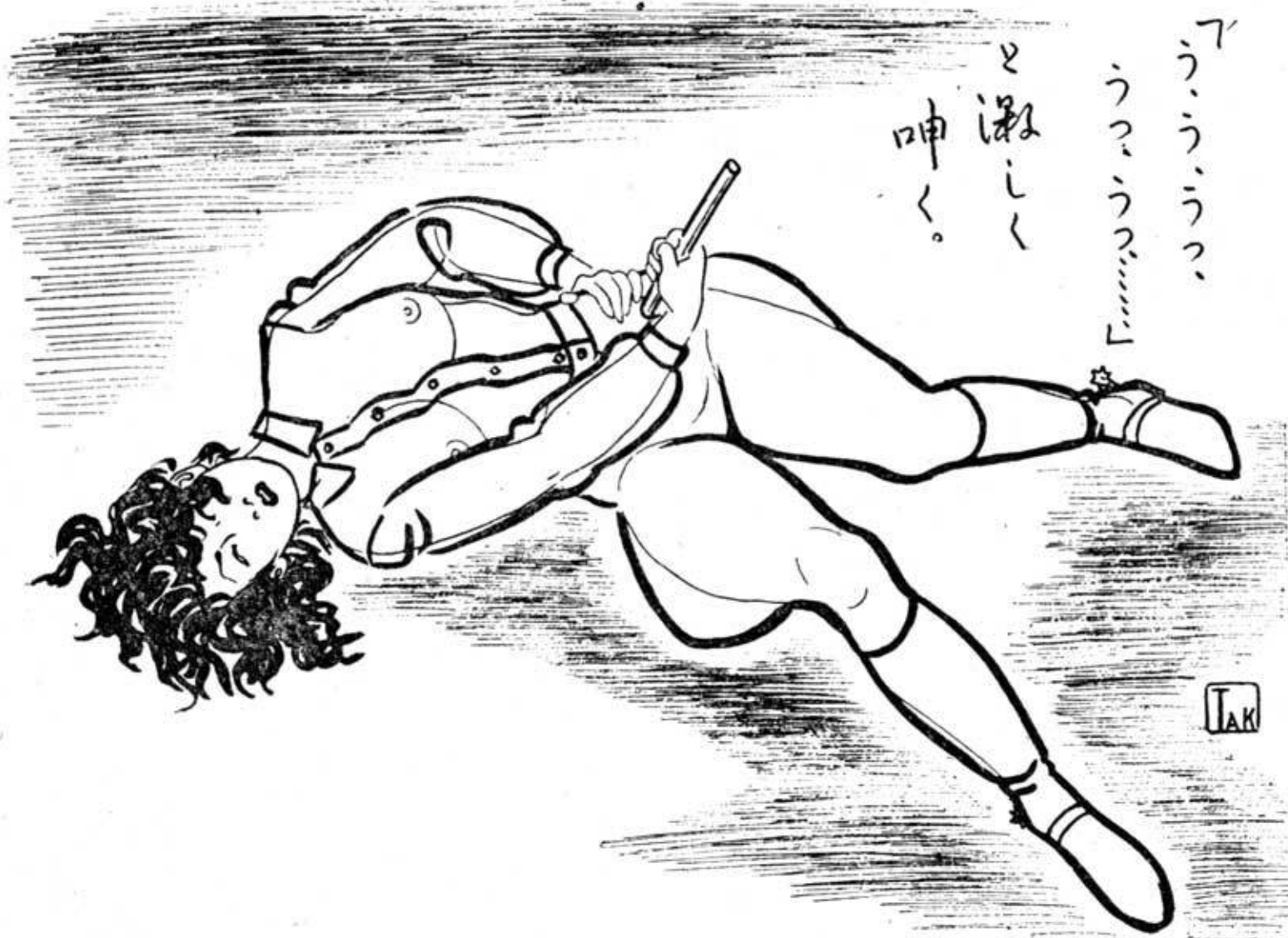
最初の巻は私が美千代。菊枝が相馬少尉と
参謀長。それに語り手。次の巻は、その反対
の配役なのです。

私は、テープをききながら小さな声で一緒
にセリフを云い、時には床にのめって仕草を
してみました。

菊枝の声は、どうしても男声にはならない
で、どう押殺しても高い調子になって行くの
です。そして、その割れそうになる声が妖し
いまでに私の心を、ゆすってやまぬのです。

テープは進んで、胃洗滌のシーンに入りま
した。私は、レコーディングの時と同じよう
に、コップの水を呑んで、息苦しい迄にベル
トをしぼりました。

次第に体は汗ばんで来ますが、ゴム引きの
カー・コートと乗馬ズボンにさえぎられて肌



の上を、ぬめぬめと
流れ始めています。

鞭打ちは、一人で
は出来ないの、縄

で縛るようにし、手

早く全身に縄をかけ
て、末端から緊めつ

けて行きました。ぐ

っと、自分で緊めて

は、姿見の中の美千

代を見つめてテープ

に聞き入るのです。

菊枝が赫ら顔をそ

むけながら、打ちつ

づける鞭の音が、ピ

シリッ、ピシリッ、

と切なくテープ・レ

コーダーから流れ、

私のかすかな呻き

が、それにつづくの

です。

私の頬、額、はえ

ぎわには脂汗が浮か

び、ゴム引きの乗馬

服で囚人、美千代の

演技は、いよいよ白熱してくるのです。

もう、ナイロンのシャツ・ブラウス、ゴム

引の乗馬ズボンの内側は、滝のように汗が流

れつつけています。

苦しいのです。……でも休えています。

ああ、私は古川裕子様の告白に打たれ、飯

田靖子様のそれに動かされ、そして乗杉貴代

子様の文章にも感激して来ました。でも、こ

の瞬間の私が、マゾヒスティンでなくて、な

んでしよう。……藤山秀緒のマゾヒスティン

としての苦悶の姿が、ここにありました。そ

して、これしきのこと、なんの、なんの……

と秀緒は必死になつてのぼり、つめるのを

抑えて居るのです。

やがてテープは、美千代の切腹へと進みま

す。マゾヒスティン秀緒は、ここで勇ましく

も九寸五分を手に取り上げ、白布を巻き、テ

ープの進行に合わせて、カー・コートの上か

ら腹へ突立てるのです。

刃先をまるめ、抉っても危くないように作

った此の短刀こそ、秀緒にとって何にもかえ

がたい宝物なのでした。

彼女はゴム衣に悩みながら、それでも、作

法通り、刃を左の脇腹へ突込みました。

「うっ……」テープ・レコーダーが切なく訴

え、きき入る秀緒も、かすかな呻きをあげて床の上に身を投げるのです。

菊枝の、うわずった朗読がつづきます。

あの小説を書いている時の秀緒は、立派なサジステインだった筈なのに。そうよ、あんなに美千代を苦しめたのは秀緒のペンだったのに。それをテープに移して聞き入る秀緒は、ゴムスタイルの汗に悩み、刃を挟る手先は自虐の一念に恐いまでの力がこもっている。

ああ、この矛盾こそ、秀緒が今まで誰にも理解していただけそうもないとあきらめていた自分の異常な姿そのものでしょうか。

そして、のぼりつめて行く息遣いが、テープのそれと、後になり先になり、床にのたうつ私は、えびのように体をかがめて、自分のゴムコートの肩や膝に口づけするあられもない姿態をくりかえしているのです。

襲いかかるおののき。秀緒は、振り切るように

「う、う、うっ、うっ、うっ……」

と激しく呻く。

「そして、美千代が臍を掴み出すあたりへ来ると、もう舌もこわばり、テープの呻きを打ち消すように、

「うっ、ううっ、ええっ、ウーム、ううっ……ううむッ、ああ……」

カー・コートの上から刃をえぐり、のたち、そして絶叫するのです。

そして、テープも遂に朗読は途切れ、がばがばと衣服の触れあう音、どさり、どさりと乗馬靴のもつれる音が入りまじり、二人の美千代がのたうつ「断末魔」の声に変わって行きます。

二人は、テープの中で一瞬、ぐっと息をつめ、そしてどちらからともなく、

「ああっ、ウ、ウーッ！」

と悲痛の叫び。そして何分かの間、朗読の声は全く絶え果ててしまうのでした。

ゴム服姿の今宵の秀緒も、刃を抜き取り、そして床の上に、あられもなくのたうつのです。

……どの位の時間がたったのでしょうか。

テープは空廻りしています。我に返った秀緒。

……恥しい。でも、いいの。きつと、これが告白として書く秀緒の最後の原稿になるかもしれない。

秀緒は恥しさに堪えて、ペンをすすめます。その夜の秀緒の物狂ほしさは、我にかえ

った恥しさも、またたくまに吹き飛ばして、ふるえる手先でテープを取りかえ、菊枝が美千代に扮してレコーディングした分を聞きはじめるのです。

秀緒は、それをききながらゴム服を脱ぎ棄て、いつものように火のズボンと呼ぶプレイ専用の乗馬ズボン、高倉みゆきの女スパイに刺戟されて新しく作った革ジャンパーという服装に着かえ、再び「夕陽に散る華」に挑戦するのでした。

その模様は、もう申しあげますまい。

でも、このような恥しい告白をつづけるのは、私のような異常な欲望に悩む者を、一体サジステインと呼んだらよいのか、それともマゾヒステインと云うべきなのでしょう。或いは、フェチステインとして考えたらいいのでしょうか。それが伺いたいからに他なりません。恥しいのですが、これは私の倒錯者としてのカルテです。こんな女が居ても、決して世の為にはならないでしょう。でも、このような異常な記録が、世に送り出されて、読者の方々の何かの御参考になるなら、秀緒は嬉しいと思うのです。

映画 通信 今月の縛られた女優達

黄金蜘蛛 (東映)

公金を掠奪する黄金蜘蛛党をさぐりに入った里見浩太郎と共に円山栄子と高島淳子が縛られる。牢の中で後手、胸に二巻三巻、どうもあまりきれいで迫力がない。(本誌六月号の口絵写真がこれである)

魔笛若衆 (大映)

新庄月千代(鶴見丈二)をおびき出すため、お妙(浦路洋子)がとらえられる胸になんとなく縄を二巻き、どうも気のぬけた様な縛り方である。倉へ引立てられて行く時、後手に縛られた手首がちらりと見える。

女と海賊 (大映)

冒頭、三田登喜子の環がむしろに包まれて

ぐるぐる巻きにされ船につりさげられる。後半京マチ子のお糸が海賊にとらえられ足かせで後手にくさりでつながれる。海賊の頭目、御崎庄五郎(野谷川一夫)のために一度解かれるが抵抗したため乾児の慰みものにされかける。この時は縄で縛られ口は手ぬぐいでいわれる。この時は縄で縛られ口は手ぬぐいでいわれる。他、縛りはないが三田登喜子が背を弓で打たれるシーンがある。

悪党カシム

アン・オウブレイが神への生にえにされるため火あぶりにされる。一本の柱に両手を頭上で吊られた形、煙にむせて苦しむところがあるが見るべき所はあまりない。

無警察 (新東宝)

終り近く小畑絹子のボスの情婦はるみが仲間を裏切ったため部屋に監禁される。胸までのドレスに後手、胸に縄、足はひざの所で縛られている。天知茂の新聞記者を助けようとガストロブで網を焼き切るため長椅子からストロブのところまでころがってゆく。縛られた手首をストロブで焼き切るまで、間にちよいちよい他のシーンが入るがかなり長く楽める。現代劇の縛りではまず優秀な方だろう

隠密変化 (新東宝)

若杉嘉津子の弓場の女お柳が島田竜三の柳生十兵衛をおびきよせるため、疾風道人の一味に誘拐される。一味のかくれ家で籠からひきずり出される。後手で胸に三巻き、口には猿ぐつわで凄艶な美しさを見せて呉れる。猿ぐつわはすぐ解かれ、後、刀で責められるシーンがあるが、残念ながら画面の外……縛られたまま牢に入れられ、火事になり外から子供が必死に縄を解く所がある。この若杉嘉津子の猿ぐつわで縛られた姿は、先の無警察の小畑絹子とともにぜひ誌上に載せてほしいものだ。又、さらわれる時に弓場の女が五、六人帯で縛られ猿ぐつわをされてもがく所が二カ所ばかりあるが特記するほどはない。

スーパージヤイアンツ毒蛾王国 (新東宝)

典型的なジャリ向映画。菱山博士の娘、星輝美が毒蛾団の一味につかまり後手に縛られる。但し胸に縄はかかっていず、全然縛られた感じがでない上に後手首が見えたのはわずかに一回、まあ子供向なら仕方があるまい。

(追) 新東宝の恐怖の罟の宣伝用ポスターやスチールに万里昌代が手首を縛られて吊られているシーンがありますが、私の聞いた所で

は羊頭狗肉、そんな場面は出てこないのと
とです。もしどなたか御覧になられましたら
お知らせ頂きたいと思います。

(以上、河崎晴夫・記)

◇ — ◇ — ◇

▽鬼女系図(大映) 中村玉緒

高家の名門鬼堂家の中に、あい続いて生ず
る怪奇殺人事件。大目付の捜査乗り出しに、
同家の養女琴江が身替り犯人を名乗り出て縄
を受ける。黒い刀の下緒で型的に胸を二巻
後手に縛られ引きたてられるが、ほんの一寸
ばかり後姿がみえた時に握り締めている拳の
型が気にいらなかった。

▽七人若衆大いに売り出す(松竹)

川口のお、浜村美智子

恋しい宇津村伊織を追っているうちに山賊
に捕われたお藤(川口)は首領が意に従わぬ
と牢に入れ、続いて色仕掛で山賊退治に乗り
出した鉄火肌のスリ女お蓮(浜村)も事発覚
で同じ災難。二人とも後手にグルグルと数巻
巻かれて岩牢の中へ。ともかく遠目ながら肌
にくい込むほどギッシリ縛られていた事は間
違いないが、縛り方は平凡。

(註)川口のおは、この作品後、川口京子と

改名している。

▽高丸菊丸(松竹) 市川春代

高丸、菊丸、兄弟の母の玉子が、悪人河野
朝光のために捕えられ、兄弟をおびき出す囹
に火焙りの刑にされる。十字の磔柱に手首、
足首を太縄でゆわえられた型的な縛りだっ
たが、縄がべらぼうに太かったのと、ネリ絹
のような柔味を感じたのが面白い。手も横に
張るでなく、斜め上へむしる吊りぎみに縛っ
ていたのもかわった試みだろう。

▽蜘蛛の巣屋敷(東映) 月笛好子

勝田藩の輝姫が土蜘蛛の精に扮した男の犠
牲になる。現場に合せた屋敷の腰元弥生が
一味達に捕わってしまう。生かしておいては
証拠となると一味達は弥生を一室の柱へ縛り
つけ、有毒な香をかかせて殺害する。グルグ
ルと後手に三巻ばかり縄尻を柱につながら、
白布で猿ぐつわされて座っている弥生の足も
とに、怪しげな香炉がおかれ、それに怖える
姿、苦悶、やがてバツタリとうつ伏せに倒れ
てしまう。

▽からくり雛人形(大映)

大和七海路、浜梅世津子

古風な雛の胎内に秘められた大身の旗本の

お墨付。それは約二十年前に世をはばかった
娘のためにこさえた後継の証であることを知
ったその旗本の弟が、知り合いの手踊師匠と
その妹を偽姫に仕立てて、お家横領を図る
が、殺したとばかり思っていた真の姫達が現
われ男どもは斬り死、女どもは捕えられる。
細引で後手縛りにされ連行されるシーンが現
われる。後姿である。

▽唄まつり千両旅(東映) 円山栄子

やくざの娘が、お定まりの横恋慕する喧嘩
仇の悪親方一味に不意打ちをかけられて、父
は殺害され、自らは誘拐される。黒布で猿ぐ
つわされた上に、後手縛りグルグル巻きにさ
れて連れ出される。

▽新吾十番勝負(東映) 長谷川裕見子

父を斬った松平頼方を討つために侵入した
商家の娘が、逆に頼方の当身のため気を失い
その間に犯される。その上に帯締めのような
もので後手に縛られ横たわっている。その姿
で気づいた娘へ頼方が己の非をわびるが、簡
単なこんなシーンも演技でみせてくれる。

(以上、大河原珠樹・記)

レーゼ

シナリオ

旗 本 退 屈 男

海 野 築 朗

― 仮想配役 ―

早乙女主水之介	市川右太衛門
妹 菊路	大川恵子
霧島京弥	里見浩太郎
江戸屋小夜	丘 さとみ
雲霧仁左衛門	月形竜之助
お柳	千原しのぶ
黒装束	藤田進
〃	月形哲之助
〃	沢田清
浪人者 A	吉田義男
〃 B	海江田譲二

○江戸の辻（春）

瓦版売 川田晴久
番頭 加賀邦男

威勢の良い声が響いて、往来の老幼男女がその声の方に足を向けていく。

人だかりの中に瓦版売りがいる。

瓦版 さあ！ 瓦版、瓦版。さあ、たった今刷り出しの瓦版だよ。今お江戸に名高い怪盗の雲霧仁左衛門が、またしても日本橋の呉服問屋に忍び入り、五千両の大金を奪って逃げたという、昨夜の事件ので

ん末は、この瓦版だよ。さあ、瓦版は十文。えー、この瓦版は、たったの十文だよ。

バラバラと四方から手が出る。

瓦版 へい、へい。どうも有……。

大家の娘といった姿の小夜が丁稚を連れて通りかかる。

瓦版 さあ、花のお江戸を荒す大泥棒、雲霧の仁左衛門の瓦版……。

と、売っているのを立止って見る。
人混みの中で、白髪の老人が、小夜に鋭い目を向ける。

○奥の部屋（夜）

絹行灯の横に綸子の夜具。小夜が寝ている——と、行灯の灯影がゆらめいて、すうつと襖が開いていく。

黒装束が入ってくる。その影が、大きく天井まで部屋一ぱいに揺らぐ。

小夜ふと、目を覚ます。

人の気配に一瞬、目が冴える小夜。

黒装束に気づいて

小夜 あッ！

と半身を起して、鹿の子の長襦袢の胸を掻き合せる。

小夜 ど、どなたです？

黒装束 教えて貰いたいことがあって、やってきた。お前の父、江戸屋八五郎の埋蔵した百万両のありか。

小夜 知、知りません。そんな……

黒装束 知らぬ筈はない。百万両のありかは小夜に聞けと、八五郎は遺言して死んでいったはず。

小夜 そ、それが、私は、知らないのです。

黒装束 かくすか！

小夜 本当です。本当に知らないのです。

恐怖に顔を、ひきつらせる小夜。

一瞬、黒装束の目に不審の色が流れたが、

すぐ消えて

黒装束 どうでも知らぬというなら、こっちで探すまでだ。おとなしくしろ。と、懷中より小布れと手拭をだす。

小夜 何をするのです？

黒装束、無言で小夜に近寄る。

小夜が逃げようと立上るのを、夜具に押し伏せ膝頭でこじつけると、叫ぼうとする小夜の口に小布れを押込む。

小夜 う、うう……

と、かぶりを振るが、その上から手拭が鼻孔まで塞いで顔に巻かれる。

扱帯が胸と手にからむ。

小夜は俯伏したまま夜具の上で必死に、あがく。

黒装束 畜生、余計な手間をとらせやがる。

と部屋中を探すが、ない。

黒装束 はて？

と、あがく小夜に目を止める。

しやがみこんで、小夜の体を押え、下じめをプツリと切り、伊達巻を荒々しく解く。

小夜 う！うッ！

海老のように、からだを折り曲げて転がるやがて、長襦袢が左右に割れる。

黒装束 ない。肌につけてないとすると……

黒装束の腕が、やにわに小夜の首に巻きつ

いて、小夜を引き起す。

黒装束 小夜。埋蔵金のありかは？何処だ！

小夜 ……！

目を閉じて顔を振る。

黒装束 まだかくすか。しめ殺すぞ。

小夜 う！う、うッ

黒装束 何処だ？いわぬか……よし、仕方がない。

と、首に巻いた手を一旦はなし小夜の身体を抱きかかえる。

○廊下

小夜を横抱きにして、黒装束くる。小夜の長襦袢の裾が割れて、廊下に引きずられていく。夜目にも白い小夜の脚。

雨戸が外れている所から、庭へ降りる。

○庭（月がある）

黒装束は塀に近寄ると、かけてある縄梯子を伝って板塀の上に立つ。

○塀の外

二人の黒装束が駕籠を一挺はさんで、見上げている。

黒装束 （下の者に）おい、荷物だ。受取ってくれ。

と、小夜を下へなげる。

長襦袢と湯文字が月光に、パツと広がる。

○夜 道

黒装束と、駕籠が矢のように走っている。

○駕籠の中

烈しい揺れに、苦悶している小夜。次第に

簪が、髪から抜ける。

○夜 道

霧島京弥くる。駕籠と、すれ違う。京弥不

審気に見送る。足許に落ちている簪を拾って

ハツとし、後を追う。

○夜 道（黒塀が続いている）

京弥、追ってきて、立止る。駕籠が消え失

せたからだ。

京弥 はて？

見ると、傍に白髪の易者がいる。

京弥 （近寄って）御老人。今、駕

籠を見なかったか？

易者 駕籠を？

京弥 うむ。黒衣の男が三人で、か

ついでいたのだが……。

易者 さあ、知らぬ。ワシは、ずー

と此処にいたが。

京弥 左様か……。では、

と、いこうとする。

易者 あ、お若い方。

京弥 私か。（と、立止る）

易者 そう。お前さんじゃ。教えた

いことがある。

京弥 ほう？何を。（と、引返す）

易者 されば……。

と、京弥の顔を、天眼鏡でユッタ

リと眺めて

易者 こりや、いかん。矢っ張り不

吉！

京弥 何？不吉！



易者 いかにも、まぎれもない兇相。兇相も兇相。ありありと剣難の死相が浮んでおる。

京弥 黙れ！若年と嘲り、愚弄いたすと容赦せぬぞ！

と、刀の柄に手をかける。

易者 (大笑して) 怒ったか。だが、残念ながら、ワシの占いに狂いはない。気の毒にお前さん、やがて死ぬぞ。

京弥 死なぬ。

易者 いや、死ぬ。

京弥 死なぬ！

易者 ほう、強情だな。では証拠を、お見せしよう。それ！

と、京弥の背後に合図をすると、忽ち現われた黒装束が数人、無言で切っかかる。

京弥 たわけ！死ぬのは、こいつだ！

と、一人切りなぐ。

易者 手ごわいぞ！

と、立廻りになる。

易者 小癪な、稚児の剣法。

と、懷中より短筒を出して京弥を狙う。

■突如！小石が飛んできて、易者の手に当る

易者 あっ！

と、短筒を落し

易者 な、何者だ！

と、屹と睨む。

深編笠の早乙女主水之介、悠然と現れる。

思わず黒装束、刀を引いて退がる。

主水之介 退屈払いに見物致しておったが、

一人を相手に飛道具とは卑怯！

と、静かに進んで京弥を庇う。

易者 何！聞いたようなセリフを吐くな。貴様は何者だ？

主水之介 月もでておる故、この顔を拝ましてつかわそうか。

と、笠をとる。

額に、クッキリと三日月傷。

易者 やや、その三日月傷は？……。

とまた、黒装束達退る。

主水之介 旗本退屈男と異名をとった早乙女

主水之介が、この若者に助勢いたす。く

どうはいわぬ。あっさりと引揚げたらど

うじや。

易者 (黒装束に) えい、臆するな。それ、

やって仕舞え！

黒装束、勇を鼓して、ジリジリと退屈男に

迫る。

主水之介 馬鹿者共奴が！江戸御免の篠崎流

正眼崩しを存せぬか。その菜切り庖丁を

おとなしく引いた方が、身のためじやぞ！

易者 ほざくな！それ、かかれ！

と、斬ってかかるが、退屈男は、素手で適

当にあしらってから

主水之介 まだこりずに参るか。さらば参る

ぞ。退屈男の篠崎流は、抜けば必ず斬る

ぞ。いいか！

と、刀を抜く。

主水之介 但し、逃げる者は追わぬ。逃げた

くば今の中に早う逃げい！

と、立廻りになるが、黒装束は忽ちのうち

に形勢不利となる。

易者 畜生！悪い奴にぶつかりやがった。

退け！退け！。退屈男、この礼は必ずす

るぞ！

主水之介 それは有難い。この早乙女主水之

介、本所長割下水にいる。いつでも参れ

その時は、たとと傷供養をして仕わそう

ぞ。

易者、黒装束を下知して、あたふたと去

る。その後を、じっと見送って、ふと見ると

京弥がいない。

主水之介 ほほう、若者迄消え失せたか。

と刀を納めて、すぐ笠を手にして静かに歩

き出す。

○庭ぞいの廊下

退屈男くる。

主水之介 菊、菊、兄が戻ったぞ。はて？一

人で月見でもいたしておるか。

庭から菊路が小走りにくる。

菊路 お帰り遊ばせ。

主水之介 何を致しておった？

菊路 はい、別に……。

主水之介 そうか。

と、座敷に入る。

入ってゴロリと大の字になる。

○座敷

菊路が、静かに入ってきて、羽織を足にか

けて暫く思い入れ——。

主水之介 ——おや？菊、そちは泣いている

な……。

慌てて面を、そむける菊路。主水之介、ム

ツクリと起上って

主水之介 今迄、一度もそのようなことはな

かったが、今宵は、またどうしたことじ

や……黙っていては分らぬ。兄が毎晩、

こうやって夜遊びに出歩きする故、それ

が辛うて泣くのか？

菊路 ……。

主水之介 水臭い奴よのう。では、もう聞い

てやらぬぞ。

菊路 (恐る恐る)では、あの、お聞きしま

すが、お兄様は決して、お叱りなさりま

せぬか？

主水之介 突然、異なことを申す奴や喃。叱

りはせぬよ。叱りはせぬから、打明けて

見い。

菊路 きつとで、ござりますな。

主水之介 ああ、きつと叱りはせぬよ。さ、

いかがいたした。

菊路 では申しまするが、実は……。

と、いい憎そうである。

主水之介 実は？……。

菊路 (思い切つて)実は、この程から、さ

るお方様と……。

主水之介 何、何……。ほほう。これは、ど

うも容易ならぬことに相成ったぞ。少々

退屈払いが出来そうじやわい。

と坐り直して、菊路を、しげしげと見る。

菊路 まあ！いやな、お兄様……。

主水之介 うふふ。そうか、そうか、偉いぞ

偉いぞ。まだ、ホンの小娘じやろうと存

じていたが、いつの間にか、偉う出世を

いたしたな。いや天晴れじや。それでそ

の、さるお方とかいうのは、いずこの何と申されるお方じや。

菊路 はい。横目付、霧島三九郎様の御次男

で、霧島京弥と申されるお方でござりま

す。

主水之介 霧島三九郎殿の次男で京弥か。

菊路 御存じでございますか？

主水之介 横目付の三九郎殿とは、かねてか

らじつ懇の間じやが、京弥は知らぬ。そ

ちが恋をする男じや、定めて男前である

うな。

菊路 存じませぬ。(と、すねるふり)

主水之介 うふふ。いや、隠すな、隠すな。

だが、あの涙は何のためじや？

菊路 はい。実は、毎夜お兄様がおでましの

後を見計らつて、必ず庭からお越し下さ

りましたのに、どうしたことか、今宵は

お見えにならないのでございます。——

それで、若しや、京弥様のお身の上に間

違いが起りはせなんだかと、打案じてお

りましたのでござります。

主水之介 よし、相分った。では、早速、霧

島の屋敷へ参り、京弥どのとやらを手土

産にして参ろうぞ。

と立上る。

易者 いかにも、まぎれもない兇相。兇相も兇相。ありありと剣難の死相が浮んでおる。

京弥 黙れ！若年と嘲り、愚弄いたすと容赦せぬぞ！

と、刀の柄に手をかける。

易者 (大笑して) 怒ったか。だが、残念ながら、ワシの占いに狂いはない。気の毒にお前さん、やがて死ぬぞ。

京弥 死なぬ。

易者 いや、死ぬ。

京弥 死なぬ！

易者 ほう、強情だな。では証拠を、お見せしよう。それ！

と、京弥の背後に合図をすると、忽ち現われた黒装束が数人、無言で切っかかる。

京弥 たわけ！死ぬのは、こいつだ！

と、一人切りなく。

易者 手ごわいぞ！

と、立廻りになる。

易者 小癪な、稚児の剣法。

と、懷中より短筒を出して京弥を狙う。

■突如！小石が飛んできて、易者の手に当る

易者 あっ！

と、短筒を落し

易者 な、何者だ！

と、屹と睨む。

深編笠の早乙女主水之介、悠然と現れる。

思わず黒装束、刀を引いて退がる。

主水之介 退屈払いに見物致しておったが、

一人を相手に飛道具とは卑怯！

と、静かに進んで京弥を庇う。

易者 何！聞いたようなセリフを吐くな。貴様は何者だ？

主水之介 月もでておる故、この顔を拝まし

てつかわそうか。

と、笠をとる。

額に、クッキリと三日月傷。

易者 やや、その三日月傷は？……。

とまた、黒装束達退る。

主水之介 旗本退屈男と異名をとった早乙女

主水之介が、この若者に助勢いたす。く

どろはいわぬ。あっさりと引揚げたらど

うじや。

易者 (黒装束に) えい、臆するな。それ、

やって仕舞え！

黒装束、勇を鼓して、ジリジリと退屈男に

迫る。

主水之介 馬鹿者共奴が！江戸御免の篠崎流

正眼崩しを存せぬか。その菜切り庖丁を

おとなしく引いた方が、身のためじゃぞ！

易者 ほざくな！それ、かかれ！

と、斬ってかかるが、退屈男は、素手で適

当にあしらってから

主水之介 まだこりずに参るか。さらば参る

ぞ。退屈男の篠崎流は、抜けば必ず斬る

ぞ。いいか！

と、刀を抜く。

主水之介 但し、逃げる者は追わぬ。逃げた

くば今の中に早う逃げい！

と、立廻りになるが、黒装束は忽ちのうち

に形勢不利となる。

易者 畜生！悪い奴にぶつかりやがった。

退け！退け！。退屈男、この礼は必ずす

るぞ！

主水之介 それは有難い。この早乙女主水之

介、本所長割下水にいる。いつでも参れ

その時は、たとと傷供養をして仕わそう

ぞ。

易者、黒装束を下知して、あたふたと去

る。その後を、じっと見送って、ふと見ると

京弥がいない。

主水之介 ほほう、若者迄消え失せたか。

と刀を納めて、すぐ笠を手にして静かに歩

き出す。

○庭ぞいの廊下

退屈男くる。

主水之介 菊、菊、兄が戻ったぞ。はて？

人で月見でもいたしておるか。

庭から菊路が小走りにくる。

菊路 お帰り遊ばせ。

主水之介 何を致しておった？

菊路 はい、別に……。

主水之介 そうか。

と、座敷に入る。

入ってゴロリと大の字になる。

○座敷

菊路が、静かに入ってきて、羽織を足にか

けて暫く思い入れ――。

主水之介 ――おや？菊、そちは泣いている

な……。

慌てて面を、そむける菊路。主水之介、ム

ツクリと起上って

主水之介 今迄、一度もそのようなことはな

かったが、今宵は、またどうしたことじ

や……黙っていては分らぬ。兄が毎晩、

こうやって夜遊びに出歩きする故、それ

が辛うて泣くのか？

菊路 ……。

主水之介 水臭い奴よのう。では、もう聞い

てやらぬぞ。

菊路 (恐る恐る)では、あの、お聞きしま

すが、お兄様は決して、お叱りなさりま

せぬか？

主水之介 突然、異なことを申す奴や喃。叱

りはせぬよ。叱りはせぬから、打明けて

見い。

菊路 きつとで、ござりますな。

主水之介 ああ、きつと叱りはせぬよ。さ、

いかがいたした。

菊路 では申しますが、実は……。

と、いい憎そうである。

主水之介 実は？……。

菊路 (思い切つて)実は、この程から、さ

るお方様と……。

主水之介 何、何……。ほほう。これは、ど

うも容易ならぬことに相成ったぞ。少々

退屈払いが出来そうじやわい。

と坐り直して、菊路を、しげしげと見る。

菊路 まあ！いやな、お兄様……。

主水之介 うふふ。そうか、そうか、偉いぞ

偉いぞ。まだ、ホンの小娘じやろうと存

じていたが、いつの間にか、偉う出世を

いたしたな。いや天晴れじや。それでそ

の、さるお方とかいうのは、いずこの何と申されるお方じや。

菊路 はい。横目付、霧島三九郎様の御次男

で、霧島京弥と申されるお方でござりま

す。

主水之介 霧島三九郎殿の次男で京弥か。

菊路 御存じでございますか？

主水之介 横目付の三九郎殿とは、かねてか

らじつ懇の間じやが、京弥は知らぬ。そ

ちが恋をする男じや、定めて男前である

うな。

菊路 存じませぬ。(と、すねるふり)

主水之介 うふふ。いや、隠すな、隠すな。

だが、あの涙は何のためじや？

菊路 はい。実は、毎夜お兄様がおでましの

後を見計らつて、必ず庭からお越し下さ

りましたのに、どうしたことか、今宵は

お見えにならないのでございます。――

それで、若しや、京弥様のお身の上に間

違いが起りはせなんだかと、打案じてお

りましたのでござります。

主水之介 よし、相分った。では、早速、霧

島の屋敷へ参り、京弥どのとやらを手土

産にして参ろうぞ。

と立上る。

菊路 では、あの、菊の願いを叶えて下さり
まするか。

主水之介 うむ。早乙女主水之介は、退屈す
るときは人並以上に退屈するが、いざ立
つとなると、ほら、この通り、篠崎流と
直参千二百石の音がするわい。

と、腰に刀を差す。

菊路 まーうれしゆうござります。では、あ
の、今すぐと御出かけ下さりますか。

主水之介 参るぞ。こうなれば、退屈払いに
なる事故、参って遣わすが、首尾よう連
れて参ったら、のろけを聞かしたその罰
に、うんと芋粥の馳走をしるよ。

○土塀の道

京弥が、土塀をしらべている。
ポカッ、と土塀が口を開く。

京弥 うむ。さては、ここに消えたのか…
と、四辺を窺って中に入る。

○庭

荒れ果てた庭である。
空き屋敷がある。

○一室

裸ろうそくの廻りで、易者と黒装束が、小
雀のようにふるえている小夜の乱れた姿をね
め廻している。

あだッばい姿のお柳が入ってくる。

お柳 おや、何処からか娘を啜え込んできた
んだね？

易者 こいつが、江戸屋の一人娘、小夜だ。

お柳 おや、そうなの。成程ね、大家のお嬢
さんだね、消えたいようにふるえている
よ。もっと優しくしてやらなきや。可哀
そうに、まるで荷物じやないの……。

と、小夜の後手の縛し目と猿轡をとく。

お柳 さあ、楽になったでしょう。妾も娘ッ
子のときに、一度だけ、この猿轡ってや
つを嵌められたことがあるけど、ほんと
に苦しく切ないものだからねー

と、小夜の長襦袢の裾を直してやる。

小夜は、腕がシビれているように唯、膝だ
けを合わせて項垂れている。

黒装束 さあ、百万両は何処に埋めてあるん
だ。そいつをいえ。ええ！

小夜 (涙声で) しりません。

黒装束 この阿魔！まだ、かくすか。頭、ど
うします？

易者 一責めして見るんだな。

お柳 ま、お待ちよ。女は、女同志。ここは
妾におまかし。

と、小夜の顔をのぞきこんで

お柳 お小夜さんとかいったね。いくら強情

を張っても、結局は裸にされ、さんざん
に罵られて、音を上上げるのが落なのだ
よ。ね、今のうち、素直にいつてくれれ
ば妾が、お前さんを家まで送り帰してや
ろうじやないか……それとも、

と、いきなり長襦袢の襟をつかんで、ぐい
と背中をはだける。

小夜 あっ！

と身をもじるが、もう肌を腰のあたりまで
剥がれて、慌てて袖をつかんで、乳房のあら
われたのをかくし押える。

お柳 美しい肌だね。その肌を、もっともっ
と出してやろうか。この緋鹿の子を、こ
うすれば訳はないんだよ。

と今度は、裾をつかんで、ぐいとはだける

小夜 あっ！

小夜は夢中で俯つ伏す。

お柳 さあ、金は何処にあるんだい。

小夜 し、しりません。……本当に知らない
んです。お、お許し下さい。

お柳 そう。折角、人が親切にいつているの
に、それでいいなら、いつまでも、そう
やって強情を張れば良いだろうよ。

小夜 ゆ、ゆるして下さい。

お柳 まだ、違ふことをいってよ。この阿魔！

と、ピシリと、平手で背中を叩く。

小夜 あっ……。

お柳は片膝を立てて、指を小夜のおどにかけて、ぐいと顔を仰向かせた。

お柳 フン、睫毛がふるえている。憎いねえ
美しい顔をしている。だけど、一晩も続けて責め折檻をすると、目の廻りが、あざのように黒くなってくるんだよ。おまけに女の妾は、女の弱い所を知っているんだよ。

と、すっくり立上る。

お柳 仕方がない。裸に剥いておやり。(黒装束に)
お前達の仕事だよ。

黒装束 へえ。

待ちかねたとばかり、我も我もと、小夜に襲いかかる黒装束達。

小夜 許して……あつ！許して！

争って緋鹿の子が、ビリビリと破けて、黒装束の手に渡る。



お柳 ……馬鹿、匂いを嗅ぐのは後におし。次は湯文字だよ。

その時、京弥がその場に躍りでる。

京弥 待て！

○土塀の道

退屈男、通りかかる。

主水之介 はて？

と足をとめて、塀にあいた口を鋭く見つめる。

主水之介 空屋敷の中に、白刃の響き……。

と、中に入る。

○一室

京弥が、小夜を庇って、立廻り続けてい

る。

退屈男、ずいとお出る。

主水之介 ほう、先程の若者に、易者、黒装束、いや揃っているな。

易者 うぬ！またしても……それ！生かして帰すな！

主水之介 うふふ、生かして帰さぬとあれば

主水之介、篠崎流に物をいわせて帰るまでじゃ。いや、御苦勞御苦勞、久し振りに傷供養も、ずんと仕栄えがあるぞ。

と、立廻りになる。

忽ち、黒装束仆される。易

者とお柳、逃げようとする。

主水之介 こやつ(と、お柳

の利腕をつかんだ)

京弥 待て！逃げるか

と、易者を追おうとする。

主水之介 待たれよ。来れば

即ち迎え、去れば即ち送

る……深追いは禁物。禁

物。

京弥 然し、あれは首領。

主水之介 急くな急くなまた

の日もある。それよりそ

の娘。

小夜、ハッと己の裸身に氣付いて、胸を押えて、うずくまる。

主水之介 何処の娘か知らんが、送り届けるにも裸で道中は出来ぬ。そこで……

お柳 畜、畜生。はなせ!

主水之介 はなして仕わすから、帯をとけ。

お柳 な、なんだって?

主水之介 その娘に、お前の着物を着せてやるのだ。

お柳 畜生! 殺せ!

主水之介 この主水之介、女は殺さぬ。いいから、脱げ、脱がねば、こうか、と、腕を捻じ上げる。

お柳 あっ! ち、ち、

主水之介 痛いか。では、承知だな。と、突き離す。

お柳 覚えといで! 脱いでやるから、さあ、後をお向きよ!
と、やけになり帯をとく。



京弥、慌てて後を向く。

主水之介 そなたの手並、若年ながら、なかなか天晴れじや。

京弥 お恥しうございます。揚心流の小太刀を少々、嗜んでおります。

主水之介 成程。で、いずこの門で習われたかな?

京弥 父に教わりましてございます。

主水之介 ほう、父上に。して、父上の名は?

京弥 横目付、霧島三九郎でございます。

主水之介 何、では、そなたは京弥どのか?

京弥 はい。申し訳ございません。

主水之介 ホホウ成程。それで先刻、消え失せたのじやな。

京弥 はい。菊路様の兄上様が、お段様とは存じておりましたが、まだ御逢いしたことがございませんので、見咎められては恥かしいと存じまして……それに、あの易者と黒装束の正体を暴きたいと……。

主水之介 いや、流石は横目付の御子息。そうと分らば、却^{かえ}っていじらしさが増すという位のものじや。

京弥 恐れ入りましてございます。
こちらの隅で、お柳は長襦袢一枚となり、

小夜は、お柳の着物をまとっている。

主水之介 さて、(と、振り向いて) いや、

それで良い。所で、その女。近う寄れ。

お柳 まだ妾に御用があるんですかい？

主水之介 これからじゃ。まだ、罪滅しは充分でないぞ。京弥、そのあばずれ女を縛り上げい。

京弥 はっ。

と、お柳を押えつける。

お柳 畜生！何をしやがるんだよ。

主水之介 ほざくな。町娘を拐かし、折檻した罪により今夜一晚、この黒装束共の通夜をせい。京弥、縛り上げた猿轡を、しっかりと噛ましておけ。

○庭ぞいの廊下

退屈男、小夜とくる。

菊路 お帰り遊ばせ。まあ！そのお方は？

主水之介 (笑って) 不粋の兄には珍らしい拾いものじゃ。夜が明けてから届けねばならぬが、わしは女子をあやす道を知らぬ。そちに任せる故、ずんと、いたわつてとらせよ。

菊路 はい。それで、あのお兄様、京弥様は……。

主水之介 うふふ、催促か……案ずるな。こ

の兄は約束をたがえる男ではない。まずこの娘を頼むぞ。

菊路 はい。さあ、どうぞ、こちらへ。

と、小夜の手をとって座敷に入る。

京弥、廊下をおずおずとくる。

主水之介 京弥。わしの身体は、ごく都合が良くてな。目に見て毒なものがあつたり耳に聞いて毒なものがあつたりすると、じき俄盲になったり、俄つんぽになったりする故、遠慮せずにとんと、楽しめよ。うふふ……。

と、庭下駄を履いて庭へ出る。

○空にかかる月

○庭

退屈男、見上げて

主水之介 退屈男のわしには、つがもねえ月じゃ喃。(FO)

(FI)

○座敷(朝)

刀の手入れをしている退屈男。

○廊下

京弥くる。

反対側から菊路、いそいそときて

菊路 京弥様、御帰りなされませ。

京弥 只今、戻りました。殿様は、どちらで

ございます？

菊路 兄は座敷で刀の手入れしております。

それより京弥様、あのう……。

と、目で物をいわせて

菊路 御分りになりましたでござりましょう京弥 は。分つてござります。のち程参りますから、お先にどうぞ。

菊路、庭へ出て切れる。

京弥、見送ってから座敷の前に

京弥 殿様。戻りましてござります。

主水之介 御苦労だった。

京弥 ここを開けても、よろしうござりますか？

主水之介 菊に用なら、この座敷には見えぬぞ。

京弥 何かといえはそうように、お冷やかしばかり仰有いまして——殿様に申し上ぐべきことがござりまして……。

主水之介 また殿様とな。兄と申せばよいのに。他人がましゅう申して憎い奴じやな。よい、よい。入れ。

○座敷

京弥、入ってくる。退屈男、刀を納める。

京弥 実は、小夜殿を江戸屋へ送り届けて、番頭より聞いたのでござりますが、江戸

屋八五郎が病気で死ぬ間際に、百万両の埋蔵金を、娘の小夜に大事の際に掘り出して使うよう、いい残した由でござります。

主水之介 何？百万両とな。うむ、江戸屋はその名の通り江戸一番の両替商と聞いていたが、百万両とはまたずんと大金じやな。

京弥 はつ。それで、それを何処から聞きつけたのか江戸屋には怪しい者が夜昼となくうろついているとの由でござります。

主水之介 成程。それで小夜が拐かされたという訳じやな。

京弥 はい。所が小夜殿は、そのような金のありかは一向に存せぬ模様でござります。

主水之介 ほう、知らぬと申すか。また、奇態な話じやな……。

○庭

植込みで、焦々しながら京弥を待っている

菊路。

その背後に忍び寄る浪人者、二人。

いきなり、一人がおどろかかって菊路の口を塞ぐ。

菊路 う——。

と足を、ばたつかせる。

浪人者A さあ、早いとこ、猿轡だ。

“B うむ。

と小布れと、手拭いを出し

B その手をどけろ。

菊路 あれ！

と一声で、口に布をつめ込まれる。その上を更に手拭が縛る。

浪人者A 俺が押さえている。早く剥げ。

菊路の裾が、よじれ合い、もつれ合って、必死の抵抗をものがたっている。

帯上げが下に落ち、更に腰紐、縹珍の帯が地に、くねくねと落ちる。

浪人者A 馬鹿に暴れやがるが、良い匂いがするぞ。

“B のんきな事をいうな。さ、剥ぐぞ！

総模様の大振袖が菊路の体から、むしりとられると、下は燃えたつ緋の長襦袢。

浪人者A よし、次は手だ。前に組合わせて縛るんだ。早くしろ。

“B 急ぐな。念入りにやらぬと……

と、長襦袢の上から細引きで、ふくよかな胸元を締めつけ、喰入るようにぎりぎりと縛り上げる。

菊路 う、う、う……

浪人者A 猿轡も、もっと締めろ。まだ呻き

が洩れる。

“B よし、こうか……。

菊路 う……

浪人者A よかろう。次は、男の羽織り袴だ

“B うむ。これからが、一苦勞だ。おい、女を臥かせろ。袴から赤いものがでてはまずい。少しまくれ……。

○堀

裏門から、深編笠をかぶせ武士の姿にさせた菊路を、腕を組むようにして連れだす浪人者。

菊路、よろよろとする。

浪人者A おっと……。

と、支えて

浪人者A おい、しっかりしろ。貴公は、どうも酒に弱いぞ。

と、介抱するように引きずっていく。

○庭

京弥 菊路様。

と、植込みにくる。

京弥 あつ！

と驚く。

そこに捨てられてある帯、振袖、匹田の扱帯等。そして一枚の紙。

○道

深編笠が、フラフラしながら浪人者、二人とくる。

さすがに往来の者が、すれ違って不審そうに見送る。

一隅に白髪のお柳がいる。

腰元姿のお柳もいる。

浪人者と易者、意味ありげに目を見合わせ
てうなずく。

○座敷

京弥、かけ込んでくる。

京弥 殿様！

主水之介 取り乱して、何事じや？

京弥 菊路様が何者かのために……

主水之介 何！菊が、どうしたと？

京弥 はい！この紙を御覧下さりませ。

主水之介 どれ、見せい。

と、受取って読んでみる。

主水之介 早乙女主水之介。妹の命が欲しく
ば、今宵六ツ半、空屋敷迄参上せよ。町

方などに他言は無用なり。雲霧仁左衛門

……雲霧……うむ、さてはあの白髪が雲

霧か。將軍家の膝元を荒らす不敵な盗賊

奴。この早乙女主水之介、旗本八万騎に

なり替り、雲霧に天譴を加えてやろうぞ

！

京弥 殿様、無念でござります。菊路様が……
主水之介 大事な、案ずるな。菊も、この

早乙女主水之介の妹だ。いざとなれば、

それ相応の心得があるう。だが、それよ

り雲霧とは奸智にたけた男と聞く。江戸

屋の小夜にも手が廻っているかも知れぬ

……。

○空屋の一室

浪人者二人。荒々しく菊路を突きとばす。

編笠がとんで、猿轡の菊路の顔がでる。

浪人者A あまり手荒にするな。こわれるぜ

“B 瀬戸物じや、あるめえし。

菊路は必死に目を閉じている。その頬に喰

い込んでいる猿轡。

浪人者A 骨を折ったぜ。

“B そうでもねえが、道々匂って参った。

浪人者A 夜鷹にやねえ匂いだ。

“B ふっふふ……。

二人は顔を見合す。

浪人者A 頭はまだなのかな？

“B 姐御と一緒にだったが、あっちは江戸屋

の娘だ。手間はとるまい。

浪人者A 俺達の方が早かったか……では、

頭がくる迄……。

と菊路の傍に、しやがみ込む。

浪人者A さわって楽しむぐらい、いいだろ
う。千二百石、直参の娘だ。

“B 普通なら高峰の花だが……

ビクッと、菊路は足をすくめる。

“B へへへ……

と、ぐいと引かれた菊路の足が、Bの胸を

思い切り蹴飛ばした。

“B (ドスンと引っくり返って) や、やり

がったな！

と、慌てて起き上る。

“B この阿魔！ようし、裸にしてやるぞ。

と、つかみかかると袴の紐を解いて、ぐい

ぐいと脱がす。男の着物を、はぎとる。

緋の長襦袢の裾が、伊達巻にはさみこまれ

ている。

と、体をそむける菊路を、ごろりと仰向け

にする。Bが伊達巻を解こうとする。ところ

へ、白髪の雲霧と紫矢絰、腰元姿のお柳が、

小夜に匕首を突きつけて入ってくる。

お柳 何だ、もう店を開こうとしているのか

い。

浪人二人、手を離して

浪人者A へへへ、どうも……

と、頭を掻く。

お柳 その娘が、主水之介の妹なんだね。成

程、武家娘だけあって、きかない目付をしてるね。

雲霧 とに角、御苦労だった。所でこっちの娘も縛って貰うか。

浪人者A 合点、そんなことなら喜んで。

〃B 俺にも縛らせろ。

と、小夜を二人がかりで縛り上げる。

小夜は観念したように、なすがままに、させている。

浪人者A 猿轡は？

雲霧 決ってるじゃねえか。

〇江戸屋の店

退屈男と京弥が番頭と話している

退屈男 何！小夜が、わしの屋敷から使いがきて、一人ででていったと申すか。

番頭 へい。腰元姿の方が見えられて……はい。

退屈男 わしの家に腰元はおらぬぞ。では、矢張り雲霧奴！

〇一室

浪人が小夜に猿轡を嵌め終った所。

雲霧 さて、六つ半迄にはまだ日がある。一



責めするか。

浪人者A どうします。

雲霧 逆さ吊りにするんだ。

浪人者A それは趣向ですな。

〃B 所で吊る縄は？

雲霧 武家娘の身体に、少し余計に巻いてあ

る。それを解け……

浪人者B 成程。おい、手伝え。

と、二人で菊路を抱き起して、縄をとく。

といた後の両腕を、うしろに廻して、手首だけに縄をかけ、はしを切る。

雲霧 いいか、小夜。今度こそ逃げられんぞ。今のうちにいう気があるなら、首を縦に振れ。そうすれば、猿轡をとってやる。

小夜 ……

必死に首を横に振り、身もたえする。

雲霧 よし、やれ!

と小夜の肩を前に突く。

小夜 う!

と、後手の身体は簡単に前に仆れる。

小夜の両足首が、縄で縛り合わされると、

その縄の一端が鴨居にかかって、浪人者の手に握られる。

お柳 強いね、お小夜さん。お前さんの身体

は宙吊りになるんだよ。足を上にして着物が、すっかり捲かれて、いいのかい……

……

小夜 う、う、うッー。

と、身をもむだけである。

浪人者A 引くぞ!

小夜 うッ!うッ!

小夜の足は一尺ばかり、床をはなれて宙に踊った。

浪人者A それ、どうだ!

と、また引く。そして弛める。

小夜の足が床から二尺上を、上ったり下ったりして、そのたびに裾がひらいて、長襦袢と湯文字がまくれ、ずり落ちてくる。

ふと、お柳が菊路を見ると、失神している様子。

お柳 おや、武家娘の方が見ているうちに参

ったらしいね……ホホホ。

だが、菊路の後手の手首は少しずつ動いて

指が、順々に屈伸運動をしているのだ。

雲霧 良し、止める!こっちも失神したらしい。

浪人者A えっ、もう終わりですかい。

〃B 頭。もっと俺達にも目の保養をさして

おくんなせーよ。

雲霧 遠慮せずに近寄って、トックリ睨め。

浪人者A へ、へへへ。どうも、そういうわけ

ちやうと……。

雲霧 案外、気の弱い野郎だ。所で失神したんじや責めても仕様があるめえ。一そ裸にして、酒の肴にして六つ半時迄酒盛り

といこうか……。

浪人者B A 有難え!

と、二人は踊り上った。

雲霧 どうだ、お柳?

お柳 好きなようにしたらいいだろう。妾に構わずにさ……。

雲霧 じゃ向うへいつてろよ、お柳。

お柳 おや、妾が見ていちゃ、いけないのかい。

雲霧 女のお前が見ていたって、おもしろかねえだろう。

お柳 男が、よだれをだす所は見物だよ。

雲霧 嫌な女だ……。

○土塀の道

退屈男と京弥、そっと忍んでくる。

○一室

小夜が次々と剥かれて、湯文字一枚のまま後手に縛られる。猿轡は、そのまま。

雲霧達、徳利と茶碗で酒を飲んでゐる。

お柳 その湯文字は剥がないのかい?

雲霧 楽しみは、一度にするもんじやねえ。

退屈男、京弥出る。

退屈男 雲相変らずの事を、やっちよるのー

一同が、パツと立つ。

雲霧 うぬ!もう参ったか。飛んで死にゐる

夏の虫奴!

と、いうより早く、菊路の身体を抱き起すと、その胸に七首を突きつける。

京弥 あっ! 菊路様!

その声に、パツチリと目をあく菊路。

菊路 うッ、うー……。

と、身をもむ。

雲霧 動くな! 早乙女主水之介。

主水之介 (流石に、ぎよッとして) よ、よッ!

主水之介 菊!

雲霧 さあ、この始末、どうつける。

主水之介 う、むむ、卑怯!

雲霧 のこのこと、考えもなく乗り込んでくるとは、思ったより間抜けな男だ。主水

之介、妹を救いたくば腹を切れ!

主水之介 何! 腹を?

雲霧 切らねば、この女を刺し殺すぞ。

主水之介 む、む!

雲霧 さ、早くしろ! 直参旗本なら、旗本らしく潔よく観念しろい!

主水之介 よし判った。からめ手は篠崎兵法では、下の下に属するが、止むを得ん。

腹を切ろう。

と小刀を抜く。

雲霧 大刀は、こっちへ貰おう。立腹が切り

憎からう。

主水之介 鞘ごと刀を投げる。

京弥 殿様!

主水之介 よい、よい。雲霧とやら、但し条件がある。わしが此処で立腹を切らば、

これなる若者と、その菊は容赦するな。

雲霧 うむ。特別にな……。

主水之介 では……。

京弥 殿様! そのようなこと……

主水之介 止めるな。そちが止めると菊めが

ほれ……。

菊路、猿轡の下で目を力一ぱい見開いて、

何か訴えている様子。

お柳 退屈男のお殿様。男は、諦めがかんじ

んでござんすよ。

雲霧 さあ、早くしろい! 三ツ数えるうちに

腹を切らねーと……一ツ、二ツ、

主水之介 待て! 天下の直参旗本退屈男の最

期をよく見ろ! (と小刀を逆手に持つ)

一瞬、菊路の手がパツと動くと、雲霧の七

首を、手刀で叩き落す。

雲霧 あっ!

主水之介 見事だぞ、菊! 篠崎流の柔術!

雲霧 畜生!

忽ち、攻守所を変え、立廻りの後、雲霧一味は仆される。

菊路と京弥は、ひしと抱き合う。

菊路 (猿轡をかなぐり捨てて) 京弥様!

京弥 菊路様!

その傍に徳利が倒れて、酒が、まだ失神している小夜の白い背中を濡らしている。

主水之介 よ、よ!

見ると、その小夜の背中に次第にハッキリと刺青の地図が現われてくる。

○飛鳥山の花見

向う鉢巻きのお祭り姿の若者達。仮装をこらした菅笠の大夫達。豪華な振袖で練っている町娘で賑わっている。

○満開の桜

その下に花菰を敷いて仲良く重箱を開いている菊路と京弥。

菊路 まあ、おもしろいこと。

と時々、うかれ踊る老幼男女の姿に視線をやっては、京弥と微笑をかわす。

飛鳥山が、管絃と騒音にすっかり包まれた中を、深編笠の退屈男が静かな足どりでいく。

退屈男 退屈じゃ、生きていることに……。その後から、小夜が、そっとついていく。

乳房に火をつけるな・第四回



恐怖の悪戯

藤木仙次

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

深 海 魚 の 客

銀座八丁目裏の高級バー「深海魚」――。

このバーのマダム夏代は、星島大五郎の情婦である。

三年前、北条哲夫が自分の美佐を、はじめて大五郎にひき寄せたのが、この店だった。

そのとき、美佐の清純な姿体にひと目惚れした大五郎が、奸計をめぐらせて、哲夫の手から彼女を奪いとったのだ。

この「深海魚」に、いま二人連れの客がきていた。

一人は、でっぷりと肥えた四十がらみの年配の男。一人はまだ二十そこそこの青年で、話している言葉つきからみて、肥えた男の部下のように思える。この店にとっては、新顔であった。

上客とみたマダムの夏代は、愛想よく相手をしながら、この二人の身分や職業を想像していた。

(どうみてもカタギじやなさそうだけど、どうも正体のわからないお客だわ……)

肥えたほうの男の風貌は、一見、大五郎に似ている。が、腹のなかにひそめた得体の知れない不気味さを、品のよい会話や動作で、さりげなく隠しているゆとりをみると、大五郎よりは、すこしばかり人物が大きいと察せられる。

「おや、もう十一時半だ。よく飲んだな。そろそろ帰ろうか、順――」

腕時計をみて、肥えた男がいった。

「へい……」

順と呼ばれた若い男は、ペコリとうなずいて、椅子から立ちあが

りかけた。

と――。順の眼が、ふと、カウンターの奥をのぞいて、キラリと光った。

いま、マダムの夏代が立っている背後のドアの隙間から、見覚えのある顔が、チラリと見えたのだ。

(おかしいな。金次のやつが、こんなところに……)

いぶかしげに光った順の眼が、さらに、その金次に似た男の横に、これも見覚えのある若い女の顔をとらえた。

(あッ、あれは、たしかに星島の娘、千絵子だ!……)

金次と千絵子が、いま頃、こんな銀次のバーの奥の部屋にいるはずはない。

だが、いまチラリと見えた横顔は、たしかにそうだ。

「なんだ、どうかしたのか?」

ドアに歩きかけた年配のほうの男が、ふりかえっていった。

この、でっぷり肥えた紳士こそ――北条哲夫が、いまボスと仰いでいる。王竜元であった。

そして、順と呼ばれている若い男は、王竜元の子分で、三日前に金次と一緒に千絵子を誘拐する仕事をやった、順吉である。

今夜、王竜元は、順吉をつれて銀座の麻薬業者を訪ずれ、一仕事終えてきたのである。その帰途、このバーへ寄ったというわけなのだ。

順吉は、千絵子が金次をそそのかして、あの大森の古洋館から逃げだしたのを、まだ知らなかった。

「おかしいんです。金次のやつが、星島の娘と――」

順吉は、王竜元の耳にささやいた。

「なに？」

王竜元も、哲夫のこんどの復讐には手を貸している。大五郎にそれほどの恨みがあるのなら、徹底的にやってみると、子分の順吉と金次を、哲夫に貸してさえやったのだ。

「金次の野郎、もしかすると、裏切りやがったかな」

順吉の推察は、なかなか鋭い。

「順。とにかく、二人をつかまえろ」

王竜元が、事態を察して、すぐ命令を発した。

順吉がピンと感じたとおり――。

店の奥にひそんでいたのは、金次と千絵子であった。

千絵子は、大森の古洋館から脱出すると、父の情婦が経営するこのバーに、ひとまず身を寄せたのだ。

ひっかけてきた男の服をぬいで、夏代のワンピースを借りて着替えた。

「お、お嬢さん、これからどこへ？」

おどおどしながら金次がきいた。彼は哲夫の追跡がおそろしい。

「どこへって、あたしの家よ。杉並の善福寺にあるの。いくら哲夫がしつこい男だからといって、まさか杉並まで手はとどかないと思うわ」

「あぶねえな。あ、兄貴は凄腕なんだ」

「といって、いつまでもこの店にもいられないわ。杉並の家には、うちの子分もいるから大丈夫よ」

千絵子は、金次をつれて、バーの裏口から外へ出た。

と――その二人の眼の前に黒い影が、ぬうッと立ちふさがった。

「金次。たいした駈落ちをやらかしたな」

ピタリと拳銃をつきつけた順吉だ。そのうしろには、王竜元もいる。

「あッ！」

金次は悲鳴をあげた。ふいの驚愕に腰をぬかしそうになった。

「哲夫に様子をきかなくちや、なんにもわからねえが、とにかく、うちへこい――」

王竜元が、静かにいった。

「ちくしょう！あんたは誰だい！」

千絵子がさげんだ。暗くて相手の顔が分らないのだ。

「静かにしな。すぐわかるよ」

バーの横手に、王竜元のビュイックがおいてある。

順吉の拳銃は、千絵子と金次を、その車のなかへ追いこんだ。

金次の顔面は、もう死んだように蒼白である。膝頭が、ガクガクとふるえた。

（ちくしょう、折角うまく逃げだしたのに！……）

千絵子も、胸のなかで歯がみした。

三人の男と、一人の女をのせた車は、深夜の銀座を、すべるように走りだした。

竜 一 楼 の 密 室

横浜月光町の中華料理店、竜一楼――。

王竜元のおもてむきは、この中華料理店の主人である。裏へまわれば、国際麻薬団のボスであった。

千絵子と金次を捕えた車は、銀座からまっすぐにこの竜一楼にもどってきた。

順吉が、すぐに大森の古洋館、哲夫のところへ、連絡の電話をかける。

「——ああ、もしもし、哲兄貴ですか。こちら、竜一樓——」

「順吉か。——しまったことをしたよ」

すぐ、哲夫のくやしげな声が響いてきた。

「せっかく誘拐した星島の娘を、金次の馬鹿がだまされて逃がしてしまったというんでしょう？」

「えッ、どうしてそれを知っている」

「安心して下さい。二人共、こっちの手でうまく捕まえましたよ」

「なんだったって？」

「銀座の深海魚ってバーに逃げこんだところをね、旦那とおれが偶然に見つけて——」

「そうか。夏代のところへ隠れやがったのか」

「二人とも、こっちに預かってあります」

「よし、おれもすぐそっちへ行こう」

「待ってます」

電話を切った順吉は、奥の部屋にきた。

麻薬の取引に使う、嚴重な部屋だ。ここに千絵子と金次を押しこめてある。

「——なるほど。これが星島組の親分の娘か。美しいお嬢さんだね。金次が迷うのも、無理はないかな。ふふふ……」

明るい電灯の下で、しみじみと千絵子の顔を見つめながら、王竜元がいった。

「か、かんべんして下さい、旦那！」

金次はあえいだ。この世界のリンチのおそろしさを、いやという

ほど知っている。

「女にそそのかされて兄貴を裏切るなんて、お前もとんだまぬけたよ！」

順吉が、その金次の顎を、靴先ではげしく蹴とばした。

「げえッ！」

横転し、金次の鼻から、タラタラと血が流れた。それでも両手をつき、額を床にすりつけて許しを乞うのだ。

「まあ、待て、順——。金次よりも、このお嬢さんのほうをひと責めしたくはないか。このところしばらく、女の泣き声をきかなかったからな……」

はやる順吉を、王竜元が押しとどめていった。

「へい——」

順吉の眼が、異様な輝きをおびた。娘を責めろとの、ボスの命令がでたのだ。

順吉は、狼のように背をまるめて、千絵子の前に近づいた。ついと手をのばして、千絵子の手首をつかんだ。

「あれッなにすんのよ！」

千絵子は、氣丈にその手を払った。

「フフフ……」

とうす笑いをうかべながら、順吉が右手を大きくふりあげた。ピシリ！——と、千絵子の頬がはげしく鳴った。

「ひえッ！」

ひるむところを、襟首をつかまれて、ひき倒された。ワンピースの裾が大きくまくれあがり、白い太腿がさらけだす。

「おい、千絵子。おれたちをなめるんじやぬえよ」

すさまじい順吉の力で、千絵子は耳を握られたウサギのようにねじ伏せられた。

頸をガツンと床におつけ。自分の身体の重みに、二つの乳房がペタリッと下敷きになった。すかさず、順吉の膝が千絵子の背中をぐいッとおさえこんだ。

「ううッ、痛ッ……」

膝頭でグリグリと背中をこじられ、千絵子は、手足をバタバタさせてもがく。だが、その右手が、まず、ジリジリと背中へねじりあげられた。つづいて左手も――。

左右の手が、うしろへねじまわされて、一つにわしづかみにされたのだ。肩の骨がポキリと音をたてそうな痛さ。

「くうッ、くくくッ……」

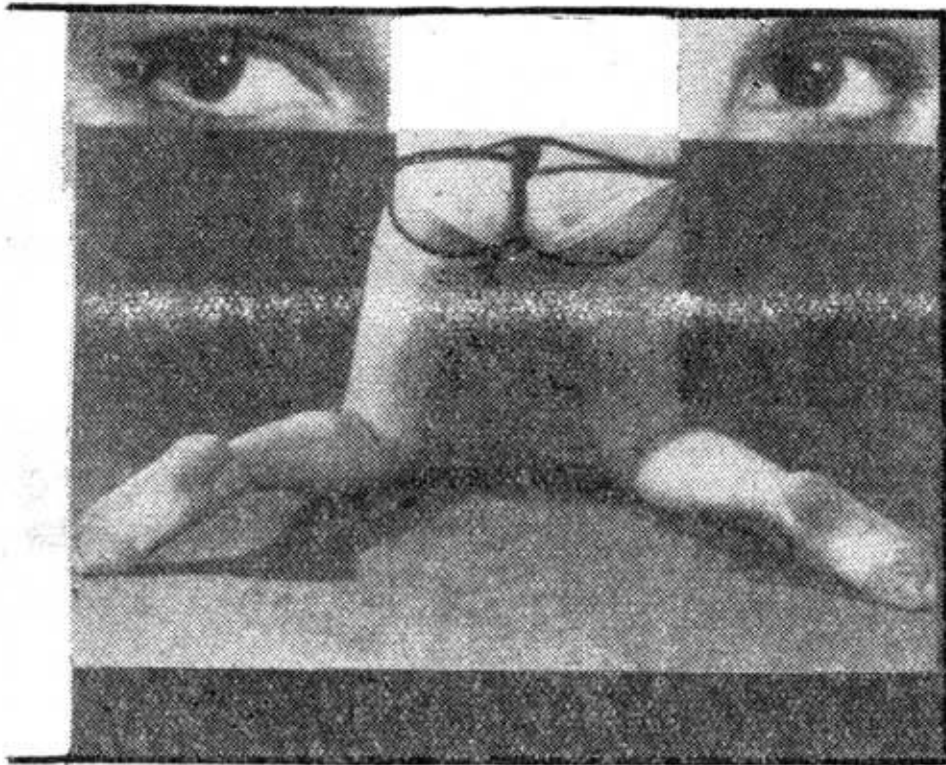
千絵子の眼がひきつり、口がゆがむ。順吉の手には、いつのまにか縄が握られていた。その縄で、背中にまわした千絵子の両手首を、ギリギリと縛りあげるのだ。

ザラザラした縄の感触は、千絵子の手首に、おぞましい勢いでからみつく。

左右の手首を一つにくくり終えた順吉は、その縄尻を、ぐいぐいと肩のほうへ引きあげるのだ。肩の肉がやわらかく盛りあがった。

「うううッ……」

息がつまるほどの苦しさだ。思いきり引きあげられた千絵子の両手首の縄尻は、つぎに咽喉



首にかかった。

「げえッ！」

縄は首に巻かれ、背中の手首と直結した。もう、うごけない。いたずらに手をうごかせば、縄は自分の咽喉をしめあげるだけである。

「さアどうだ。あばれられるものなら、あばれてみる」

順吉がヘラヘラ笑いながら、千絵子の背から、ゆっくりと立ちあがった。ズボンについた塵をかるく払い落してから、千絵子の襟首をつかんで、ぐいとひき起した。

「い、痛い！ちくしよう！」

半身をおこされ、千絵子は床の上に、ペタリと尻をつけて、横坐りに坐った。

髪が、めちやくちやにみだれ、顔の前に大きく垂れさがっている。張りのある大きな瞳が、せいっぱいの怒りと憎しみをこめて、順吉と王竜元を見あげるのだ。

「ふふふ……。女という動物は、ちよっと

痛い目をあわせれば、すぐに泣く。だから、つまらん。しかし、このお嬢さんはたいした勝ち気らしいぞ。凄い眼をして、わしをにらんでおる。わしは、こういうお嬢さんを見ると、どうも泣かせたり、わめかせたりしたくなって、困るんだが……」

王竜元は、酒をのむときのような、楽しげな顔でいった。

順吉は、千絵子の前にまわり、そのワンピースの襟もとに手をかけた。力をこめて、ビリビリと左右にひき裂くのだ、肌着があらわれると、それもビリビリと破った。

「あれえッ！」

抵抗しようにも、両手は背中にたかだかたくくりあげられている。身をふりもがいて、順吉の手を避けようにも、咽喉を縛った縄の苦しさで、首すらうごかせないのだ。

「むむッ………」

眼だけが、必死に順吉をにらみつける。

だが、順吉の手は容赦なく肌着をひき裂き、むしりとり、千絵子の上半身をむきだしにするのだ。

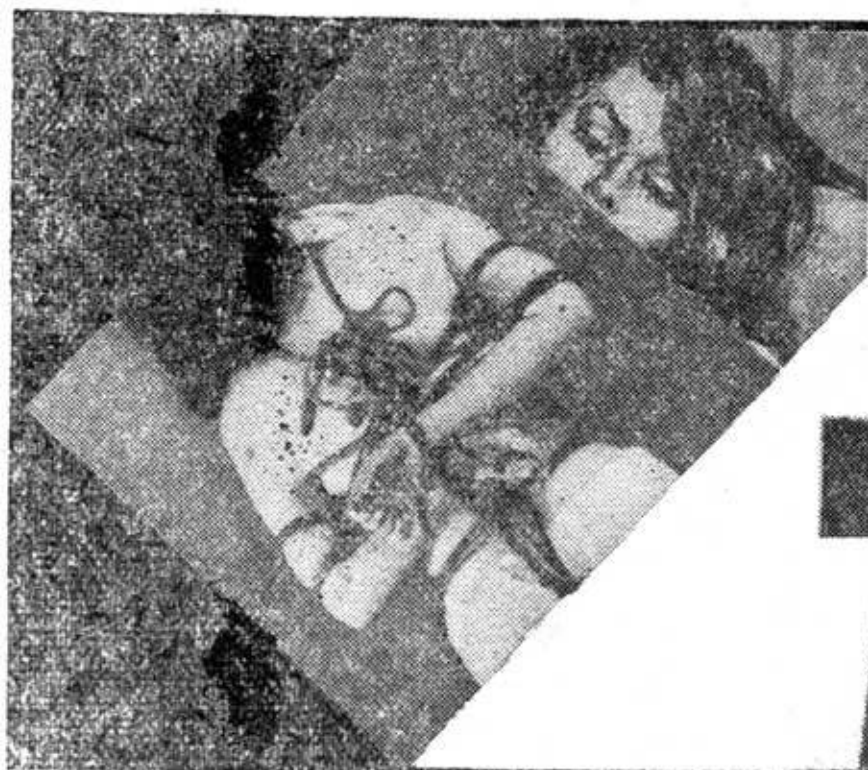
「むっちりとふくらんだ乳房が二つ、恐怖と羞恥にふるえながらあらわれた。娘ざかりの美しい乳房だ。形よいまるみの頂天に、ポッチリとうす紅い乳首までが、こきざみにおののいている。」

「な、なにをするのよ、やめて！」

千絵子の唇が、蒼白になってワナワナとふるえた、

「フフフ………。縄はまだ手首と……咽喉を縛っ

ただけだ。縄尻がこんなにも余っている。だから、そのたっぷりしたご自慢の乳房にも、縄の味を、味わってもらおうのさ」



長い縄尻を、千絵子の目の前にブラブラさせて、順吉がいった。

と——その言葉どおり、白々とむきでた千絵子の二の腕から乳房へ、縄がキュウツと巻きついた。

金とひまにまかせて磨きあげた、なめらかな柔肌である。そのスベスベした肌に、まるで芋俵か、荷物でもくくるような荒っぽい手つきで、キリキリ、キリキリと縄をかける順吉である。しかも、乳房のもっともやわらかい頂点にも縄をかけ、とくに力をいれると、グイッ………としめあげるのだ。

「ぐうッ！うッうッうッ………」

と千絵子が歯を喰いしばったのは、そのゆたかな乳房の盛りあがり、おそろしい勢いで縄が喰いこんだためである。

ぐいぐいとひきしぼると、縄は柔肉のなかに陥没して、その形よいまるみは、奇妙な肉塊となってゆがむのだ。

これは、非情な乳房責めであった。

「ひいッ、ひッひッひッ………むうッ………」

苦しさに耐えきれず、前のめりになると、首縄がぎゅうツとしまる。うしろへのけぞれば乳房の縄がキリキリと喰いこむ。背中の手首は、もぎれるかと思えばかりの固い縄目だ。

「ちッ、ちッ、ちくしよう！」

恨みと呪いが、血のように吐きだされる。肉がうめき、骨がきしむような、縄の強襲であった。しかも縄はまだ、三巻き、四巻きと悪鬼のような執拗さで、千絵子の胸を縛りあげるのだ。

痛烈木馬責め

「さあ、縛りあげましたぜ。これから、どうしましょう？」

順吉が、王竜元の顔を見あげていった。この女いじめに、すくなくらず上気した順吉、鼻の頭に汗をかいている。

「哲夫はまだこないか」

「へい。まだらしいです」

「哲夫のくるまで、もうすこしつづけるか。どうせ人質の娘だ。殺さなければ、なにをしてもいいだろう……」

王竜元は、ニタリと笑ってつぶやいた。

「なにをやります？」

このボスと子分は、どうやら同じような性癖の持ち主らしい。

「ひさしぶりに、あれを使うか——」

「あれとは？」

「木馬だ。まだしまっているだろう」

「ああ、あいつですか……」

順吉は、ゾクリと首をすくめた。

半年ばかり前、麻薬のバイニンで春子という女がいた。いい腕をもっていたのだが、ちよっとした油断で当局にあげられ、手きびしく追究訊問されたあげく、麻薬ルートの一部を吐いてしまった。

その後、釈放されたが、この裏切り行為を黙っているような王竜

元ではなかった。大阪へ逃亡寸前の春子をつかまえると、この竜一様の奥室へつれてきた。

処刑の部屋である。春子は高手小手に縛りあげられ、木馬にのせられた。凄惨なリンチであった。

悲鳴、絶叫、慟哭——。半殺しの目にあわされ、その翌朝、死体となって月光町裏のドブ川に、メタン・ガスと一緒に浮いていた。

「あの木馬を使って、この美しいお嬢さんが泣いたり、吠えたりする顔を見たいよ」

目を細めて王竜元がいった。自分の思いつきに満足していた。

「金次、あいつをひきずりだしてこい」

まだ床に這いつくばっている金次に、順吉が命令した。靴で金次の肩を蹴りつけた。

「へ、へい！」

金次は、血だらけの顔をあげて、とびあがった。

この部屋の隅に、大きな戸棚がある。板戸がついていて、物置きになっているのだ。金次は、そこから妙な物をひきずりだしてき

た。

なるほど——木馬である。しかし、この木馬には頭も尾もない。頑丈な四本の足に支えられた胴体がついていて、その高さはおよそ四尺ばかり。

不気味なのは、その木馬の背中が、鋭く三角にとがっていることであつた。

「さあ、可愛いお嬢さんを、この木馬にお乗せしな」

王竜元がいった。

「へい。——おい、金次。手を貸せ」

順吉と金次は、千絵子の両側から、つきそうようにして手をさしのべた。

「いや、いやッ、なにをするのよ!」

千絵子は身をふりもがいた。この奇妙な形をした木馬が、これからどんな悪戯を自分に仕掛けてくるのか、まだハッキリとはわからない千絵子である。

だが、ひしひしと身にせまりくる不気味な気配に、彼女は戦慄した。

「やめて!」

さけんでも、無駄であった。いまさら、この地獄から逃げられるはずはなかった。強烈な高手小手、しかも首縄までかけられた、みじめな千絵子の身体である。

「そら——よいしょ。おお、重てえ娘だな。さア、あんよをひらきな」

両脇から抱きかかえられ、千絵子はついに木馬の上にまたがせられた。

「ああッ、痛ッ、むむッ!.....」

三角にとがらせた木馬の背は、たちまち、乗り手を責めさいなみはじめなのだ。自分の身体の重さが、こんなにも呪わしいことを、千絵子は今はじめて知った。全身の重みが、ずっしりと腰にかかるのだ。

削りとがらせた木の背が、ぐいぐいと喰いこむのだ。手が自由なら、その手を木馬の背にあてがって、自分の体重をささえることもできよう。だが、うしろ手の固いしましめは、すこしのゆるみもない。

ニューモデル未発表新作緊縛フオト集

ヌード初縛り

大名刺 三枚一組 二〇〇円

ニュー・モデル 平野笑子

略号 (みい)

ヌード初縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円

ニュー・モデル 田原美佐子

略号 (みろ)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円

ニュー・モデル 岩井知子

略号 (みは)

全裸後手くらべ

大名刺 三枚一組 二〇〇円

ニュー・モデル 平野笑子

略号 (みに)

観念の座

大名刺 三枚一組 二〇〇円

ニュー・モデル 平野笑子

略号 (みほ)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円

ニュー・モデル 絹川文代

略号 (みへ)

開股縛くらべ

大名刺 五枚一組 三〇〇円

ニュー・モデル 絹川文代

略号 (みと)

椅子開股縛

大名刺 三枚一組 二〇〇円

ニュー・モデル 絹川文代

略号 (みち)

「ひいッ、あッ、あッ、あッ!.....」

突きあげる木馬の激痛が、脳天までもつらぬいた。自分の体重が自分を苦しめるのだ。千絵子は、のけぞった。縛られた腕を、必死にゆすってもだえた。

「あまりあばれると、木馬から落ちるぞ。身体をささえてやれ……」
王竜元が注意を与えた。

順吉は、横から手をのびし、千絵子の肩をつかんで落ちないように

にした。

千絵子の額から、タラタラとあぶら汗がしたたりはじめた。その汗が垂れさがった髪の毛にべっとりと濡れて貼りついた。千絵子の顔は、はげしい苦悶に赤くなり、死人のように青くなり、また血がのぼって赤くなっていた、もう羞恥も屈辱もなかった。この一寸きざみの責め地獄から、すこしでものがれようともがく。だが、もがけばもがくほど腰は、ぐいぐいと三角の背の頂天に沈むのだ。

「くうッ、くくくッ、くくくッ！……」

血を吐くばかりのうめきであった。烈火が体の深部をつらぬきとおるような凄惨な苦痛だ。千絵子は背をまるめ、木馬の上にうつ伏せになる。喰いこむ非情な木材から、一寸でものがれるために――



すると、順吉が千絵子の髪の毛をムズとつかみ、ぐいと持ちあげる。そして乱暴にゆするのだ。

千絵子の眼は、髪にひっぱられて吊りあがり、とがった木馬の背は、ふたたび、グリグリと柔肌を噛みはじめ。

「グウッ、ググググッ！……」

苦悶のあぶら汗は、千絵子の額から咽喉へ、胸へ、乳房から腹へと、ジットリとつたわる。汗はしずくとなってポタポタ流れ、木馬の背までも濡らすのだ。

「も、もう、ゆるして！」

ついに千絵子は哀願した。苦痛を耐え得る限界がきたのだ。垂れさがった髪の毛のあいだから、眼だけを必死に王竜元にむけると許しを乞いはじめた。

「お、お、おろして！……」

汗で濡れ光った乳房が、泣いてるようにみえる。流れるような汗に、身体を縛った縄が濡れて縮むのだ。

「く、くるしい！、もう、がまんできない。ゆ、ゆるして！……」

歯のあいだから、弱々しい哀願が洩れる。

すでに、千絵子の顔面からは血の気が失せていた。顎を前につきだし、唇を半びらき

にして、眼にはもう生きた色はなかった。

失神一步前の表情である。とみた王竜元は順吉にいった。

「よし。そのへんで下ろしてやれ」

「へい」

千絵子の身体は、やっと木馬の上から下ろされた。

床に投げだされた千絵子は、ぐったりと眼をとじて、うごかなかった。両肩で嵐のような荒い息をつくだけである。その苦しい呼吸を、苛責ない縄目が、なおもギッチリとおさえつけているのは、むざんな光景であった。

「ふふふ……。なかなかいい顔をみせてくれたぞ。ひと休みしたら、こんどはどの手で遊んでやろうか」

タバコに火をつけ、うまそうに一服吸いながら王竜元がいった。

人質の母娘

そこへ、北条哲夫が姿をみせた。大森から車をとばしてやってきたのだ。

「——旦那、すまねえ。千絵子を捕えてくれたんだってね」

部屋へはいりなり、哲夫はペコリと頭をさげていった。自分の失態を恥じるような表情である。

「なに、銀座のバーで偶然、順が見つけたんだ」

とこたえた王竜元の眼が、哲夫の背後にいる和服姿の女をみて、ギョロリと光った。

「その女は誰だ？」

「へえ。これがその……大五郎の女房なんです……」

女は、美佐だった。哲夫は、大森の古洋館につれこんだ美佐を、

さらにこの横浜までひっぱってきたのだ。

「なるほど。これが三年前にお前のイロだった女か……。いい女だな」

「へい」

哲夫は、頭に手をあてて苦笑した。こんどの復讐も誘拐戦も、すべてはこの美佐から端を発したのだ。

そのとき、床に倒れていた千絵子が、ハツとして声をあげた。

「ママ……ママじゃないの！」

いきなり呼ばれておどろいた美佐は、はじめて千絵子の姿を眼にいった。

「あつ、あんた、千絵子さん！」

おどろくのも無理ではない。美佐にとっては、継娘にあたる千絵子が、すさまじい半裸の姿で後手に縛られ、床の上にころがっているのだ。身につけたワンピースはボロボロにひき裂かれ、そのあらわになった乳房には、むごたらしい縄が幾本も、噛みつくようになっていている。

その胸が苦しい呼吸にあえいでいるのは、今この部屋で、なみならぬ恐怖の事実がおこなわれたことを物語っていた。

「なるほど、二人は親娘というわけだな」

王竜元が、感心したようにつぶやいた。

「三つ違いの兄さん、じゃなくて、母さんというわけです」

と、哲夫が説明した。

「さすがは哲夫だ。大五郎の女房と娘を、早くもこっちへおさえてしまったということは、お前の復讐ももう半分は終わったようなものじゃないか」

「それが、旦那。さすがは銀座のボス、星島大五郎です。こんどはあたしの妹を誘拐してこっちに対抗してきやがったんです」

「お前に妹がいたのか」

「兄貴がこんな世渡りだから、大きな顔して逢うこともできねえが、たった一人の可愛い妹です。見殺しにはできません」

哲夫は唇を噛んだ。

「大丈夫だ。こっちには二人の女がおさえてある」

王竜元が、はげますようにいった。復讐に凝り固まった哲夫の姿に、王竜元も強い興味をそそられてきたのだ。

はたしてこの勝負、どんな結着をまねくのか――。

「明日の晩十二時。芝浦の下水処理場の横――。そこが人質の交換場所です。千絵子の身代金を一千万とふっかけておいたんですが、あたしの妹も、やつらの手におさえられている。条件は五分五分だ」

「いくのか」

念を押すように、王竜元がいった。

「いきます」

「気をつけろよ。お前のことだから、ヘマはやらないだろうと思うが、相手は暴力団だからな」

「三年前までは、あたしも星島組の飯を喰ってましたよ」

「だが、今じゃあお前はおれの片腕だ。つまらないことで、失いたくはないからな」

「この三年間、夢にまでみた仇敵との対決です。おめおめとはやられませんか」

哲夫は、順吉をふりむいていった。

「すまねえが、美佐を縛っておいてくれ。たいせつな人質だ」

「へい」

とこたえた順吉は、縄を持って美佐のうしろに寄った。

「あたしは逃げやしません。そんな、縛るなんて、そんなひどいことはしないで下さい」

美佐はたじろいで哀願した。しかし、順吉は容赦しなかった。

「ここは、おもてむきは中華料理屋なんだ。ヘタに騒がれると、ちよつとばかり困るのさ」

美佐の両腕を背中にねじりあげると、馴れた手つきで、うしろ手に縛りあげた。

「あれ、やめて、やめて！」

「兄貴の惚れた大事な人だから、裸にむかねえのが、おなさけなんだぜ」

縄は、着物の布地にキシキシと鳴った。

「美佐と千絵子を、その柱にしっかりとくくりつけておけ――」と哲夫は、いった。

(未完)

写真 碟

(ハリツケ) 三態 略号(はり)

大判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円
モデル 大塚 啓子

代理部分讓品総目録

新人モデル多数 新しく参加
御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13) 印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

悦慮雨さらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり

略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歎

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭

儀(カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

【G】組 緊縛フォト

判紙
中画紙
大印
焼付

一枚一組	一五〇円
五枚五組	六〇〇円
十枚十組	一〇〇〇円

G1	鉄鎖と柔肌	(高瀬 忍)
G2	股間縛り正面	(高瀬 忍)
G3	海老晒し	(萩千恵子)
G4	羞紅の椅子	(菅登紀子)
G5	量感の帯	(伊吹真佐子)
G6	アイデア	(萩千恵子)
G7	叫喚の森	(伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し	(村田那美子)
G9	優すがた	(花坂道子)
G10	開股一番	(萩千恵子)

◎浣腸連続フォト◎ 略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付

十二枚一組 九百円

モデル 愛川悦子嬢

女体 『浣腸風景十二態』

(9×31Cm) 印画紙焼付

十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢

略号(ちふ)



(九) 春木俊野伝

僕の好みから云って、本誌の話の中でも春木俊野、山本節夫、馬場好男、乗杉貴代子、長瀬昭子、三隅千恵子……と云った方々の体験記や作品を喜びます。勿論、その他の方々の書かれた中にも好きな所が少くありません。春木俊野氏の「姉とその弟」、「見たり聞いたりためしたり」、山本節夫の「イタ・セクシユアリス」、鷹野めぐみ氏の「半生記」等と云った魅力に富んだ力作中に一つも挿絵がないのは誠につまりません。春木氏は

☆K・Kスクラップより☆

馬 化 白 書

(その二)

鞍

良 人

實際上、お転婆な従妹を組敷いて見たことがあるだけ(註13)ですが、作品では、お友達(秀子)やお姉さん(明美)に、気の毒なほど散々組み敷かれます。

小学五年だった春木俊野氏が留守番している時、隣家の秀子と格闘するが、俊野が仰向けにされて、その胸の上に秀子が「だめだめ腕いたって起きれないわよ。さあ、これでもかこれでもか」と勝ち誇った様に馬乗りになってしまふ。明美が外から襖をあけて入って来た時には、真赫になった俊野の顔は、小麦色に陽灼けした健康そうな秀子の両脚の間に

ピッタリと挟まれています。秀子の両脚は俊野の両腕をしっかりと踏み敷いて、お尻を胸の上に下ろしています。「秀チヤンは女の子だから、わざと負けてやったんだよ」と俊野が弁解すると、「あらあんな事いって、さっきから起れないくせに。さア、これでもかこれでもか」と秀子は、なおもお尻を揺って押さえつけます。俊野は、むむむむと、秀子におしつけられた首を振ろうとしますが、秀子の両脚に挟まれて顔を動かせません。

それから三日ばかり後の夕刻、今度は明美に組敷かれてしまふ。鍛えてやるとばかりに

俊野の胸の上にドウと誇がっている明美は水着一枚の姿です。すこやかに伸びた女学校三年の姉の肢体の圧力に、敷かれた俊野は、とうとう苦しさのあまり降参の悲鳴を上げる。

それ以後は、うっかり姉のしている所で秀子に負けられなくなったのだったが、折悪しく一度、またしても秀子にギョウギョウな目にあわされている所を見付けられてしまいました。その夜、姉の部屋に呼びつけられた俊野は、再び押し倒されてお仕置を受ける。弟の胸の上に馬乗りになった明美は、膝で相手の両手を踏み敷いたまま、無茶苦茶に頬を撲りつづけます。弟が泣こうがわめこうが、狂気の如く打って打ち止みません。あまりの騒ぎに、とうとう両親が来て、やっと引き離してくれます。それから二年間と云うものは、戦争も熾烈の度を加えて、めったに姉と組討ちをする機会もないままでしたが、或る日曜日の事、ズボン姿も凛々しい姉と、久し振りに二階で組討ちを始めます。その頃では、もう負けない自信があったのですが、最初からあつてなく勝つてしまったのでしよう。一先ず屈服するかのような態勢を取るや、姉は得たりとばかり背後から組ついて来た。これはいかんと、撥ね返そうとした時には既に遅く、

姉は満身の力をこめて首すじを抑え込んでしまっています。しまった！ と思いますが、姉の身体は身動きも出来ない程しつかりと俊野を組敷いてしまっていますから、どうし様もありません。

「どうだ、降参か？」

「ううん、まだまだ」

「とにかく今日は絶対に許さないわよ」

と姉は絶対優位です。俊野は、時々お尻をもちあげられるぐらいがやっとです。

その中に明美の恋人（佐々木）が訪ねて来て、母が二階へ案内して上って来ます。それでもかまわず、明美は組敷いたままで弟を放しません。皆が見ているので、俊野もなかなか降参出来ないでいますと「姉さんなんか女じやない」と云われて怒った明美は、面倒とばかり弟の両手を逆手に捻じり上げてしまいます。

「いたいたア。御免ナサイ御免ナサイ。」

手が折れる。おかアさん

と、あまりの痛さに遂に悲鳴をあげてしまします。お母さんが

「明美、もう許しておやり。佐々木さんが呆れているよ。」

と取りなしてくれて、やっこのことで放し

てもらいます。

（十） ジャンゴ潰し

この物語りと殆んど軌を一にしている様な物語りに、相当以前「馬乗られ人生記」という作品がありました。それは五年程前（即ち昭和二十八年になる）の「風俗科学」誌上に藤崎洋美氏が発表されたものです。五月号だったか六月号だったか（或は七月号？）忘れしました。現物を持っていますけれども、大ざっぱな事は云えます。藤崎氏も幼いころから女の子に屢々組敷かれて来ました。幼稚園時代から小学校時代にかけては、近所のフジ子にしょつ中組敷かれていました。フジ子と別れてからは、しばらく組敷かれる機会がありませんでした。後、女中のトキ江の尻に敷かれてしまうことがありました。更にその後は十九才になるまで、組敷かれる機会にめぐまれませんでした。ところが、いくら健康を害した彼が、鎌倉辺の叔母の家に厄介になるようになってからは、機会が遂に訪れます。叔母には二十一才（美津江）と十八才（照子）の二人の美人娘があったのです。

或る日の昼近く洋美が一人で退屈していると、照子が午後の授業をエスケープして帰っ

て来ます。彼女と二人きりなのを幸いに、洋美は照子に組敷かれようと計ったところ、計略通り、彼女に組敷かれることが出来ました。

背中に馬乗りになられ、ギユウギユウ押さえつけられている洋美は、苦しい息の下から「ごめん、ごめん。僕、照ちやんのお馬になって、この部屋を十回廻るから許してください」と許しを乞います。

照子との馬乗りごっこはこの時から始まります。はじめのうちは、誰にも判らずに馬にされていたが、或る日、美津江の居る前で突然

「洋ちやん、お馬になるのよ」

と照子が命ずるものですから

「嫌だよ、照ちやんの馬になるなんて」

と云うてしまいます。

「あーら、何時も私のお馬になるくせに、今日は抗うのね。いいわよ。腕ずくでお馬にするから」

と云うことで、取っ組み合いが始まりますが照子が勝ってしまう。洋美は少しばかり病身ですし、急襲を防ぎ遅れたためです。照子は押し倒した洋美の胸の上に、どっかとお尻を下ろします。洋美は案に相違して、もがけど

も撥ね返す事が出来ません。いくら美女に組敷かれたくても、知っている人の前では困るでしょう。彼はあせて手、足をふんばりましたが、照子は胸の上に馬乗りになり、両膝で相手の両手を踏み敷いてしまいました。「照ちやん、許してあげなさいよ。洋ちやんは病人よ」

美津子が見かねて云ってくれますが、「あーら、私、こうして運動させてるのよ。今日はお馬にならないから、一寸こらしめるのよ」

と平気なものです。そして征服した犠牲者を見下して気味よげに笑ってさえます。

「フン、わざと負けてやっているんだ。照ちやんは女だからね」

とでも云うより仕方ありません。

「あんな負け惜しみ云ってるわ。じゃ、起きれるものなら起きてごらん」

そう云ってぐいぐい圧力をかけます。洋美が起きられないで、散々負け惜しみを云っている、しまいは、

「いいわよ、うんと苛めるから。泣いたって許さないわ」

と云うが早い、彼女は洋美の顔の上にどっかとお尻を据えてしまいました。

洋美は口も鼻も、そして顔全体を照子のお尻の下にどっかりと踏み敷かれて、呼吸も出来ず、ただ苦しくて腕くだけの哀れな有様です。「ヴィナスの」苦しみとでも云いましたよ。玉乗りお花の大きなお尻に押し潰された一寸法師の緑さん(註14)やジャング(註15)の味わった苦しみでしょう。男性をこんな目に遭わせて愉しむ女性の話は、外にもあります。

シュミーズ姿もあでやかにベッドに腰かけていた鈴宮郁子は、足下に跪いている山口課長をふたたび蹴倒した。ストンとひっくり返ってあわてて起き直ろうとする山口の上に襲いかかった郁子は彼の胸の上へいきなりどさんと馬乗りになってしまいます。踏みつぶされた蛙のように山口は郁子に押しひしがれて郁子の両脚の間から首だけ辛うじて覗いている恰好で、アップアップあがいています。「あたしのお尻が重い、軽い、よく判るようにしてやるわ。サア、重い、軽い、どっちなのサ」

山口はひっくり返された亀そのままに、身動きも出来ず、大きな口をあけて苦しい息を吸いこみながら、上からぐっとのしかかっている郁子を見上げた。郁子の逞しい重みのため

め、山口は顎が外れそうな重圧を受けて、軽いにも重いにも、一語も発することが出来ません。その苦しみを郁子は、さも気味よさそうに見下しています（三十年三月号二百十八頁真砂十四郎「ヴィナスの重石」）。

山本節夫氏も又、幼い頃から組敷かれた体験を豊富に持って居られます。二年下のK子は、節夫の顔をよく敷き潰す女性です。女中のキヌも恐らく節夫を敷いたと考えられるフシがあります。と云うのは、キヌのしているところで、節夫がもう一人の女中キヨウを馬にする件^{くだ}りがあり、その中で、「私はキヨウを仰向けにすると顔の上に腰をおろした。發育した少年が若い娘の顔の上に腰をおろす光景を眺めたらどんなであろう。キヨウは、これにはただ観念の眼をつぶるだけだった。キヌは横目でみながら『お坊ちやま、弱い者いじめはいい加減になさい。あとでキヌがいじめてあげるから』そしてキヨウを許した私は、今度は同じ事をキヌから実行されたのである。』と書かれているからです。これは或は誤解かも知れませんが、このキヌが男の子の顔の上に尻を下ろした女性であることに、ほぼ間違いないでしょう。節夫が、「土伏せ^{どふせ}って随分乱暴なんだね。」とキヌに聞くと

「本当は顔の上に乗っかちやうんです。よく男の子をいまの様に泣かしてやったけ^け」と答えています（三十二年六月号四十五頁）

鷹野めぐみも、よく男性の顔を尻に敷くのが好きな女性です。小学一年の時、明男が、めぐみに意地悪して坐らせまいと、彼女の椅子の上に横たわります。ところがめぐみは何の躊躇もなく明男の顔の上にペタリと腰を下してしまいました。級友達、環視の中で、わざと、ぎうぎう押しつけて明男の無ざまな姿を見せつけてやります。五年生の頃になるとばあやオハナの息子勇一の顔を敷く様になり時にはわざわざオハナの前に勇一を連れて行って、そこでやります（三十二年一月号百二十九頁「半生記」）。こんな彼女でしたから年頃の娘になっても、兄の顔ぐらい当り前の事に敷いてしまいます。兄と、その婚約者の貴美江と三人でトランプをやっているとき、兄と喧嘩となり、すばやく後から襲いかかった彼女は、忽ち兄を引き倒しました。

「あッ、こいつ何をする。おてんば娘」
兄は起き直ろうとしましたが私の奇襲が早くいち早く兄の胸の上に馬乗りになってしまいました。

「まあ、めぐみさんたら」と貴美江さんが笑いました。兄は私に組み敷かれたまま、「おてんばな妹を持った兄を見て下さい。いつも此の始末なんです」

と貴美江さんをみて笑います。

「貴美江さん、兄のおよめさんになったら毎日こうして、いつもお尻に敷いてないと駄目よ。男なんてすぐつけあがるから」と云うと、貴美江さんもおてんばなくせに、結婚と云われたためか「まあ」と顔を赫らめました。

私は勝ち誇った様に悠々と組敷いたまま「貴美江さんもやりなさいよ。少し苛めてこらしめないとかせになるワ。レディーの頭をぶつなんて、貴女、いつも撲られるわよ」

と云うと兄が、

「冗談じゃないよ。僕はそんな男でないよ。お前だからやったんだよ。女の人なんかにそんなことするものか」

と云ったので、

「まあ、私を女だと思ってないのね」と云って、兄の顔の上にペタリと腰をおろしてしまいました。

「貴美江さん、一緒にやつつけよう。さあ早くのるのよ。私の後に」

私は恥ずかしがっている貴美江さんを冷やかす様に云って笑い乍ら、私に組敷かれてもがいている兄の顔を、お尻でぎゅうぎゅうと押さえつけていました。(三十二年三月号百三十四頁「半生記四」)。

こうして、義妹から、男を尻に敷く楽しさと悦びを教えられた貴美江は、今では毎日の様に夫をお尻に敷きながら、とても幸福な生活を送っていると云う。

「マゾヒズム第一景」で、春子は夫、三郎を仰向けに寝かせて、その顔の上にとっしりと腰を掛ける話がある。三郎は、春子さんに敷き潰されて呼吸も出来ず、それにぎゅうぎゅう仇とばかりこづき廻され、半殺しの目に遭わされるのです(三十二年七月号百六十頁)。

明夫(小学三年)は「ごめんよごめんよ、あわてて跳き出したが、徳郎はどつかと組敷いたままで起きさせない。「由美ちゃんも乗れよ」「ウン」由美子(小学三年)は、いたずらッ子そうな顔を見ると、明夫の顔の上にお尻をのせてしまった。鼻も口も塞がれて呼吸が出来ない。「むむむ」と苦しみのうめきをもらすが、上の二人は「ハイドウハイド

ウ」と面白がって身体をはずませるので、明夫は死にそんな思いをする(三十二年九月号百三頁)。

春木俊野は、東京へ出て来た頃(註13参照)、三十二、三才の見知らぬ女性から旅館に誘い込まれます。風呂から出た彼女は、

「ね、今から三十分、私に飼われて頂戴。お願いだから私の云うなりになって」と俊野に云うが早い、俊野を押し倒してしまった。俊野はあっけにとられますが彼女はやがて俊野の顔の上にドッカーリと腰を降してしまつた。そして

「男の人が息が出来ずに苦しむでしょう。それが好きな、フッフ」

と云うのです。その時彼女が何を身にまわっていたかについては、書いてありません。三十分も下敷かれていたでしょう(三十二年三月号四十二頁)。

阿南弥生子(五尺三寸、十五貫)は、ウキウキと喬介を組敷いた。と、その時「奥さま!」と云う女中の声がしたので、己むを得ず喬介を寝台の下に蹴込まなければならなかった。もし、この瞬間に邪魔が入らなかつたら……そのまま、喬介の顔の上にドスンと大きなお尻が落ちて来る所だったのです。

喬介の荒い息使いは、まだ止まない。おごりたかぶった弥生子の感情は悦びの絶頂に達した。虐げられたひとりの哀れな男が彼女の身体の下敷となつて横たわっている。(三十年四月号二百三十二頁、馬族保「牛乳風呂の饗宴」)

この件りから、弥生子の尻が喬介の顔を敷いたと解するには、幾分無理がありましようか。

マゾ通信の男性を皆、集めて片っぱしからギユギユ云わせて見たくて、ゾクゾクしている別府の荒井貞子と云う女性は、小学校五年生の頃、八つになる従弟と喧嘩して投げ飛ばし、顔の上に馬乗りになつたと云います。この人は身長五尺五寸で、熊ん蜂を思わせる逞しい女体の持主です。九州には日本人ばなれした顔だちの美人が多いと云う話ですが、彼女もその一人なのでしょう(三十年四月号三百十頁、読通)

以上の如く、女性が仰向きの顔の上へ、ペッタリお尻を下ろして見も出来なくしてしまつて喜ぶ(註16)例もありますが、亦俯伏せになった所を頭を押さえて、地べたに相手の顔を蹴る例もあります。

(十一) 顔に泥を塗る

山本節夫氏が「猥奇の男」を紹介する件りに、「男の馬に跨がって赤いシゴキを手綱にしてハイシ、ハイシと調子をとって這わせた女騎士が、仰向けになった男の顔の上に尻を下ろす」(三十年七月号百五十八頁)とあります。

又、山本氏が高校(旧制)三年の時、下宿した家に女学生が居ました。彼女は、弱い者イジメをしている自分の弟(小学生)を引きずり倒し、傍らの坐布トンをとると、俯伏せにした弟の頭の上にかぶせ、自分はその上に馬乗りになると、さあフトンむしだぞ。降参か」と云って、お尻をどしんどしんと動かすのでした(三十二年七月号百五十七頁)

この女学生の名前は、わかりませんが、彼女を山本氏が肩車(註17)して床の間に掛け軸をかけさせる降りの描写をついでに引用して置きましょう。

「えっ?」と彼女は聞き返したが、すぐに子供っぽく相槌をうった。私がしやがむと彼女は勢よく私の肩に脚を乗せた。横目で見ると、赤いガーターの喰い込んだ太腿が白々と見え、初々しい乙女の香りがツンと

鼻を打った。彼女はそんなことには頓着なく、重心をとることに精一杯。やがて私が立上ると、「アー楽チンだ」といいながら私の肩の上ではしやいだ。仕事が終わってから一回、部屋の中を廻った。「ああ、いい気持。馬に乗ってるみたい」……(三十二年七月号百五十七頁)

鷹野めぐみは、男の頭を俯伏せにして、その上に尻をのせた事こそないかも知れませんが、はね返えそうと懸命に手足をばたつかせる明男の背中の上に馬乗りになっている彼女は、彼の頭をぎゅうぎゅうおしつけます。ですから明男の顔は、砂と土の上にこすりつけられ、口の中が泥でジャリジャリの目に遭うのです(三十一年十月号百三十五頁)「半生記」。めぐみのお転婆振りは前にも出ましたが、とにかく、やたらに膝の下に敷いてしまわないと、おさまらない女性です。彼女に組敷かれた男性は、名前のわかつているだけでも何人居りますでしょうか? 書生、明男、兄さん、勇一、哲夫、木原、……そして、彼等は何回となしに、組敷かれ、潰され、這い廻らされたのです。この外にも彼女に思いのまま凌辱された男性、女性は何枚挙にいとまないことでしよう。「私とつきあっている人達も

なかなかそれを云わず、思いきって私が女だてらに組敷いて、顔の上にお尻を下ろして、ぐいぐいこずいたりすると、君は魅力があるとか云って、今後はそれをいつも望んでいる様です。」と云う彼女からの通信(三十二年一月号百六十頁読通)によっても、それは充分裏書きされます。

顔や頭にまでお尻を下さないにしても、女性、ただ無造作に組敷いてしまう位の話に至っては、これまで述べて来た外にも挙げ尽すのが寧ろ困難である位あるのではないでしようか。

(十二) 首のり

馬として御した場合は、大抵潰れるまで、いやペチャンコに潰れても尚、乗りつづけている彼女等の事です。女豹の如く獲物の上に跨がってしまうと、自分の脚が相手の咽喉を圧迫する辺まで騎座を蹴り上げて行くのが珍らしくない様です。獲物の肩を乗り越えた彼女達の太腿は、つり行く征服の快感に酔って、自然と、獲物の顔をギッチリと(或は万力の如く)、挟み付けてしまうのでしよう。その例は各所に見られます。三木恵子の最初の体験談と、女学生だっためぐみが哲夫

(小学五年)を馬にする場合を取って見ましよう。

……何とかして本当に女性を組み敷いてみようと考え始めました。しかし、やはり恥しくはあり、それにめったによいチャンスがありませんので、この一年間に二度しか実行していません。二度とも長瀬さんの真似をして相手の顔を太ももの間にはさみ込んで、太腿でうんと喉を絞めつけてやりましたが、其の時の快さは全く大変なもので私は気も遠くなりそうでした。本当は最後に相手の顔の上にべったりお尻をのせて、息が出来ない様に口、鼻をふさいでやりたかったのですが、いざとなると、あまりひど過ぎる様な気がして、これだけは未だ出来ないうえです。近い内に、今度こそ一と思いに可愛らしい顔をお尻の下敷きにしてやりたいと思っています。(三十一年九月号百七十四頁。読通)

哲夫は手足をふんばって、はね返そうとしましたが、私は哲夫の両腕を膝頭の下にしっかりとふまえておこしません。とうとう哲夫は

「ごめんなさいよオ、ごめんなさいよオ」と泣き出したのです。春の夕暮れの公園

の中ですから誰も居ないので。私は「泣いたって許さないから、泣くともっとぶつよ」

とおどして、すっかり抵抗しないと判ると、哲夫の上に馬乗りになったまま身体を前の方へずらして首の上に跨がり、両脚でぴったりと顔をはさみ、ぐいぐいとお尻でおさえつけたのです。哲夫の唇からもれる熱い呼吸。男の子を完全に征服した快感、私はもう憎しみを忘れてこの快よさにのみふけていたのです。(三十二年二月号六十七頁「半生記(三)」)

中学四年生だった兄を妹と二人でぎゅうぎゅう組敷いた時も、めぐみは首に乗っていましたが、貴美江の面前で、兄の顔を敷く時(註18)もやはり最初そう云う姿勢を取っていたのでした。秀子が俊野をやっつける場合もそうでしたし、長瀬昭子の場合も戸破貞子の場合も、山本節夫を組敷いたK子の場合も勿論そうです。又、昭和三十一年十一月十二日のお昼すぎ、飲屋の女二人が、酒代を払わなかった四十男を上野公園内で太腿も露わに組敷いた折も、やはりそうでした(三十二年二月号五十四頁「見たり聞いたりためしり」)。

山本氏の云う「首のり」もほぼこれと同じでしょう。この語は彼の「イタセクシユアリス」中、二カ所で出ます。キヌが強盗の芝居をする件りで、「私の腹の上にデンと尻を下ろすと『何だ、これっばっち。もっと出せ。出さねえとこうだぞ』キヌは、ずいと身を前にずらすと例の首のりの形で私の顔を両脚ではさみ込む。」(三十二年六月号四十七頁)とあります。「例の首のりの形」とは、キヌが、節夫を「土伏せ」た時、

私は、わざと私がいてはね返そうとした。キヌも段々本気になって、お尻をぐんぐんズリ上げて来て、とうとう私の首の上に尻を下ろしてしまった。一寸キレ長の大きな目で睨みつけながら「さあどうだ。降参か。」(三十二年六月号四十五頁)

という件りを指していることは明らかです。千恵子の脚は泰子の顔を挟んでいます。泰子の体が海老責の様な恰好でさえなければ、「首のりの形」をとることが出来るわけです。

(十三) あゝ、痴人

馬場喬次氏は、「女性乗馬考」の終りの方で、人間馬に言及して、「人間馬は今迄数多

くの文芸作品や実話等に女性が男性を四つ這いにさせ、その背中へ跨がると云うわけですが、あまり例が多い為、とかくマンネリズムに落ちやすいわけです。」と述べています（三十二年四月号五十五頁）しかし、あまり例が多いとまで云えるとは僕には到底思えません。寧ろ稀ではないでしょうか。映画に至っては、わずかに「無頼の谷」のデイトリッヒ乗りを挙げ得るのみではありませんか。「十戒」の馬乗りシーンでさえ、考えて見れば「人間馬」の名に値するでしょうか。京マチ子が、四つ這いになった宇野重吉に跨がる「痴人の愛」にしたところで、跨がる」と云う言葉を用いるさえおこがましい程であることは、馬場好男氏も指摘（三十三年八月号百十二頁）している通りです。（ナオミが熊谷の胸に飛び上って、踏台にして電灯を消すところすらありません。）ミユッファ伯を馬として這い廻らす「女優ナナ」に至っては、原作からして、ナナがその上に騎乗することになっていないことは勿論、映画では馬さえ出ません。

脱線して申し訳ありませんが、「痴人の愛」は原作に忠実に是非再映画化して戴きたい希望です。原作には、少くとも三カ所で、

馬乗り遊びが演ぜられます。二度目の時は、どしんと十四貫二百の重みで、のしかかったナオミは、手拭を手綱にいつまでもいつまでも馬が、へたばってしまいうまで面白そうに乗り廻しています。

「まあ、何て云う小さなよたよた馬だろう！ もっとし、っかり！ ハイハイ、ドウドゥー！」

三度目の時は、ナオミから散々意地悪いからかいを受けた譲治は、もはや我慢がし切れなくなって、彼女の足下に跪すく。「じや己を馬にしてくれ。いつかのように己の背中へ乗っかってくれ。どうしても嫌なら、それだけでもいい！」こう云った譲治は、やはりナオミを乗せて馬の様に這い廻りたかったのだでしょうが猛然として、どしんと彼の背中の上へ跨がったナオミが、「さ、これでいいか。」と男のような口調で云いますと「うん、それでいい。」と云ってしまいます。ですからこの場合は真の人間馬ではなくて、文字通り背中へ乗っかってもらったただけだと見なければならぬでしょう。

しかしこの外、ナオミを叩き出してしまった際には、彼女の古着を引っ張り出してそれを何枚も背中に載せ、彼女の足袋を両手に嵌

めて、部屋を四つ這いになってグルグル廻ってみるのです。空想の中では、彼女の体が背中へぐつとのしかかっているのです。若し彼女が、この後も一度私の所へ帰って来てくれたら、私は何より真っ先に再び彼女を背の中へ跨がらせて、この部屋の中を這って見よう。それが出来たら俺はどんなに嬉しいか知れない！ それこそが譲治にとって、この上もない幸福であるのです。

さればこそ、「たしかに私達は我が身を馬と想定する時、先ず『打ち乗られたる』己が姿を想像するのが常である。直接に女騎士の全体重を我が身に支える際の快感はまことに云い難いものがある」と沼氏は述べる（三十二年四月号百六頁「手帖第八十八」）。「確かに」と馬場喬次氏も書いています。「柔かい臀肉と快い重さ、胴の両側から下った、白い柔かい太腿、美しい足、そして太腿と足で胴を締めて貰った時は天にも上る気持でした」（三十二年四月号五十五頁）それに対し、乗っている側の西田佐代美は「ぎめっと私の豊満な足で締めつけられて可愛くあえぐ細い胴、この征服感は何もいわれぬものでございます。」（三十三年七月号百十五頁）と云っていますから、乗るも乗られるも、お互に天にも上っ

ていれば世話はありません。ついでながら、暗闇のカヤの中で雌の海豹と化したナオミが畳の上にどっかと腰を下ろすと、寝ている雄の海豹共を恣に迫害するシーンもなければ困るのです。

「どう？ 譲治さん、この光景は？」

「うん、……」

「うんとは何よ。」

「呆れたもんだね。まさに海豹に違いないね。」

「ええ、海豹よ。今、海豹が氷の上で休んでいるところよ。……」

ナオミの役には、本当に馬乗りの好きな女優を起用して下さい。ナオミ希望者を一般から募集してもよろしい。楽しい審査風景が想像出来ます。

(十四) 映画の格闘

かくまでも脱線に及ぶが程に、映画では、人間馬の快感を楽しむシーンは絶無に近い。馬は言うに及ばず、快楽としての組敷きすら見る事は至難です。映画に比較的、屢々出る組敷きシーンは、組討ちをする喧嘩のシーンでしかない。従って、お互い同士が敵意と憎悪に燃え合っただけの闘争であって、フザケ半分

に楽しんでる、などと云うのとはまるで違いうわけですね。

「浅草三四郎」でバー・クララのマダム(日野明子)が、女スリ、ロケットお竜(三条美紀)を捻じ伏せる喧嘩は、かなり長いシーンでした。この種のシーンでは最も長いのではないかとさえ思われます。お竜は、むこう脛を蹴り上げる事の達人で、今までにも、クララをその手で痛い目に遭わせていました。そのためか、クララは、倒れたお竜を靴のまま蹴っていました。その脚をやがてお竜が引っ掴んで捻じ倒し、一度はお竜の方が上になったかに見えましたが、撥ね返したクララがやっこのことで態勢を挽回しかけます。見かねて三四郎が止めようとしますが、かえって胸をいやと云う程蹴上げられてしまう。多分お竜の足によったものでしょう。やがて、クララは完全に、——全く完全に——、お竜のお腹に乗ってしまう。見事に馬乗りになったクララは、両手で征服したお竜の首を絞めてつけています。しめ殺すつもりなのでしょう。か。苦しい抵抗をつづけていたお竜もやがて力つきたのか、ガククリと動かなくなっていました。上のクララはそれでもなお乗ったまま放そうとしません。よっぽど敷き心地

がいいのでしょうか。日野明子と云う女優は例えば鷹野めぐみの様に、本来馬乗り好きな女性なのでしょう。征服感に我を忘れ、陶然として組敷いているクララの頭から、バケツに汲んだ冷水を三四郎の手下がブツ掛けます。クララが如何にうっとり勝利感に酔い痴れていたかは、そのバケツ一杯の水がすっかりかけ終るまでさえ、なお組敷いたままであったことから察せられると云うものです。演ずる日野明子は、いかにも惜しそうに立ち上るのです。びしよぬれになったクララは、水を掛けた手下に躍りかかりますが、空のバケツをその男の頭にカブせてしまうだけです。折角躍りかかったのですからついでに彼をも亦、お竜の上に捻じ伏せて、颯爽と体はずませてやればよいと思います。更に慾を云うなら、どうせ負けることになるのでしたら、お竜が、はね返されるまえに、もっと思う存分、クララを敷いとけばよかった。これは「居酒屋」の洗濯場シーンにならったものでしょうか。「居酒屋」では、ナナのお母さんが、倒れた相手の女の背に後向きに跨がったと思うとそのお尻を引きむいてまる出しにして洗濯棒(——板状に見える——)で力の限り叩きつけます。勝利の快感に打

ちふるえるその女の表情は、一寸、書き及べるところでありません。これなども比較的長いシーンでした(三十二年三月号一七二頁参照)その外、どんなのがあるでしょう。女同士がほんの一瞬、上に下にと取組み合う場合はありまして、クララ乗りの様な本格的なのはなかなかありません。

「美女中の美中」で、ジイナ・ロロブリジタが、ちよっと組討ちするところがあって、相手の女を組敷くところがないでもありませんが、感心する所まで行きません。同じ映画中あとで彼女が女ダルトニアンとなって勇ましく自転車(註19)に打ち跨がり、決闘場へと乗り込んで来るところがあります。そしてめちやめちやに相手をやつつけてしまいます。「男と女」でも塩田で女同士の取っ組み合いがありますし、「拳銃稼業(一)だと思ひます?」でも同じです、但しこの方は組敷いているところがほとんど見えない位です。

「熱砂の女盗賊」で、捕われて来た王女を、昔奴隷だった女盗の一人が、組敷いてふん縛るシーンが一瞬出ます。十年近くも前のことでしょうか、やはりアラビアンナイト物の美しい色彩映画で、ハレムの庭園にしのび込んだ少年をかばうため、男に飢えた美女たち

の中の二人が、八百長格闘を演ずることによって太主の注意を外らすところがありました。綺麗なうす絹をまとった一方の女が突きのけられてもはねのけられても、なおキヤーキヤー云いながら猛然とむしやぶりかかるすさまじさ。以来アラビアンナイトものが病みつきとなりました。

以上は外国映画ですが、日本では「美しき不良少女」「禁男の砂」「続禁男の砂」「人喰海女」等の中で見られましょうか。「美しき不良少女」では「山猫」由美が、ボスの娘まゆみを組敷く。この映画では由美を演ずる中原早苗が、大いに馬を駆け廻らせます。中原はやはり、馬に乗る事の好きな女優なのでしょうか。「禁男の砂」では、大柄な泉京子が露わな肢体で瞳麗子と格闘を演ずる。どっちが勝ったのかわからない。「続」の方でもこの二人が闘う。ここでは泉京子が勝つ。一寸瞳が組敷く様な瞬間もありますが、大体は一方的に泉の方が組敷きます。泉が着ている服は大きく縦に割れているものですから、相手を撥ね返した姿勢からサッと組敷くとあの見事な太腿が堂々と瞳を押えつける恰好になるわけです。上になった泉が、撲りに撲っているシーンが一瞬大写しになります、撲られ

ている方の姿がかくれてしまっています。場面があわただし過ぎて折角の場面も台なしです。カメラの据え具合をもっと工夫出来ないものでしょうか。「人喰海女」では、シヨッパナから海女同士の格闘場面になりますが、ただ撲り合いをしながら、上に下にと、ごろごろ転がり合うだけで、一方が、遂に相手を征服してしまうのとは縁遠い。何故、どっかと組み敷いてしまわないのでしょうか。いずれの映画にしても、大抵何だか遠慮勝ちな演技です。演ずる女優が格闘を好まないのでしょうか。

女同士ではありませんが、「義仲をめぐる三人の女」で、巴御前が実盛を討ち取るころにしても、「宝島遠征」で美空ひばりの演ずる桃太郎が鬼の大将を殺しそうになるところにしても、クララには遠く及びません。同様なことを、馬場好男氏が「マゾヒズム第三景」の所で、「青空娘」について指摘しています。即ち「……若尾文子が、弟を組み伏せる処が、何となく見ていて弱い感じがするのだ。動かないものにそっと腰をおろすと云った恰好で……云々」(三十三年八月号百十二頁)

【註】

註13 あとで出るジャンゴ潰しの項の話(昭

和二十四年頃、有楽町でおこった話）が実際体験であるとすれば、三十年五月号三百六頁読通と矛盾する様です。いずれにしても、春木氏が昭和二十四年に鹿児島から東京に來た事、現在三十一才位の年令であることはほぼ確実でしょう。

註14 これは、「(一)馬場さん有難う」の項で出た乱歩「踊る一寸法師」(三十年五月号二百四十三頁「沼速報欄38」参照)の話です。「と、ちようどその時、踊りつかれた玉乗女の大きなお尻が、彼の目の前にただよって來た。故意か偶然か、彼女は一寸法師の顔の上へ尻餅をついてしまった。仰向きにおしつぶされた緑さんは、苦しそうなうめき声を立てて、お花のお尻の下でもがいた。だが、その時、緑さんは大きなお尻の下じきになって息も出來ず、半死半生の苦しみをなめていたのだ。」

註15 これは後程「(四)ナオミ群像」で触れる。やはり乱歩の作「影男」——「断末魔の牡獅子」——のくだりです。「……いや足ばかりではない。その顔の上へ、二つの丸いだんだら染めのお尻が、はずみをつけて落ちて行き、そのまま顔を蓋してしまった。男は鼻と口と呼吸をとめられて、苦し

さに手足をのたうち、断末魔のようにもたえるのであった。」(三十年三月号二百八十六頁「沼速報欄16影男」参照)

註16 …上から腰を掛けお尻の重みで風船をつぶすと云う寸法、真白いすき通る様なスカートをひる返して可憐な乙達、或は恥かしそうに、或いは得意気に、皆喜々として、お尻の下に風船を破れつさせていた。(三十二年十月号百二十頁「テレビ通信」清水恵二「美女達のお尻が風船をつぶすアイスショー」)

註17 「貴女達は共に自分の奴隷に打ち跨りふざけたり、笑ったりしながら従者を引き連れ、騎乗のまま去った。乗られる奴隷が身を屈めると女騎手は一方の脚を奴隷の項越しにサッと跨らせて、肩の上に腰を落ち附かせる。と忽ち男が立ち上る。と云った工合にして乗るのである……」

黒人の方でどう思おうと、白優黒劣の序列は天意である。白人女性が黒人を馬にすることに躊躇する必要はないわけだ。

(三十二年七月号五十一頁「沼手帖第百十二」)

(三十年十二月号の裏表紙の絵で、裸女が原始人の肩に騎っています。なお「家畜人

ヤプー」用語アシク用例5の図参照。三十二年二月号八十五頁)

註18 「(十)ジャンゴ潰し」の項

註19 自転車に飛びのったとき、裾が尻の下にしかれる。ペタルがふみにくいのか彼女は二、三度腰を持ち上げるようなズラすような所作をしてその裾をひきだし、半開きであったスカートの花卉を一杯に拡げ、サドルを完全にスッポリ包みこむ。サドルはその闇の中で、彼女の重量の下でギシギシなっているではないか。彼女がよしズボンを穿いていたとしても、いや、かえってその方がいいかもしれない。膝から下の両側に流れ下りる線が美しく、その足先はつましくも可愛い。そして脚、そうだ、あの両脚は挟まれて苦し気にチョッピリ覗いているサドルの黒い金具は、自分自身に与えられたその位置をどう考えているのか。私は軽い眩暈を感じる。衝動にかられ私が彼女を呼止め、必死でこう云ったとする。「どうかお願いです。私のこの体を、いやこの顔をサドルの代りに使って下さい。思いきりよくこの顔の上に腰掛けて下さい。」(三十三年十月号百二十一頁天野哲夫「マゾヒズムのいざない(1)」)

奇譚クラブ最近号総目次
昭和三十三年

○七月号（復刊第二十九号）

〔定価二百円〕

口絵

孝傑作集一本足の窄衣……四馬 孝面

緊縛映画場面集

縛られた女優達……提供田辺・阿部

東映「鬼面竜騎隊」……星美智子

大映「おけさ鴉」……近藤恵美子

大映「遊侠五人男」……中村玉緒

責給「浴室のPLAY」……杉原虹児

特写「腰元折檻」……村井知可子

縛り写真「囚衣の女」……大塚啓子

縛り戯画「藤と坐禪草」……南村俊平

或る通信「特異な角度から」……九雅比古

話の屑籠「女中の「拷問記」」……辻村 猛

黒田史朗氏に寄せる……原 正志

創作「黒い霧の中で」……黒田 史朗

ナースの洗腸日記……岩村美智子

女体風俗（さよならの巻）……牧 高志

条痕（じようこん）……横村 奏

誘拐されゆく美少女の詩……菅合はるみ

臨時増刊号（復刊第三十号）

SADO特集号

○八月号（復刊第三十一号）

〔定価二百円〕

口絵

孝傑作集 拷問倉……四馬 孝面

緊縛映画場面集……提供・楓月 太郎

新東宝「朱桜判官」……若杉 嘉津子

新東宝「毒婦夜嵐お絹と天人お玉」……若杉 嘉津子

新東宝「幽霊沼の黄金」……瀬戸 麗子

新東宝「サタン城の魔王」……瀬戸 麗子

ニューモデルの緊縛模様……益田房子嬢

俊平戯画集……南村俊平画

「床間のニューデザイン」「飾櫛」

「ロボット」「模型鉄道」

写真後手（高小手）縛り愛川 悦子

女殺油地獄（近松について）南方 純

「サタン城の魔王」の縛り雑感佐渡 京子

洗腸と妊娠……羽村 完

婦人補導院の保護具……佐渡 京子

映画に見る男性責……梶 孫一

最近の時代劇縛りシーンから嵯峨美也子

「研究発表」切腹風土記……壬生 三郎

現代マゾヒズム芸術時評……原 忠正

妖艶木乃伊地獄……海野 愛造

残虐なる女性達……森本 朗

女斗美相伝……土俵 四股

話の屑籠……辻村 隆

告白小説「屈辱の砂」……横村 史朗

マゾヒズムへのいさな……黒田 史朗

愛好者の記録……とや 高志

「腰元女の吊責」と題して……牧 高志

魔教団NO8（その六）……土路 孝子

体験「鼻いじめのこと」……花房 好男子

マゾヒズム風景……馬場 純

切腹特集号に関するアイデア……南方 夫

体験記「ナナ」の人々……加 時夫

E・Gクラブ撮影会報告……泉 良太

歌舞伎にあらわれた輝美……菅 卓史

創作「紅山彦」……小野 比呂

私の女性下着コレクション……路加 隆

懸賞作品「身悶える妖精」……比 隆

妖虫は夜にうごめく……辻村 隆

読者通信

○九月号（復刊第三十二号）

〔定価二百円〕

口絵

孝傑作集 いぶしセメ……四馬 孝面

俊平戯画二題……南村俊平画

「大井川渡渉」「河童と少女」

縛り絵責給師の苦心……滝れい子画

縛り写真特報……大塚啓子嬢

縦と横の線、柔肌の熱き血潮

緊縛映画場面集……提供・梶・田辺

日活映画「殺人計画」完了一日高澄子

日活映画「悪魔の爪痕」筑波 久子

東映「少年猿飛佐助」山崎 昭子

東映「変幻胡蝶の舞」桜町 公子

入選作品「草雙紙に於ける責場の研究」……杉原虹児画

創作 受刑の肌……近藤 彦

通信 最近号を読んで……近藤 彦

「檻」への執着（その二）……池田喜代子

マゾヒズムへのいさな……黒田 史朗

「戦場にかける橋」とぼくの責小説……史朗 策

続・女斗美短歌……土俵 四股

幕末奇談手枕お千代……海野 愛造

今月の縛られ女優達……大河 樹朗

残虐なる女性達……森本 朗

切腹風土記「江戸の切腹」……壬生 三郎

ニース小説「復讐船」……横村 奏

愛好者の記録……とや 高志

体験記「ナナ」の人々……加 時夫

お座敷シネ・プロ始末記……泉 良太

マゾヒズム風景……馬場 純

「奴の拳銃は地獄だぜ」に思う……浦田 好男

創作「紅山彦」……小野 比呂

裸馬との対話……三 卓史

手帖の縛り映画……乗 貴子

今月の縛られ女優達……沼 正子

文部大臣の専属室……鴉 美也子

魔教団NO8（その七）……土路 孝子

現代マゾヒズム芸術時評……原 忠正

告白「マゾヒズムの谷間」……鍵村 江津子

読者通信

○十月号（復刊第三十三号）

〔定価二百円〕

口絵

孝傑作集 汚物漬け……四馬 孝面

俊平戯画選……南村俊平画

「縛りごっこ」「水飴のプール」

縛り写真特報「細目」……大塚啓子嬢

縛り写真「指紋なき男」……益田房子嬢

洋面スチール二題……編集部・選

伊映画「指紋なき男」……編集部・選

責給「腰元折檻」……久留木 昭子

告白「私の青春履歴」……川西 毅

私の縛り写真報告……池田喜代子

マゾヒズムへのいさな……黒田 史朗

話の屑籠……辻村 隆

創作「最良の仲人（一）」……若松 高志

アプロ目八……佐渡 京子

麻生保氏の生活と意見（八）……南 夫

休験記「ナナ」の人々……とや 高志

「ヌード春泥」から……佐渡 京子

愛好者の記録……菅 卓史

今月の縛られ女優達……大河 樹朗

殊なる女性達……森本 朗

創作「紅山彦（完結篇）」……千 卓史

本誌「緊縛絵画」論……千 卓史

切腹風土記「切腹の研究」……千 卓史

創作「偽縛（ぎばく）」……千 卓史

殉国女性に捧げる……中 弘

レイコン「女水兵哀史」……市田 章

入選作品「女水兵哀史」……市田 章

洗腸と妊娠（続）……市田 章

告白「マゾヒズムの谷間」……市田 章

読者通信

告白「マゾヒズムの谷間」……市田 章

告白「マゾヒズムの谷間」……市田 章

告白「マゾヒズムの谷間」……市田 章

告白「マゾヒズムの谷間」……市田 章

告白「マゾヒズムの谷間」……市田 章

告白「マゾヒズムの谷間」……市田 章

告白「マゾヒズムの谷間」……市田 章

告白「マゾヒズムの谷間」……市田 章

告白「マゾヒズムの谷間」……市田 章

告白「マゾヒズムの谷間」……市田 章

告白「マゾヒズムの谷間」……市田 章

【定価二百円】

〔定価二百円〕

南村俊平

スクリーンの緊縛場面……田辺・増田

東映作品「薩摩開拓」……花園ひづる
東映作品「丹下左膳」……美空・松島

ニユーガールの緊縛模様……田代悠子

孝傑作集裏切者の私刑……四馬孝画

女侍 人喰鬼の腕を斬る……南村俊平画
見入 犬云の女の縛り絵……三条 卓由

新聞切抜通信……………藤木仙次

体験記「ハーナ」の人々
胸毛公………菅良太

愛憎裸女……………綠猛比古

現代マゾヒズム芸術時評……原忠正

幻想小説「家畜人ヤプー」……沼正三
今日の博覧会女憂童……大町京珠樹

話の屑籠……………辻村隆

相撲雑誌……津田
映画スナツプ七人若衆誕生……牧
高素

愛好者の記録……………とやま
三系 皇中

三多
倉作 吾才香
切腹研究夜話
……
中康
……
三引通

創作妖婦の生餐……東町三郎
 昇の妹について……羽村空

魔教圈NO8 (その十二) 土路草

馬場好春の作家へ………
創作法と軍服……………植村

蠟人形に想う……………生地野添
九寸奇單……………吉備子三郎

懸賞入選 十七娘火焙哀話……有瀬 流子

1

10



貴誌を一年余り愛読して来ましたが、「魔境園」も、いよいよ完結となり、非常に残念に思っております。どうか再び筆を揮われんとを土路氏にお願い申し上げます。さて今までの「魔境園」について気づいたことを述べさせていただきます。第一に挿画ですが、文中の人物の顔を毎号、似せて描いて下さい。月毎に路子の顔が異なると云うのも、おかしいことです。それと今までのよい画は（大変、失礼な言葉ですが美加子や路子に対する私のイメージにぴったりする画という意味）「その十二」の百二十三頁、百二十六頁の路子の顔、この顔と出来るだけ同一にして描いて下さい。又、美加子について、は、「その二」の八十七頁、九十一頁、九十四頁「その三」の四十四頁、「その六」の百一頁などが比較的、美加子のスタイルや個性をよく表わしていると思いま

すが、特に「その二」の八十七頁が一ばんよいと思います。顔ばかりではなく、スタイルの点も注意して下さい。幸いと思います。この点、「その十二」の百二十三頁や、「その九」の百四十五頁などはよく書けているようです。同じ「その九」の百四十七頁の路子などは、まずいと思います。余りにも筋肉質です。それから今までの掲載分をひとまとめにして単行本にして下さい。中途から読んだ人でも大分、大勢いるだろうし、私などのように数少ないこの様な小説を保存しておきたいと思う人もあると思います。ぜひ計画実行して下さい。その時は前に述べたような画を出来るだけ多く載せて下さい。（奇巧の熱狂ファン）

愛読者の皆様、お元気ですか。私は東京に住み男性美を愛する二十四才の平凡な男です。最近、上京したばかりなので親しい友人もなく、いつも空想だけで満足しなければならぬのです。私の理想は男性（二十代の若者）の渾美及び緊縛にあります。銭湯などで引きしまった若人の裸体を見る度にこんな男に純白の褌をしめさせて後手に縛って見たい！手も足も引きちぎれるばかりに天井の梁から吊してみたい！と思います。前袋の中も狭く下腹に食い込む様に締められた褌の男が逆海老に縛られてコンクリートの冷い床に投げ出され、油汗が全身ににじみ出ていく風情！浅黒い肌と男性特有の強烈な体臭を発散させて高手小手、海老責めに縛られて始みたいな格好で転がされていくチンピラ風の慎太郎刈りの男！

◎写真特写引受◎

特別に変った着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他についてお返事いたします。

（返信料同封下さい）

云う様に、サポーターでは褌の様な緊縛感が味わえません。しかし私の様に愛用以外に観賞？の立場に立って見れば、サポーターにも又、実生活に応じたスマーティストとスポーティな面も感じられ、本当によいものです。現在は若人のうちではマンボズボンのびっちりした細身のものが流行している関係で男性のエチケットとして半数はサポーターを着用しているでしょう。又、デニムのマンボは、その実用性から軽い労働をする者にとっては大変便利です。臀部にびっちり食い込み余裕を残さない緊縛感は太股に感ずるデニムの感触と共に絶えられないものです。上半身を裸体にして天井の梁から吊り下げられた男は、コルセットの様に腰部を締めつける様な細身の紺のデニムズボン、ありとあらゆる屈辱を受けて力一杯抵抗する若い男の半裸体、身を刺す痛みの中にも微かに沸き上る被虐の喜びを表わすが如き若人の曲線……。又々、悪夢のような妄想が私の体を駆け

廻ります。こんな私に呼びかけてくれる方がありましたら、ぜひ御交際願います。(東京柏山多津夫)

初めてお便りいたします。僕はアクロバットに非常に興味を持って居ります。女性が自由自在に極度の曲線を描くとき非常な興奮を覚えます。そして、どんな訓練をやっているのか知りたくてたまりません。二、三年前、フランスの曲芸師という短篇映画が上映されましたが、その中にアクロバットの練習シーンがありました。水着様の体操着を着た女の人が片足を後方に跳ね上げ、教師風の男がその足を持ち爪先が頭に近くなるまで力一杯持ち上げたり、うつ伏せになった女の体の上に乗って腕から肩のあたりを力一杯、後方にそらされたりしているのを見て心臓が止りそうになったくらいです。短編モード映画によくアクロバットのシーンが一コマ二コマありますが、そんな時は何回も見ています。どなたかアクロバットに興味をお持ちの方、誌上での出現をお待ちしています。(京都SD生)

サド特集第二号。益々充実した外観、内容ですっかり刻の経過を

忘れました。豊富な、しかも精選されたグラビア頁が四馬氏と白頭巾氏の記事の中にまで延長され、文字通り特集の素晴らしさを表しています。四馬氏の麗筆による二十四ページと、特写フォト二十四ページにギッシリつまった面白さは特筆すべきものです。今回はそれらのグラビアページについての感想を綴ってみましょう。四馬孝傑は、どうせ密貿易の取引物でしょうから、この取扱いは当然です。単に縄ばかりでなく、首輪や荷札をつけてやれば尚よいでしょう。2 晴美の受難。意欲的な作品と思いますが、中でもイブシ責めは美しいものでした。3 新品第一号という美しい奴隷達がふえれば、もっと世の中が楽しいでしょう。4 嫉妬の鬼。みじめな立場の女に対して、責めての女がどうして靴を許すのでしょうか。観賞でなく、苛責なのですから、裸足にして冷気を充気を充分に与え、衣服等も眼に見える処に置いておくのが、よりよい賜り方でしょう。5 地下室の苦行。これは、どう考えても外せない拘束ですね。死ぬことさえ許さない厳しい苛虐は素晴らし

いものです。6 苦悶。逆エビにされた美女の眼の美しさは格別です。足首を背中へ、もっと引きつけてやったら尚、悦ぶでしょうに。7 吊し責め。隷従を強いられる女性でしようか。このような浅ましい姿を人見に晒すなんて、全く良い趣味です。8 黒眼鏡の女。醜い責め手と異り、スマートな美しい責め手は、案外頭に描いた自分の姿を現実に創造しているのではないでしようか。幾つにもくびれた女体で、加虐に対して充分の自信を誇っているではありませんか。余程痛めつけないと音を上げそうにありませんね。9 アクロの訓練。訓練は厳しい程効果があるものです……。10 捕われた商品。買手がひそかに覗く中で、奴隷の価値も面白いものです。美しい姿を柱の周囲に悶えさせて裏表を見た挙句、次には調教の場を見たいもの11 乳房責め。このような拷問はあまり好きではありません。乳搾りなら、この女体も飲んで枷を受け

てくれるでしよう。12 人間フープお客様には笑顔でなければ失礼ですね。13 檻禁。生理的な要求を泳えなければならぬ女体の素晴らしさは格別です。14 奴隷船。横にな

どうして済まして来たのでしようか。15 妙な吊責め。こうして愛されているのに抗議の言葉など必要がないでしよう。16 雨中の引廻し。せっかくの美女です、革かゴムのマスクをかけ、裸足にして鎖で足首を繋いでやったら満点でした。17 奈落のリハーサル、アクロの訓練は、いつでも楽しいものです。18 鼻責めテスト。美貌のオダリスクの誕生も間近でしょうね。19 犬の訓練。一号舎の構造をはつきり知りたいものです。私も愛する人と、こういつた楽しみを持ちたいと思います。20 女体輓馬。楽しいお伽話ですが、装着具をもっと飾ってもよいのではありませんか？殺風景では勿体ない話です。21 筏ながし。女性美しく生れついたこと自体が既に大きな罪なのです。充分に罰を与えられて然るべきなのです。私はそう信じて居ります。被縛女体特選集。1 仇姿黄八丈。眼の表情は流石に絹川嬢ですが、何よりも手首の吊上げが忠実で、好感が持てます。そのために全身のこなしが実に女性らしく柔らかで美しいのです。胸の膨み、顔の向き、裾の乱れも佳く、綺麗な髪と猿轡が巧みにマ

ツチしています。この十七葉で、彼女の和服姿の良さも実証され、また華麗な肢体の活用も拡ったので、美貌の才女が男性に虐げられて悪の道に入り、就縛、拷問、刑死する迄のフォト・ストーリーを企画されるのもよいと思います。一ページは野暮ったく、二、三ページはエロチック、四ページは艶麗、五ページは端整というような絹川嬢の黄八丈は正に圧巻でした。2 縄さばき。浜本、三木両モデルのコンビが美しいポーズを作って下さいました。サド役の微笑の妖しさ、マゾ役の表情の可憐なことに特にマゾ嬢が閉じていた眼を見開らく辺り、背へ足をかけて首縄をしめ上げるサド嬢の表情と対象的な苦悶がよく表われていて、私は一遍に好きになりました。3 挑発の笑み。脚を縛った三葉は平凡で笑みが硬いので、顔はそらせても眸はカメラを見ることが大体良さそうに思いますが。4 被襲。これは綺麗な作品です。特に左側の二葉は美しいものです。5 深海魚。田中嬢を活かした面白い作品で、流石に杉原氏と思わせる独創的幻想の特写でした。6 哀れなる賓客。右ページは平凡。絹川嬢は美しい表情のすぐ隣りにいやらしい表情

を持ち合せている人ですから、表情には充分留意して下さい。それにアグラはエビ責めくらいで結構です。運転台に仰向けに寝かされた左ページの一葉は立派です。せっかくの首縄は大事に活用して下さい。絹川嬢も猿轡の似合う美人です。7 豊胸。愛川嬢の胸のボリュームは見事という他はなく、猿轡も生きています。8 絹布と絹肌。左上のフォトの佳良なこと。田中嬢は、もっとウエストを締め上げて良いと思うのですが。9 飾り人形。少々逞しさをもてあまし気味。もっと太目の縄で、大まかなバックで撮ったらと思えます。次の企画に、題して「お仕置人形」などは如何でしょうか。10 台上の贅。躰の捻転の見事さです。一枚一枚の眼の表情の佳さ、びったりした肌膚で、厳しい縛しめの躰を、磨かれた丸いお膳の上で悶えるさまは素敵です。黄八丈の和装と対象的なこの素晴らしさに惚れ惚れします。11 若妻の秘美。長橋祥姿の花坂嬢のポーズには抵抗が全くありません。といって外に表われ喜びもなく、只、忍従、諦観があるだけです。或いはそういう生活環境にあるのでしょうか。何か想いに沈む風情も良いも

のです。12 白い若鮎。これはどういう設定なのでしょう。私には若妻のプレイと見えるのですが。躰のこなしが少し硬いようです。13 監囚。黄八丈の和装、台上の贅の洋装に対して、これは絹川嬢の華麗な裸身です。右ページの憐れみを乞うような、訴えるようなフォトは絶佳。下の観念の仰臥も立派です。左ページの鼻責めで、眸の絶望的なことはギョツとする程です。これだけ完全な女体を見せられてはやむを得ません。これから私の頭の中は、絹川嬢を苛め抜き素敵なマゾヒストに仕上げることを夢見るでしょう。彼女の歯並びも大変気に入りました。14 三面鏡。手首がよく吊上げられた高小手ですが、黒い紐の方がよく見えます。これから何が始まるのでしょうか。四馬氏と覆面子白頭巾氏の読みごたえある文章もさることながら、視覚に訴えるグラビア頁の充実が特集号としての美点だと思えます。春日、愛川、浜本、三木という秀れたコンビや、絹川、花坂、大塚、益田という方達の御活躍を希い、更には大好きだった川端、伊吹、萩、坂口という諸嬢のカムバックを、切に祈って次の企画を娛しみに待つことに

致します。四月号グラビアの特写のフォトは近來にない快品でした。春日、愛川両モデルさんのコンビには初めて接した訳ですが、得難い雰囲気醸されています。春日さんが、ずっと落着いた貫録を見せて堂々たるサディスティンぶりです。愛川さんのマゾ役がまた好適で豊満な肢体を誇つても、伊吹さんや、大塚さんとは異質の柔らかさがあります。女性同志のコンビでは、今度のものの方が正統かも知れません。春日さんと伊吹さんのコンビでは体も大きく力も強そうな伊吹さんが、敏捷で美貌の春日さんに屈服するシチュエーションでしたから、プレイとか精神的なコンプレックスに因るものという説明が必要でした。それが愛川さんとのコンビでは、春日さんのポリウムが心憎い程です。(御結婚のせいだと思ふのですが) サド役、マゾ役の合意によらず、尋常の立合いをしても、やはり春日さんの圧勝を思わせる出来栄です。それは愛川さんの体量があれ程に豊かでありながら、崩れを思わせる程に柔らかく、被虐のポーズが演技でなくびったりするからです。日蔭の暗さのような哀れさが、全身のこなしににじんでい

るようで、緊縛であればある程、苛責が惨酷であればある程、美しく見えて来ます。春日さんがマゾモデルの女体を痛めつけければ、それだけ心のときめくような輝きを増すように。愛川さんは本格的な猿轡で呼吸も抑えられ、蹂躪されるとき忘れ難い美しさを残す女性です。今後、このコンビの活躍はファンを歓喜させるでしょうが、私はお二人の御健康と御多幸を心からお祈り致します。目次のカットと扉(十七頁)のカットはこの処、毎号素晴らしい、それ自体一つのストーリーをなしています。これからもこの調子が続けて欲しいと思います。懸賞入選作品の四篇は、いずれも読みごたえのある力作揃いで楽しく拝見致しました。この号で私が一番心を惹かれたのは、久留木氏の「飼育」でした。ヒロインの幸子のような女性を私は欲しています、それともかく残念なことに奴隷契約以後の描写がなく飼育の本筋が不明ですのでこれは続篇として発表して戴きたいのです。「魔教園」は胸が痛みます。どうも美女を醜男いたぶりすぎて、私には尻込みする構図です。周囲の女性が云うように、私はフェミニストなのかも知れま

せん。救け出されないなら、うんと残酷な方法でもよいから殺してしまった方が救いになると思えます。「バーナナの人々」は愈々佳境で、挿絵も佳良(ただ、一部逆のようでした)大いに期待されます。藤山氏の「落穂集」はまた新しい構想が現れて嬉しく思いました、更に藤山さんが健康を回復なさった由、愛読者として非常な喜びです。榎村氏、馬場氏、とやま氏の作品は、毎号愉しく拝見しています。牧氏のスナップ・シリズ、小野道子の眼許の涼しさがよく撮れていました、是非「弁天小僧」も取り上げて頂きたいと思えます。半弓で吊り上げられる青山京子については大河原氏も触れていらつしやらなかったのです、何故でしょうか。私の作品をまた一つ掲載して頂いて嬉しく思っています。この処、挿絵には満足しています。(近藤 一)

特集号の目次に「アクロの訓練」というのを見つけて、ハッとさせられ、急いで頁をめくりました。画のそばの短い文章がエキサイティングなイメージを次々に味わせてくれました。小生はMもSも大分、軽度なのでK誌の読者として

は、ごく末輩のような気がします、多数原理が絶対、主導権を持つて支配しているこの社会の中でどこかに居られる未知の同じような傾向の方に、ひそかな連りを感じたいと切望するのです。割腹や荒々しい緊縛は、小生にはどうも過度な刺激に思われ、何よりも美しい肢体の女性のアクロバットや体操の演技に強い魅惑を覚えます。それも華やかなステージの技よりも稽古場でのその訓練の方です。小生等が丁度、戦時に中学校で施されたあのスパルタ式の体育のイメージを、そのまま投影してアクロのトレーニングを描いています。冷たい稽古場、そこには体操用マットが敷かれ、平行棒や、ろく木が、きびしい訓練の象徴のように置かれています。普通のバレーと異なり、タイツを穿くことは許されないので、ピッチリと体に喰い込むナイロン・パンツとブラジャーだけに包んだ彼女の肢体は、どんなアクロバットも出来るようになるまで基礎訓練を受けます。逞しい青年教師は銀色のタイツか総ゴムのパンツをつけて、彼の手にはいつも細い柔軟な鞭が握られています。鞭が彼女の肢体に加えられることは、たまにしかないのですが

掛声の代りに鳴らされる鋭い鞭の音に励まされ追われて、彼女はきびしく仕込まれてゆく……。こんな雰囲気求めて居る方が居られますか。K誌の一部にアクロバットや体育(柔軟訓練)のアイデアを加えて頂きたくお願してペンを止めます。(東京 水野生)

○ 読者の一人として日頃、貴誌に託している希望を述べさせて頂きます。貴誌が他の類似した刊行物に比較して、最も特異とする点を私は浣腸に関する題材を採り上げたことではないかと考えています。私自身、以前、入院生活をした頃の経験から、浣腸を含めて医療看護といったものに、とても関心を持っています。そのせいか、女性に対する縛しめや猿ぐつわの胸苦しい場面も決して嫌いではないのですが、最近の各号の内容には一抹の寂しさを禁じ得ません。最近では看護に関する一般教養書の類も随分多く、中には写真入りの看護技術解説書も見受けられます。女性のモデル患者と附添い看護婦によって寝具衣料の調え方、洗面清拭、検温、注射、用便、浣腸とグラビヤに立派な写真が出て居る便器を当てがう場面でも、ちゃん

とブローは脱がせて少しばかりですが白いお尻を覗かせていますし、浣腸では寝巻がまくられて浣腸器が挿入される直前の大寫しのヒップも掲載されています。こんな場面は、その方面の専門書の故に可能なのかも知れませんが本誌も挿画にもつと迫真的なものと見せられたいでしょうか。浣腸にしても、他の刊行物では、それをそのままつて来ても、今から浣腸を受ける場面としておかしくない角度からヒップをとり上げている写真は沢山あります。同一の画面に施術者と患者を織り込む事に無理があるならば、先ず患者である女性が、真白なシーツの上で、ねの上で、折上げられた上掛けから丸出しになったヒップを差し出してゐる場面（寝巻も、ちゃんと着た上ではだけられ、ブローも途中まで下されたくらいが、かえってよいと思います）一方、それと別の頁にして、浣腸を施す側の女性が（私の希望では普通に見受けられる和服にエプロン姿の家庭の主婦のタイプか看護婦さんかが好ましく思えます）浣腸器にグリースを吸上げていたり、液の工合をすかしてみたり、実際に薬液を入れた浣腸器を片手に膝を

ついて身構えていたりする各種の場面を出して貰えるなら、浣腸ファンにとつてはどんなにか楽しい事でしよう。又、浣腸の取扱ひ方については、たとえ、その内容が浣腸の羞恥と嫌悪を利用した罰やお仕置であつても、飽くまで看護の仮面の下にリアルに行われてほしいと思ひます。殊更、不自然なまでの苦痛を与えたりするくらいならば、もつとニューモラスな採り上げ方をする方が効果を生むのではないでしようか。最後に編集の方にお願ひ。現在、用いられる各様のグリースリン浣腸は何時頃から始つたものか。外国の家庭での浣腸の使われ方や器具について紹介して下さい。

（関生）

○ 小生は旧号時代よりの愛読者です。色刷りの表紙がと切れてから大分、久しくなりますが、先日は数年ぶりに、あざやかな色刷り表紙を手にして嬉しくて堪りませんでした。処が内容が余り小生好みでなくて、毎度のこと乍らガッカリしてゐます。号数は忘れましたが魔園吉年氏の「悦虐回想録」は内容、挿画とも本誌中の出色で、小生はこれほど激しい興奮に駆られた文章に今まで接したことがあ

りませんでしたので、非常な感銘を受けました。このことでお判りかと存じますが、小生は男性マゾに類するものですが、どちらかと云えば第三者の立場から「悦虐回想録」の如く女性が少年を虐める或は「少年刑務所体験記」の如く看守の少年への体罰といったものを好みます。いろいろと貴誌としての計画もありのことと推量しますが、余りにも女性を対象とした或は成人男性を対象とした挿画写真が多すぎて、いささか、マンネリズムに陥いつたかの如き感ある貴誌に異彩をそえるのにも、次のような種類の小説なり挿画なりを、ぜひ御掲載下さるよう心からお願ひ申し上げます。たとえば大正の頃、日本の少年が中国人に誘拐され曲芸師に仕込まれる。激しい教育法と拷問的体罰に耐えかねて、少年は主の曲芸師に復讐しようとするが、失敗して虐殺される。しかし曲芸師の娘の直訴によって曲芸師は法の裁きを受ける。挿画は南村俊平氏か、なるべく迫真的なデッサンをする先生にお願いしたいものです。ザ・フアミリー・オブ・マンのニューヨーク版に、在米日本人の撮った写真で素晴らしいものがありました。そ

れは太い樹に後手に縛りつけられた少女の表情写真で、黒系統の画面の中で特にその少女の鋭いまなざしと太い針金状のロープが白い手首に喰ひ込んだ処が、本当に失礼な云い方ですが、L誌上では見られない真剣さと迫力に満ちて居りました。

（下村生）

○ 前回は素晴らしいフォトをお送り下さつてありがとうございます。R14「しん3」がよかったと思います。「しん3」は股間しぱりとしては「しん3」に及ばないようです。大塚嬢のアクロバティックなフォトに期待しています。

（北海道 M生）

○ 編集部の皆様、御元気でいらっしゃいますか。私は相変わらず貴誌を愛読しております。さて、貴誌の増刊号に二度ほど浜本喜美嬢と三木敬子嬢のプレイの写真が出ておりましたが、私は、すっかり魅せられてしまいました。彼女の、どこか、あどけないような姿態に何ともいえない魅力を感じます。（ただ猿ぐつわで顔が隠れているのが残念ですが）彼女の緊縛姿をよく見たいと思ひますので、貴誌のグラビヤか分譲写真に掲載して

ティを蒐めました。私の場合幸いに妻が理解してくれ協力してくれ、るので凡ゆる面で助かりますが、それと云うのも他人が使用したパソティには全く関心がないと云う所謂潔癖な処が物を云っているものでしょう。実際物干場などよくみる真黄色に変色したパソティなどは全く幻滅だと思えます。だから本誌のモデル嬢着用済みの下着分譲などの広告をみてもそれが私の所有する物の域を出ないせいもあって、殆ど欲しいと云う気持ちが起きません。妻は下着は何でも白が好きなので、パソティも勿論白いのを穿きたがるのですが、変色が目立つのが私にはどうも嫌で色物を無理に穿かせています。私の毎日の下穿きは云う迄もなく婦人用の物に限っています。色はピンクか赤が大好きなのです。時々ブルーのパソティを穿いた時の感激をより強いものにしたいたからに他ならないのです。そんな訳で止むなく紳士用ブリーフを穿かねばならない時など、どうも気持ちが落着かなくて困ります。本当云って真赤のパソティを穿いたからとて別にどうと云う事はないのです。が、どうしても穿かないではいけない処がマニヤたる所以なので

しよう。またレースのついたパソティもエレガントで宜しいが、会社によつて裾ゴムに伸縮性のあるものとなないものがあり、ないものは余程股の切れ上ったものでないと男には困る場合があります。また最近刺繍のたつぷりついたパソティの出廻る様になった事は嬉しい事です。今流行のビキニ型パソティは、私には到底使用出来ないので時々妻に穿かせていますがどうもストリップを観る様で変な気がしますし、妻も急にそうした物を穿くと、何だかノー・パソティになった様で腰が涼しくて凄く羞しいとか申して嫌がります。どうせ穿くならやっぱりびっちり肌に喰込む様なきつい裾ゴムの入った、或る程度お尻の隠れる物の方が私は好きです。短かいと云つても精々キャロット位が適当なのではないでしょうか。バレリーナなどがよく穿いたりする丁度お尻が半分位隠れる物の事です。私はその、極く一部を除いたらあとは全部黒のナイロン・ネットになつていてと云う素晴らしいパソティをつい先日入手致しました。スタイル美人が穿いたらさぞ素敵なシルエットになる事でしょう。並原さんお便り下さい。貴兄と同じ経

験が私にもあつて、その為に貴兄をひどく身近かに感じていたのです。貴兄の「ブローズへの郷愁」が没になったのを知つて非常に残念に思っています。では又。

(東京 佐野雪夫)

○ K K誌は投稿してから一年たつた。二編の創作と数編のエッセーが登載され、自分とK誌とが何か他人でないような親近感を持つようになつた。毎月の発行日が待ち遠しく思われてならなかった。期待と満足と失望とその限らない循環を何回くりかえしたことだろう。自分の傾向が女性切腹をもととして、サド的なものに限り、マゾヤ、かんちようや、同性愛的なもの、むしろ嫌悪の情を覚える程である。だから沼氏の大作などその博学に畏敬の念を禁じ得ないが興味をもつことは出来ない。読者通信には、自分の好みを強調するの余り性向に合わないものを排斥するような論説も見られるが、それは、どうであらうか。自分はどう考える。大体、アブ傾向の読者などそう多数にあるものでない。それを更に細分したら到底、発行可能な部数を確保出来なくなる。社会党が右派と左派に、自民

党が主流派と反主流派に分裂するようなものである。だから、アブ全体を対象に盛り合わせ式なものを本誌に載せ、特別な嗜好のものは特集号、分譲品にまかせるという三段構えが、やはり理想的だといえる。それにしても、この三段構えが運営出来るのは本誌という幹が、しっかりしているからである。だから読者たるものは、寛容の精神をもつて本誌の育成に努力すべきではなからうか。三十三年中を通じて一番活躍した作者は、牧高志、三条卓史、近藤一の諸氏で、縁猛比古氏や海野繁朗氏も目立った。奔放な牧氏と対照的に着実な近藤氏、いずれも、つきることのない筆力は驚異的であつた。切腹ものについては、青山芳樹氏の「愁風連」、佐藤すみ子氏の「春浅き日に」が、とびぬけてよかった。藤山女史のシリーズものは、ややマンネリの傾向があつたとはいへ、熱っぽい女体のいぶきを伝えて、本誌の一名物たるを失わなかつた。青山氏や大島氏の新作に期待すると共に、新人の出現を希望する。この一年の収獲として特記したいのは、壬生三郎氏の「切腹風土記」で、これは中康弘通氏の指摘された通り、大変な労

作である。「切腹七部集」として早く出版して頂きたいものである。自分の書いたものが活字になるのは嬉しいものである。読者通信で同感の意を表する投書に接するのは、なお嬉しいものである。しかし共鳴した読者でも、全部が全部投書するとは限らないから、読者通信などに何の反響がなくとも、どこかで同感の士は、いるのかもしれない。「生首礼讃」の小文には同感の投書があり、むしろ意外に思った位だが「女性文身

考」には全く反響がないので、ちよつと、がっかりした。女性文身の趣味については、切腹や、かんちようなどと並んで、本誌の一項目として取り上げてもらいたいと今でも考えている。高木淋光氏によれば、ある雑誌上で「羽衣お小夜」なる、女性の刺青姿を見て、これあるかなと思ひ、名作「刺青殺人事件」を書き文壇にデビューし、生涯の方向が決まったそうである。新東宝の怪傑、大蔵貢社長は、縛り責めと並んで刺青を盛ん

に取り入れている。それで興業的に当たっているのだから、その方面の嗜好も実は、相当に根強いのではなからうか。戦前の名著、玉林晴朗氏の「文身百姿」の再版が出た。戦前そのまま、それ以後の変遷は全然、追加されていない。本誌で、もし刺青を一項目として取り上げ、口絵に記事に、その美を競つたら、文献としても貴重なものを後代に残すことになる。本誌のような特殊雑誌では、視覚的要素が重要視される。いかによ

い内容の文章でも挿画が悪いと興味半減する。挿画、口絵について折にふれ注文を出し続けたのもその為だ。滝、杉原、四馬の三氏それから中途から書出した南村氏と、いずれも好調だったが、北原純子女史が全く姿を見せぬようになつたのはさびしい。又、口絵が緊縛一点張り、切腹図はただ一回しか出さないのは片手落ちと思う。特写真真についても同じことが言える。特写真真は全く編集長の腕の見せ所、本誌の華でもあ

奇譚クラブ旧号の在庫案内

★復刊号の分

復刊第1号 (昭和30年10月号) 〆売切〆
 復刊第2号 (昭和30年11月号) 〆売切〆
 復刊第3号 (昭和31年4月号) 〆売切〆
 復刊第4号 (昭和31年5月号) 定価二百円
 復刊第5号 (昭和31年6月号) 定価二百円
 復刊第6号 (昭和31年7月号) 〆売切〆
 復刊第7号 (昭和31年8月号) 〆売切〆
 復刊第8号 (昭和31年9月号) 定価二百円
 復刊第9号 (昭和31年10月号) 定価二百円
 復刊第10号 (昭和31年12月号) 定価二百円
 復刊第11号 (昭和32年1月号) 定価二百円
 復刊第12号 (昭和32年2月号) 定価二百円
 復刊第13号 (昭和32年3月号) 定価二百円

復刊第14号 (昭和32年4月号) 定価二百円
 復刊第15号 (昭和32年6月号) 定価二百円
 復刊第16号 (昭和32年7月号) 定価二百円
 復刊第17号 (昭和32年8月号) 定価二百円
 復刊第18号 (昭和32年9月号) 定価二百円
 復刊第19号 (昭和32年10月号) 定価二百円
 復刊第20号 (昭和32年11月号) 定価二百円
 復刊第21号 (昭和32年12月号) 定価二百円
 復刊第22号 (昭和33年1月号) 定価二百円
 復刊第23号 (臨時増刊号) 〆売切〆
 復刊第24号 (昭和33年2月号) 定価二百円
 復刊第25号 (昭和33年3月号) 定価二百円
 復刊第26号 (昭和33年4月号) 定価二百円
 復刊第27号 (昭和33年5月号) 定価二百円
 復刊第28号 (昭和33年6月号) 定価二百円
 復刊第29号 (昭和33年7月号) 定価二百円

復刊第30号 (サド特集号) 〆売切〆
 復刊第31号 (昭和33年8月号) 定価二百円
 復刊第32号 (昭和33年9月号) 定価二百円
 復刊第33号 (昭和33年10月号) 定価二百円
 復刊第34号 (昭和33年11月号) 定価二百円
 復刊第35号 (増刊号青い魔院) 定価二百円
 復刊第36号 (昭和33年12月号) 定価二百円
 復刊第37号 (昭和34年1月号) 定価二百円
 復刊第38号 (悦唐小説と緊縛写真) 三百円
 復刊第39号 (昭和34年2月号) 定価二百円
 復刊第40号 (昭和34年3月号) 定価二百円
 復刊第41号 (昭和34年4月号) 定価二百円
 復刊第42号 (サド特集第二集) 三百五十円
 復刊第43号 (昭和34年5月号) 定価二百円
 復刊第44号 (昭和34年6月号) 定価二百円
 復刊第45号 (悦特第二集) 定価三百円

るのだから一層精進をのぞむ。一体に表情がよくないようだ。それにしても、美女を惨々しばった、責めたりしたあげく腹を切らせてしまふとは昔のお代官様よりよい身分の編集長よと、うらやましくなる次第なり。村井嬢の腰元自刃が、あれだけの道具立をしなから失敗したのは表情が悪いためだ。モデルのセンスが問題ではなからうか。一度藤山女史を煩して、よいモデル嬢を得て体当りの監督指導をしてもらったら傑作が生れると思うがどんなものか。緊縛映画の紹介については、口絵に解説に又、最近は牧氏の誌上シネマスコープに、大いに努力の跡が見られる。時代映画の大半に多かれ少なかれ緊縛シーンがあるとは驚くべきことである。全部見たわけではないが、特に記憶に残ったシーンは「天下の鬼夜叉姫」と「朱桜判官」の若杉嘉津子の吊し責めだ。彼女は三十三年大活躍で「高橋お伝」にも、よい演技を見せた。旧式のパンプ型で、時代物の毒婦役には右に出るものを見ない。しかし演技に欲をいえば物足りなさがある。例えば「毒蛇のお蘭」で恋敵の小畑絢子と組んずほぐれつの女斗美を見せたのはよい

が、あつさり突き殺されてしまったのは芸がなさすぎる。死んでも死にきれない執念の深さを見せる芝居をすべきであつた。単に脇役におしやらず、もう一度、主役で毒婦物をやらせて見たい女優だ。絹川嬢の切腹フォトは出来は村井嬢よりよいが、やはり表情が物足りなかつた。短刀を突き刺してから引き廻すまでの三枚の連続は比較的、良好だが、裸になつたり、横になつたりした二枚は、全く意味がない。切り口の紅が余り上手についておらず、前の「悦虐図」のように鮮血りんりといった風情が見られなかつた。もっと傑作を出してもらいたいと希望するの余り、敢えて酷評する次第。

(南方 純)

貴社ますます御発展の御事と心からお喜び申し上げます。さて休刊前一度提案した事がありました。が全国には女性の素足に興味を持たれる方も多いでしょうが、小生の様に白足袋をはいた女性の足に關心を持たれる方もあると存じます。汚れない真白な五枚コハゼの白羽二重足袋を見ると堪らない魅力を感じます。どうかこうした方面にも新しい計画を樹立されます

予告

限定版特別号第二集

特価 五百円

「緊縛写真と緊縛画集」

略号 (緊縛)

愈々六月中旬発売!

数十葉の緊縛フォトのアルバムと三十数

態の四馬孝画の緊縛画集

限定番号押捺へ一般書店にては販売しません。

直接発行所宛御申込下さい。V

様祈ります。女性の切腹と女装と白足袋が私の最も興味を持つところ。真白な女性の腹部を真赤な鮮血が流れ白足袋を真赤に染めてゆく。考えただけでもゾクゾクする程の興奮にかられます。さて、小生の切腹遊戯の白衣と足袋とお送り申し上げます。汚れたままでもK誌にのせて下さればと存じます。えのぐ糊を水でといたものですので洗えばきれいになります。高島田のかつらをつけ、白衣を着、白足袋をはいて胡坐をかい

て坐し、ナイロンの上に白布を敷いた上で切腹してみたのです。もちろんゴムの袋にえのぐを入れて腹に当て、このゴム袋を切つたのです。一文字に切つてから一時間程前横に伏してじつとしていました。失礼とは存じますが、白衣の鮮血に染つた切腹写真がK誌にのつた事がない様です。ので、ぜひお願いしたくお送りさせて頂きます。女装と女性切腹につかれた哀れな男の願いを実現させて下さい

(桜 恵之助)

懸賞原稿募集

☆ 規定 ☆ ☆ 賞 金 ☆

- 告白と手記と体験記
- | | | | |
|----|------|-----|-----|
| 優作 | 一篇に付 | 一万円 | 若干篇 |
| 秀作 | 一篇に付 | 五千元 | 若干篇 |
| 佳作 | 一篇に付 | 二千元 | 若干篇 |
- 一、必ず未発表の自作であること。
 一、枚数に制限はありません。
 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

○ 小生従来から貴誌を愛読して居りますが、最近の貴誌上に「浣腸」関係の記事が少くなったのを、大変淋しく思います。此の間の二月号の読者通信にも某氏が述べて居られたが我々マニアは極めてデリケートなエレガントな雰囲気愛好するのであつて其の点洵に文化的にもハイクラスなものを求めているのです。従来例でいえば、昭和二十九年十一月号、十二月号の花村恵美子氏の連載、昭和三十年三月号の縁川純子氏のレポート、その後の復刊では昭和三十

年十二月号の岩村氏のナースのレポート等々、実に貴重な作品でした。羽村さん流のグロ染みた作品はさっぱり魅力を感じません。十七、八才の美少女、二十台の若い女性乃至三十台の美貌の人妻達、こうした人達をヒロインとして、家庭の寝室なり医院の診察室なりを舞台に、ソフトな雰囲気籠めて筆細かに情景描写が行われたならば、どんなに素晴らしいことか。それにふさわしい挿画があれば更に素敵です。(昭和三十三年六月号、三十二頁、昭和三十二年十二月号百三十八頁の如く)もし、こ

うしたエレガントなレポートなりロマンなりを集めて特集号が出たならば我々マニア、マニアは、それこそ、その値段を問わずに早速に大量購入するでしょう。前から大分同好の士からの催促がある様ですが、一向に特集号が現れないのは、まことに残念です。若し御希望あれば、小生が新しいアイデアに満ちた新作を、発表しても結構です。

(東京 佐藤生)

○ 六月号拝見致し我々フンドシマニアをなぐさめて呉れました。それは植村氏の「僧堂」です。所が青木様の絵で、修行中の坊主が丸裸にされ越中褌一つで尻を持ち上げ責められて居る画ですが、役付坊主が正面に大きく描いてあるので、肝腎の責められるフンドシ姿が見えぬ。又、次の頁は柱に縛られて居る絵ですが、これも六尺褌が半分消えて、残念です。それに五月号の絵ですが、腹這いの男に浣腸を挿し込むところなのか、終ったところなのか、さっぱりわかりません。私も面を真似て腹這いになり両足を伸し固く縛り友達にやらせたが不可能でした。あの姿勢では出来ません。浣腸するのなら

足をちぎめて尻を少々うかし痺をずらす。又終った所なら足は伸びても、痺は尻からはずれているはず。それに現在では画が小さくなりすぎたが、もう少し大きく書いて下さい。度々お願い致して居りますフンドシ姿の責め場は未だに見られませんが写真で見せて下さい。五月中旬に責め場の特集が出るこのことで私達は喜んで見たが、男の責め場がなくガッカリです。次の夏の特集には是非とも男のフンドシ姿の惨虐な刑や私刑の男責を御願ひ致します。

(清水フンドシ男)

○ 新緑の候、貴社御一同様益々御健勝のこととお喜び申し上げます。嘗て予約致しておりました「悦特第二集」予告の五月中旬通り早速お送り下さいまして有難うございました。取るものも取りあえず拝見、期待以上の出来ばえに大いに満足しました。内容の中、本文は、中には読んだものもあり、中には未見のものも多くあり、なににしても、初めから終りまで自分好みのものばかりが、このようにずらりと並んだ壮観さは、全く自分のためにのみ作ってくれたのかと疑うばかりです。(青森坂実)

☆懸賞愛読者原稿募集☆

規 定

- 一、原稿の内容は本誌の掲載にふさわしいものであれば、どんなものでも結構です。
- 二、創作、小説、文献、研究、物語、告白体験等形式は如何なるものでも構いません。
- 三、枚数は最高百五十枚位まで（四百字詰）
- 四、必ず未発表の作品であることが必要です。
- 五、締切は毎月十日。以後に到着の分は翌月廻しとします
- 六、入選者は毎月の誌上に発表。賞金は一篇につき二千元以上五万円迄贈呈いたします。
- 七、掲載外の佳作には、本誌三月分乃至一年分贈呈いたします。
- 八、封筒には「懸賞愛読者原稿」と朱記のこと。原稿返戻御希望の方は返信料同封下さい。
- 九、発表に支障のある個所は掲載の際に訂正又は削除することがありますから予め御承諾願います。

天 星 社 編 集 部

（編集後記）

○同人雑誌のようになささやかで派手がましくない存在ではありましたが、早いもので昭和三十年に復刊して以来、毎月かさず白い表紙の雑誌がおめえして、ここに復刊四十六号を迎えました。年に二回位の予定だった臨時増刊号も、本誌はすでに「サド特集第二集」と「悦特二集」の二号を発行しました。

○秋には更に変わった企画で二号位を予定しておりますので本年は都合、臨時増刊号は四冊位になるでしょう。他に限定版特別号の第二集「緊縛写真と緊縛面集」も本月号に引続いて世に出る筈です。この限定版の方は本年中、事情の許す限り連発したいと思っております。

○本誌がかくの如く順調に軌道にのりまして以上、次は内容に変化を持たせ、限られた誌面を最高度に活用出来るよう工夫をこらしたいと思っております。

○最近少し下り坂になってきたようですが、週刊誌ブームで我も我もと週刊誌が方々から出されていますが、題目やキヤッチフレーズだけを見ると、どこになに面白いかわかるとは思いますが、いざを読んでみると、なんとつまらない、とその羊頭狗肉さ加減に驚くものが少くありません。PR過剰時代の産物でしょうが、こんなところからも一度倦まられるという気がします。

○それに引きかえ本誌はどうでしょう。全く宣伝らしい宣伝は何一つやっておりません。これ位いい地味な存在で、他にちよっと見当らないでしょう。週刊誌やエロとバクロを売り物の或る種の雑誌なんかと比較すると、毎号そう変りばえのない内容ともいえます。それでいながら確実な固定ファンの方々が根強く支持をして下さっているのは、私たちの方針が次第に実を結んで来たのではないかと、ひそかに自負し、或る意味では読者の方々に感謝しております。

○しかし、だからといって、こういうやり方が目下のところ最上だというのは決してありません。毎日のように机上に山積される愛読者からの鞭撻便を待つまでもなく、もっともっと誌面から火花の出るようなイキのいいものになりたいと常々願っております。線香花火的にならず永続出来るものなら、或る意味でこういう妖気も必要ではないかと思えます。

○多くもならず少くもならず、コンコンと湧出する深山の泉のような味を続けてゆきたいという方針が現在の形をとりしています。時折りは臨時増刊という異端児を産み出し、本誌の方も知らず知らずのうちに新しいものへの変化に足を向けたいものです。（三四・五・一七）